明治三十七年三月五日發行
每月一回五日發行

第四巻
女學世界
第三號

明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可

口繪
旅順の大海戰
海戰の三將官
船中の看護
東鄉中將の家庭
瓜生少將の家庭
露兵の暴虐
富士艦
榮城灣軍隊の上陸

記事要目
戰爭實記
新家庭
伊東海軍大將の家庭
平田男爵の家庭
露西亞の婦人界
婦人の自治問題
海軍將校の家庭




東京日本橋駿河町
大坂高麗橋三丁目
三井呉服店
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕る可く候尙は註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置候に付き御立寄り御縦覧被下候樣冀希上候

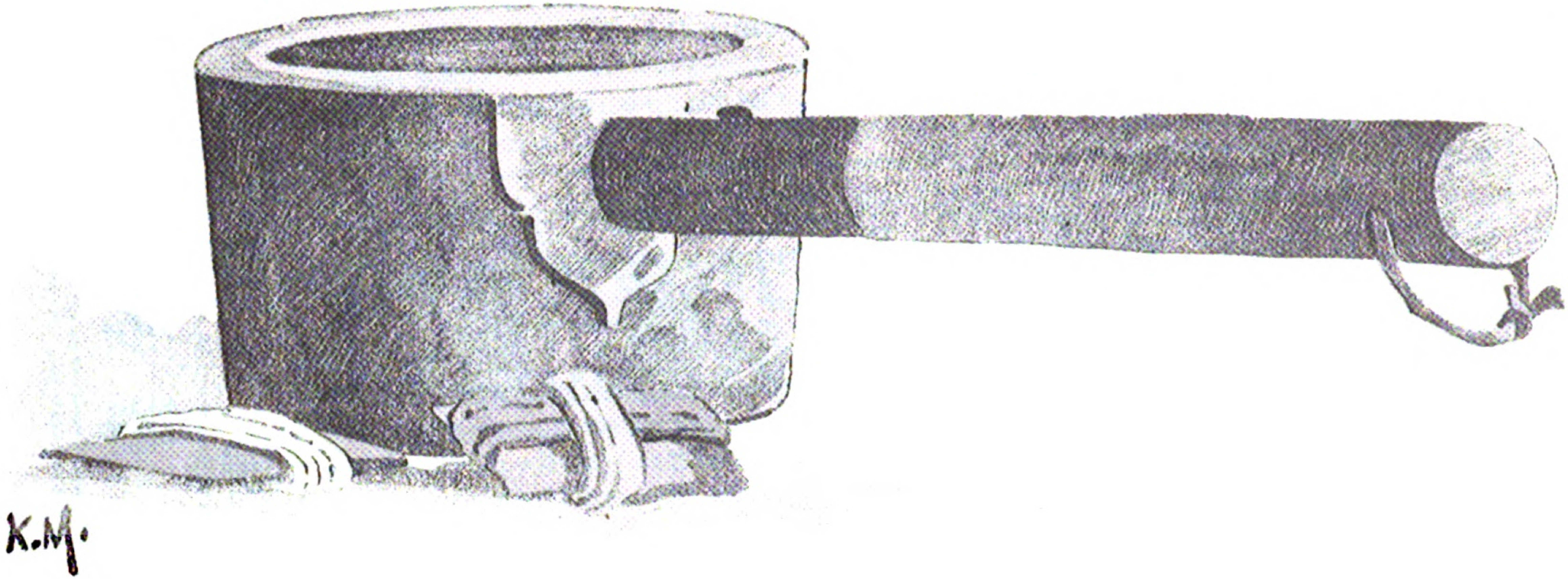
女學世界 第四卷 第參號 目次

春景色

三宅克己氏筆



火熨斗糸巻



三宅克己氏筆

(甲の二)

秋水 三浦覺玄氏著

戰爭と婦人

▲最新版本日發行▼

今や世界未曾有の大戰爭起り、國民の勇躍、將士の奮戰、世界の耳目を聳動するは勿論なから、殊に日本婦人に於て一層の任務と士氣を要すべき時なり、婦人は劍を提げて戰はざるも熱誠燃へて爛々情熱の戰に非らずや、光榮ある歷史を有する日本婦人は如何に覺悟あり、又如何に活動せむとするか此書勇愛なる婦人の敵愾心を鼓舞し滿腔の涙を濺ぎたる者なり

▲製本尤も美麗
▲四號かなつき
▲四六版百七十頁餘
▲印刷實費金二十錢
▲郵税四錢

發兌 東京本郷四ノ五（電下谷二〇二九） 文明堂

賣捌所 上田屋 其他全國各書店 ● 東京堂

觀世流 謠曲指南

麹町區有樂町一丁目五番地 土居香海

肺病

私儀多年肺病にて九死の際偶々一奇法發明の爲め全治する故世の同病者を救ひたき志願に付望の方は郵券封入にて御照會あれ

千葉縣安房郡北條町 川名助次郎

肉筆繪畫手本

希望者金二圓送れ

京都船井郡胡麻村 細井峰心

材料改良奏功確實

謄寫復寫インキ

器械不要

蒟蒻版寒天版及び其他の印類又は器械いらず此インキ一品にて簡便迅速座上立ところに文書圖書數十百枚を印刷し得べし本品はすでに諸官衙及び郡區町村役場等の御用品たり

●定價 金四拾錢（二オンス壓鐵 錫入送料共）（郵税代用 壹割增）

發賣元 東京神田區末廣町三八 中村屋商店

岡山縣下一手 發賣所 岡山市上之町 細謹舍

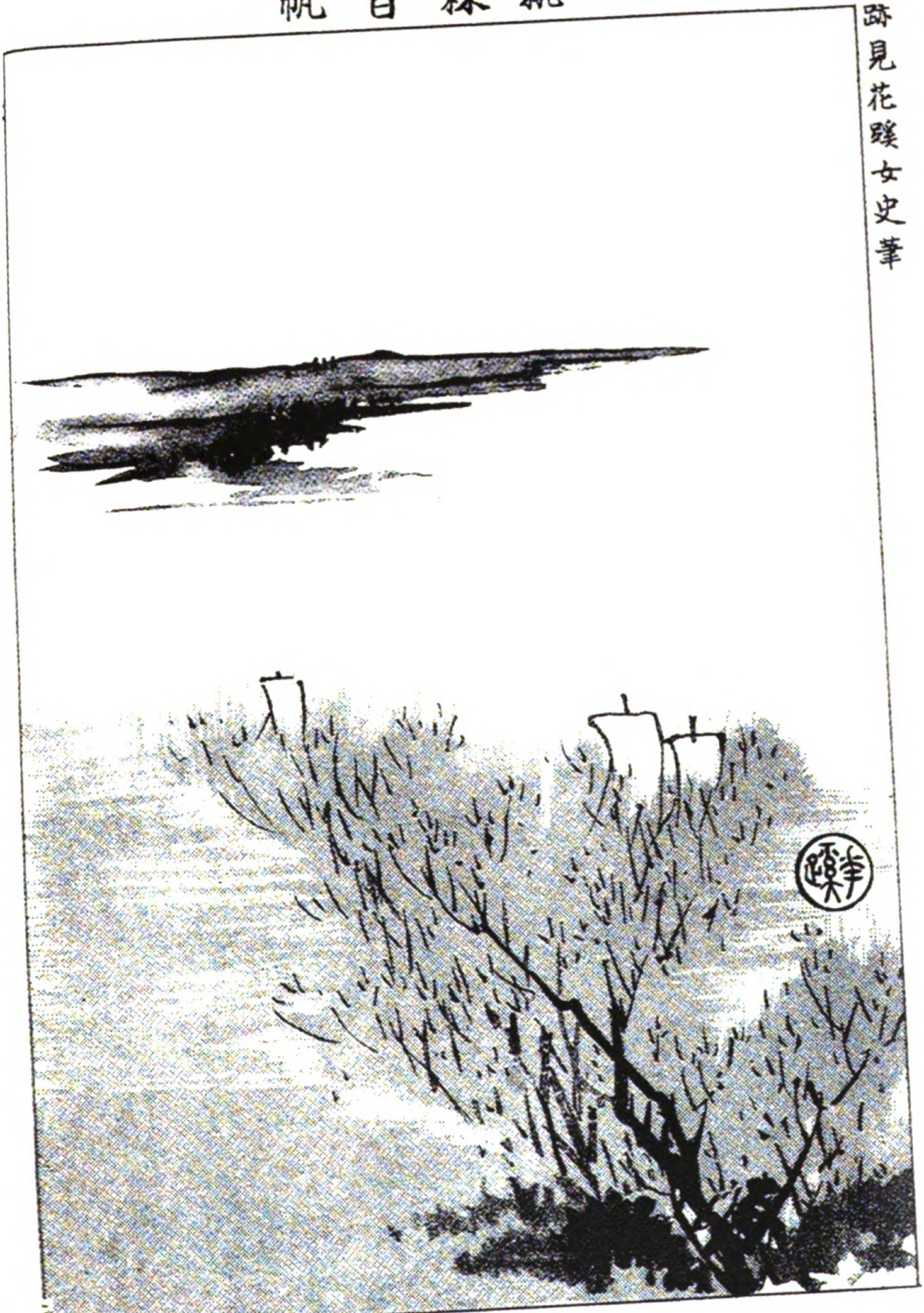
（甲の三）

跡見花蹊女史筆



桃林白帆

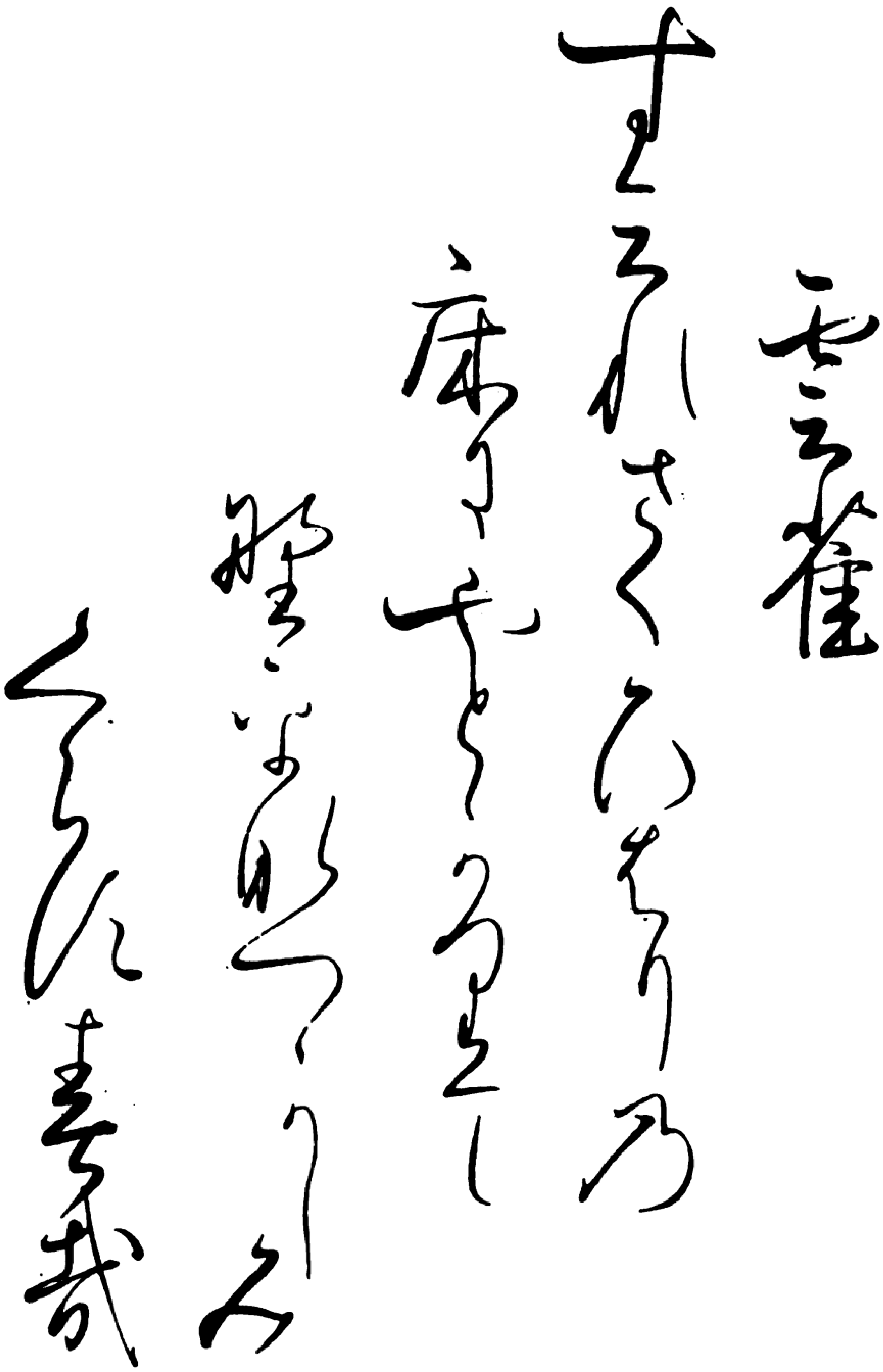
跡見花蹊女史筆



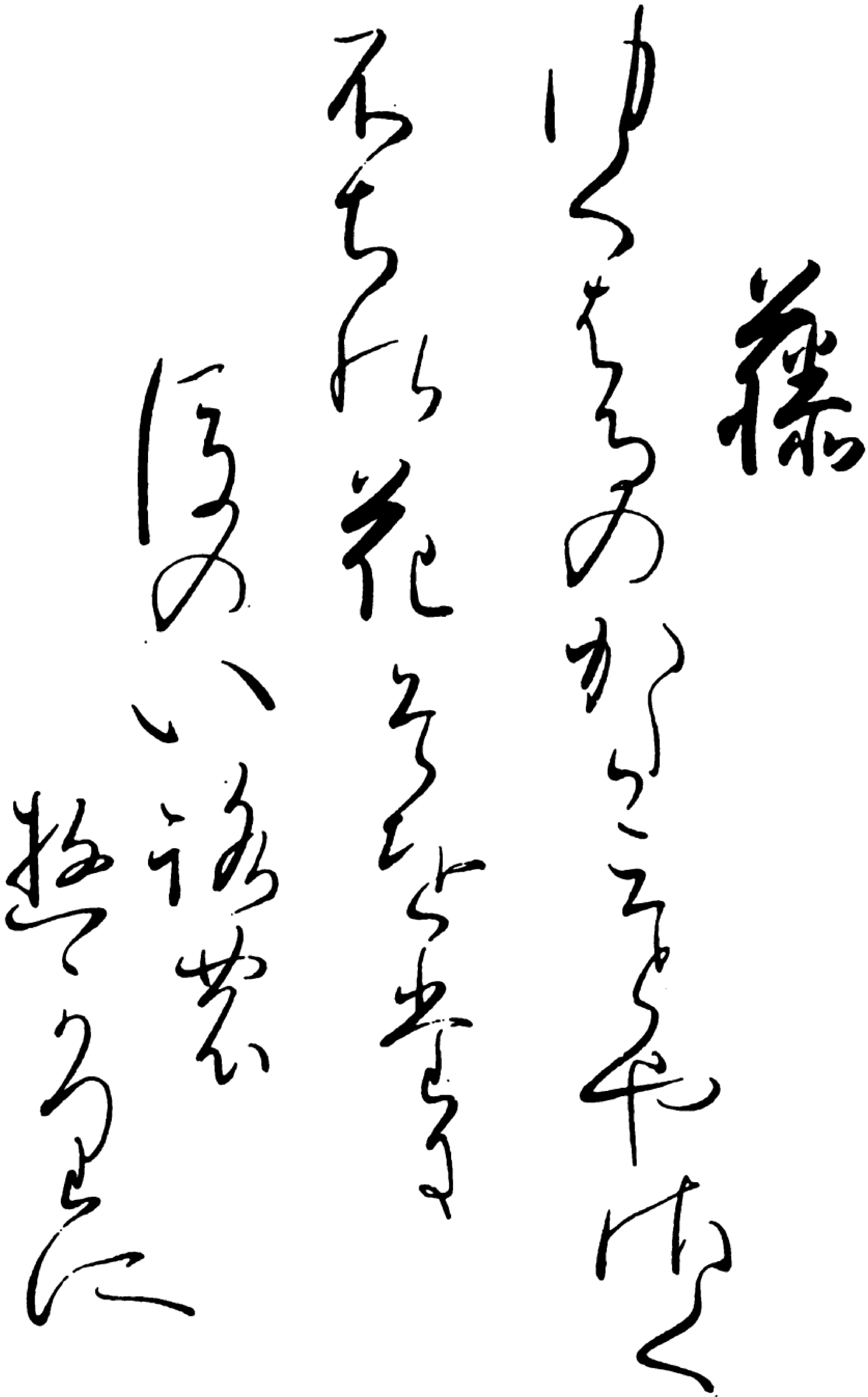
うなゐよりして女ものしつくることゝもをしへ
まつぬひものゝ義のしるべなりつく
十数度し神功皇后の迹
あなるひこのくらゐへ下村に通
このほかなるものも読くおほえくへ八
たゝかえの前かくはひおほえへ八のし

あはれにも流れよりも思ふまさるや
中庭の梅はみなとるゝ折て
いととく咲かなむ
よのはなは秋くれ勢
宮乃御所の園
一發情遣在や このこと

多田親愛先生筆



多田親愛先生筆



露國サマローフ氏原著
文學士 中内蝶二君譯

日露戰爭未來の夢

洋裝大判　正價貳拾五錢　郵稅六錢

日露關係愈よ破裂して東亞の天、風雲益々急に、砲火滿州の野に轟くの日は將に來たらんとす我果して勝つべきか彼れ果して捷つべきか今に方て先づ世人の念頭に來るものは日露强弱問題なり而して此問題を尤も平易に尤も愉快に且つ最も趣味深く解決したるものは即ち此小說なりとす且つ本書は露人の日露戰爭觀にして著者自身か己れの本國を如何に觀察せるか又日本に對して如何なる同情を有せるか是れ最も本書の價値ある所にして又最も現實に徵すべき奇書なり讀者請ふ讀んで其眞相如何を知れ

大和田建樹君作（上眞行君作曲）

軍歌 **日露開戰軍歌**　正價參錢五厘

大和田先生の國學に精通せる敢て喋々を要せず而して本書は方今の時代に於て國民士氣の振揚を圖り得意の靈筆を呵せらる句々躍動字々壯絕を極む日東男兒必ず玩吟すべきなり

文學博士 井上哲次郎君作（山田源一郎君作曲）

軍歌 **征露の歌**　正價貳錢五厘

拂へや拂へ打拂へ大和男兒の腕前を現はすべきは今なるぞ唱歌に名高き譽ある井上博士の新作ぞ讀む者聞く者諸共に勇氣は一入彌增して聲は天地に轟かん

野口寧齋君作

軍詩 **征露 宣戰歌**　正價五錢

一東より十五咸に至る一韻一絕句にして計三十首より成る句句心血を湧かし字々活躍を極む壯士一たび之を朗吟せば其壯烈や言ふべからず

淺谷小波君作（山田源一郎君作曲）

軍歌 **日露 旅順の海戰**　正價貳錢五厘

九日の海戰捷報は我陸海軍の大名譽を世界に宣揚するの一着手にして又古來未曾有の大海戰たり小波先生直ちに筆を呵し軍歌數首を作るもの即是也

佐々木信綱君作（上眞行君作曲）

軍歌 **魯西亞征討の歌**　正價參錢五厘

暴慢無禮の彼れ露西亞は忠勇義烈の我鉾に如何でか向ひ敵すべき仁川旅順の海戰に脆くも負けて打しほれさしもに驕りし艦隊の最後も近くなりにけりいでや進めよ我將士非道の露西亞を倒すまで

●文武堂出版書類廣告●

東久世伯爵題辭
佐々木信綱先生
樺山伯爵夫人題詠
渥美雅子女史共著

新刊

新撰女子用文

全壹冊菊半洋裝美本　正價三十錢郵税六錢

婦女諸君の生涯を通じて、最も必要なるものは書翰文なり。しかも最も易きに似て最も難きは書翰文かくとなり。その一見易きが故に、顧らるゝこと少くして、爲によくかく人の多からぬはいと〳〵恨むべき限なり。思ふにこの恨をもちつゝ、學ぶべき師なく、書なきにくるしめる人世に少なからざるべし。この女子用文は、さる人々の爲につくられしものなり。その文雅に偏せず俗にかたよらず、よく當今の女子が、以て則とすべき躰をえたれば、或は世の需むる所にかなふべきか。殊に附錄としてそへたる。作文心得、婦人百人一首、修身百人一首、近世名家歌集抄は、相まつて初學の人々を益すること尠少ならざるべし。

中島義弌先生著　◎木版挿畫數十個入

〜〜新撰女子作法書〜〜

再版出來
全壹冊菊判美本
正價金二拾五錢
郵税六錢

著者は東京府女子師範學校其他の學校に教授せられたる數授案を高等女學校禮法教授要目に照し削正し各種心得を丁寧懇切に緻密なる挿畫もて說明を加へたるものなれば禮法教科書として、はた家庭に於て作法を修めんとする婦女子の要書なり。

若松賤子女史遺稿
櫻井鷗村君編纂
桂舟蕭伯意匠

〜忘れかたみ〜

全壹冊四六判上製
金文字入頗美本
正價金壹圓
郵税拾二錢

目次

◎忘れかたみ◎雛嫁◎せーらくる一物語◎我宿の花◎波のまに〳〵◎いなつくあーでん物語◎入學前◎ひろひ兒◎林のぬし◎鼻で鯔◎邪推◎榮公の誕生日◎淋しき岩◎黃金機會◎ろーれんす◎女房演說◎お向の離れ◎おもひで……以上

元良文學博士評論
戸澤文學士譯

● 小說 愛と心　正價金三拾五錢　郵税六錢

櫻井鷗村君譯

● 飜譯小說 少看護婦　正價金拾五錢　郵税四錢

讀賣新聞社編纂

● 明治閨秀美譚　正價金拾錢　郵税二錢

讀賣新聞社編纂

● 名士の父母　正價金二拾五錢　郵税四錢

讀賣新聞社編纂

● 明治の令孃　正價金三拾錢　郵税四錢

櫻井鷗村君著

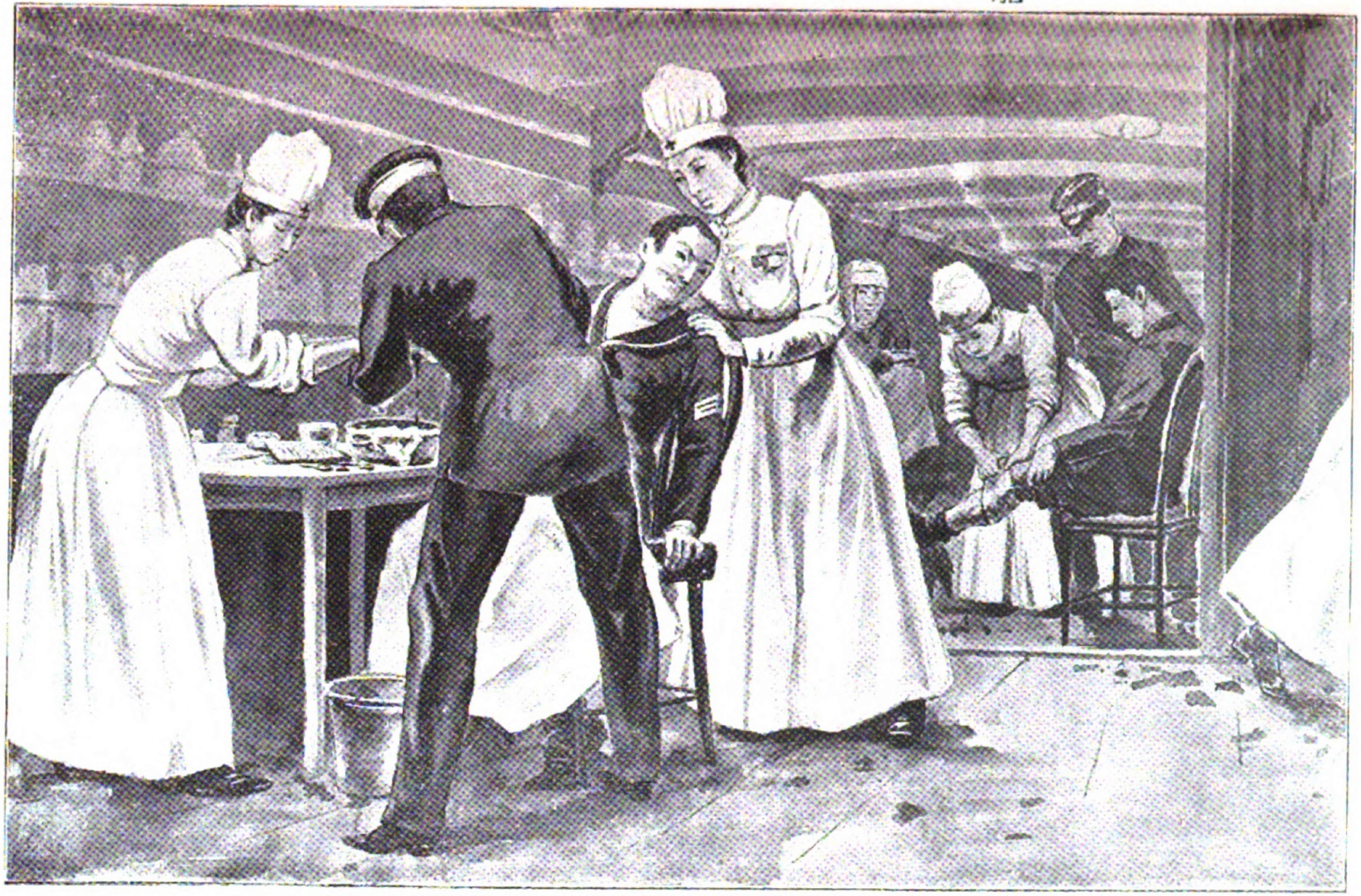
● 現代女氣質　正價金三拾五錢　郵税六錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

發兌元　東京神田表神保町　東京堂

(乙の三)

船中の看護



（博進社工場印行）

赤十字社の病院船博愛丸、弘濟丸には醫員看護婦を搭載して根據地を發し戰地より後送し來れる
負傷患者を收容したり、是れ即ち手術治療の光景を寫したるもの看護婦の同情船中に溢る。

露人の暴虐（猶太人を虐待す）

輕蔑する勿れ米國の猶太人は今回戰費として七百萬弗を我が國に義捐せり



横暴なる露西亜人は國内に居住する猶太人を異教徒と見做し故なく捕へて毆打し頭部に烙印するなど言語に堪へたる所業を爲す事あり是れ露西亜田舍の慣習彼は實に人道の敵なり

瓜生海軍少將の家庭

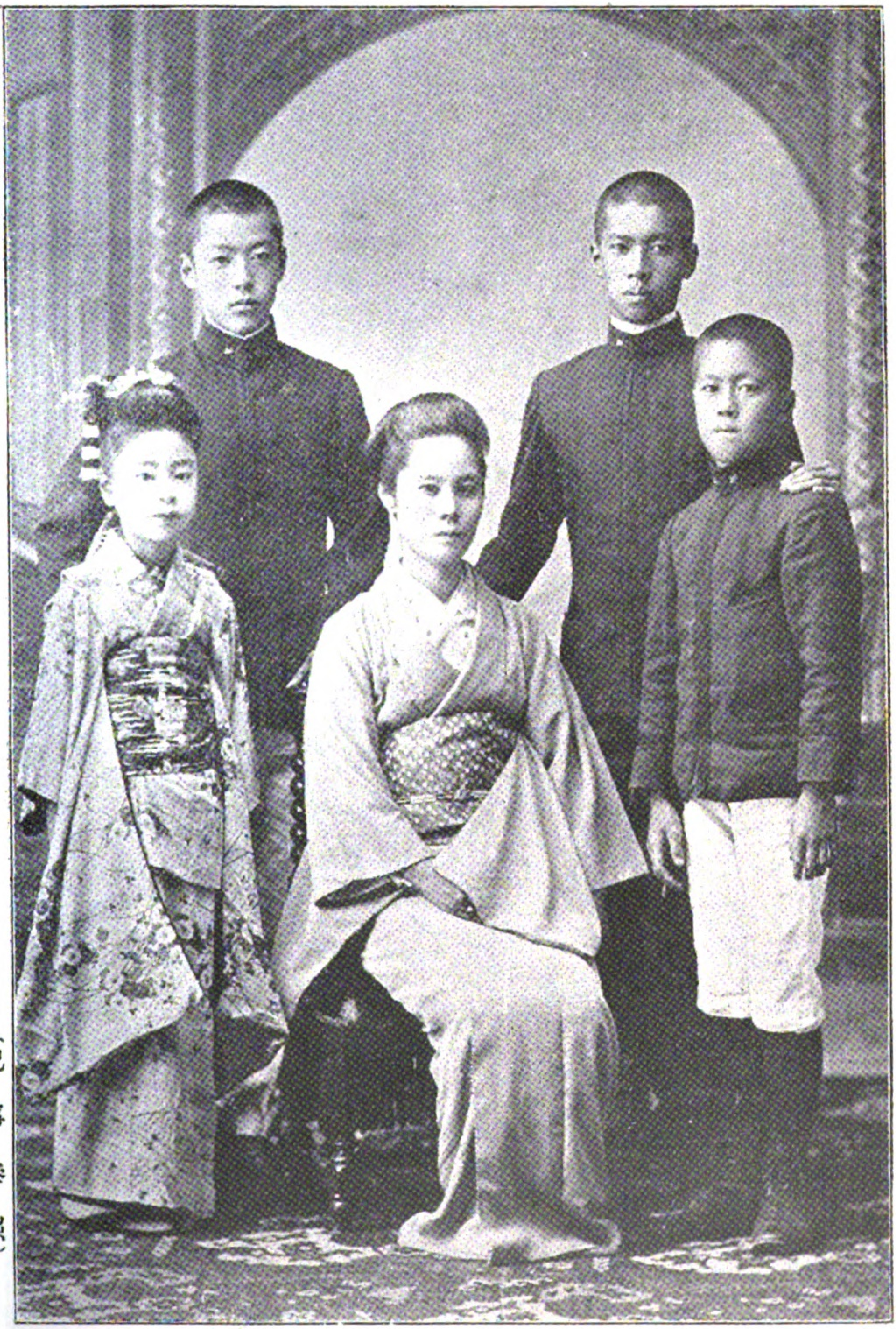


（記事參照）

二女忍子　長女千代子　次男剛氏　少將外吉君　長男武雄氏

三男義雄　三女桑枝　夫人繁子

東郷海軍中將の家庭



（記事參照）

海江田幸吉氏　夫人哲子　長男彪氏

次男實氏　令孃八千代子

旅順海戰の三將官

聯合艦隊司令長官　東郷中將



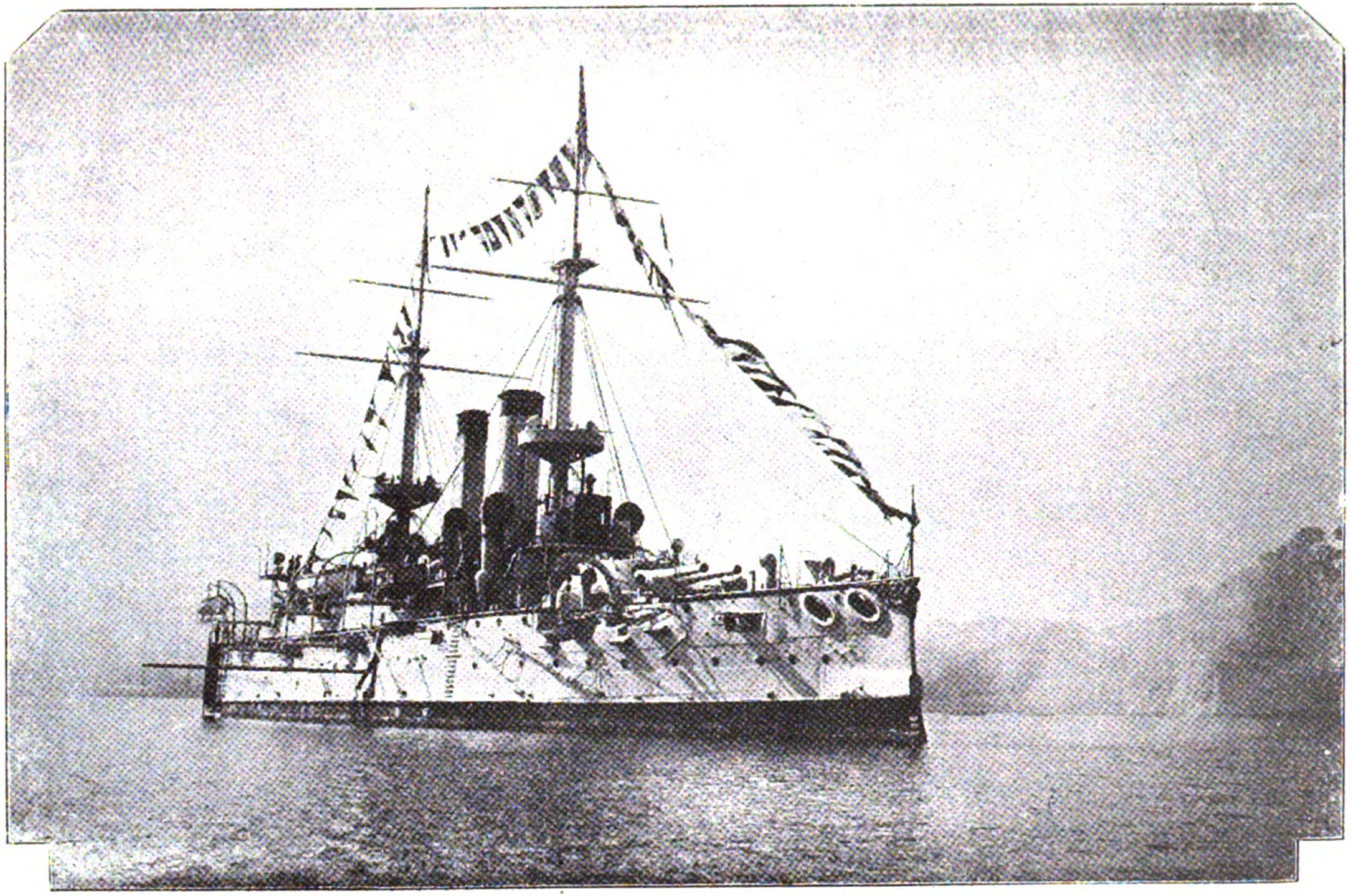


司令官　梨羽少將



司令官　出羽少將

一等戦闘艦富士



旅順海戦に於て最も敵の砲丸を蒙りたる我が戦闘艦

中學世界春期増刊

（三月廿日發行）

本誌の増刊は從來主として懸賞文を收め來りたるが本年は姑らく方針を一變して、懸賞文募集は例號に於てのみ之を行ひ、増刊は各期とも特別に計畫を立て、從來と趣味異りたる最多趣味なる材料を以て編纂することとしたり、而して先づ本年第一回を三月廿日發行とし、先頃自轉車にて世界無錢旅行を企て、幾多の艱難と危險とを排して、終に其目的を達し、めでたく歸朝したる山口縣人中村春吉氏の旅行實歷談を冒險小說に堪能なる押川春浪氏の筆に依つて紹介せんとす。小說よりも更に奇なる此冒險談の如何に痛快なるよ。

無錢冒險 自轉車世界一週

正價廿錢
郵稅貳錢

（附錄）

●日本歷代の冒險家傳……大町桂月君
●冒險奇談無人船……上村左川君
●マルコポーロ冒險譚……鷹野止水君

右の冒險譚は各自得意の文章なり其詳細に至りては誌上に就て見よ、如何に趣味の豐かにして、裨益の繞多なるかを

（丙の一）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

(丙の二)

伯爵東久世通禧君題字
子爵福羽美靜君題詞
男爵文學博士末松謙澄君序
文學博士小中村清矩君遺序
東宮侍講本居豊穎君閲
增田于信君譯

(豫約募集)

新編紫史

一名通俗源氏物語

豫約期限 期限後は正價に復し候
三月廿日限り

紙數三千七百餘頁四六判洋紙摺挿繪五十餘
和本美裝全十冊箱入
正價金六圓

製本全部既成

見本 御望の方は郵券二錢御送附あれば呈す

豫約減價 甲 一時拂込金四圓 書籍は着金の順に送本仕候
乙 三回拂込金四圓五十錢 申込の月より毎月壹圓五十錢宛三回(最終送本の事)
市外郵税甲乙共五十錢

新編紫史は源氏物語を通譯したるものなり。それ源氏物語は。我邦小説の巨擘にして。空前絶後の大著。感神泣鬼の妙筆たること。古來既に説あり。されば鎌倉時代より。今日に至るまで。學士文人。これが註釋を施したるもの。殆。五十家を下らず。然れども。猶その讀み難く。解し易からざるを以て。後世の人。其書を耳にして。其文を目にせざるもの多し。增田先生夙にこれを慨し。この書を譯して。何人にも容易にこれを通讀するを得るの便を與へられたり。その文は曾て原書の意を失はず。語は古雅に偏せず卑俗に陷らず。眞にその中庸を得て。艶麗優美なる。實に今式部の筆といふべし。また原書を讀むものは。本書を併せ見て。講義の材料にも供せらるべく。一旦本書を通讀して。後に原書を讀めば。如何なる初學の者も。他の註釋を須ゐずして。容易に原書を解讀するを得べければ。一擧兩得。實に近代無比の珍書たり。

本書は。先年第壹篇より第四篇(二十四帖胡蝶)まで刊行したるを。今般第十篇(五十四帖夢浮橋)まで刊行して。悉皆完結を告げたり。こゝに於て全部十冊を美麗に製本し。特に豫約者には箱入に調進す。されば國文和歌の研究。及び國語受驗科の材料に尤も要須なるは勿論。貴顯縉紳の應接室。閨秀淑女の書齋等には裝飾として。體面上亦缺くべからざる者なり。大方の諸氏希はくば豫約の好期を失はせらるゝ勿れ。

發行並豫約申込所 東京市神田區鍛冶町(電話本局九百四十九) **誠之堂書店**

取次所 神田表神保町 東京堂　日本橋通二丁 六合館　表神保町 中西屋　大坂心齋橋北久太郎町 柳原書店　京都市寺町二條 若林書店　其他全國各地書店

●文武堂藏版新版廣告●

海國冒險奇譚 新造軍艦

肝付海軍少將序文　押川春浪君著

山中古洞君揮毫寫眞版挿入

全壹册洋裝・袖珍・金文字入美本
正價三拾錢　郵稅四錢

押川春浪君の海底軍艦は大好評を以て既に數版を重ね、本書は海底軍艦に似て更に結構の雄大なる海國冒險小說なり、新造軍艦「うねび」の行衛不明は世界の最大疑問、支那海の浪荒き所何者か潜む、南洋貿易船の出沒、露國軍事探偵の隱見、冒險奇傑の快擧等、眞に破天荒の珍事にして、今や東亞の風雲急なる時、我日本國民の一團体は、天外万里の異境にて大飛躍を試みんとしつゝあり、強大なる義勇艦隊は如何なる有樣にて世に現はるゝや、諸君お待兼の武俠之日本の續編の出づる前是非本書を讀め!!!

◉◉春浪君著書類◉◉

●英雄小說 武俠之日本　四版・・正價四拾錢　郵稅六錢

●續武俠之日本 義勇艦隊　近刊・・艦隊編成中

●海島冒險奇談 海底軍艦　七版・・正價三拾錢　郵稅六錢

●海島探險奇談 塔中の怪　五版・・正價廿五錢　郵稅四錢

●傳奇小說 銀山王　既刊・・正價三拾錢　郵稅四錢

英雄末路 ナポレオン

煙山文學士著

肖像。セントヘレナ島。ナポレオン住宅寫眞版刷挿入

全壹册（四六判）洋裝
金文字入美製本
正價三拾錢　郵稅六錢

ナポレオンのセントヘレナに於ける末年の生活は世人の多く詳にせざる所なり。此書は其ヲートルローの戰敗より孤島流竄となり、終に身を終ふるに至るまでの轉變を細寫して餘蘊なし。彼がロングウッドの住宅や、其日常生活の有樣や、知事との衝突や、彼の侍臣及び侍醫との交爭や、皆之を目のあたりにするが如し。就中彼の談話、殊に古今人物評、戰爭談、冒險談、亞細亞東征論、英國觀、幷に女性觀、宗敎觀等は皆頗る興味ある事項にして。大方の批讀を待つ所なり。

（丙の三）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館　東京神田表神保町　東京堂

數學書の最新著

理學士 藤田外次郎君著

文部省檢定受驗用 新撰數學講義 全貳冊

（近日發行）

洋裝菊判上製 正價 未定 郵稅 未定

從來我國に行はる丶數學教科書夥多ありと雖大概ね中學教育のものに止まり其程度甚卑近なり彼の中學程度以上のものに至りては其類非常に少なく偶々是あるも只一學科に限らる丶か或は問題の機械的解法に止まるものとす本書は此欽を補はんが爲めに編述せられたるものにして理論を主として普通教科書に洩らされたる稍高尚なる理論は細大洩す所なく加ふるに適當の順序に配別せられたる應用問題に詳細なる解法を與へ理論及應用相待つて完全を期せしむ即上卷にありては算術の主眼たる四則應用問題を特種の順序に配列し凡ての種類を網羅して殘す所なく代數學に於ては、其主要なる代數式の運算より筆を起して代數方程式の起源及解法の原理を詳述して餘蘊なし本書は其形式に於て一小冊たるを免がれざるも所謂要を摘み粹を拔きたるものにして中學卒業以上の學生及文部省檢定受驗者の一讀を逸すべからざる良書なりとす

佐久間文太郎君著

中等教育 算術教程 全壹冊

洋裝菊判並製 正價金四拾錢 郵稅六錢

本書は斯學に令名ある佐久間先生の著に成る、抑も現時中學程度の算術教科書は汗牛充棟啻ならざるも、同程度の實業學校の教科書にして、能く應用に適するもの誠に尠し、殊に甲種商業學校に於て商業算術を授くるに先ち其豫習として普通算術を敎授するに際しては、此憾更に切なり、先生深く之を慨し丶即ち其深邃なる學識と多年敎授上の經驗とを以て本書を著述せらるされば本書の價値の如きは敢て贅言するを須たるべし、故に本書は啻に商業學校に適するのみならず、敎師の運用如何によりては、中學師範學校用として、亦絕好の敎科書たるべきにあり是れ本館の信して疑はざる所なり、

發兌元 東京市日本橋區本町 博文館

（丙の五）

蠶業叢書

全部十二冊洋装

第一編 蠶業新論

三谷徹君池田榮太郎君著

本書は世界蠶業の起源より之に關する萬般の事項を論じ蠶業界の既往に照して將來採るべき方針に及ぼせり實に本邦空前の良著なり凡て斯業に從事する諸氏は其學者たると實業家たるとを問はず一讀せば恰も闇夜に一道の光明を得たるの觀あらん

第二編 生絲檢査論

德田實也君著

我邦に於ける生絲檢査の方法を論述し進で其精撰優劣の由て來る所を詳説したるものにして著者自ら其職に在りて日常檢査に從事し見聞調査せる事項を發表し以て全國各地生絲業の趨勢を窺ふの便に供す製絲家及生絲業者の好參考書たり

第三編 栽桑新論

池田榮太郎君著

近來世間栽桑に囂々するや世亦栽桑に關する書乏しきにあらず然れども其術概ね一方に偏するのみならず迂濶なる舊式一定の方法のみ記述し進んで改良の新術に論及せるあるなし本書は學理に徹し實際に照し最新法を詳説して餘蘊無し

第四編 桑樹病害論

岩淵平介君著

本書は專ら桑樹の病害に關して精述したる者にして菌類の寄生によりて發生するもの生理的變狀より來るもの及び桑樹の害虫により被れるもの等五十有餘種の桑病を詳論し倘附錄として野鼠の害晩霜の害を切論す苟も桑樹の病害と認むるものは遺漏なく網羅精論せられたり

第五編 蠶體解剖論

松下憲三郎君

從來蠶體解剖に關する書なきにあらずと雖も簡にして其要を欠き繁にして解に苦む等一般當業者に適切なる者少なしとす本書は之を補はんが爲め斯學の泰斗石渡農學士の校訂を經且附するに百有餘の圖解と蠶體解剖用具論の一章を以てし諸を實驗の便に供す

第六編 殺蛹乾繭論

三谷徹君著

現下殺蛹乾繭法の改良を喚ぶの聲や大改良の績を見る極めて遲々是れ繭の性質を解得し器械其物の構造を辨知して而る後之を使用するにあらざるを以て也本書此弊を矯め説く處は悉く實驗其論ずる處は悉く學理盖し斯業改善に資する鮮少にあらず

發兌元　東京市日本橋區

全部完成

正價 壹冊金參拾錢 ●六冊金壹圓七拾錢 ●全部參圓卅錢 郵稅六錢宛

第七編 蠶病論
岩淵平介君著

今や蠶病は年と共に蔓延して猖獗を極め爲めに收益を減じ失敗を招く者益々多からんとするの傾向あり是れ主として蠶病々理の未だ詳かに闡明せられざると當業者の多くは蠶病に關する智識の欠乏せるに因らずむば非ず著者深く之を憂ひ蠶病に關し專攻すること多年一々實驗に訴へて其得たる所を收錄し以て本書を作すに至りたるもの也

第八編 蠶業經濟論
德田實也君著

今や我國蠶業の現狀は普及の過渡時代より整理の新時代に入らんとするの秋也經濟の大旨を骨子とし以て斯業の方針を確立せざるべからず本邦古來蠶桑の書多しと雖も悉く技藝の指導に竭すに止まりて未だ斯業の大方針を指示せし著述あるを見ず本書は其必要に逼られたるものならんか請ふ机上に備へて經濟的觀察に資せられんことを

第九編 製絲新論
森正恒君井上隆君著

我邦製絲に關する智識一般に低きより甚しきに至りては婦女子の手に一任して又顧みる事無し豈に蠶絲業の一大痛恨にあらずして弊館此書を刊行するの微衷又之れに外ならず其說く所學理に適し實驗に合し寸毫の誤り無し斯業を利する事の決して少々にあらざるべきを信ず苟も身を蠶絲業に委するものゝ一讀の榮を給はらん事を

第十編 多化蠶飼育論
山田島次郎君大森孫十郎君著

凡百の事物を攻究するに當て彼我對照長短補足するは蓋し其尤も必要にして而も捷徑たり蠶業家に於ける多化蠶飼育の如き亦然り夫れ多化蠶は春蠶夏蠶と異り年數回の發生を爲すを以て飼育法に於て大に異なる所あり本書之を說示すること極めて懇切周到苟も蠶界に從事する者本書に就て多化蠶を研究し優勝の好果を捡し玉ふべし

第十一編 養蠶新論
山田島次郎君大森孫十郎君著

養蠶の業は國家の主要生產業の一として重要視せらるゝも當業者は常に收益少くして失敗多きを喞つの聲世間に囂し願ふに是れ飼育法の學理に則らずして單に舊き習慣に泥むの過たらずんばあらず本書は學理を實地に照したる智識の記述にして眞に養蠶上の蘊奥を極めたるもの斯學重大の寶典なり

第十二編 蠶體生理論
池田榮太郎君著

本書に先づ總論に於て生理學の說明生物の起源生系と死滅無胞と增殖生存起源自然陶汰人爲陶汰物體の變遷生物の人生に對する關係各論に於て生殖機論卵體生理論血液循環論呼吸器論吸收及類化論皮膚の機能成繭機論營養論運動機論五神論等を詳述す是れ本叢書の終卷にして蠶業界の大主腦たるべし

本町三丁目 博文館

(丙の七)

十洲　男爵細川潤次郎先生序
赤堀又次郎先生訂校

心學叢書

全部六册
一册大約三百頁
菊判和製　正價一册四十錢　全部貳圓廿錢　郵税一册十錢

德川氏の中世、太平既に久しくして四民奢侈に長し、淫逸に流れ、道德殆んど地に墮つ、石田梅巖先生深く感ずる所あり、慨然として廻瀾の志を起し、心を知ることの學問の始たるを悟り、平易の話を以て其說を講ぜられき、所謂心學是れなり、手島堵庵、脇坂義堂、中澤道二、奥田頼翁、柴田鳩翁等の諸家相踵ぎて、其道を說き一世を撼起し明治の今日に及ぶ本館今回諸家の遺書を捜り、其名著を校訂して發行せんとす、其卷中には心學に關する諸種の密書を加へ傍訓を施し、句讀を正し、一讀趣味多く資益する所を全からしむ、希くは江湖諸彥其遺志を繼きて、後進の士を裨益せられんことを

第壹編（製本既成）

●賣卜先生安樂傳授
●賣卜先生糖俵
●齊家論……石田勘平著
●塵とり……手島宗義著
●里俗教談錢湯新話……伊藤單朴著

續刊

第貳編（三月發兌）

●民の繁業……虛白齋著
●松翁道話……入宮齋譯

以下第三編より逐次發行第六編に至りて完結すべし今や一世の人心復小康に傾き道念德操日に漸く微ならんとす今や本書刊行は全く無用の業にあらざるべし

（丙の八）

發兌元　東京日本橋區本町　博文館



第三號 三月五日發行

家庭月令（三月）

〔三日〕上巳の節句、此の日女兒ある家々にては雛棚をしつらひ、雛人形を飾付て艾餅、菱餅、白酒、煎豆等を供す。〔二十一日〕彼岸の中日――春季皇靈祭。此の月下旬各學校共學年試驗を了り、引續き證書授與式あり

〔氣節〕「啓蟄」「春分」衣服はなほ綿入を着る氣候ながら、春風堂に滿ちて、窓外煙霞の棚引くを見る。

〔農事〕春暖漸く萠すにつれ、農家は追々繁忙となる、上旬には藍、しんぎく、西洋ちさ、花椰菜等を、中旬には中手茄子、料理蔘等を播種す、床蒔の物には玉葱、煙草、紫蘇、南瓜、胡瓜、甘藷などあり、彼岸には霜に強き植物を播種し又た移植す、かや、海棠、梅、柿、松、櫻、撫子等の植替、燕子花、寒菊の根分、枇杷の接木等によろし、養蠶家は下旬より來月にかけて貯藏中の蠶卵紙を取出す。

〔食品〕蔬菜類――三葉芹、花柚、生椎茸、鹿角菜、蕗の薹、蕎菜、つくし、など青き物口に適す、◎魚介類――若鮎の吸物、鯖の鹽燒、かれひ、かながしらの煮付、など最も美味、其他鯉こく、鮒の昆布卷、蛤鍋、あさり、榮螺、赤貝、雉、山鳥、なども妙なり。

〔遊樂〕各地とも梅花滿開の季節、下旬よりは彼岸櫻を先頭に、枝垂櫻、一重櫻つゞいて咲き綻び、野邊には青柳の糸長く垂れて、菫、蒲公英など追々蕾を破りそむるので、郊外散歩に適す、又た此月彼岸には都下の老人連の六阿彌陀詣賑かなり。

〔祝祭日〕二十一日――春季皇靈祭。（日曜日）六日、十三日、二十日、二十七日。

大詔降下

天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐める大日本國皇帝は忠實勇武なる汝有衆に示す

朕茲に露國に對して戰を宣す朕か陸海軍は宜く全力を極めて露國と交戰の事に從ふへく朕か百僚有司は宜く各〻其の職務に率ひ其の權能に應して國家の目的を達するに努力すへし凡そ國際條規の範圍に於て一切の手段を盡し遺算なからむことを期せよ惟ふに文明を平和に求め列國と友誼を篤くして以て東洋の治安を永遠に維持し各國の權利利益を損傷せすして永く帝國の安全を將來に保障すへき事態を確立するは朕夙に以て國交の要義と爲し旦暮敢て違はさらむことを期す朕か有司も亦能く朕か意を體して事に從ひ列國との關係年を逐ふて益〻親厚に赴くを見る今不幸にして露國と釁端を開くに至る豈朕か志ならむや

帝國の重を韓國の保全に置くや一日の故に非す是れ兩國累世の關係に因るのみならす韓國の存亡は實に帝國安危の繫る所たればなり然るに露國は其の清國との明約及列國に對する累次の宣言に拘はらす依然滿洲に占據し益〻其の地歩を鞏固にして終に之を併呑せむとす若し滿洲にして露國の領有に歸せむ乎韓國の保全は支持するに由なく極東の平和亦素より望むへからす故に朕は此の機に際し切に妥協に由て時局を解決し以て平和を恆久に維持せむことを期し有司をして露國に提議し半歳の久しきに亘りて屢次折衝を重ねしめたるも露國は一も交讓の精神を以て之を迎へす曠日彌久徒に時局の解決を遷延せしめ陽に平和を唱道し陰に海陸の軍備を増大し以て我を屈從せしめむとす凡そ露國か始より平和を好愛するの誠意なるもの毫も認むるに由なし露國は既に帝國の提議を容れす韓國の安全は方に危急に瀕し帝國の國利は將に侵迫せられむとす事既に茲に至る帝國か平和の交渉に依り求めむとしたる將來の保障は今日之を旗鼓の間に求むるの外なし朕は汝有衆の忠實勇武なるに倚賴し速に平和を永遠に克復し以て帝國の光榮を保全せむことを期す



戰爭と婦人の覺悟

昨年八月以來外交上の難問題なりし日露の協商は本年一月に至つて事態頗る重大に陥りたり、國際上に於ては專ら忍耐克已、辭讓謙遜、平和着實を旨としたる我が日本の提議は悉く露西亞の斥くる處となりて滿州朝鮮の領土保全は申までもなく日本帝國は最早自國の存立上露國と平和の間に時宜を完ふすること能はざるを知り遂にその協商を斷念するの止むを得ざるに至れり。久しく露西亞と談判の衝に當りたる我が外務大臣小村男爵は二月八日を以て日露の交渉始末を公にしたるが我が聯合艦隊は同月七日を以て海軍根據地を出發し仁川上陸の我が陸兵を援護したる時に於て端なく露國軍艦と衝突して砲火を交へ、又同時に旅順口に於て日露兩國の艦隊衝突し爰に世界未曾有の大海戰を見るに至れり、是に於て叡聖文武なる我が天皇陛下は即ち宣戰の大詔を發し給へり。忠實勇武なる我が五千萬の同胞誰れか感激せざるものあらん。眞に是れ日本開闢以來の大事變にして世界萬人の刮目するの時なりとす、されば日本國民別けても婦人たるものは此際よろしく愼重の態度を取り平靜の心を失はず、兩國の砲火殷々として急雷を聞くが如き間に在りても猶よく其の平常の務に服し家を齋へ

身を修め、節儉力行以て永久に堪ゆべき軍國の用を便せざるべからず、而かもこの戰爭一年にして局を結ぶか二年三年に繼續すべきか、今日の狀態より見れば戰線は頗る廣きに亘つて海に於ては北は北海道の邊陲より日本海一帶の沿岸南は朝鮮海岸に至るまで今後何時如何なる處に於て海戰を見やも知れず、陸は韓國遼東より滿州西比利亞の各地一時に砲火の巷となるやも知るべからず、然かも敵は歐洲大陸に於て堅忍不拔の武國と聞へたる露西亞人なり。一戰二戰三戰の敗北に於て決して挫折するが如き薄弱のものにあらず、必らずや捲土重來して最後の勝算を期するなるべし、されば我が國民も又永久に堪ゆるの覺悟を以て終局の勝利を占むるやう常常心掛べき事なり、一時の勝敗を以て直ちに狂喜し直ちに憂恐し、以て平日の事を忘るゝが如きは決して大國民の態度にあらず。かへすぐ＼も此際愼重、詳慮して平常の事に隨ふべし、徒らに戰報に醉ふて輕噪浮薄の擧あるが如きは我が教育ある日本婦人の面目にあらざるなり。

旅順の大海戰

艦隊の出發　我聯合艦隊は佐世保に集合して一發の大令を待ちつゝある際軍令部よりの命令は二月の五日を以て接到しぬ是に於て東郷司令長官は同夜一時を以て各司令官以下を旗艦三笠に會し作戰を議し曉に徹す翌六日午前九時より各艦隊追次發航するや鮫島中將は港口に見送り東郷中將の成功を祈ると信號し東郷中將は誓つて成功を期すと返禮し萬歲三呼の間に白波を蹴て進行す翌七日朝鮮西南端の沖合に於て一隻の汽船を認む即ち龍田をして之れを追捕せしむれば船名ロシヤ號と云ふ全軍先づ露西亞を獲たるを喜び歡呼湧くが如し既にして木浦沖に進むや先發の明石は敵艦隊は旅順に集合し其二隻は仁川に在るを報ず此時我全艦隊の集合するもの五十五隻渺茫たる大海の中に巍然たる鐵城を築けり是に於て東郷司令長官は瓜生司令官に命じ浪

速、淺間、新高、高千穗、明石の五隻及び水雷艇隊二隊を率ゐて運送船三隻を護衛しつゝ仁川に向て分航せしむ東郷長官は瓜生司令官に向て成功を祈ると信號し瓜生司令官は厚意を謝すと答禮し總員登舷式を行ひ軍樂を奏して之を送る。

▲本隊の進航　既にして本艦隊の進發せんとするや復一商船の航行するを認む上村司令官は吾妻をして之を追捕せしむれば露船アルウジン號なりき八日旅順の沖合五十浬の處に達するや夜來の風雨歇む全隊踴躍して戰氣鬱勃たり是に於いて驅逐艦及び水雷艇は本隊と別れて進攻の途に上る總員登舷式を行ひ萬歳の聲裡に之を送れり、斯くて驅逐隊の一部は大連に向て發したるも其敵艦無きを認めて後本隊に合せり此の日午後六時に至り驅逐艇は猛然として敵艦を襲擊し本隊も亦敵艦を距る三千米突に逼りて盛に砲火を交へたり此時に當り敵の驅逐艇港內より出で探海燈を射て搜索を極む我艦隊は毫しも以て意となさず十八隻の驅逐艇各一發の水雷を發射し其三發は確に命中するを認めたり。

▲水雷の突進　此時命令を受て進發したる我水雷艇は彈丸雨飛の間を潜行して旅順口、黃金山の麓にまで猛進し敵艦狼狽の時機を待ち搆へたるに果せるかな露國の戰鬪艦二隻は我水雷の奇襲を恐れたりけん背進して將に港內に遁れ入らんとす我水雷艇之を見て機の熟するを伺ひ保式魚形水雷を放ちて其胴腹を射る其發射せし水雷は美事に命中して露の戰鬪艦二隻は立所に沈沒したり之と相前後して露の裝甲巡洋艦一隻も亦我水雷艇の襲ふ所となりて沈沒し二戰鬪艦相並んで港口の狹路を閉塞したり由來同港口は平常すら通過自由ならざる所なればその沈沒のため殘餘の露國艦隊は自然港內に入る能はざるの結果となれり此交戰においては我艦隊には何等の損傷なし又九日午前九時頃より我全艦隊黃金山下に併立して總攻擊を開始したり。

▲總攻擊　此夜十一時に至り東郷司令長官は敵艦隊に向て總攻擊を命ずるや堂々の陣形を整へ各艦萬歳を唱へて甲板に上る此時に方り露艦マンチユリー號は高砂の捕獲する所となれり曩に露西亞號を獲今又滿州號を

捕ふ船員の意氣之が爲に大に昂り然ども敵艦隊は砲臺掩護の下に陣形を作れるを以て我は頗る不利の地に立りしが零時に至り三笠より發したる大砲は忽ち敵砲臺に命中し黑煙天を衝て揚れるを見る而して砲臺より發射したる敵彈の爲め我艦の損傷を受くるもの亦た尠からず。

▲九日の總攻擊　翌九日午前十時我艦隊は再び列を整へて敵艦に近き砲擊を開始す敵艦の應戰するもの形勢甚だ振はず砲擊四十分にして止む此夜我艦隊は敵の砲臺と戰ふの不利なると驅逐



艇の夜襲を警戒するが爲めに隊を纏めて牙山沖に凱旋せり。

▲彼我の損傷　兩日の戰に於て最も損傷を受しものは磐手なりしも幸に戰鬪力を減殺するに至らず而して敵の三艦は確かに大損傷を被り黃金山砲臺の如き亦た頗る損害を受けたるもの、如し而して我の戰死者中富士砲術長山中少佐は艦橋の上にて二十八サンチの巨丸に腹部を貫かれ頭部足部　各處を異にしたり松村參謀は砲臺より發射せし敵彈一尺計りの破片の爲めに右股を打たれ同時に艦隊旗艦機關

長山本大監は左手に輕傷し吉村主理は肩部澤本候補生は頭部に負傷し其他信號兵の負傷あり富士分隊長三浦容夫は左舷のチッチングに立ちて指圖中敵彈の爲めに海中に飛ばされ唯劍と腹の服切れの燒けたるを殘すのみ各殿下は無事御奮戰遊ばされたるが三笠の博恭王殿下は殊に十二インチ砲を御指揮あらせられたり。

仁川の大捷

二月八日午後二時海軍根據地を發したる我が淺間、新高、浪速、高千穗、明石は



二隊の水雷艇隊を率ゐ三艘の運送船を護衛しつゝ同五時仁川沖に近寄り此處にて千代田に合し更に各艦の配列を一變して日暮仁川に入らんとす、此時先頭にありし千代田艦無線電信にて報ずらく「敵艦コレーツ仁川を出港す」と、此に於て我先鋒の水雷鳩、雉子猛然として敵艦に近づき魚形水雷一個宛を發したり、此の二個の水雷は不幸にして的中せざりき、コレーツ號よりは鳩、雉子を目がけて頻に發砲したるも兩艇は毫も猛進を躊躇せず、此くてコレーツは港外に航走するの危

險を覺り其儘仁川港内に引き返したり。
夜に入れば敵艦二隻は我が運送船を護衞せる高千穗、千代田、明石と接近して港内の舊錨地に在り他の外國軍艦また其附近に散在して天下の奇觀を極めたりき、而して冲合に陣列を整へたる新高、浪速、淺間の三艦と相對して我が將士の意氣既に敵艦を呑むの慨あり、我運送船の陸兵を上陸せしめしは翌日午前六時なりき。
此に於て我艦隊の任務の大半は滯ほりなく達せられたる也、而して未だ到達されざる重大なる他の一半あり、我艦隊は非常なる迅速力を以て此一半の目的を到達す可く準備を急ぎ、千代田、高千穗、明石、及水雷の一隊は月尾島に於て淺間の一隊に合し此に全く戰陣を形造り先づ瓜生司令官によりて「港外に出づ可し」との命令は敵艦に致されたり、此命に接したる二隻の敵艦は午前十一時港外に出で頗る平和の態度を裝ひたる模樣なりしが、我が淺間が之に接近し八吋砲を放つに及んでコレーッは俄然其態度を一變し戰鬪旗を掲げて我に應じたり。
我高千穗、千代田その他一齊に發砲す、敵は淺間に向け大に發射せしも毫も命中せず正午過ぐること廿分、コレーッ先づ退却しワリヤーク獨り砲火を交へしも零時四十八分亦退却、忽ち火災を起して沈沒せり我艦萬歳を唱ふ我艦隊は其追擊を中止し一時十五分戰鬪は止みたり淺間の偵察によれば十發は確に命中したり午後四時半コレーッより白煙揚るを見る水雷艇曉の報に據ればコレーッ號はマストの尖頭と煙突と少しく見え其の位置に端艇二艘在りワリヤーク號は其儘左方に沈まんとし上甲板少しく見ゆ運送船スンガリー號は乘組員を佛艦に移し火を發して沈沒したり我艦隊は十日朝根據地に向へり。

旅順口内敵の狼狽

旅順海戰の際同港内にありし英國汽船の報に八日夜日本水雷の襲擊は露人をして恐ろしく狼狽せしめたり蓋

し提督幷に高級將校は同夜觀劇の後ち晩餐會を催ほし居たるものにて日本の襲擊の如きは全然之を豫期せざりしなり日本水雷が露艦に對し與へたる攻擊の結果は之を詳細に言へば戰鬪艦ツエザレウイッチ幷にレットウイザンの兩艦は正しく港口に於て損傷し其結果として港を封鎖したるが翌日に至り曳船七隻に助けられて入口の片側に曳き寄せられ巡洋艦パルラダ號は其沈沒を拒ぐが爲め港の左側に乘上げたる儘今尙ほ依然として地點に在り。

水雷の襲擊に依り惹起されたる驚愕は殆ど言語に盡し難く市民は殆ど狂人となりて騷ぎ立ち翌日は軍隊の掠奪を拒がん爲め至る處戶を閉ざし巡査は恐慌を拒がんとして匆忙を極めたり。

扨て翌九日に至り早朝砲擊の開始せらるゝや日本水雷艇は不思議にも之に先ち露國の信號旗を得居りて之を使用しつゝ露艦の戰鬪線内に進入し來り露國警戒艦が之に對し信號をなすや剛脆なる日本軍人は之に應信したり。

砲擊は殆ど信ず可からざる程の恐慌を惹起し幾多の大砲彈市中に墜落し其一は運送船を貫透して船渠に落ちたり然し爆發するには至らざりし又硝子は市中至る處破裂したり。

▲海戰に於ける露國の損害高

露國は仁川港外に於ては二隻の軍艦と一隻の滊船とを破壞せられ旅順口外に於ては三隻の軍艦を破壞せらる加ふるに滊船の捕獲せられたるもの五隻あり是等の損害を計算すれば莫大の額ならん試に之れを擧げんに

ツアルウ井チ	(甲鐵艦)	千三百萬圓
レトウ井ザン	(同)	千三百萬圓
パルラダ	(巡洋艦)	四百萬圓
ワリヤグ	(同)	四百萬圓
コレーツ	(砲艦)	百五十萬圓
スンガリー	(滊船)	九十萬圓
(以上破壞)		
エカテリノスラーヴ	(滊船)	八十萬圓
モグデン	(同)	十五萬圓
アルグン	(同)	二十萬圓
ロシヤ	(同)	六十萬圓
アレキサンダー	(捕獲船)	五萬圓
(以上捕獲)		

之れを合計すれば三千八百二十萬圓となる　露國の損害も亦た大ならず

や左れども是れ唯一二日間の損害のみ今後の損害は幾億圓の多きに上るやも計るべからず。

▲拿捕したる露國商船

平和破裂以來我が海軍によりて拿捕せられたる露國商船左の如し

	船名	噸數	所屬
一	エカテリノスラーフ	五六、二七	義勇艦隊
二	モクデン	八八一	東清會社
三	ロシヤ	三、九五二	貿易會社
四	アルグン	一、三九七	東清會社
五	アレキサンダー		捕鯨船

▲苦戰せし富士艦

富士艦外に甲鐵戰艦五艘、巡洋艦十艘水雷驅逐艦十八艘旅順口砲擊に向ひ八日夜半十二時先づ水雷驅逐艦を遣り敵國軍艦を衝かしめ艦隊は芝罘沖に廻航し九日午前六時千歲外三艘を以て偵察せしめ其報告を得艦隊は旅順口へ向け歸航、正午十二時黃金山の方より老鐵山の方に向け右舷大砲を以て港外にある敵國軍艦を砲擊しつゝ通過せり、此間凡そ四十分、敵國軍艦は我水雷驅逐艦の水雷及艦隊の砲擊に依り甲鐵二艘と共に六艘程甚しき損害を受けたる如く、此外戰鬪力を減じたるもの多かるべし、我艦隊損傷は初瀨艦艦に彈丸を受け上甲板を損傷し內部の器物を燒けり磐手艦は敵の彈丸を受けたる最も多く、船室を打ち取られたり、富士艦は敵の彈丸墜落して內に破裂し山中海軍少佐之に死し艦隊の死者五、負傷五十三、千歲艦は大砲一個損傷せられたり、尤も我艦隊の損傷は重に砲臺の砲擊の爲めなり、又我艦隊にては朝日外一艘を除き外は總て多少損傷あり、戰鬪力を減ずる如き損傷更に無し。

▲旅順口外海戰死傷人名

二月九日第一回旅順口外の海戰に於ける死傷者

▲戰死者

富士砲術長海軍少佐	山中幹
富士分隊長必得海軍中尉	三浦容夫
初瀨乘組海軍少尉候補生	梶村文夫
初瀨乘組海軍三等兵曹	町田軍次

▲負傷後死亡

富士乘組海軍上等信號兵曹	小野光長
初瀨乘組海軍三等水兵	藤崎左久眞

▲負傷者

第一艦隊參謀海軍大尉	松村菊男
磐手分隊長心得海軍中尉	高橋節雄
第一艦隊附主理	吉村幹三郎

八雲海軍少尉候補生	桑原岩次郎
富士海軍少尉候補生	伊藤究
磐手海軍少尉候補生	青木貞之助
三笠海軍少尉候補生	澤本壽
磐手海軍上等兵曹	大隅爲吉郎
三笠海軍二等信號兵	瀧澤甚左衛門
富士海軍二等兵曹	綿岡淺登
同海軍二等水兵	佐々木清吉
同	笠谷富藏
同海軍三等水兵	笠原桂馬
初瀬海軍三等兵曹	坂本德右衛門
同海軍二等水兵	坂田吉次郎
同海軍二等信號兵	岡田辰藏
同海軍三等水兵	篠島平一郎
同	釣重吉
同	佐藤十次郎
敷島海軍二等兵曹	磯永與太郎
同海軍二等信號兵	利才角藏
同海軍三等水兵	鳥居前三郎
同海軍三等信號兵	島村音藏

▲以下輕傷二十三名

旅順第二回の海戰

二月十三日我が驅逐艦の一隊は大風雪を犯して旅順口に向へり、途上各艦見失ひて相分離せしも司令艦速鳥、朝霧のみ旅順港外に達し朝霧は十四日午前三時港口を偵察し盛に陸岸砲臺及び哨艇の砲火を被りしに拘はらず黒烟を揚げ居る一軍艦に對し水雷を發射し且つ敵の哨艇を砲撃して無事歸り來れり速鳥は當日午前五時旅順港外へ達し港口に近接し敵の二艦を暗中に發見すると同時に其砲火を受けたるも直に其一軍艦に對し水雷を發射し其爆發を確認して無事歸來せり。

速鳥朝霧の勇敢なる襲撃の効果は暗夜の爲め之を知るに由なしと雖も少なくとも敵をして益々戰慄せしむるの大効ありたるは疑ひなしと東郷司令長官より報告あり本驅逐隊の司令は海軍中佐長井群吉氏速鳥艇長は海軍少佐竹内次郎氏にして朝霧艇長海軍少佐石川壽次郎氏なり

旅順避難民の窮狀

芝罘より其筋に達したる情報中旅順口より引上げたる

もの丶實話に據れば二月八日の夜日本行の英船ラスペラ號は軍港内に在りたるの故を以て一旦乘船したるものも之を禁せられたる故止むを得ず上陸したるに夜半我水雷艇の砲擊あり翌九日午前二時頃警察署長はアレキシーフの命令なりとて日本人は一切港外に出づるとを禁せり日本艦隊砲擊の際は日本人の大半は指定せられたる芝罘行英國船温州號に乘込み居たるに八人の哨兵船中に在り一たび乘船したるものは上陸を許さず同日夕刻までには總て乘船するを得たるに十日に至るも出帆を許されず二百餘人は全然餓死に瀕し哨兵の持てる麵麭一斤を三留にて買求むるに至りたるを以て日本人總代はアレキシーフより鎭守府司令官に同胞の困難を救はれたき旨請願したるに午後十時に米十俵ビスケット半打を送り來りたるに付粥を以て辛じて露命を繫げり十一日は飲料水不足の信號を爲したるも何等應ずるものなく十二日に至りて漸く水を送り來れり然るに温州號の爲めに指定されたる錨地は恰も同港の入口に當るを以て日本人の中には日本艦隊再擧の時同胞人に顧慮して軍機を失ふ事あらんとの考より强ひて船長に迫て出帆せしめんとの意見を抱くものありしが十三日再び願書を司令官に提出し哺乳兒ある婦人及姙婦だけにても滋養物を與へられんことを請求したり此日ハルビンよりの避難民百三人到着したるが此等は途中荷物も所持金も悉く强奪せられたりと是に於てか温州號の日本人は總計三百餘名となり其困難は益々加はりたるも一同能く忍耐し靜肅謹愼を守れり二月十四日午後四時初めて出帆を許され港外數哩の處にて一同帝國萬歳を三唱し十五日朝芝罘に着し領事館の國旗を見て初めて安堵の思ひを爲せり。

尙ほ旅順の事情に付聞く所によれば日本軍の同港攻擊以來秩序大に紊れ馬賊の横行する外露兵の掠奪を逞ふするあり重立ちたる露國商店の店員は皆武裝して同國兵の掠奪に備ふる程なれば日本避難民の荷物の大部分はクラークソンの倉庫に預け置きたる荷物一品をも殘らず盜み去れたり猶太人波蘭人等は日本の戰勝を祝するもの多し日本人中ハルビンにて旅費なくして引上

げ得ざるもの多かりしに日滿商會の杵淵某の如きは數年來貯蓄したる四千留の金額全部を支出し以て同胞を引上げしめたり。

戰死者の葬儀

旅順の海戰に戰死を遂げたる梶村候補生を始め各戰死者葬儀は二月十六日午前九時半海兵團出棺日宇村海軍墓地にて執行されたり葬儀掛は田邊機關大監、西海兵團長にて早朝より其準備に取掛りて昨日火葬に附したる遺骨



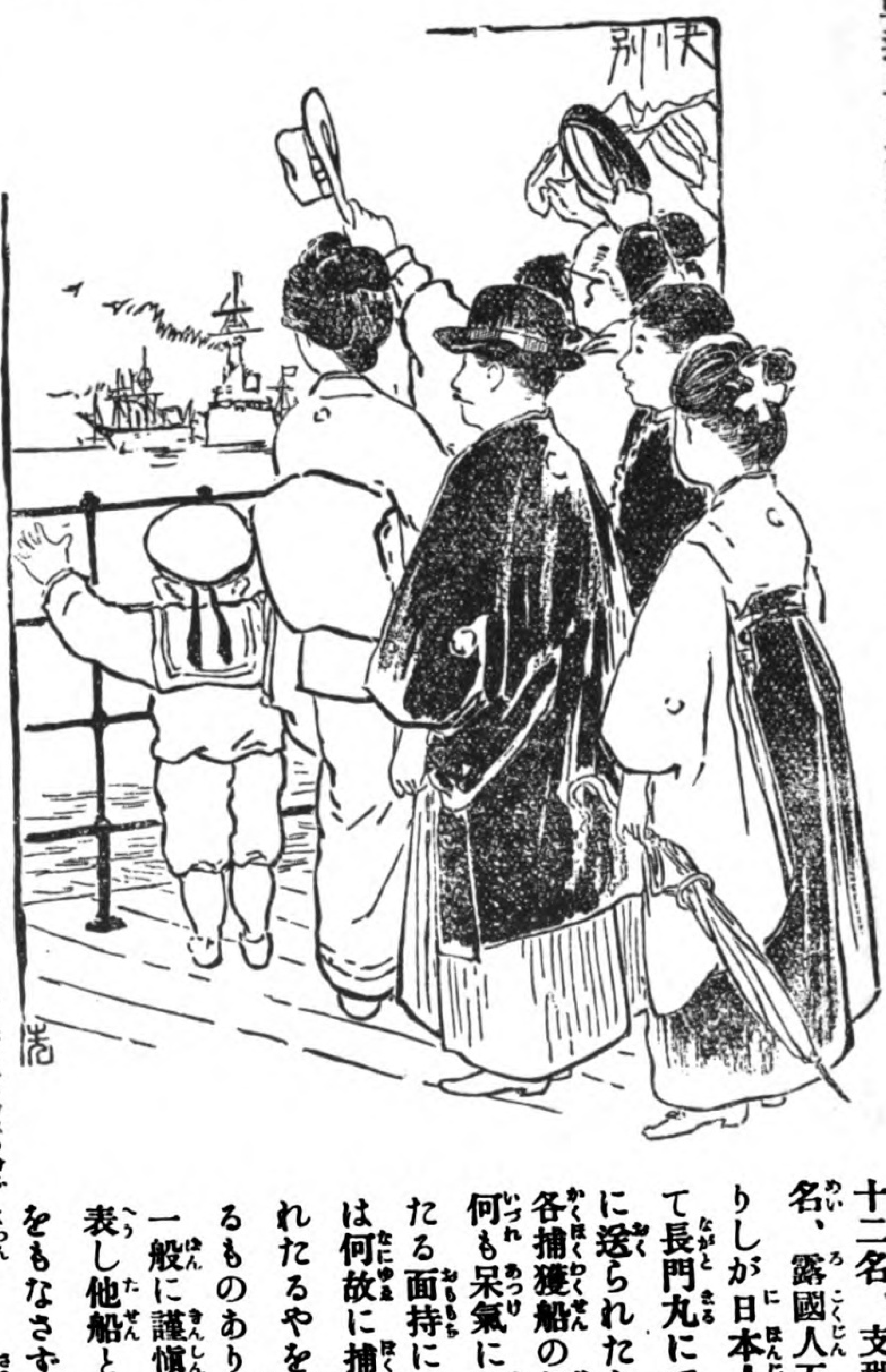
を砲車に載せ列を整へ時の至るを待つ軈て遙かに一聲の喇叭聞ゆるやしづ〳〵と構內を繰り出し先導準士官一名次に軍樂隊、儀仗兵一小隊榊一本、紅白の旗五本、造花、生花數對次に神官三名車上にて之れが導をなし海軍三等水兵は藤崎佐久良柩としたる旗に次ひて砲車に乘せたる柩を引き夫より海軍三等兵曹町田軍治、上等信號兵曹小野光長、少尉候補生梶村文夫の各銘旗引續き黑の紗にて包みたる柩を引き藤崎氏の柩には同人遺族、友

人隨從し町田氏の柩には同人下宿の主人從ひ小野氏の柩には未亡人ヨシ子白無垢藁草履にて當年五歳の遺子光夫氏の手を引き悄然として伴隨し梶村氏の柩には令兄及び從兄某氏隨從し續ひて田邊、西兩氏の儀仗兵一小隊、每兵團水兵千五百名夫より一般會葬者にて鮫島中將は村田少將と相幷んで徒歩し餅原少將其前に在り坂本參謀長は鮫島中將の次に在り時々吉田副官を顧みて何事をか語り戶塚總監、上村少將は渡邊市長、色紙警察署長等と肩を雜へて行く海兵團より日宇村迄約一里半然も會葬者の數夥しくして前列既に墓地に達したるに後列は尙ほ町を離れざる程なりき在留高等官夫人は水交社前に整列して此を送りしが小野未亡人の悄然と歩み來るを見るや一同涙に咽びてまた面を上る者なく無心の光夫氏此時負はれて水兵の肩にあり一同泣き沈めるを見て母に向ひ頻に其の故を問ふ未亡人の心中や如何なりしならん柩の墓地に達したるは十一時十分にして先發の委員及び鮫島夫人上村中將夫人等整列して此を迎へ四個の柩を一所に集めて祭壇に送り儀仗兵其の前に整列水兵儀仗兵の後ろに立ち遺族は左方會葬者は右方の席に就き神官形の如く式を行ふ此日朝來空曇りて今にも降り出さんとする有樣なりしが神官壇を下りて鮫島長官弔文を朗讀し始むるや遂に降出し式を終る迄歇まず一同歸途に就くに至つて漸く歇みたり長官の弔文に次いで遺族の玉串奉拜會葬者の玉串奉拜あり終つて梶村、町田、藤崎諸氏の柩は各々其の鄕里に送る爲め遺族近親の者に渡し小野兵曹の柩は祭壇右手の穴に埋め遺骨の一片は未亡人此を護して鄕里に歸るととし儀仗兵の弔銃三發と共に正午式を終りたり長崎縣廳よりは特に參事官を派して此に列せしめ折柄出征の後備步兵第四十六聯隊又路傍に整列して之を送りたり舞鶴海軍工廠よりは特に弔電を寄せられたり。

捕獲露船の情況

事變以來捕獲露船は合計七隻となりたり捕獲船「アル

グン」は入港當時既に糧食缺乏せる趣きにて其の供給を乞ひ來りしに依り早速人を派遣して取調べしめしに船員一同及び船客の分は九日間は支え得べき見込なりしも下等船客は何も自炊の事とて既に食料に窮し居るを發見し直に七十八名に對する二食分を給與し其他船員及び船客に對する食料をも送り尚引續き供給する筈右「アルグン」の船員は士官七名、水夫五十名、内露國人二十七名、支那人二十三名、スチユワード十五名、内露國人四名、支那人九名、日本人



二名、買辨十一名にて船客は上等八名、内英國人一名、露國人五名、日本人二名、下等七十八名、内日本人七十二名、支那人六名、露國人五名なりしが日本人は總て長門丸にて長崎に送られたり。

各捕獲船の船員は何も呆氣に取られたる面持にて中には何故に捕獲せられたるやを知らざるものあり然れど一般に謹愼の意を表し他船との交通をもなさず能く我命を奉じ居れり唯其の仕度料供給に關しては樣々なる注文を提起し二月十日「ロシヤ」號よりチャーレス、エ

バボレットのクリーム十二罐、麥酒一箱、魚二百封度牛五十封度、芋五十六封度、麵包五十斤の注文あり「モクデン」號よりは特に乘組支那人の食料として豚肉十封度、豚脂三封度、魚五封度、キャベツ十五封度・牛三十封度、ラーブルバタ二罐の注文あり「エカテリノスラーヴ」號よりは毎日新しき牛乳三罐、紙八百帖を送られたき旨申し出でたるが鎭守府にては悉く之に應じ頗る優遇しつゝあり水夫等に與ふる食物は一食五十錢の豫算なり。

千代田艦の任務

（村上艦長の談）

千代田艦は元と北清警備艦にして事局前には芝罘を根據とし碇泊するも淡水の補給を受くる爲め 一ヶ月數次仁川に赴く事あり十二月中旬も淡水補給の爲め仁川に回航せしに同港警備の任を帶びたる 濟遠號は木浦に赴き仁川は空虚となりたれば 我千代田は其代理として仁川に止るの命を受けたり此地は固より遼隔の場所なれば 東京の如く時局の狀態を詳しく知る事能はざれば浮説百出し人心常に騷然たり 其間露國軍艦は大概二隻宛碇泊し居りたるが十二月下旬となり 外交局面漸く危殆を告げ來ると共に 英米伊佛等の諸國軍艦來泊し各自に自國公使館保護の目的を以て水兵海兵を京城に入京させたり 此外國水兵の入京は居留民に甚しき 不安を與へ人心益々動搖せしに加へて事局の進むに從ひ各國軍艦も其數增加し既に七八隻に及びしを以て 各艦長士官の交際盛に行はれ其表面は頗る無事泰平なる如く或は 晝餐に或は晩餐に或は喫茶に互に招待應酬せしが其內實は皆互に情報を知らん事を務めしは 勿論なり此際千代田艦長の職に居る予は 適當の時機に適當の命令下るべきを信じて疑はざれば沈着して任務に就き居たり但し其爲すべき 適當の注意は毫も間斷なく然かも目立ぬだけの態度を取り 夫々準備したるが二月の 上旬露國艦隊は旅順を出たりとの說傳はりたり此地に於ては兼ねて五六月の頃より韓國はアレキシーフに 三千の露兵を借るの約ありて露艦隊は此兵を送る爲め 旅順を出でたるなりと信ぜられ京城仁川の人心急に恟々たるものありき千代田艦にては若し此風說果して 眞なれば我艦の態度は如何せんと大に苦慮する所ありしが 幸にして風說に止り露艦隊は再び旅順に歸り 仁川の人心漸く安じたり續て本月六日露國商船釜山に於て 我艦隊に捕獲されたりとの報傳りたれば此事若し露艦の知る處とならば彼は忽ち敵意を含みて容易ならざる事態を 生ずべしと其應備を講じたるが 露艦は遂に知らざりしか警戒の內に何事も無く一日を終り七日の夜我艦は仁川を出發すべき時機來りたれば 十一時半暗夜に乘じて 拔錨し露艦に氣附かれざる樣徐々として仁川港を出航したるに此時港の水道を照導する三個の燈臺悉く 消え居たれば急潮狹隘なる水道の通過を暗夜に爲すは 危險極りなしと雖も幸にして無事に航行し港外に出で天明後我瓜生艦隊に逢ひ先導艦となり 陸兵上陸の保護を終り八日午前五時高千穗朝日兩艦と共に再び仁川港に入り 露艦が若我上陸兵の沮害を試なば此に應ずる 手段を爲す筈にて碇泊一夜を過せしが陸兵の上陸は仁川居留民の熱誠なる助力に依りて 大速力を以て進行

し九日午前二時に全く終了し　運送船は平壌丸の少し遅れたる外皆天明の頃港外に出たり我軍艦も又續て港外に出で　瓜生司令官は露國軍艦に出港決戰を申込み各國軍艦には日露兩國は既に交戰の場合となり居れば露艦を砲撃する事なるべしと注意を與ふる手續を爲したり九日の晝以後ワリヤーク及コレーツと交戰したる事は各新聞紙に詳しければ是を略す朝鮮人は世人の知る如く事大主義なるを以て仁川に有力の露國軍艦ある爲め日本軍艦が引揚げたりと云へば同港の日本人は勢力を甚だしく失墜し陸兵の上陸其他に就て非常の不利益を來す故事體頗る危險なるに堪へ仁川に我千代田艦を匿かしめしは當局者の措置宜しきを得て日本帝國の爲め大なる任務を果せし事は確信せし處なり斯くの如く　籠城的碇泊の場合に於て予の尤も苦心せし處は　乘員の決心は鐵の如く堅きを以て顧慮するを要せざるも若し機先を彼に制せられなば　我の不利益豈何ぞやと此間四五日は殆んど寢食を廢して諸般の設備を爲したり、高等司令部の命令宜しきを得て今日の場合に至りたれども其當時は曾つて學校に於て與られし數學の苦難問題と同じく非常の苦慮したるが幸に任務を全うし得たるは正く我大元帥陛下の御威德の然らしむる所なりと信ずと

停車場の見送



▲（父）此お守りは大切にして身に附けて置くだよ
▲（母）時て早く歸れよ!、言ひ終つて涙潸然

大佐又曰く予が佛艦を訪問せし時氣候頗る寒冽にして寒暖計は華氏十度を示し小蒸汽船に打込む激浪は直ちに凍結し爲めに甲板は辷り危險なりしが我小蒸汽船が佛艦と離るる頃一人の水兵は靴を滑らして海中に落入りしが之を救助する水兵は固より落ちたる水兵も擧動頗る沈着にして毫も周章狼狽するの風なく直ちに小蒸汽に救ひ上げたり　此後該佛艦長は予に語りて貴官は能き水兵を持たれたり彼の落付きたる擧動より考ふれば射撃も必ず沈着にして　精確なら

んと大に賞美したり一兵卒の行動も我帝國海軍の價値に關すると思へば決して忽せにする事能はず

ワリヤーク艦長ルードチフ大佐は佛語を巧に操り英語も能くし快活にして頗る交際家なれば一個人としては大に交の宜き方なり　海戰の當時横臂に微傷を蒙りコレーツ艦長ベライエフ中佐は淳朴無愛想の純然たる露西亞風の人物なり云々

負傷大尉の海戰實話

旅順海戰の際重傷を受け目下佐世保病院に療養中なる松村海軍大尉を訪問せし人の談に大尉は左大腿部を砲片の爲めに打たれて深さ一寸長さ五寸に亘る重傷を負へるに拘はらず元氣燄にして佐世保病院に入るや間もなく相當の手當を爲して繃帶を解き手術に着手したる際にも傍に居たる人々と談笑しながら既に膿を持ちて腫れ上り居たる所を治療するに曾て苦き顔を爲さゞるより戸塚院長は勇士の龜鑑なりとて褒めたゝへ其後同大尉に向ひ如何に我慢强きにも程こそあれ實際苦痛を感せざりしにやと問ひたるに同大尉は院長の言葉をありがたきことに思ひ膿を出さるゝ時の痛みは顧る强かりしも傍に多くの人も居り他の負傷者に對する聞えも如何あらんかと氣遣ひたればこそ態と物語りを爲し居たるものゝ其實は隨分苦しかりしとて哄笑したることもありしとか是れ獨り同大尉のみならず今回入院したる負傷兵は何れも容易ならざる重傷たるに拘はらず神心爽快にして毫も苦悶するものなく國家の爲めに棄てたる命を拾ひたるは無上の幸福なりと申し居るよし松村大尉が信號掛の指揮官となり後艦橋の上に在りて「勝敗の決此一戰に在り各員奮勵努力せよ」との信號を掲げしめ各艦よりの應答を受けたる際山本機關大監と吉村主理と登り來れるゆゑ後部は至て危險なれば避くる方宜しからんと云ひたるに山本大監は十年前の日清戰爭中には西京丸に在りて黄海の海戰に加はりながら艦内に居りてアレ程の激戰を目擊し得ざりしは此上もなき遺憾なりしかば此度は是非に見物せんとて肯んせず吉村主理も笑つて應せざるより然らば三人ともに討死せんかなど物語り居たるに果せるかな敵彈來りて碎くるや否や橋下に在りたる水兵四五名打斃され山本

大監は右手の甲部を傷けられ吉村主理は肩と足に砲創を受けて入院するに至りしが此時最も重傷を負ひたるは、松村大尉にして艦橋上に斃れたるまゝ起つ能はずナニ是れしきの事にとは思ひながら大腿部を打たれたるなれば如何とも詮方なく自ら腹巻を取出して括り附けんと爲し居る内看護兵來りて中甲板に下されたるよし元來海軍の負傷は砲彈の破裂に基づくものなれば何れも重傷多く富士艦の分隊長心得たりし三浦庸夫中尉の如き全身飛んで其形體を餘さず腰に帯びたる洋劍の革と金具とのみ甲板上に落ち居たりとか左れば今回佐世保病院に入院し居る負傷兵も多くは散彈の破片に起りたるものにて創傷の大なるは方四五寸より小なるは豆大のものあり或は破片の肉體中に殘れるもあり負傷の當時各艦にも軍醫ありて急場の手當は爲し居るものゝ醫官にも限りあれば大手術を爲す能はざるより途中にて瘡口の腐爛したるもの等あり斯くては治療し得べき創傷もますく大ならしむることあるより遠からず病院船を設けて大概の創傷は戰地に於て療養し得る計畫なりと。



▲露國公使ローゼン男

國交の斷絶より本國政府の召還する所と成て、急遽行季を整へ、我が國を去れる露國公使朗善男は、有名なる日本贔負にて、我が朝野の人士間に人望あり、さ

れば其の退京に際しても、敵味方の感情を離れて、訣別を惜むもの多く、恰も親友を送るが如くに、彼の行を見送れり。

彼が日本贔負なる事に就ては面白き話こそあれ、抑も彼は高尚にして且つ學者肌の人物なるを以て、壯年時代には無妻主義を主張し頻に結婚の非を鳴らしたり、然るに彼は明治の初年公使館書記官として日本に來り、初めて日本の風土文物に接するや、痛く其の高尚なる嗜好に合したると見え、日本を愛する念慮を起し、追々と日本の事情を研

東海道滊車沿道所見



出征軍隊の見送

究するに從ひ、益々日本贔負の度を高め、終に其の本國人より第二の日本人と評さるゝに至れり。彼は外交官としては珍らしき品行家にて、日本へ渡來したる後も尚ほ例の無妻主義を固守し居たり。或る年の事、彼は賜暇を得て歸國し、其の親戚故舊と久振の面會をなして喜びたるが、此の際も日本に就ての趣味は忘れ難かりけん、絶えず日本公使館に出入し、日本人と談笑するを何よりの樂みとせり。

玆に又た日本公使館の常客といふ形にて、前々より

絶えず日本公使館に出入する一人の夫人こそありたれ、此の夫人は某軍人の未亡人なるが、良人が其の存生中に於て日本を愛し居たる故を以て、夫人も亦た日本の風俗文物を愛するの餘、さてこそ日本公使館の常客とはなりしなれ、是に於て此の二人は、ゆくりなくも日本公使館の紹介に依て交際を結ぶ事となりぬ、されば兩人は會ふ度に大得意の日本咄を交換し居たるが其の趣味嗜好が全く相投合する所より、遂に男爵は無妻主義を捨て、夫人は亡夫の家を去つて彼に再嫁するこ

露兵の手帖(其一)



▲今回露國は出征兵士一般に曾て大津にて津田三藏の爲に負傷せられたる皇帝の肖像を附しある手帖を交附したる由、彼等に敵愾心を起さしむる政府の窮策や思ふべし

と決し、此に芽出度く好縁は結ばれ了んぬ、詮する所此結婚は日本公使館が媒酌人の姿にて、重ね〳〵日本とは深い縁故を持つやうに成りたるが故、男爵夫妻の日本贔負は、偶然に出で、偶然にあらざるなり、されば先頃の引揚に際しても、平素樂衣として愛用する日本服を歸國土産にせんとて、匆忙の折なるにも拘はらず、三井呉服店に命じて、

朱色羽二重古代龜甲形小袖、古代紫縮緬無双羽織、裏は紅地大輪の牡丹に胡蝶(眞紅の紐付)紫根立涌形縮緬袷羽織、裏は菫

色雲龍形紋鹽瀬紫根の紐付、黒共色縫模様紋縮緬綿入羽織、裏は雲龍形鼠紋鹽瀬毛拔仕立、白地に大名縞御召パジャマ二揃、縞佛蘭西チルパロア〻三揃、淡青色地白上り牡丹模様木綿縮浴衣二枚、木綿縮枕被六枚白無地瓦斯壁縮大巾二疋等の諸品を調製せしめ、夫人も亦た友仙縮緬紋織裏紅絹の口綿二枚襲の裁縫を依頼して、之を日本土産として持ち歸りたりと云ふ、或る人は之を例の外交手段と言へど、強ちさう許りにてもあるまじ。

吾人は彼と、事の成行上暫く敵味方と成つて袂を別ちしと雖も、平和克復后は速に來つて再び舊誼を温められんことを祈る、乞ふ健全なれや。

日露談判破裂の顚末

（六月ケ間の忍耐）

去ぬる二月八日は實に我が國が露西亞に對する談判を斷つて、世界の平和の爲めに開闢未曾有の義戰を開始した日である、で、小村外務大臣には此の日の午后入時、府下の新聞雜誌記者を官邸に招じて、對露交涉破裂の顚末を事細に告知された、其の要領を摘んで話すと斯うである。

韓國の獨立及領土を維持すると共に、該半島に於ける我が帝國の利益を保護してゆくのは、帝國の安寧の爲めに必要缺くべからざることであるから、苟くも韓國の地位を危險に陷る者ある時は、之を看過して置く譯にゆかない、然るに露國は淸國並に列國に對して與へた約束あるにも拘はらず、依然滿州を占領し、韓國までも侵畧する樣に成た、されば若し滿州が露國の爲めに併呑されるとすると、迚も韓國の獨立は出來ない、故に我が政府は露國と交涉を開き、滿韓兩地に於ける相方の利益を友誼的に調理しやうと思ひ、昨年七月下旬此事を彼國政府に申し入た所、露國政府からは欣で之に同意する旨を答へて來た、依て我が政府は八月十二日栗野公使をして左の條件を露國政府に提出せしめた

一、淸韓兩國の獨立及領土保全を尊重することを相互に約すること

二、淸韓兩國に於ける各國商工業の爲めに機會均等の主義を維持することを相互に約すること

三、露國は韓國に於ける日本の優越なる利益を承認し日本は滿州に於ける鐵道經營に付露國の特殊なる利益を承認し併て第一項の主義に反せざる限り上記の利益を保護する爲めに必要の處置を執り

得ることを相互に承認すること

四、韓國に於ける改革及善政のため助言及助力を與ふるは日本の專權に屬することを露國に於て承認すること

五、今後韓國鐵道を滿州南部に延長し以て東清鐵道及山海關牛莊線に接續せしめんとすることあるも之を阻礙せざるべきことを露國に於て約すること

然るに露國政府よりは漸く十月三日に成て其の對案をよこした、そこで該對案を見るに、露國は我が第一第二の提案を拒み、滿州及其の沿岸は全然日本の利益範圍外なることを主張し、其の上韓國に於ける日本の自由權利にまで種々の制限を

露兵の手帖（其二）



攜帶せる露國皇帝の肖像

加へて在る、故に我政府は斷然之を刎付ることに決し、十月三十日を以て我確定修正案を露國政府へ提出し、度々其の返答を催促した所、漸く十二月十一日に成ってその返答が來た、それには滿州に關する條項を削り、剩へ本協商を以て韓國のみ止るものとし、其他の條項に於ても總て原主張を言ひ張てゐる、然れども我が當初の主旨とは相容れざるを以て、我政府は十二月二十一日露國政府に向って更に其の再考を求め併せて中立地帶の全廢を提議した、右に對し露國政府は一

月六日を以て回答をよこしたが、露國は韓國に關する原提議を何處までも主張し其の代り淸國との現行條約の下に獲得した權利は少しも妨げぬといふ事を協約中に入れても宜いとしてある、けれども滿州の領土保全に關しては何の言ふ所もなく、畢竟前記の保證は實際何等の價値もないものであるから、帝國政府は飽迄も强硬の態度を執つて滿州の領土保全を主張し、又韓國に關しては毫も讓步の餘地なきを以て一月十三日重ねて露國の再考を求めに遣つたが、露國政府は之に對し回答を寄越さぬのみか、何時といふ時期すらも指定しないのである。

帝國政府は始終穩和と公平なる態度を執り、露國政府に向ても毫も難きを責むることなく、唯だ彼自身の言明した主義に對して反省を求めたのに過ぎないのであるが、同政府は飽迄も之を拒み、而も不當に回答を引摺るさへあるに、內々水陸の軍備を充し、其の大兵は早や既に韓國境を壓してゐる今迄は我慢もして來たもの丶露國の此の行動は帝國政府をして遂に平和の妥協に望を絕たしめ、談判を斷絕するの已むなきに至つたのである云々。

▲女子學院生徒の義擧

麴町區六番町なる同校の職員等生徒も取敢へず從軍兵士に對して物品を寄贈することゝなり種々考案の末生徒一人に付き更紗の袋一個づゝを調製せしめ其中には萬齋寶丹淸心丹手巾鉛筆などを入れ之を軍人袋と名づけて陸軍恤兵部に獻納する由なるが右は彼の米西戰爭の際米國有志婦人より從軍者に贈りて大に重寶したりとの事をきゝて思付きたるものなりと

▲實踐女學校の恤兵

帝國婦人協會附屬の同學校にては曩に生徒の志願に依り毛絲にて造りたる頸卷（耳鼻を掩ふ）の寄附を陸軍恤兵部に出願したるも其物品に一定の內規ありとて許可されざりしかば更に手巾千五百枚（一端に和歌一端に校名を書きしもの）獻納する事に決して目下專ら準備中なるが尙ほ同校にても毎日授業の終了後日の長短に應じ生徒に三十分乃至一時間づゝ特に服業せしめ其收入の金品若しくは勞力を以て海陸軍の用途に充てんと誠意書を父兄の許に送りたり

▲女子技藝學校の義擧

星松子の主管せる深川の同校にては生徒中より續々と軍資を獻納せんと申出でたれど生徒の出金は取りも直さず父兄の力を煩はすものなればとて之を見合さしめ別に自費を以て原料を出し各自專攻の技藝に依りて相應の品物を造らしめ其製作品をば學校に保管し置き來る三月末を期し公衆の展覽會を催し其賣上高を以て陸海軍の用途に充つる事とし其用途等に就ては追て協議の上決定する筈

奉公美談

▲米人の同情　米國民が我國に對し非常に同情を表し旅順口及仁川に於ける我海軍勝利の報に接し殆ど狂喜せるとは種々の情報の示す處にして去る十日前後に米國個人より本邦知人宛幾多の祝電到達せりとのことなるが此程在ボストン市ビゲロー氏より高嶺秀夫氏へ宛て祝電を送り越したる由ビゲロー氏は米國北部諸州に於て著名なる富豪家にして嘗て數度我國に來遊したることありボストン市博物館内に「ビゲロー、コルレツクシヨン」とて數多の本邦美術品を陳列せるものは同氏の出品に係り本邦美術品を米國に紹介する上に於て鮮からざる功績あるものなりと云ふ

▲居留外人の同情　今回の日露戰爭に就ては居留外人及び外字新聞紙は孰れも我國の主張を是認して滿幅の同情を表し開戰後有志者は外字新聞に寄書し豫後備に召集せられたる者の家族及び戰死したる者の遺族を救恤せんといふものあり神戸のドツドウエル會社(二百五十圓)ジヨージ、ポルコウスキー氏(二十圓)等は軍人遺族救助の目的を以て既に神戸クロニクルにまで寄贈方を依托したるが右に付き在京濱間の外人は過日午後横濱元居留地七十八番マソニツク公館に集會し此等の手段方法等に就て協議決定したり

▲獨逸赤十字社の好意　獨逸赤十字社は我赤十字社に於て必要を感じ且つ之を使用し得るに於ては獨逸赤十字社は欣然人員並に材料補助(例ば外科器械繃帶具の如き)を日本に送附すべき旨井上公使より日本赤十字社に通報すべきことを公然請求し來り尚同時に右人員並材料を何處に送致すべきや又日本赤十字社は該人員若しくは材料の管理に任じ場合に依りては使用せられ得べきや否やを井上公使に照會したりと云ふ

▲神田區の美擧　同區奬兵義會は區内應召者の家族にして貧困なるものを扶助する事の決議を爲し適宜幹事に於て十圓以内の金員を贈る手筈にて既に着手し一方には基本金の利子のみにて不足なれば寄附金を募り小習丹治氏五百圓、伊東茂右衛門氏の二百圓を初め既に二千五六百圓に達せるが右家族扶助に止まらず疾病者あるものに對しては施療券を與ふる事となり又た神田區醫會に於ては此等に對して施療を爲す筈斯く奬兵義會と醫會と相俟つて醫療を爲すも尚は病人の滋養物に不充分なるより同區衛生會は此等の給與に力むる事となりたり又た同區敎育會は應召者の子弟にして公私小學校に在るものには學校用品を支給する筈なるが學務委員會は更らに進んで此等の學校生徒の授業料は免除する事を神田區長に建議したり

▲本郷區兵事義會　は十日夜同區役所内に評議員會を開き這回の事變に關し幹事の外に臨時常務委員七名を選み義捐金の他從軍者の家族を慰問する等の事に鞅掌し評議員の外に囑託委員二十五名を選み同會の行動に對し斡旋盡力せんことを依賴せり

▲下谷區兵事義會　日清戰爭の例に習ひて軍人の家族を救濟する筈なり萬年町界隈には夫婦小供共稼の家多き爲め主人が召集されたりとて俄かに路頭に迷ふ者少なく左れば義會より支給したる金にて酒を買ひしなどの例もあれば今回は米を以て扶助し各家主には家賃を免じ或は半額に爲すべき樣勸告する筈なりと

▲婦人結髮會　本所區徴兵慰勞義會にては一昨日常設委員會を開き軍人の慰勞、其家族の擁護及び戰病死者の葬儀執行等につき協議可決し委員は直に家族訪問に着手したる由同會々長飯島氏常設委員長太胡氏及び委員朝倉氏夫人菊子等主唱となりて婦人結髮廢止會といふを組織したるが右は本所區内の婦人を五萬人と假定し一人の結髮料一ヶ月廿錢とせば一ヶ月一萬圓を得べく戰爭中毎月之を獻金せんとするにあり區内の婦人は此美擧を傳へ聞きて入會者引きも切らざる盛況なりと

▲四谷の家族扶助と獻金　四谷區の兵事義會にては麹町區同樣議決の末出征者の家族にて目下生活困難の者十五軒に對し親一人に付金三圓子供は金一圓五十錢を一昨日贈與せり又同區傳馬町一丁目の町民一同は軍費を獻金せんとて去十四日までに徴集せし金額は金千六百圓に上りたりと

▲赤阪區徴兵義會　區内應召者へ金圓又は物品を贈り且つ其家族を慰問し尚は家族中に病氣又は事故の生ぜし時は同會に於て相當の救助をなし戰死傷病兵士のある時は委員を派して弔慰金見舞金等を贈る筈にて即時實行に決し取敢へず應召者家族の困難者へ一日一人白米三合菜代四錢五厘宛を贈る事としたり又右差配人は

時局終結まで家賃を無料としたり

▲**麴町公民會**　麴町區公民會恤兵部にては今回の戰爭に就き同區出身軍人九十五名に對し去十一日下の如き規則を設けたり曰く出身軍人にして其生計困難ならざる者の家族には金二圓以內の物品を贈り生計困難の家族には戰爭の終局を告ぐるまで一ヶ月金二圓以上十五圓以下を救助費として仕送る事とし又戰死又は病死者遺族へは金廿五圓以內不具者若くは廢疾となりし者の遺族へは金二十圓以內を贈與し及び從軍家族の疾病に罹れる者へは時々物品を贈る事と定めたり

▲**各區の兵事會**　南千住兵事義會にては出征軍人二十六名に對し金三圓宛を送りたるが家族の貧困なるものには一ヶ月大人一圓八十錢小人一圓宛を贈ると▲本所　獎兵義會は出征者の家族一戶に付三圓を十五日贈りしが尙は家主には家賃を半額にせしめんと交涉中若し又家族にして火災其他の厄に罹りしものは金七圓を贈る筈なりと▲淺草　兵事會にては出征者に對し三圓宛を贈りたり

▲**日本橋區尙兵義會**　目下三千八百五十圓の積立金あるが去十二日區內より入營したる軍人二百卅八人の爲に評議會を開き大橋新太郞より五百圓菊地長四郞、前川太郞兵衞、杉村仁兵衞、渡邊治右衞門、渡邊大次郞等より各三百圓高木彌兵衞より二百圓の義捐あり出征者の家族にて十五歲以上のものに四圓、以下の者に二圓宛を贈與する事を決議し又貧困者五十名の取調をなしたるが其扶助金員は去る廿五日入營出征者二百卅八名に勝男節料として金十圓宛を贈ると同時に贈りたりと前記の外日本橋內にては本町二丁目龜澤半次郞より海陸軍へ千圓宛富澤町前田兼七より千圓、田所町九番地樋口兼吉千圓、瀨戶物町十五番地大越清吉より千圓の献金を申出でたるが大越は戰の續く限り年々千圓宛を献金する由

▲**出兵者家族扶助方法**　麴町區の公民會にては再昨日より恤兵部を組織し出征者及其家族を扶助する事を議決し夫々委員を撰定せしが同區の出征者は去十五日までに九十五名にて其家族にして第一生活困難ならざる者には金二圓迄の物品を贈り第二生活困難なる者には戰爭の終局まで一ヶ月金二圓以上十五圓以下を贈ると第三戰歿病死者には金廿五圓以內の見舞金を贈る事第四出征者の不具又は廢疾となりし者には金廿圓以內の見舞金を贈る事第五出征者の家族にして病氣に罹りたる者ある時は生活の如何に依りて物品又は金錢を贈與し時々家族を慰問する事第六出火又は非常の時は家族を救護する事に確定せり

▲**獎兵義會**　小石川區役所にては去十二日集會を開き今回召集されたる軍人の家族に對し男子は五合女子は三合の割を以て戰爭の續く限り每日白米を給與する事及び現在基金七千五百圓にて不足する時は寄附金を募集する事に決したり

▲**女學生の美擧**　本鄕區弓町なる女子美術學校生徒四百餘名は今度スコッチ靴下四千足以上を恤兵部に献納することに決し各自規定の授業を廢し只管その業をいそしみ居るとぞ又三輪田女學校、女子職業學校等其他にても同樣の擧ありたる由

▲**篤志の夫婦**　本所區横網町一丁目白米商山口政五郞の妻ハマ（三十六）は今迄女中二人に朝夕の仕事をさせ自分は遊ぶより外に仕事も無かりしが日露戰爭に感ずる所あり一昨々日限り女中を解雇し每月浮ぶ十圓の金をば每月獎兵義會に寄附せんことを申出でたるが之を聞きたる夫政五郞も區內より出でし兵士の家族を見舞ひ一戶に三升づゝ百戶へ三石の白米を與へたしと同じく義會へ願出たりと

▲**金品献納の心得**　兒童走卒と雖も軍國の爲めに競ふて献芹の微意を致さんとし續々之を願出づるより陸海兩省は先日其規程を告示したるが陸軍の方は十三條海軍の方は十二條より成りて兩省とも大抵同樣の趣旨なり唯陸軍は恤兵部宛海軍は經理局長宛にて金圓は一通一圓以上（多人數連合の者は一人前十錢以上）たるべく物品は追て恤兵部に於て定められたる品目に限り其部隊を指定し及び使用の方法を特定したる金品は受付けず又認可を受けたる寄贈品は點檢を受けたる後指定の官衙へ送付するものなるが其輸送運搬費等は勿論寄附者の自辨たるべしとなり

▲**本間家の献金**　出羽國に過たるものと謳はれし同國酒田町の富豪本間光輝氏は宣戰の詔勅に接するや一族を大廣間に集め沐浴齋戒して詔勅を捧讀し今回の擧や實に我國未曾有の大事にして國民一致奉公の義を盡さゞるべからざるを以て今日以後交戰の終局を告ぐるまで年中の行事を廢止し大節納を行ふべき旨を嚴かに申渡し軍資として金五萬圓献納を其筋へ出願せり

と海に富豪家として本分を盡せしものといふべし

▲老婆一萬圓の獻金願　二月初の事なりし六十四五歲の老婆が神戶市役所へ出頭し庶務課長に面會し婦人の身にて差出がましく覺すらんが僅かながら軍資を獻納したしと云ふに課長は有り合はしたる罫紙を出し之に金額姓名を記載致されよと云ふに老婆はサラ〱と認め無雜作に差出し些少にて御恥かしくと云ふに受け取り見れば「金一萬圓也濟水せい」とあり課長は思はずソッと噴出し、居合はしたる市吏等も一同顏見合はせ笑ひを忍び居たる程なりしが課長は何處までも狂人と思ひ宜き程に遇らひて追ひ歸へしたるに何んぞ料らん此の老婆は狂人にもあらず戲れにもあらず三宮神社宮司某の未亡人にて家には二十萬の資產を有し宮司在世の時に國家有事の日には萬分一の義を盡くすべしと語り置かれたる遺志に基づきて今回いしくも一萬圓獻金の事を思ひ立ちたるなりと

▲匿名婦人南署へ獻金を送る　去月十一日未明に大阪市南警察署へ一通の封書郵便にて屆き裏より匿名にて差出人を知るによしなけれど消印は岸和田とありてその封筒の中に左の如き女の筆跡の書面と十圓紙幣七枚即ち七十圓を封入しありたれば同署にてはその差出人を搜查すると共に該金は南區役所へ引渡したりと

つたなき筆もて御ねがひ申上奉り候さて私事かれてより日露戰爭のおこり候際には是非とも女子は女子だけの國民の義務の萬分一なりとも盡し奉らんといろ〱と心を碎き候得どもまゝならぬ身は今はせんかたなくて唯願ひ過すのみにてまことに殘念の至りに御座候就ては此金子七十圓誠に〱些少に御座候得ども何卒軍用金の御中へ御加へ下され度伏て御願ひ申上奉り候

朝日にはもろくも消る露の身を
日かげに過す今日のかなしさ

何卒右の金子軍用金の御中へ御加へあらまほしう此段御願申上奉り候(原文のまゝ)

▲京都の貴婦人　京都の豪商辻忠郎兵衛氏は今回繃帶の材料として白木綿四百五十疋を同地赤十字社支部へ寄附せしに付同支部にては村雲尼公を始め大森知事夫人、阿武少將夫人外四十餘名の貴婦人令嬢何れも甲斐々々しき襷掛けにて機械を片手に勇ましく繃帶製造に從事し既に二百疋を造りしと云ふ

▲婦人法話會の義擧　九條、三條、毛利岩倉等の華族婦人によりて設立せる淺草本願寺別院婦人法話會は過日臨時評議員會を開き不取敢軍資金の內へ百圓を獻納する事とし尙會員各自應分の醵金をなし愛國婦人會の戰死者遺族の吊追金の方へ寄附する事に決議し去月十六日夫々岩倉會長の名を以て其の手續に及びたり

▲英國婦人軍資寄附の書面　麴町區永田町なる島津公爵(忠重)家の家庭教師として雇聘されたる英國婦人ミス、ハーツオルド氏は公爵家の爲め熱心家庭の教育に盡力し其成績非常に良好なるは兼て聞き及びたる所なるが同氏は目下の時局に對し大に感ずる所あり前號記載の如く左の書面を長崎省吾氏に差出したりと聞く

拜啓陳者私事島津公へ三年間の勤仕中實に貴國及び貴國人民の敬愛すべく且尊重すべきことを相覺ゐ申候就ては今回の戰爭に對し私の切實なる同情と稱讚の誠意を表する爲め公爵の御後見人へ請願致し度儀有之爰に本書を呈し候次第に御座候右は向後私へ給はるべき俸給を六ヶ月間御止め被下該金額を軍資中へ獻納方御取扱被下候樣致し度儀に御座候外國人中にも此度軍資獻納の義擧有之哉に承及び候得共私は貴國の精神と氣風に倣ひ可成表立たず且衆目に觸れざる方法に依り獻納仕度き情願に御座候幸に御採用被下些少ながら軍資へ御加へ被下候はゞ私の光榮之に過ぎず候何卒願意貫徹致し候樣御取計被下度右懇願如斯に御座候敬具

▲米國婦人の同情　共立女學校長たる米國婦人ミス、ルーミスは大に我れに同情を寄する結果私費を以て雜紗切れを買ひ集め生徒をして手袋及び耳袋を調製せしめて恤兵部に獻納せんと企て生徒復其の同情に感激し精勵事に從ひつゝありと

▲歐米人の美擧　本邦在留の米國人より我政府に向ひ軍資獻納を申出づる者東京、橫濱神戶、長崎等より續々ある由、尙ほ目下帝國ホテルに止宿中の墺太利人サツメーはホテル支配人ニミールフレックを介し今後戰爭問題に就きホテルに於て會合其他祝賀會等の催しある場合は寄附を爲す旨別項に記載せる有志會の田口卯吉、島田三郞の兩人に申込めりと云ふ

新家庭

巖谷小波

▲帝國萬歳！

日露の平和は遂に破れて、戰端は兩者の間に開かれた。之は決して賀ぶべき事で無いが、時と場合、元より至當の事として、余は今回の擧を義とするものである。

さりながら、今年に於いて今回の事あるのは、蓋し偶然ならぬ事だ。見給へ今年は甲辰の歳である。甲は甲冑の甲、已に戰爭に縁がある。而も『たつがしら』の甲たる事は、年が辰であるのでも解るでは無いか。

凡そ龍頭の甲は、總大將の頂く所、恐多くも大元帥陛下の、親しく兵を率ひ玉ふ、大戰の兆は已に見えて居る。

さてまた辰と云ふ字は、之に手偏を添へれば振と云ふ字になる。これ一度び手を揚ぐれば、必ず國威を振ふと云ふ意。已に開戰の是なるを示して居る。

更にまた此の辰も、試みに貝偏を加へたら如何か？ 字は忽ち賑と成る。蓋し貝は、たから と訓じて、金銀財寶の意であるから、此役正しく大勝に歸して、他日受くべき巨萬の償金に、わが帝國の賑ふ事は、また鏡にかくるが如しだ。

判じてこゝに至れば、此度の戰爭たる、正に大に賀すべきでは無いか。況んや仁川に旅順に、劈頭第一の大勝利は、皆我が手に歸するをや、大日本帝國萬歳！

▲正義の戰

あゝわが帝國は、已に露國と戰つて、劈頭第一の勝利を占めた。正直の頭に神宿るとやら、正義の爲めに起つた我軍に、天祐あるは元より當然の事である。

然り、我軍は正義の爲めに立つた、是が此度の役に付いて、最も記臆すべき點である。

凡そ戰の元因は、古來決して一規に出て居ない。或は君主の相續爭もあり、信奉する宗教の爭もあり

復讐的の戰もあれば、野心的の爭もあり、さては侵略主義の戰爭、正當防衛の戰爭、同盟救護の戰爭など、その時と場合に依つて、實に種々樣々である。

さて今度の役を見るに、露國の側から云へば。侵略主義の意十分にあつて、わが帝國の方から云へば、正しく同盟救護、乃至正當防衛の戰たるは、歷然として明かである。

同盟救護と云ひ正當防衛と云ひ、正義の戰たる事は元より說を待たぬであらう。

顧つて彼の豐太閤が、朝鮮征伐の大擧の如き、壯は即ち壯であつたが、今日から之を論じると、野心的、侵略主義の戰たるを免かれまい。之に反して二十七八年役と云ひ、また今回の事と云ひ、日本が清露兩國に對する事は、何れも正義の爲めである。これ事甚だ相似て、而も其間月鼈の差ある所以だ。

然るに世の或る者は、彼も是も同一に視來つて、只我が國の强を說き、我が軍の利を誇るのみを知り、更にその原因を究めず、動機を鑑みないに至つては、抑も大きな間違である。

されば世の父母たり、將た師兄たる人々は、此際子弟に誨へるのに、只漠然たる戰話に、我國の强さ、えらさをのみ以てせず、先以つて此度の戰爭の、因つて來つた動機をば、明かに說き聞かせて貰ひ度い。是眞に士氣を鼓舞し、第二國民の元氣を養ふのに、最も大切な事なのである。

▲軍國の家庭

家庭の改良に心あるものは、今この軍國多事の際を利用して、その實を擧げるが最も好いかと思ふ。

時局一たび發展して、動員令は布かれ、宣戰の詔勅は下だされ、號外々々の聲は、朝に夕に戰報を齎らし、日の丸の旗漸く忙しく成つて、上、九重の大奥より、下、半間の路次の隅まで、氣昂り、意熾んなる今日此頃、如何なる不和の家庭に於ても、此際些細な夫婦喧嘩もして居られず、如何な呑氣な亭主殿も、茶屋酒斗りに浮かれても居られねば、どんな引ずりの細君も、

ぼんやり火鉢の番のみは仕て居られまい。

明間と明蒲團を徴發されて、常なら苦情を云ふべき不自由も、此際は甘んじて之を忍び、却つて進んでその任に當たらんとする。さては軍事公債の募られ、恤兵部の開かれるを聞いては、大方の慈善會に、常は勸められても切符を斷つた家も、出金を辭さぬに至るなんど、頼もしい心掛では無いか。

平生は尻の重い下女も、動員令の事を聞いては、自然と朝も早く起き、不斷はずるけ勝の小使も、號外々々の聲に誘はれて、自然と使が速く成る。

まことに時局の影響は、凡ての階級に及ぼして、所謂る懦夫も起つに至たる。此時此際の心掛を、社會一般の人々に、長く忘れざらしめば、家庭改良の事なぞも、決して難い事ではあるまい。

▲猪勇を戒む

さるにても、神經過敏なわが國民は、勝つたと云つては喜び狂ひ、果は常務常職をさへ忘れて、只戰爭に夢中に成る。天眞爛熳と云へば邪氣も無い樣だが、實は必しも褒めた話では無い。

早く熱する鐵瓶の湯は、また早く冷め易い道理。勝報に逆上つた國民は、敗信に忽ちしよげ返つて、昨日の元氣を失ふ事の、必ずしも無いとは限らぬ。幸ひにして我軍の、未だ敗けた例が無いからよい樣なもの丶怪我にも一度敗けたと聞いたら、どんな顏をするであらうか、思へば覺束無い次第である。

且つ我が國民の常として、事の初めには非常に熱中して、隨分思ひ切つた眞似もするが、さてその事がちと永引くと、果はぼんやり忘れてしまふ事、彼の日清役の當時でも知れる。

平壤、黃海の戰報こそ、目を皿にして幾度か繰り返へし、牛莊、田庄臺、威海衞、澎湖島と成つては、號外もその度數を減じて、讀者も二號活字の拾ひ讀みにざつと目を通す斗りと成る。さりとは便り無い人情ではないか。

然るに今度の事に付いても、彼の旅順の海戰の、ま

だ公報さへ傳はらぬ中から、はや夢中に喜び狂うて、ちと提灯行列の、樂隊行進のと、騷ぎ廻はるなどは、輕忽過ぎると思ふ。ましてこの騷ぎ仲間が、年少血氣の學生に止まらず、圓髷の細君、束髮の令孃まで、之に交つて居たと聞いては、沙汰の限りと云はざるを得ない。

無論戰爭を初めたからは、敗けるより勝つがよい。勝てば之を祝ふがよい。が、祝ふにも時があらう。是から幾月、何年かゝるか知れぬ、今度の日露の大戰に、たつた一度の勝利位で、かう逆上るとは、常から勝つた事も無い樣で、あんまり大人氣無さ過ぎる。

まして姬御前のあられも無い。そんな騷ぎの野次馬をして、髷の根を拔く元氣があるなら、進んで篤志看護婦に成つて、いつそ戰地に飛び出すに如かずだ。戰爭と見にも角にも、あまり早くから夢中に成つて、何所やらの他を見ぬ事は、又しても例の小國根性と．嘲らで笑つて居るかも知れぬ。

凡て勇氣の尊ぶべきは、猪勇よりも沈勇にある。殊に女子の勇氣に於いて！

▲敵ながらも感服

必ずしも敵を褒めるのではないが、此度の事件に就いて．敵ながらも感服する事が二つある。

その一は、旅順口の海戰を、アレキシーフの本國政府に報じて敗軍を少しも繕はぬ事と、彼のローゼン公使の夫人が、わが國を引揚げるに望んで、多くの日本調度を携へた事、この二件なのである。

これが常の人々であつたら如何か？アレキシーフの立場からして、その敗軍を本國政府に報ずる事の、如何卜り忍び難いであらう。事に依つたら事實を變じて或は鷺を烏と報じたかも知れぬ。

また敵國を引揚げる身の、よしその嗜好に依ればとて、その國の產物を持ち歸るなどは、尋常人には眞似の出來ぬ事だ。否、多くの人々は、常から持つて居る物でさへ、此際見るも汚はしいと、燒き棄て、乃至は打ち碎しさうなものだ。

それを平然として敗を報じ、喜んで敵國の產物を持ち歸る事、よしその實は、これに多少の瞞着があり、はた例の外交手段なりとするも、流石大國的の度量と見上げざるを得ぬのである。

而も彼等の本國は、この敗報を見て、必ずしも直ちに失望せず、またこの敵國からの土產を見て、強ち不快を感せぬのではあるまいか。

思うてこゝに至ると、流石に露國は大國である。

但しその褒むべき事は、畢竟この二件に止まつて、其他には生憎く見付からない。

▲戰時の文學

戰爭が一たび起ると、一も戰爭、二も戰爭、戰爭ならずば夜も日も明けず、筆持つ者も、劍持つ人と同じ樣に、その鋒先を戰爭に向けて、之を寫し、之を描き之を稱へ、之を歌はんとする。蓋し時節柄當然の事だ。が、余を以て云はしむれば、此際所謂詩人作家なるもの丶、取つて以てその材料とする事は、戰爭その物の表面には無く、却つて裏面にあらうと思ふ。

例へば出征者その人よりも、その人の家庭の有樣、戰死者その者の働きよりも、その留守の妻子の心情、此等を深く研究すれば、正に好個の詩材を得られる。而も所謂る士氣を鼓舞し、人心を感動せしむる點に於て、此の方が寧ろ効あると思ふ。まして家庭の讀物としては。

▲皇后陛下の御物

皇后陛下の御手元に在る巨多貴品中金銀屬の一部分は今度日本銀行に下渡さるゝ事と爲り金製御置物ダイヤモンド入り純金御頸飾、同御腕輪、同數多のピン類等御取調べの上香川皇后宮太夫の目錄調製次第同銀行に御沙汰ある筈

▲各宮方の御寶物

伏見、有栖川、閑院、東伏見、華頂、山階、久邇、梨本、北白川、賀陽、各宮殿下の御所有に係る多くの金銀物中或る部分を限り今度日本銀行に交附する事と御治定相成り目下目錄調製中なりと

貴婦人の嗜好

伊東海軍大將夫人

中村鈴子

夫人美津子は鹿兒島縣士族加藤長氏の令妹にして安政元年一月二十一日に生れ、明治十年今の正三位勲一等功二級子爵海軍々令部長海軍大將伊東祐亨氏に嫁す、人と爲り重厚沈毅、幼より戰亂に遭遇せしこと多く、隨つて軍事上の趣味に饒み士卒に對する同情厚し、其令息令孃の殊に快活なるは夫人薫陶の結果なり、

後に御殿山の木立を負ひ前に品川灣の臺場を控へ、中央に東海道鐵道と電車鐵道との二線あり、偏に勇將の壯圖を賛歎するが如きの處、伊東海軍大將の御邸は此にあつて品川灣を警衛せられ居る樣であります。朝來の雪雲も何處へか散つて、樺色の日光は地面に滿ちた二月一日の午後一時頃杉檜の植込と相映せる灰色塗の御玄關に伺ひ、廣い南向の應接室に導かれました。此應接室へ入ると眞正面に富士艦の精巧な雛形を据ゑ、其上部の小壁に雙べ掲げられた扁額は、戰鬪中の松島艦及び水雷艇の油繪寫眞版なので、明治二十七年九月十七日黃海々戰云々と御主人の御自筆を添へられてあり、御書棚には武功鑑、海上國際條規、軍人立志談、十九世紀、黃海大海戰などの冊子を積まれ、小卓子の上に古代の劍、兜、及び破魔弓を飾られ、其他鹿の角、熊の兒、雀を啣へた貂、翡翠などの剝製、其處此處に權衡よく配置せられ、ストーブの圍ひ應接卓子の大理石は皎々として鏡の如く、橙黃色に暗紫色の花摸樣ある大窓掛は莊嚴の趣を添へ、絨氈の上に聯ね敷いた獸皮は、虎、豹、綿羊を始めとして、膃肭、獺など何れも澤々として軟かに、長椅子にも豹や狐の皮を懸けられ、室内の裝飾自ら雄偉豪邁の空氣に滿さるゝので、轉た御主人の威風を想望しつゝある時、西手のドアーを開いて出で來られし夫人は、藍鼠一樂の小袖に八丈を重ね、庵に木甲の五ッ紋黑羽二重の御羽織に太い丸打の紐を堅く結ばれ、襦袢の御襟は無地の薄鼠縮緬、黑繻子の帶と鐵皮色の帶止が僅かに見えて、勝色甲斐絹のフキ厚く、紫紺毛糸の、襪を穿いて居られ

ました。玉を欺むく御色白に漆のやうな黄髪を周圍の膨眼した束髮に結ばれ、善く揃つた生際は水の滴る如く・秀でゝ長い眉毛は遠山の如く、パッチリとした重瞼の御眼には凜々しい御氣象現はれ、朱唇より僅がに見ゆる金義歯と金縁の眼鏡は一層の光彩を加へて、あたりを拂ふ御威光は備へられて居られますが、謙遜で叮嚀で叉隔てなき御話振り、眞率な薩摩訛りも交れど、全躰に優雅な御物腰に恍惚として居りましたる記者を、夫人は上座の椅子へ推し進められ、御自身は朝鮮虎狩の屏風を後ろにして腰を下し、先づ強い寒さより口を開かれ、染付の大火鉢へ指環の金色燦然たる眞白な手先を翳されながら——

▲薩藩の昔

私は御覧の通り武骨な昔者で、お話が至うて不調法で困ります。藩の教育で御坐いますか、矢張り女子は家で女大學、女今川、百人一首なぞを教へられた位で……。遊藝は琴、三味線、舞、其樣なもので御坐いました。ハイ琴は生田、三味は津山、舞は京の端唄なぞで、其頃京の舞妓が參つて居つて其者が教へました。何處も昔の躾は似たもので、主親の言ひ付は固く守つて柔順なもので御坐いました。唯今十四になります娘は華族女學校へ參りますが、それは〳〵御轉婆で御坐いますこと……、私なぞの子供の時分は其樣なものでは無かつたと申しますと、其度に父が「ソヲ昔と今とは時勢が違うちよる、是れからの女は因循ぢや不可」と申して居ります。

▲旅行

夏は葉山の別莊へ參りますが、私も子供も海へ入るのが好きで毎日入りますから眞黑になります。ハイ泳ぎも致しますが、却々巧く出來ぬので、子供が「お母さん教へて上げましやう」と申して、ホントウに可笑しいので御坐いますよ。彼の北白川の姫宮樣方は大きい浮袋で御泳ぎに成りますが、滿子樣武子樣なぞ毎日よく海へ御入りになりますこと。私所の邊は人が餘り集りませんから遊ぶには極宜しいのです、それから釣魚も大好で鯵釣に出掛けますが、其釣れますこと兩方の

竿が間に合はぬ位です。一度召使を殘らず拉れて沖へ參りまして、面白いやうに釣れました、所が女共が皆舟に暈て俯伏して仕舞ひましたので、主人が女はこれぢやから困ると申し岸へ漕ぎ戻り、今度は私と子供だけで出直しましたが、最早潮の加減が違うて一尾も釣れませなんだ、私は何の舟でも平氣ですし、子供が又男の子も娘も大好で舟は如何樣に動搖ても一向搆ひません。一度烏賊釣に出掛けました時、餘り浪が暴いので、父と子供だけ參りまして、私は二階で見て居ますと、舟が全然逆立ちになりましたが、一向平氣で烏賊を四十疋ばかり釣て戻りました。海の遊びは誠に面白いもので、私所の眞下は水が清潔で岩の周圍へ魚が澤山寄るのが能く見えます、私共は履物を穿いて岩の上ですくひますが、却々樂みな事です。日光、伊香保、草津などへも參りましたが、如何しても山より海の方が、樂みが深う御坐いま


伊東海軍大將夫人

す。

▲書籍と新聞

以前は種々の新聞を取りましたが、餘り種々見ると惡いと申して近來は時事新報ばかり取ります。書籍も好きですが、私は遠視眼で細い文字を見ると難儀でなりません、新聞など讀む時は、別に眼鏡が御坐いましてそれで見ます。此眼は産後に書籍を見ましたのが原因です、私は此家へ參つて十三年目に初めて妊娠致しましたが、不幸にして屍体で生れ大層落膽して鬱いでばかり居たものですから、母が心配して氣の紛れる樣にと産後三日目に實事譚と云ふ本を持て來て呉れました、私は頻りにそれを讀みましたので、眼が全然霞みましたが、それから如何しても癒りません、母も餘り慰めたい一心でツイ心付かぬ事をしたと後悔して居りました。

▲針仕事

針仕事は大好きで、よく仕立物に手を出しましたが、近頃は此眼の爲に針の孔が通りません。私が仕事をするには糸通しが一人入用と申して、大笑ひで御坐います。

▲令息の誕生

伜は日清戰役の際旅順陷落の日に生れましたので、早速威海衞碇泊中の主人へ報知しましたが、丁度大勝利の祝宴を軍艦で開いて居つた最中に其報知が屆きましたさうで、勝利の日に生れた上に男子だと云ふ大悦びで、「モ一つシャンペンを持つて來い」と申して又皆と飮んだと、後で乘組の方がお話しでした。

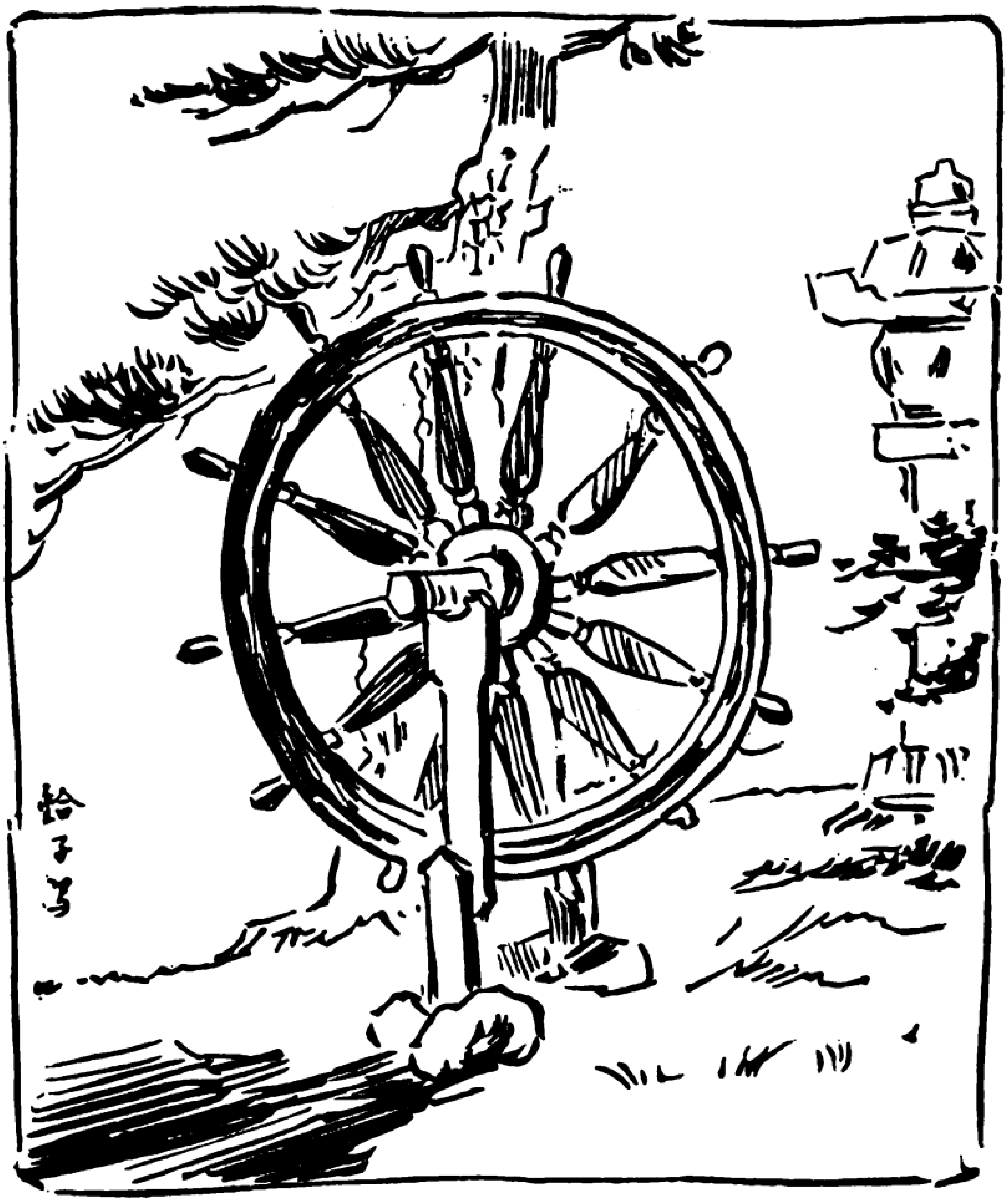
沈厚なる夫人も此に至つて感極つて胸を撫でられ、記者も夫人の快感に同化されて、心臟の皷動を禁じ得ませんでした。

ハイ當年十一歳で學習院へ遣はせますが、如何も軍艦が好きで〳〵、何でも早く御艦に乘らんなん〳〵と、そればかり申して居りますから、御艦に乘るには早く丈を伸ばさにやならんと言ひ聞せますホヽヽ。

▲演習觀覽

私は妙な奴で御坐いまして、何卒御艦で大砲を御撃

にちなる處が見たい〳〵と望んで居りましたので、『おねしがソゲイに見たかなら演習の時行がヨカ』と申て、あれは確か明治二十一年だつたと思ひます、伊東が居るとよく判りますが……、三日間觀音崎の演習が御坐いました時、品川から直ぐ軍艦に乗つて拜見に參りました。伊東は其時八艘の軍艦を率ゐて指揮致しましたが、私も艦の方々の御忙しい御働きを三日間悉しく拜見致して熟々感心致しました。御承知の通り味方の艦の進退は皆信號旗で指揮致すのですから、絶間なく種々の方向に變らせます。大砲を放つ時は、綿を耳へ入れて撃つのですが、其響のエライことゝ申したら、如何かすると下の息出しの丸窓の硝子が壊れるとがあるさうです。司令官は初から終までブリッヂに立つて號令を掛けて居ります。其周囲は水兵の釣床で囲んではありますが、胸から上は全然現れて、敵艦が第一に眼を着ける



伊東家の舵

場所に立つて居るのですから、萬一の場合には迚も免れる次第に參りません。陸の方では少しは何ですが、海軍では最早大將も水兵も危い味は同じなのです。私は矢張り伊東と同じブリッヂに立ち續けて見物したのですが、實に面白い思ひを致しました。御婦人方でも是非一度は御覧なると宜しう御坐いますネ。

▲日清役のお留守中

伊東は彼の戰爭の始まる前に、僅か四五個月の航海に乘り出しました途中から戰爭に爲りましたので、私は姙娠中ではあり、隨分心配も致しました。東京から子供の寫眞など持つて參つたのを廣島から殘らず送り返しまして、全然討死の決心を知らせますし。私も斯ういふ時にこそ國の御爲に良人が盡す秋だと存じて、別に狼狽も致しませんでしたが、以前に演習を實見しました丈に、演習でさへ彼の通りであつたから、實際の場合には伊東を始め皆樣の御苦勞は何位であらうと存じましてネエ、演習を見ただけに感じは一層深かつたので御坐います。それで支那の軍艦の樣子を東京に居る祐亨の弟に調べて貰ひました所が、鎮遠、定遠なぞと云ふ大きい堅牢な艦があると悉しく知れたので、實は勝敗の程も氣遣はれ、其上演習で伊東が立つて居たブリッヂの有樣が腦に沁み込んで居るものですから、彼處に出て指揮する大將が如何して生命を全うして歸ることが出來やうぞと、そればかり思ひ續けて居りました。丁度其心配中の出產で、其赤子が又煩らひまして内外から心配が集り、彼の時のことを考へますと夢のやうで御坐いますよ。

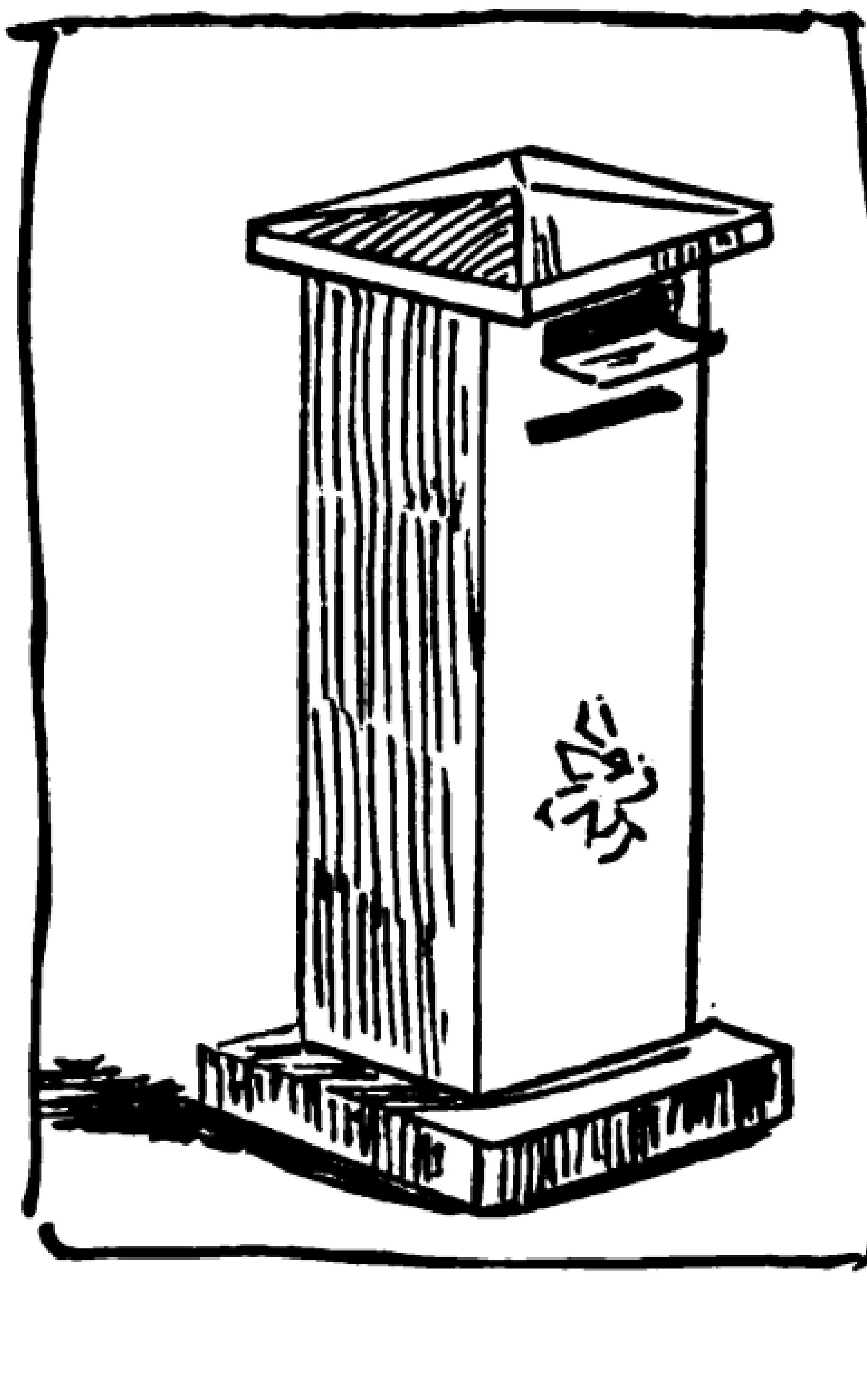
▲號外

號外が出る度に、當地に居る甥共が、叔母さん大勝利の號外が出たら御馳走なさいよと申しましたから、アア大勝利さへあれば奢るとも〳〵、幾何でも奢るよつて申したのです。

▲敵艦の分捕品

何も別に持ち歸りませんが、鎮遠の旗竿の上部と舵欄だけ持つて歸りまして、旗竿は献納致しました、舵欄は庭に据ゑ附けて御坐います。

記者は舵柄の拜見を願ひましたが、夫人は立つて次の日本風應接室の窓を推し開いて築山の上を指し示されました。御庭には老松稚松參差羅列せる間に今を盛りと咲き亂れた赤蕋黄瓣の珍らしい花ありて、馥郁たる暗香寒風の中に充ち滿ち早くも春の心地せられましたが、夫人は右手を伸べ窓側の一枝を折り記者に與へられ、支那の臘梅なることを語られました。それより御家來に導かれ廣い芝生を傳ふて、舵柄を置かれた築山に上り、黒ヅックの雨覆を取て寫生させて頂きました。車輪は圖の通りの形で直徑一間の偉大なる物、これに據つて其艦體を推測すべく、當時を憶ひ起して感慨頻りに湧き出で、颯々たる松梢杉梢の風、轟々たる汽車電車の響、柔和なる飼鳩の聲など自ら相調和して軍樂を聽く心地せられました。向は東側に偏つた芝生に、壊れた大砲彈を置かれしは乘組員の方が持ち歸られし敵艦の品であるとの事です。斯くて應接室へ復り、夫人は珈琲を勸められながら



平田家の貯金ポスト

▲鹿兒島戰爭

彼の戰爭は私が確か二十四歳の時でした、丁度戰爭が濟んでから此家へ參つたので御坐います。彼の時私の全家は櫻島に立退いたのですが、時々入用の品物を倉庫から取出す爲に戰爭の最中に御城下へ出向いたのです。婦人でなければ入ることを許されませんでしたから縣廳から印鑑を貰ひ御仲間連れで舟で參り、鐵砲の音が鎭まるのを待つて上陸致し用を足しました。ハイ其音は凄まじいもので、パチ〳〵〳〵と丁度芝居でさせる雨降りの音の樣です。それでも一しきりで止んで仕

譬へば一時歩くのに危い事はありません。本邸まで參る道傍に兵士の屍骸を度々見ました、右の手くびを繩でグル〳〵縛られて首の無いのなぞが草原に俯伏して居ました、イエ其時分は皆氣が立つて居まして、血を見やうが屍骸を見やうが何とも思ひませんでした。私の家は少し廣いので、立退く時に官軍の事務所に借りられましたが、其方々が又直に立退かれた跡で倉庫を散々に荒されました、弟なぞは私學校の隊で出た仲間で御坐いました。

▲維新前にも一度

幾つの時でしたか、未だ幼少の時分でした子。彼の英國軍艦が來て砲擊した時です、皆な伊敷へ立退きました。大砲の音なぞ微かに覺えて居りますよ、本當に私は戰爭に緣がありまして今までに三度、今度若し事があれば四度で御座います。

雄壯な御物語に聞き惚れた記者は、尙ほ御側を離れ兼ねましたが、御來客の御取次ありしに心急ぎ御別れ致しました、叮嚀に送り出でられし夫人に御辭儀して石階を下りた時、松の植込中に圓錐形の白い大砲彈を柱とせる瓦斯燈を拜見しました。

平田男爵夫人

夫人たつ子は山口縣士族勝津兼亮氏の四女にして文久二年五月を以て生れ九歲の時品川彌二郎氏の養妹と爲り十八歲にして今の從三位勳二等男爵前農商務大臣貴族院議員平田東助氏に嫁す人と爲り眞率にして客を愛し儉素自ら奉ず品川子の養妹平田男の配偶たるに耻ぢずと謂ふべし

寒威殊に強く水道栓氷結して正午を過ぎざれば水の出でざるもの四五日、一月二十九日朝から少しく緩んだので、午後二時頃駿河臺袋町の御邸へ伺ひ、黑羅紗の上履幾足を列べられた御玄關から、薄緣を敷いた長廊下を通つて右手の應接室へ入りましたが、第一に客の眼を引くのは左壁に高く揭げられた油繪三面で、中央は人物、兩側は漁村の風景で何れも伊太利風の配色濃厚な古畫と見受けられ、其他蘆雪筆淡彩の支那人物屛風、銅製唐獅子の置物、手編レースを敷いた紫檀のテ

ーノル、白布で覆ふた椅子など何れも端正に整理せられてあり、豪奢でなくして雅潔、質實にして和氣に充され、窓硝子から見ゆる植木棚の蘭幾鉢は風情面白く列んでありました。記者が此室へ入ると間もなく出で來られし夫人は、丈高く肉豊かに色の白い愛嬌の充ちた御顏色には未だ小皺の一つだに見えねど、御子達の多い故か小さな老けた丸髷に金無地の目立たぬ櫛笄、鼠縞秩父銘仙の綿入に焦茶の紬飛白の羽織、黒繻子の帶へ前垂を挾んで居られましたのは、吐哺握髪して客を待つたと云ふ故事を聯想する位でした。初對面の御挨拶も殆ど舊識の如く、先づストーブの加減を試みられて後お座に着かれ

▲腦が持病

折角御深切様に仰しやつて下さいますが、私は皆様のやうに學校へも參りませんし、それに元から腦が持病で人中へ出ますとのぼせてグラ／＼致す癖が御坐いますので、何方の會へも伺ひませんから、何も面白い御話を致す術を心得ません。ハイ御覽の通りの躰格で極壯健らしく見えますが、見かけ倒しで終始御醫者様の御厄介にばかり爲ります、濱田さん賀古さんなぞにも願ひました。仕合せに良い御醫者が御近所で……。御醫者様に御縁のあるのも碌な事ぢやアありません、近頃は餘程宜しい方ですが、記臆が惡くつて困ります。

▲何時も此通り

東助が御承知の通り極構ひません方で、誰様が入しつても御耻かしい様な服裝で御目にかゝり、全然書生風で御坐いますから、座敷なども毫も構ひませんし、誠に見苦しいので御坐います。私も亦御覽の通りの不作法者で何時何處で御目に懸つても此通りなので御坐います。

▲佛教

氣の鬱ぐ時には說教を聽くのが益があると存じて折々出掛けます。ハイ眞宗の西の方で、主に小石川の稱名院へ參り又築地へも參ります、島地默雷さんの御話も善く聽聞致しました。何卒島地さんを迎へて宅の婢共にも聽かせたいと存じますが、先頃までは、富士見町

の官舍の方と逗子の方と三軒に分れて置きましたので一人に聽かせて一人に聽かせぬ次第にも行かず、皆を集める機會が六ケしいのでツイ〱延引して居ります。

▲品川家の姉

私は不思議な縁で、九歳の時から品川の家へ養女の約束に爲り、十五歳の時、丁度明治九年に品川一家と共に東京へ出ましたので御坐います。品川の姉(彌二郎氏夫人)は十四の時嫁に參つて却々苦勞した人で、氣性の確乎した上に佛敎にも熱心でありました。萩の松本と申す處は、井戸の水が惡いので、毎日川水を「荷桶」で汲んださうですが、其頃兄は留守勝ではあり生活向も豐でなかつたので、姉は木綿を織つて川水で晒して賣りましたり、又は山へ薪を取りに參つたり、隨分エライ骨折を勤めたさうで御坐います。私などは別段難儀も致しませず、此家へ嫁る時にも御飯の炊方一つも存じませんで、結構な身分になりましたのは勿躰ない事で、私のやうな仕合な者は無いと、始終有り難いと存じて居ります。

▲運動

身躰の爲と存じて急がぬ時は成るたけ歩きます、逗子へ參る時も汽車までの往復に大抵歩くやうに致します如何致しても逗子の方は座敷も狹いので掃除に手が入りませず、又お客もなし、暇が多いものですから、近邊をブラ〱遊び歩いて身體の具合が宜しう御座います。畏れ多い事ですが、皇后陛下は先頃葉山で御靜養中大層御機嫌麗しく時々御運動に御歩ひ遊ばしたのを拜みました……ハイ彼の邊の民は却て善く尊顔を拜みますので、勿體ないやうで御座います。ツイ先達て二十日(一月)頃でしたか、女官六人ばかりを御供に御伴れ遊ばして富士見橋を御渡りに爲り、濱邊を貝拾ひ遊ばしてゞ御座いました。

▲料理

鄕里では大槪料理店から取り寄せず、家へ料理人を呼んで致しましたし、私の母がキカヌ氣の人で、何でも致すのを見て居りましたから、先アつまらぬ事ぐらゐ

は出來ますが、田舍料理で、……それに東助は米澤、私は萩で食物の趣味が違ひまして困ります。萩と東京との違ひで御座いますか、大抵同じですが鄕國の方のは何でも鹽辛いので御坐います、御魚は新しいので、私が廿年振りでチヨツト歸鄕致した時何の魚の肉も堅過ぎるやうに思ひました。鮪はトントありませんから、魚軒は主に鯛かオホセを用ゐます。オホセは先つ鱶のやうな魚で、圓く切ると骨の周圍が薄赤く花の樣になつて居ります。盛んな式の時は口取などを島臺に盛りますが、ザツとした時には三寶に載せて式紙と申します。唯今私共の家では和洋折衷の料理で定りはありません。左して分に過ぎた奢りは致しませんが家内中一日の生命とも致して樂を盡しますのは晩餐の時で御座います。



平田男爵夫人

▲遊藝

私の七八歳位の時鄕國では却々遊藝の躾が厳しかつたので、唯今何の役にも立ません、ハイ琴唄の三味線で、大阪唄から多く取つたもので御座います。其頃の寒稽古は朝三時頃に起き水に手を浸してそれから椽先で浚へ、又夜分は母親が附いて大きな聲で唄だけうたつて歩くのです、川の岸を一周して歸ると丁度二十町程ですが、毎晩缺かさずに唄ひ歩いたので御座います、ホントウに馬鹿げた事でして、

此位熱心な教え方を有益な事に用ゐて呉れたなら、唯今不自由は致すまいものと愚癡が出ます。併し忍耐力を養ふには至極宜しい方法だと存じまして子供達にも善く申す事で御座います。私は餘り遊藝は好みませんし、男の子達が皆頑固の方ですからトント致すことも御座いません。

▲哺乳

七人の子供を三人取られましたが、如何いふ理か乳母にかけた子供ばかり取られました。唯今二十四歳になりまする長男は私の乳で育て、他の三人はコンデンスミルクで育てましたが、其三人は極壯健で、長男は却て一番體も細く腦や耳の具合が惡いのです。人乳と牛乳との優劣に就ては、樣々の說がありますが、人の乳も一槪に善いとばかりも參りますまい、尤も私の乳は白水のやうな薄い惡い乳でありましたから別段ですが、ミルクも却々馬鹿に出來ません。ハイ御飯は少し足がつきましてから遣はせました。

▲長男

長男は體が弱いので、中學卒業後、當人の好みで美術學校へ參つて居ります。文學の方もモー少し遣らなければならぬと申して居りますが、腦が惡いので詰めて勉强も致しません。稽古畫で御座いますか、大槪學校へ置いて御座いますので……、ナアに未だ碌な物は出來ません。ハイ東助も畫は大好で、先達中逗子の宅の襖を玉章さんの御弟子に畫いて貰ひました、此人は乏しい資金を以て勉强し、田舍廻りをして隨分難儀をされたさうで、近頃大層腕が利いて望みのある方で御座います。

▲次男

次男は軆格も性質も兄とは反對でゴツ〱して居ますので、寒中足袋も穿きません。當年二十歳に爲りますが、當人が海軍の方をたつての望みで、卒業一年前に師範中學を止めて海軍の試驗を受け、昨年十二月四日に呉港の先きの江田島へ參りました、御友達も知己も一人も參りませんが、校長敎員方が御深切なので何より安心して居ります。それに小遣なぞも皆學校で監督

して日曜に二十錢づゝ渡すだけで、少しも無駄な入費はかゝりません、ハイ郵便は一週に一度缺さず寄越します。時候は餘程お暖かいと見えて、十二月あちらへ參つた時分、月見草のやうな黄色い花が盛りであつた相です。

▲三　男

これは十七歳で矢張り師範の方へ通ひますが、次男と同じやうな氣風で頑固の質で御坐います。直此向ふに謡の師匠がありまして、朝早くから聲が致しますのを頻りに氣に致して、此時節柄餘り悠長な事だと思ひましたが、寒稽古だと聞てそれでは仕方が無いなぞと申して居りました。一番末は女で十四歳になりますが、矢張り御茶の水の學校へ遣せます。彼處は誠に良い學校で、衣服も式日に銘仙止り位ですから、娘も縮緬を着るのは自分から厭がります。此頃は地方でも大抵黒木綿の紋付になつた樣で、結構な事で御坐います。

▲會と雜誌

愛國婦人、教育會、衛生會、保育會、其他二三に入つて居りますが、前にも申し上げる通り、脳が悪い爲に人樣の御集會へ出ます事が出來ません。會の雜誌は大抵拜見致して居ります、他に「そんな」、女鑑など少しばかり見ますので……。

▲和　歌

私も長男も下手の横好ですが、サッパリ出來ませんので、折々止めやうかと申しますと、何樣な腰折でも自分だけの樂みとして挫けずに勉強するが宜いと、毎度叱られます、ハイ先生は松浦さんに願つて居ります。

▲性　急

いつたい御茶や花なぞは、私のやうな性急の者には氣を沈着かしめて極宜しいので御坐いますが、家事が相應に忙しいので何樣も致す暇が御坐いません。下女も五人ほど居りまして、其中二十五になりますのは九年も勤めて當節は萬端取計ひが出來ますし、針仕事も順々に仕込みまして各自少しづゝは致しますから、私はホンの襦袢の襟をかける位で濟みますもの丶、子供も

多し來客も多いので、私が先へ立つて致さなければ手が廻りません。それに掃除が厳しい方ですから、使はれる者達も骨が折れましやう。ハイ大抵逗子の宅へ彼の土地の漁師や百姓の娘を雇ひ入れ、其者が慣れますと、東京へ呼ぶと云ふやうに致します。

▲召使の貯金

召使達に貯金を致させるのは必要だと存じて、種々工夫致しました。最初の内は年末に其貯金を召使連名で養育院などへ寄附させて見ましたが、何様も下女の連名で寄附する例も他に見えませんし、又多勢の金を一人だけの名前で寄附と申すも不都合ですから、それは止めに致し、五十錢程づゝ掛けさして十個月目位の無盡を設けて居りました。其内丁度昨年の二月頃でしたが、汽車の中で圖らず金森通倫さんに逢ひ、それから種々貯蓄に就ての御話を伺ひ、熟々感心致したものですから、宅へ御迎へ申して召使一同にも御話を願ひましたが、女共も皆感心して伺つたので御坐います。それで五月から前例を殘らず改めて、各自一日一錢宛の貯金をさせ銀行へ預ける事にしました。尤も元金として一圓、又最初の一個月分として三十錢、都合一圓三十錢宛を私が皆に出して遣りまして積ませ始めましたが、皆も漸々溜るのが張合で喜んで居ります。

▲紙屑空罎

紙屑や空罎の賣代は一個年貯金箱へ溜めて、年末に頭割に致し又はそれで反物などの福引をさせます。平常入れる箱を定めて置いて、廊下に散つてる紙屑や臺所の空罎を誰でも見付け次第に持て來て入れさせて置くので御坐いますが、塵も積れば山で却々馬鹿にならぬものです子。ハイ銀行の通帳も貯金箱も、チヤント私の手元に預かつて置きます。

▲子女方の貯金

子供達の小遣も定めて渡します、男の子は一圓、末の娘には五十錢宛ですが、筆墨鉛筆など細々した物の入用だけですから、各自此中を剩しまして其金は又子供の貯金箱へ入れます。又私の方で調へて遣る大きい買物でも、自分達が欲しいと思ふ物を我慢した時には、

それだけの價を箱へ入れ、其他今日は車に乘る所を耐へて歩いたとか申す塲合には矢張り貯金へ廻します。但小遣の少々殘りますのは長男で、先生方の送別會だとか、繪具だとか筆だとか要りますから、却々他の子供の樣には參りません。

▲掛取の金言

金森さんが或時按摩を御呼びになつた時、其收入を問かれますと、上客は一療治十五錢だと答へましたので、種々彼に貯金の方法を御示しなすつた處、按摩も感服して其時から收入の半分を積む事とし、十五錢の收入に付て七錢づゝ貯金したさうです。所が先生は之を聞かれて、「半分づゝ貯金する定ならば、七錢では五厘足らぬでは無いか」と申されたが、按摩は「先生、五厘位如何でも可いぢや御座いませぬか」と答へ、先生は更に「五厘と云へば僅かな樣だが、長い月日の勘定が溜ると大きいから粗末にするな」と諭されたさうです。私宅へ昨年出入商人の小僧が掛取に參つた時、家來が帳面の〆高から三厘と云ふ端錢は面倒だから負けろと申した處、小僧は々却承知致さないで、「三厘は僅かですが、度々負けるやうな事になると、大きい高になりますから、負けぬ事に定めてあります」と答へましたさうで、丁度金森さんが按摩を諭された御話と一對ですから、面白く感じたので御座います。

▲金森氏の家族

金森さんの北海道の御留守宅では、御子さんが夜業に新聞紙で菓子袋を貼り、それを義捐金の用意として貯蓄されるさうです。又御女中達も却々節儉で、鼻紙位の入費の外は、大抵貯蓄されるとの事です。先生が善く御話しですが、「西洋では收入の中から貯金を先づ第一に取除けて之を神に献げる御初穗とする習慣で、斯くあつてこそ眞正の尊い貯金と謂つて可いが、日本では大概經費の餘りを貯金に廻すから、丁度乞食に遣るやうな方法です」つてオホヽヽヽ、其他「理髮店に拂ふ度々の錢は大きいから、高くても剃刀を買つて自身で剃るが可い」などの御持論なので、「髮かせぎ」、「足かせぎ」「煙草かせぎ」など種々の名があるのです。眞

成に忽せにならぬのは、些細の事だと存じますよ。種々の慈善向の會費なども、平生少しづゝ取除けて置けば、容易く出金が出來ると思ひますよ。

▲下女へ足袋代

私宅では客の出入が多く、自然夜分も遲くなり勝ですから、女共へ足袋代として僅かづゝの心付を遣はせますが、これも矢張り貯金の方へ加へて置きます。

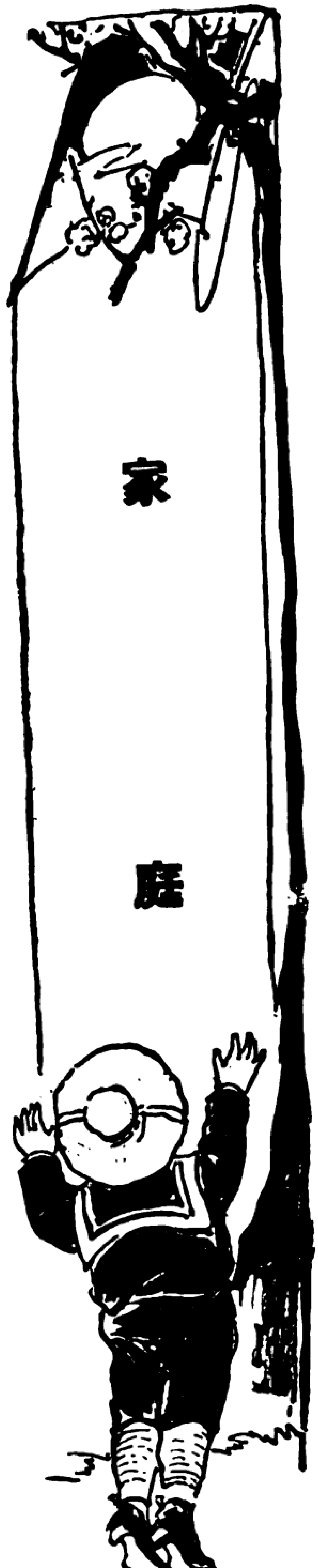
▲買　物

定つた出入商もありますが、大概は自分で買物に出掛けます、自分でなければ思ふ樣に參りません。イエ最早獨りで風呂敷を提げて歩きます。電車へも乘りますし、チヨツトも搆ひませんが、それでも世間で大臣の妻が何う斯うと噂して新聞にでも出ると主人の外聞にも關ると存じ、氣兼して小さくなつて歩くので御座います。

▲小間物屋は入れぬ

頭の物なぞ一つ物を何時までも用ゐて一向流行などに搆はぬ主義ですし、小間物屋なぞ出入しますと、若い女共は見たくもなり、隨つて下らぬ品まで買ふ樣になりますと、金を費ひ時を潰させまして、それが何の益にもなりませんから、一切入れぬ事に定めて置き、必要の折は外へ買ひに出る事と致して置きます。

精細な御話愈々佳境に入り、幾度か膝の進むを禁じ得ませんでした。夫人が婢女を愛撫せらるゝの懇到なること、實に其道を得て遺憾なしと申すべきです。夫人は尙ほ談話の最中にも絶へずストーブの火氣に注意し、屢々立ちて石炭を投込まれ、又女中を召して御茶を取り換へらるゝこと再三、少しも油斷なく持てなされました。記者は夫人に請うて、貯金箱の仕組を拜見して御暇致しましたが、供待部屋の圍爐裏にも炭火がカン〳〵起されて、御來客の車夫が多勢暖まつて居たのを見て、自ら奉する薄く人を待つ厚きを感じたのです。



生理的より見たる男女の配偶

水原翠香

凡世中に生る丶程の物、男は女を娶り、女は男に嫁して陰陽相和し、以て家を整へ、子を生みて是を育て、人と爲して又自己がせし如く、身を修めしむるは何人も然有るべき天地自然の道にして、世界萬國、啻人倫のみならず、苟も生としいけるもの、下等動物と雖、此定則に洩る丶有らむや、然るを萬物の靈と稱する處の人、却て一生を、獨身にて終らむと爲者多きは、何故ぞといふに、畜類の如きは配を撰ぶの知識なければ其時期至れば、狂奔して牝牡見附次第に交尾すれど、人は然らず、單に女でさへあれば可といふ男なければ又男ならば誰でも拘はぬと思ふ女もなし、各自好む處は異なれるも撰ばざる者は有るべからず、只其好惡の甚敷と、大概なるの差あるのみ、餘りに撰び過して却て糠粕を掴む人あり、又は輕卒にも唯其容貌姿色の美に惑溺して他事の如何を顧ず、強求に結婚して僅々の月日に早くも物議を起して離縁する者あり、二者共に撰擇の度を愆つ者也、男女共に、少壯の頃は血氣定まらず、之を愼むこと、色に有りといへり、何事に拘はらず、物事一途に凝り固まり易く、躁急の癖あるものにて、フト此人をと思ひ附ては、意中唯忘る丶能はず、其人のいふ言は悉皆道理尤と聞え、爲る事做す事

假令無理にても、其情を察して、同情をよせ、其筈など、道理を附會、親の異見友の諫も、空吹風と聞流し、或は理とは、思ひながらも、迷ひ込たる初一念は、容易に飜思がたくて、終には手を携へて奔るに至る、斯家名を汚し、恥をさらしても、添遂らるれば猶可なれど、思慮なく奔る程の者は、決して、前途の計畫有に非ず、只他國の知己を目的にして、何某に依らば何とかして具るべし、何業を爲さば、夫婦が活計は立つべしなど、難期事を目途にして、扨其實地に至りてみれば、依頼らむとする何某は、存外にも頼もしからで、事に托て、體裁よく謝絶せられ、他に依るべき處はなし、其うちに追手に捉へられて、親元へ引戻さるれば、幸にして路頭に彷徨に及ばねど、若不運にも、其儘打捨置るゝ時は、不知案内の土地にして、身の藝を賣らむにも、思はしき顧客なし、とかくする程に、貯は竭、身の皮迄も賣盡して、今日の食にも究するに及べば、女は男を、活智なしと疎み、男は女の餘りに世態を知らず、且我儘なるに愛想竭て、始の逆上氣は、反比例に、冷却し去り、互に不愉快極る處より、男は不頼の徒に交り、女は酌婦などに身を陷し、共に墮落の底に沈みて又浮ぶ瀬有るべからず。

◎又、如斯不品行には非ずして、女兒の生質、穎敏なるは、才學ともに人に優れて、漸々氣位高尚になりゆく儘に、尋常の男、侮らはしく、いかで自己に優る大學士ならでは、夫と爲て侍へるに足らず、淺學無識の俗人に嫁するは、千里の駿足、糞桶を負はさるゝに異ならず、寧獨立するの潔にしかず抔、と自惚の空想に驅られて、時に良縁のあるをも、彼是に不服をのみいふ程に、光陰は矢の如く、いつしか、嫁期は徒に過去りて、三十に近く成ぬれば、初婚の口はなくなりぬ憖に後妻となりて、繼子扱ひも嫌なりと、是に於か始好奇心の空想は是非なくも、事實と成て、女教員、看護婦等に成て、餘裕なき世を渡り、其身不具にも非ずして、生涯獨身となる者在、然而空閨を守りおほすれば、又然る方に氣健なれど、其時期に嫁せざりし人は、動すれば、三十を越てのち、狡猾なる男子の欺く

所となりて、醜名を流す者世に尠しとせず、抑女子の獨立といふ事は、西洋の如く女兒にも、父母より授與する、財產有ての事、又は不具者か、無類の醜面にて嫁せんと欲するも、能はざる者、然らざれば一度嫁して不幸にも、早く孀婦と成、再緣せんにも、兒を手放し難く、或は種々の事故の爲に、止を得ず、獨立となりて、所謂、藝が身を助くる程の不仕合せてふ諺に洩れぬ者なれば、決して羨ましからぬ者、好ましくもなき事なれば、成べくは普通、それ相應の配偶を求めて、人たるの常道に背かざるが行末の爲にも、目今身體の、衛生上にも、適ふ事なるをや、昔より、比丘尼の持戒堅固なるは、壯年に及びて必、病に罹る事あり是他なし尼也とても、天地間に生を受たる人に相違なきものを、其時期至れば、春情發動は免れざるを、法を守る爲に天理に背きて、强て自然の情を抑へ留るが故に病煩ふ也、男子に有ては、僧と雖、又是を發散爲しむるの道あれど、女子には、其道なし（有ては破戒の罪となる）自然の情は、內に鬱結して、幸に身體健强なれば、而始、腫物、潰瘍と成て、體外に發し去らざれば止ます虛弱なれば、神經疾、或は名の附られぬ鬱症となる事あり、比丘尼ならでも、女子の時期に達して嫁せざる者に皆多少此事あり、父母たる者察せずんば有可らず、治療宜に適ひ兎角して一命を保護し得れば、其時期の經過と共に病も、自然と、快復するもの也、然ればゑび茶の諸孃達、たとひ天禀の敏才ありて、學業は、いつも優等に及第したりとも、漫に淸少納言を摸擬て、男子を侮る事なく、紫式部が、あれ程の英才を懷きながら溫順、宣孝に嫁したるに倣ひて、其時節到來せば父母、長上の計らひに從ひて、嫁期を取失はぬうちに身の納りを全ふして、父母を安堵なさしめ、生涯を愆ち給ふ事勿れ、其上の運の良否は天命なれは是非もなし、但し、斯申せばとて、男女の道は天理也を、口實として彼戀愛は神聖など、人惑はせの言を、得手勝手に牽强けて、自由結婚せられては忌々敷大事に及ぶべし、貴賤を通じて結婚は人一生の大禮なるを、たとひいかなる身分なるとも、輕卒にして可ならんや、何

處迄も、念を入れて、必、父母長上の許諾を得て双方合意の上ならでは、決して行ふ間敷事勿論也、

▲夫の撰び方

◎壯健にして、血統に惡病の氣なき人

みるからに、其顔色生々として擧動活潑、体格强大に、有爲の氣象、顯はれてみゆるは、無病壯健の人也、父母共に壯健なれば、子も又壯健なるもの也。

◎相貌よき人を撰ふへし

人の心術は、表面より知るべからず、然れ共又一方より觀察すれは、大に相貌による事あり、觀相にて、吉凶禍福を判斷するも强ち當らずとはいひ難し、人は生物なれば其時の境遇によりて其心變化す、其心渝れば面相も從て替らざる事を得す、觀相學者ならずとも少しく注意して經驗を積めば大体の事は測り知らるゝ物也、凡人初對面の時公平なる眼より視れば克觀相し得らるれ共、かねてより傳聞して其人を信じ、或は其人の著書論說等に心醉して對面すれば、己が心旣に先方へ奪はれ居るが故に何事もよくのみ見えて惑ふ事あり少しも關係なき人又は怜悧なる少年などの視る處却て克あたる事あり。

華族紳商にても、獰惡陰險なる相ある在、貧窮書生にても福相なる人在、强らしき貌にても何となく愛を含めるは心術あしき人に非ず。氣味わるく冷笑し、折々白眼する人、眼ざし尖く光る人、頰骨顋骨のとがれる等、皆獰惡陰險の相也、必其心殘忍にして、己が妻と雖意に適はされば、慘酷の待遇を爲事有。

◎人に對するに眼定まらずキヨロ〳〵とし又或物を凝視かと思へは忽又他の物を視又何かいはむとしていはず口内にて漫に獨言する等の癖あるは神經過敏にて動すれば發狂する人也此癖男女に拘はらす女に在ては嫉妬深く、繼子虐待、嫁責する者なり。

◎大酒呑まぬ人

下戸ならぬぞ男はよけれと、吉田の粹法師のいへるは程宜く呑む事にて、交際場裏にたつ者、人より盃を受けざる事を得ず、雫ばかりの酒にも、面首筋迄、赤う

して、胸に動氣をおどらせ病人の如く席にも得耐ず苦しみて、物の役にもたゝずなる樣の、下戸ならぬぞ男は宜けれ也、呑べき時には呑みても、格別に酔痴す、心を亂さぬ程の酒量ありて、常には餘り呑たがらぬ人は最上也、酒は天の美祿又百藥の長とも稱へて、適度のむは敢て厭ふべき物ならねども、其適度を守るが甚難き事にして、兎角過し易く、美祿の爲に、財產をも傾ぶけ、百毒の長と變じて大酒家の子孫動すれば虛弱不具を生ず。故に、大酒家の妻となる勿れ、又大酒家の兒女を娶る勿れ

◎世才ありて浮薄ならざる人

才子はとかく浮薄にて、賴み難きが多し、されど又、着實一方にて世才なければ、世に處しがたく人に欺かれなどして、發達爲がたきものなれば也

◎學識卓絕なる人、又何にても一藝に秀たる人

昔より何の道にても、後世に名を遺す程の、名人上手と爲る人はそれ一方に心を傾くるが故に經濟には迂遠にて勢ひ貧窮ならざる事を得ず、然れども、其學、其藝、成て、天下に名を擧るに及びては、富貴も自ら來り大にしては、其國の光榮ともなり後世迄も、芳名を傳ふべし。但し、人の運命は、豫め知りがたし、賴山陽は、名高き大儒なれども、存命中は、每度窮して發達爲ざりき、死後に至りて、其名大に揚り、其著書は、世人爭ひて購求し爲に紙價を、騰貴せしめたり、又野口小蘋女史の如きは、幼より諸國に流浪して、具に辛苦を嘗られしも高運にして豪商に嫁し、活計に餘裕を生せしより天稟の筆才を延ぶる事を得て、忽ち其名世上に顯はれ、女流の大家として名聲都鄙に躁げり、學者、伎藝家の配偶たる者は、貧苦に甘んじて困難と戰ひ、十年一日の如く、屈せざるの覺悟なかるべからず此勇氣有りて共に稼ぎ、克內助の功を積み、夫をして他事に心の惹るゝなく、十分に、其伎倆を發揮せしめて共に其名の擧るを俟、無上の快樂亦其中にあり、然れと是は元來貧家に育ちて、世故に馴たる女子は兎も角、富裕に成長せし女兒にては、とても耐忍續くべからずもし好奇心にても行かむとならば、父母に乞ひて嫁入

支度は不用なれば、其換として、一廉の大金を持参し、其金は慥なる銀行に入れて、元を失はぬ様に保管し利は月々に引出して夫の生計を裕ならしめば、前記の目的を達し得る事有べき也。

▲花嫁の資格

◎容貌は美ならずとも、愛嬌有て陰険の相なき者、

世間縁談としいへば、必ずまづ容貌の美を専一に望む、女子の美貌は、万人の好む處、然れども、妻は翫弄物に非ず、美人也とて心操正しからず、又愚痴ならむには、子孫の爲、家の爲にも、ならざる事勿論也美といふにも、醜と云ふにも種々段あり、又各自の、好む處、嫌ふ處も同からず、他は美人といへど、自己はすかぬ貌あり世にいふ、お亀は却て、美人の險なるよりも愛嬌ある者也、先十人並ならば、可と爲て、夫たる者の、好みに應きを、擇ぶべし。

◎體格よき者、壯健なるを擇ぶべし

繊少なる女子は其兒亦必ず小人也、母の體、ゆたかならでは大丈夫を生み難し、背の高過るは苦からず

◎肉締りて、ムッチリと肥たるは可、脂肪太は病身也、

◎お尻の大なるは見苦しとて厭ふべきに非ず、兒を分娩に、必安產なり、柳腰の美人に、は却て、難產爲る者あり。

◎顔色白きに、少しく赤味を帯て、生々と、艶光有る者は、無病壯健也、白くとも、艶なく、底蒼く、或は黄味を帯たるは、目今病人ならずとも、必、腹中痼病あり、其兒、又多病也

◎色すぐれて黒く、艶なきは、胎毒深き者、黒くとも、土の如くならず、艶あり活氣あるは苦からず

◎縮毛の者には、淫婦多しといふ、但し是は、教育と、習慣によるべければ、一概には云ひ難し、縮毛よりも、眦の垂れて、象の如き者は、極めて、多淫也、

◎大學校迄、卒業せずとも、不品行の悪評なき者

女の學問は世間普通の事物の道理を解し、漫に人の慫慂に乗らず、欺かれぬ智識あらば足る、文學は、通俗信書を達筆に、走書出來れば十分也、それ以上は餘力

有ての事也

◎外國語は未熟にても可、日本語の片言をいはぬ者

◎遊藝は置て不問、裁縫、割烹及、算術のよく出來得るもの

◎容貌醜なりとも、婦徳賢才あらば、美人にして、才なく、多淫なるにまさるべし

◎於轉婆なりとも、毒氣なく、正直なれば、柔順にして、無學愚昧なるにまさる

◎學文なくとも、世才愛嬌あり、人應接よければ、學藝優等にて、世辭をいはず、高慢なるに勝る、商家、交際家は、殊に、是を採るべき也

以上は、普通、中等の撰擇也、上下は少しく、撰を異にす

▲貴婦人の資格

◎外國は知らず、今の日本にて、貴人の夫人を撰ぶには、第一に血統正しからざるべからず、假令主公は許すとも、素生正しからぬは一家中、及親戚の物議ありて、始終順熟すべからず、但し、其夫と共に、發達せし、所謂糟糠の妻なるは此限にあらず

◎美人ならずとも、品格ありて、下賤の相なきもの

◎應揚にして、小事に拘はらず、しかも、聰明、克く下情に通ずべき事

◎人を知るの識有りて其道々に、遣ひ分るの伎倆なかるべからず

◎慈惠を專とし、依估の沙汰なく、又物憎みの心、有べからず

◎習字と和歌を能爲給はゞ、他藝は、それ〳〵、熟練の者に、爲させて差支なし、されど大概の心得は、有たき物也

▲普通の嫁撰み　月々の收入三四十圓まで

◎容貌の如きは、措て問はず、只壯健にして、不具ならざれば、足れりとすべし、若撰まば、福相なるを、採るべし、之に依て思はず、發達する事あり

◎何にても、一藝に達して、人の師となり得らるゝ者、

又は手に、職業あり、活計の助となる者ら、許すべし

◎氣がさ者也とも、それだけの、伎倆あらば、許すべし

活智なしを娶れば、百年の不作にて、生涯、頭は擡がたし

◎親の、甘く育たる女兒は世に成ても間に合はず、幼より、母の手助に、慣たるを撰ぶべし

新世帶の實驗

紅梅女史

私は新に世帶を持ちまして種々なる事を感じました而も自分一個でなく大勢家族でもあれば猶更であります、精神上の事は扨て措て先づ日々の物質上に付て感じたと失敗した事など御參考迄に申しましよう。

家を借るに就て貸家と云ふ札は處々に見受ますがさてなかなか相當の處はないもので或は廣すぎたり狹すぎたり或は丁度適當の處と思へば家賃の外に敷金が三ヶ月も有つたりして實に困りました、自分が氣に入つたと思つても他の人の氣に入らなかつたりして漸くの事でやつと適當らしい處が見付かつたので前後の考へもなく引移りました、處が間數は可成廣いのでしたが肝腎な日あたりの工合に就ては少しも考へず、檐の深い家で何となく陰氣で殊に食物などを取扱ふに芥が有つても一寸わかりません、何につけても不潔に流れ易くなります、殊に日の暮れる事が早く外はまだ明いのに家に入るともう何も見えなくて、從つて燈も早くつけねばなりません、石油だけでも月には四合や五合は餘計に用ゐなくてはなりません。

夫から井戸でありますが近來は多く水道が引かれましたから別に申分もありませんが、井戸水では其水の性質をよく調べないと人間の生命に關係する事が往々ありますから、先家を貸る事に就て第一に氣を付くべきは飮料水です。

井戸水は地中の水脈即雨水の自然に地にしみ込んで一所に集まつたものとか、他の原因で集た水がある

場等を掘つた爲に其處からわき出すものですから地を通る間の自然の濾過法で清潔になるものです故之は深い程宜しいわけであります、然るに雨水と云ふものが大變に物を溶かす性質を持つて居て、地中に溶解しやすいものゝある處を通て行た水はいくら水濾し器で濾しても其溶解物は取れません、即其最溶け易いものは石灰とか炭酸であります、是等は大抵の水中に溶けて居まして、水道の水より井戸水の方が味の宜しいのは多く之が爲であります、されども地中の不潔物迄も一所に溶かす事がありますから、水道よりは惡いのであります、掘井戸のよき點は太陽の熱が地にしみても水面迄餘程間があると、其處迄は熱が行きませんからいくらか夏の暑い時でも極く冷い水を得る事が出來るのであります、冬は丁度此反對で空氣の温度は低くなつても地中の温度は其割合に取られませんので温かく、井戸から湯氣の立つて居るのは之が爲であります、決して井戸の水が温かになるのではなくて外界の空氣が夫よりも冷いから温く感ずるのであります、之等の點から考へますと、不潔物さへなければ夏もなまぬるく冬は氷の如き水道よりは却つて上等のものと云はねばなりません。

水中に含みたる性質には害になるものあり益になるものもあります、炭酸の含みたるものは宜しいものと云はれますが、天然に出づる瓦斯の中にも往々有害なものがあります其内にも、最毒なのがフトマインと云ふもので、之を飲みますと下痢を起す事があります故、之を避けるには一度沸騰して用ゐる事であります。

水中の鹽分には格別惡しき害をなすものはありません、即食鹽の如きものであります、アンモニアなども少し位有りましても、其ものが決して害をなすものではありませんが、兎角こんなものゝあるのは其水源の方で大便とか小便とか其他アンモニア氣を發する樣な不潔物のある證で、是等から恐ろしい病氣の原因を引起す事がありますから、先こんな水は用ゐないに若くは有りません。

夫から井戸水の外に雨水を用ふる事があります、上海

香港などでは水の少ない爲何れの家でも大きな器に雨水をためて置いて家事の用にするさうであります、雨水は洗濯とか化粧用にするには最宜しう御座います、之は地中より湧き出た水では有りませんから土類を含まなくて從つてシャボンをよく溶解させますから洗濯などには極く適當して居ますが溶解力の强いもので空氣中に飛散して居る惡い物も一所に溶かして居ますから廣い原野と云ふ樣な空氣の清淨な處で取つたものは宜しいが空氣の不潔な處で取つたものは種々のものを溶かして居て純粹のものは得られません殊に中に溶けたものは直に腐敗し易く誠に貯へるに困難なものでありますから洗濯位には宜しいが其他には餘り用ゐられません。

水中にまじり居るもの、中には病氣を起すバイキンもあり又人体に益になるものもあります、夫のみならずどんな水にでも水ごけと云ふものは多少あるもので之等は余り害になるものでは有りません、其證據は日清戰爭の折など水のない場合には水苔の靑く浮いて居るのでさへもすくつて飮だそうであります、而も健康には何のさわりもなかつたと云ふ事です、水中にある靑苔小虫等は水中の不潔物を取つて生活して居るものでありますから、却つて其水は淸潔になるわけであります。

日本流の井戸は側を木で造るのでありますから、常に風通しがよくなければ木が腐れてごみが水の中に落ちる樣になります若し其他の原因などで水がにごつた時には水濾器で濾せば大抵のものは取れますが、また夫でも取れない時には昔より用ひ來つた明礬を入れますと芥は皆明礬に引寄せられて下に沈むものです。

水を汲み置きて日光があたりますと其温度が次第に高くなつてバイキン發生に都合よくなるから、餘り日光のさす處には置かない樣に又總て一晝夜越したものは用いない樣にするのが宜しい。

斯く水に就ての利害得失は直接に人体に關するので有りますからよく之に就て研究しなければなりません、井戸の深いのは水の性質は大抵宜しう御座いますが、

汲み上げるのに不便なと云ふ事があり、又餘り井戸の遠いのも不自由で、自然に水を使はない樣になるので、不潔になり易いものでありますから夫等の點も亦考へねばなりません。

其次には流しや溝の水は排出のよい處を撰ばねばなりません之は云ふ迄もなく不潔な水が何時迄も溜つて居れば衛生上害のあるは勿論、夫が地に浸み込て終には井戸の中へも入るのであります、又處に依つては芥屋が少しも來なくて夏向きなどは大に不便を感ずるものでありますから、餘り引込だ處や巡査の廻つて來ない處などは行かぬのがよろしい、如斯な事は一寸見た位では中々知れないからよく其近處の人々に聞くべきであります、夫から隣近處の人々の身格とか、風儀とか云ふ事も念頭に置くべきで、殊に子供でもある人は之が必要であります、孟母三遷の敎へも實に大切な事であります。

引越しは中々最初一度で極く適當した便利な處に行かれるものではなく、二度も三度もやつて見て經驗をつまなければ落付く事は出來ないものです、引越の事は是位にしていよ〳〵家も取きめて之から其處で一家を立てゝ生活して行くに必要なる器具を集めねばなりません、先第一に必要なるは臺處の器具で、初めて自分が主になつて凡ての買物から、經濟の事までして行くのは實にむづかしいもので、また實に間の拔けた事ばかりするものであります、先十圓二十圓の金を預つて種々と世帶道具を買ひに行きます、鍋釜はさすが臺處の王たるものでありますから、忘れる事はありませんが、さて火吹竹火箸などは得て忘れ易いもの、朝寢して、大急ぎで釜の下たき付け樣としては、初めて氣が付き、火を取ろうとしては火箸のないのにうろたへるなど隨分滑稽を演じました。

種々と買い集めて見ると中々大變なもので、十圓や十五圓は直に費してしまいます、自分が實際經濟にあたつて見ると物は勿体ないもの儉約はしなければならぬと云ふ事が初めてわかるのであります、殊に自分一人立ちになつて、自分の勞力で暮して行く樣になると、

金の眞に大切なるもの、價値のあるものと云ふ事が初めてわかつて、假令一錢でも冗使はせまいと云ふ氣が起るのであります、お互に親の脛を噛つて居る内は、金は貰へるもの、だまつて居ても毎月月末になれば書留となつて來るもの〻樣に思つて、餘分さへ有れば欲しいものが買いたくなるのですが、今から思つて見るとなぜあんな冗遣をしたかと思つて口惜しくてなりません、どうか今親御から學資を貰つて勉强して居られる諸嬢達は、誠に私の老婆心かは知りませんが、自分の實驗に照して見てもなるたけ儉約をして後日の爲になさると云ふお心掛けが肝要な事と存じます。

夫はさて措き東京は酒屋魚屋は勿論八百屋も乾物屋も毎朝うるさい程に御用聞きに來るので、居ながら何でも整へられるので、至極便利の樣でありますが、味噌醬油薪炭の類は別として八百屋ものなどは御用聞きから買ふのは損であります、之も自分の經驗でありますが、實際のものを見て買ふのではないから、品物の善惡は少しもわかりませんし、大抵之等は外で買ふよりは高いのであります。

所に依つて思ふ樣にも行きませんが麹町などは別してものが高いので四ッ谷あたりに自分で買に行きますと一品に就て一錢や二錢は必ず異ふのであります、中には少しは品物の劣つたのもありますが先夫等は少し我慢して之が毎日となると大した相違となるので一度之を知た以上は馬鹿らしくて取付けの高い八百屋では買へなくなるのであります。

自分でこんなものを買に行くのは何だかきまりが惡い樣な感じがしますが、夫も初めの内だけで馴れば何ともありません何の恥かしいこともなく經濟を重じ經費を少なくして滋養になるものを其代りに取ると云ふ心掛でするならば實に賞すべきではありませんか、西洋の諸國では中等以上の貴婦人が自ら下婢をつれて馬車で買物に行かれると云ふ事は屢々聞く事であります。

只魚ばかりは斯うは云はれません魚は靑物とちがつて腐敗しやすいもので、無暗に安いからとて買ふ事は出來ません、夜店などに行くと可なり大きな鯛が五六錢

で買へる事がありますが、之では隨分失敗をした事があります、鯖や鰹など大變に安いと思つて買つて來て得意になつて煮て一口食べて見ると變な匂がしたり舌をさす樣だつたりして、大損をする事があります、凡て魚は眼の美しく澄だもの、鰓の色の極く鮮紅なるもの、肉の堅いものなどでなければ、鯛の色のさめたのなど買ふものではありません、飛だ安物買いの錢失ひをすることがあります。

併一反買つたものだから何の之位構はない、勿体ないからとて食べて失舞ふ事がありますが實に馬鹿氣た話で、高か六錢や七錢のものを惜しいと思ふよりは身体の大切なるを思はねばなりません、凡て魚には限りませんが、古くなつたものを勿体ないから食べて失舞ふと云ふのは飛だ間違ひで、若し夫が爲に身体を惡しくしたなら只醫者に掛つて苦い藥を飲み金を取られるのみならず、ものに依つては危險に陷る事があります、これらは其家の主婦の責任で注意せねばならぬ事です、斯くいろ〳〵な事に注意して儉約をして行つても月の末には大抵豫算より越すもので、何うしてこんなに要るかと驚くです、一々其諸入費を綿密にかき止めて置て何には幾何之には幾何と其要目を明にし標準を明にして經濟を整理して行かねばなりません。

夫から日々の食物の事ですが馴れない内は毎日三度三度に何をしたらいゝかと途方に暮れてしまつてつい煮豆や汁豆腐ばかりですますものですが一家の食物は實に大切なもので只滋養分のみに重きを置くばかりでなく食慾を増させるとも肝要です夫には毎日の献立を豫め一週間なり十日なり定めて置きます、しかしとても其の通りに行くものでないが毎日の食物に變化ある樣食品の種類をちがはす樣に且つ同じ品物でも調物法を代へて行くと云ふ事が必要です。

夫からが家の内外の淸潔で、勿論、朝に夕に拭き掃除をするのは當然の事で斯うすれば只淸潔など云ふばかりでなく他から人が見ても誠に心地よく自然に其家の人迄が床しく見えます、一々きちんと物の置處が定まつて家の内が整頓して居ると所謂光明は罪惡を行はせ

ない様に自然と取散さうとしても出來ない様になり、人の心の内迄が整頓して來る様になるのであります。

一日醫者

糸左近

▲精神病　きちがひのこと

〔原因〕(一)世が文明に進めば進む程精神病は多くなるものである、故に支那朝鮮などよりも我が國に多く、我が國よりも歐洲各國に多い、即ち歐洲各國は三百五十人に一人の比例なれど、我が國は明治以來の統計に依ると五百人に一人の割合である、察するに世が文明になれば從つて精神を費すことが多いためである、太古の所謂無爲の世には本病のある筈は無いのである(二)男女を以て比較すれば男子より女子に多い、これ女子の本性として精神に訴ふることが多いからでもあらう(三)遺傳は最も多い原因である、本病者の半數は遺傳であつて、遺傳ある人で本病を發さずに一生を過したものは殆んど無い位である、これから考へても人生の一大事たる結婚は大いに注意せねばならぬ。(四)胃腸の病心肺の故障及び生殖器諸症からも誘發することがある。(五)酒精中毒からも本病に轉ずることのあるのは珍らしく無い、これ酒は腦を刺戟することが强いからである。(六)房事過度も一つの原因をなすものである、嗚呼愼しむべきは酒色の二つと謂はねばならぬ。

〔種類〕本病は其の種類甚だ多くあつて、一々これを擧げたら一冊の書物となる位である、されど大いに區別すれば沈鬱的と磊落的となり、稍細かく分くれば(一)鬱憂狂(二)躁狂(三)麻痺狂(四)痴狂(五)妄想狂等となる。

〔病狀〕一般に言へば心性の狀態大に變り、目的と順序とを失つた行爲をなし、他人の諫めなどは頑然として受けず、さうして自身では本病に罹つてゐることを少しも知らぬものである、今(一)から(五)までを區別して述ぶれば、(一)鬱憂狂は其の初め些細なことを心配し、それより何となく悲しくこれが爲に一室に閉ぢ

籠り、親戚朋友の交際を厭ひ、遂に疑ひ深くなり、我が親や夫までも信せぬやうになり、食物中に毒ありと恐れたり、或は仇敵があつて我を害せんとしてゐると信じたり、或は自ら罪を犯したりと思ひ、何時捕縛の身になるかも知れぬと驚き、食欲進まず夜は眠れず頭は重く、便通は次第に悪くなり、食事を厭ひ、身体益痩せ衰へて其の極端は死ぬのである。

右の如く鬱憂狂は大抵沈静な方なれど、中には放火を企てたり、或は無暗に人を殺さうとしたりするのがある。(二)躁狂は前者と大いに異なり、意志は大きくなり、従來の心配などは頓に去り、過分の仕事をしても疲労の感覚無く、或は徹夜して田を耕したり、或は終日食を忘れて車を曳くなど常人の為し能はぬことを為ることがある。斯様な状態であるから勿論他人の忠告などは毫しも受けず、唯私欲を逞くして、己れの思ひ込んだ事は何處までも行り通さうとするものである、偶我が意に逆ふことあれば大いに怒り、粗暴の挙動をなし、器械を壊したり、人を傷けたりする、其の他暴淫暴酒を好み、大いに叫び躁ぐものである。(三)痲痺狂は極めて緩やかに發るもので、初めの中は分らぬ位なれど、次第々々に記憶力が減り、職業を厭ひ、怠惰に流れ、讀書や寫字は少しも出來ず、若し強ひて行はしむるも蛙鳴蟬噪に等しく何事を書いてあつたか一向に辨へぬのみならず、五分時間も續けて讀むことは出來ぬ、筆記は眠りながら書いたものゝ如くに字の行は整はず或は脱字し、遂に手が顫ひ全く不明瞭なものを書くやうになる、病漸く進めば頭重く食慾は減り眩暈を發し小便を洩すなどの有様となり、時には人事不省になつて倒るゝこともある、病愈々高ぶれば精神益々異常を來し、或は木葉を竝べて數百萬圓の紙幣なりとなし、或は空中を飛行する器械を發明したとか、或は今日より何國の帝王になつたとか實に憫れむべき妄想を懐くものである。斯様なことが二三年も續く中に、身体次第に衰弱し、遂に斃れて了ふ。(四)痴狂は記憶力判断力は大いに減り、それが為に精神を要する業は一切営なむことは出來ぬ、昨日まで立派に業務に就

いてゐた人も今日は空々として世事を忘れたる仙人の樣である、病段々進めば進む程面貌が痴呆然となり、假令顔に墨が附いて居らうと、泥に穢れて居らうと、一向無頓着な有樣は、恰も二三歳の小兒の如しであるされど小兒と異る點は甚だ色を好み、大食暴飲を敢てせんとするのである。常は一日に三四合の飯で事足つた者も一度にそれだけ食しても平氣な風をしてゐる、それより段々月日が進むに從うて知覺力が減り、筋肉麻痺するものである。(五)妄想狂は元來己れの力に及ばぬ大事業を企で精神を無理に費した結果往々本病になるのであるから、意志傲慢になり、斷へず馬鹿な空想を遂げようとし、自ら智識學力ある人たるを許し、他人を輕蔑し、或は自ら神なりと稱し、或は佛菩薩なりと信じ、自尊の態度言語を用ゐ、夢幻と談話し、或は數千年前の釋迦如來が來てゐるとか、或はナポレヲンが低頭平身したとか稱へて意氣揚々たる樣は實に憐れむべきものである。

偖右の樣に五種類に説いたが此の外細かく分けたら何百種類あるかも知れぬ、素人の方が普通の人と思つてゐる中にも本病者が澤山ある。譬へば宗教狂、衛生狂色狂、清潔狂などの左程目立ぬのがあるやうなものである。三尺の童子も笑ふべき事を迷信し本願寺住職の糞小便を藥用に供したり醜業婦に迷うてゐる樣な墮落坊主に先祖累代の財寶を寄附したりする如きは宗教狂に非ずして何ぞや、又香の物の中にバクテリヤ無きか、帽子傘に如何なる黴菌が附いてゐるかも知れぬ、料理屋の食物は危し、疊の上に座るは傳染病に罹る基であるなど丶些細なことまで心配してゐる如きも一種の病氣である、又學力智識に富んだる身でありながら、婦人を見れば、老幼美醜を問はず、一夜の夢を見たがる阿房もある、之等は金箔附の狂者と謂はねばならぬ。又醫者の目から見ると彼の奇人と呼ばれたる高山彦九郎なども一種の道義狂である、足利尊氏の墓に到つて石碑を鞭つこと三百、五條の橋の上に座つて草莽の臣高山某と謹んだなどは尊王の志氣が鬱勃として溢れたとは言ふもの丶精神に異常を來さぬ限りは斯樣な態度

を爲せるものでは無い、故に彼は何の爲に自殺したのか人の疑ふ所である。入澤博士は德川三代將軍家光も其の子綱吉も精神病者であると斷言して曰く

家光は一世の英主であつたに相違無けれど、男色を好んで婦人を遠ざけ、漸く春日の局の苦心に依つて妻をもつたのは色欲顚倒狂である。綱吉に至つては純然たる精神病者である、何となれば讀書に耽り、婦人を遠ざけ、しかも動物殊に犬を愛し、殺生禁斷の令を下して若し其の禁を破る者は死刑に處するなどの殘酷なる行爲を物ともしなかつたとは聖賢の書を讀んでゐた人とは思はれぬからである。

と實に名論と謂はねばならぬ、この論から推して考ふれば犬猫或は小鳥を愛して婢僕を叱咤呵責する如きは愚と謂はんよりは狂者と斷定せねばならぬ、又これと反對に動物さへ見れば打擲して見たい性情の發るのがある、或は何の妨げもせぬ犬猫に石を投げたり、或は蜻蛉の羽を取つて見たりする好惡狂もある。すべて物は程度があつて其の程度を越ゆる者は令ひ狂者とまで行かないでも常識のある人とは斷然言へぬ、譬へば勉學は善い事であるとは言ふもの丶每晩股に錐を刺して讀書したり一週間に二晩しか眠らぬなどは如何なる方面から論じても賞むべきことでは無い、今一つ例を擧れば慈善は美事である、されど已れが家を傾け妻子を路頭に迷はせてまで行ふに至つては倫理の大道に合つた行と言はれようか余は醫者であつて倫理學は知らぬけれど恐らくは古今東西に渉つて斯樣な道を勸めた人は無いだらうと信ずるのである。

〔療法〕(一)より(五)までの種類に從うて多少其の療法は異なるけれど、それは專門家の硏究すべきことなれば今は其の一般の心得を書いておかう。卽ち如何なる狂者に向つても精神の感動を遠ざけ、一事に熱心することを避けしめ、規律ある生活に馴れしめ、成るべく深切怜悧な看護者と共に住はすやうにし、輕症の者には適當な職業を與へ、頭部を冷し、便通を整へ、滋養の食物を與へ、刺戟性の飮食物を禁じ、夜は能く安眠出來るやうに導き、入浴は屢々行はねばならぬけれど、

可成就寝に臨んで施すが可い、山水明媚の地に遊ばせたり協意の談話を聞かせたりすることは甚だ善い事である。本病の遺傳ある者には未發を防ぐやうに工夫せねばならぬ、豫防法さへ上手に實行すれば必ず一生無事に濟むだらうと余は信ずるのである、即ち一事に熱心することを避けしめ、それで其人の意に逆らはぬやうに其の人の癖を矯め、すべて繁雜なる業務を取らせぬことが肝要である、若し名譽心の強い人であるならば名利に汲々せぬ文人墨客の風を慕はしめ、厭世的であるならば可成家庭の趣味を感せしめ、酒色を貪る如き野卑な風があるならば宗教道德の美を樂ますといふ的に側方面から直すが善い、彼の春日の局の如きは其の人の意に從ひながら上手に他方面へ導いたものである、宜しく手本として應用すべしである。

又右の手段の外に今一法がある、それは未發者或は患者の固執する事柄を絕体的に厭はしめ然る後他方面に導くのである、亂暴な所行をなす狂人の前で、其の亂暴よりも一層甚しい亂暴を故と爲て見せ亂暴といふものは厭なものであると自覺せしむるやうな方法である恰も嫉妬深い妻に向つて其の妻よりも一層強く嫉妬を裝へば妻の方で嫉妬といふものは厭なものである何うかして夫の嫉妬を直したいものであると思はしむる仕掛である、此の方法で狂者を直すといふ人もあれど如何にも拙劣な仕方で或は却つて病を重くせぬかといふ恐れがあらうと思はる、何となれば自覺力がある位なら勿論狂者で無いからである。

又本病の遺傳ある人には可成怯懦ならぬやう即ち膽力を養成するが肝要である妖怪的の事は可成其の眞理を悟らすやうにせねばならぬ、遺傳の無い人ですら怯懦の爲に發狂した例が幾らもある、子を育つる母は假にも幽靈人魂などの話をせぬ習慣を養はねばならぬ。

兎に角本病者の內服藥としては、これと一定出來ぬけれど其の便秘する者には

蘆薈　〇、二　大黃末　一、五

右丸藥として一日三回に分服

不眠の者には

スルフオナール　〇、五乃至一、〇

右實際に一度に服ますが可い、但し劇藥なれば懇意な醫者に買つて貰ふより外に仕方は無い、

又

臭剝　四、〇　苦丁　一、五　白糖　適宜

水　一〇〇、〇

右一日三回に分服

これも最初の中は仲々効あれど、連服してゐる中に習慣となるものなれば、時々休めては時々服ますが可い

今や世は日増に頻繁になり、婦人と雖も昔日の如く男子に盲從すべき時では無い、宜しく國家事業の半分は男子の手より受取らねばならぬ、サア斯うなると纖弱い婦人の腦力を刺戟する事が益々多くなるは理の當然本誌の愛讀者よ滿天下の貴女方は、能々此の理を悟り頻繁なる中にも秩序を守り、平々淡々一歩々々に進み決して齷齪としたる心を持たぬやうにといふ精神衛生を守られたいものである。

（以下續出）

農家の生活

仙臺　平山ろく子

東北一流の地主陸前桃生郡の藤本氏の家庭に就て、一寸御紹介致しませう。

藤本家の現在の所有財產の總額は百餘萬圓で、直接國稅一萬圓以上を納むる大地主です。そして現主人は九代目ですが、代々の積德に加ふるに現主人の慈善心深く、地方人に尊敬せられて居ります

▲起家の由來、藤本家の祖先は、四五代頃迄は至つて微々たる小農でありましたが、六七代の頃に到りて勤儉して資金を貯へ、農業の傍ら酒造を爲し始めしより大に身代を造り上げました

▲現在の地位、其富の度合を言へば東北に於て僅に第二流に下らず。地方に於ては隱然重きを爲して居るのです。然し俗人に譽めらるゝ事などは頗る厭ふ方ですから、廣告的の慈善を行ふたり、又は議員其他の公職に擧げられたいなどと云ふ虛榮心はありません。當家の特色は主人夫妻の采配の振方が行屆いて居るので、家内萬般の事が秋毫亂れず整然として居るのです。現在所有の財產は小作米の實收入一ヶ年に七千五百石、及び家屋其他の所有物件の見積高廿萬圓、農業の傍ら金穀貸付業をも營みて、小農又は小作人間の金融機關として相互の便益を計りつゝありますが、其運轉して居る金穀高の總計は五六十萬圓もあるとの事です。尤も今酒造業は廢しました。

▲生活事情　當主は四十八歲で學問は深くない方ですが。先代善兵衛氏は伊達家の家臣で、維新の際戰陣に臨みましたが、武運拙なくも遂に白河口の一戰に敢なく葉末の露と消へ失せました。其時當主は僅かに十歲、其當時の財產は一切を包括して二三十萬圓にも滿たなかつたさう

ですが、此効果が廿數年間に何等の山師的事業を爲す事なくして百有餘萬の財貨を積み得るに至つた技量は、其天性に於て何等か常人と異なる點がなければなりますまい。

當主は生來の沈默家で、人と談話をする時も濫りに言辭せず又何事を爲さんとする時にも、常に默考の結果でなければ行ひません。放言高論を以て快としたり、人に賞められて嬉しがつたり、罵られて怒つたりするような輕躁な人ではありません。言論よりも實行を重んじ、世間の毀譽に心を動かす事なく、飽くまで自信を確守し毅然として俗世間の上に超脱せる意見を持して今日迄で通し來りました。

▲家風、斯の如き性質の人ですから其家風も大凡推察されませう。私が此記事の材料を得んが爲めに訪問した時親しく話されましたが、此藤本家が今日あるを致した源因は何か、と尋ねました時に當主は、「勤儉」、と云ふ一事を祖先より實行し來つたに過ぎない、自身自ら之を行ひ以て家族を率して居るのです、家庭の憲法として別段制定してある譯ではありませんが、左の事柄は不文法律として自ら守り家族に守らしめて居ります。

一、勤勉と儉約は修身齊家の基礎たる事。
二、飲酒は家族と共に嚴禁す、
三、家族相互の關係は各個人意志の自由を束縛する事勿れ、父母なるが故に子を自己の意に從はしめ、主人なればとて壓制的に雇人を使役して權柄說する事なく慈愛を加へて相愛の念を起さしめよ、これ一家の財物を保護せしむる精神を養ふ唯一の方法なればなりと。

大體の家風が斯うですから冠婚葬祭の禮儀を行ふにも、嚴重ながら頗る質素で外觀は恰も小百姓の如くですから主人より、家族雇人に至るまで總べての方面に於て外飾を避け、專ら實用を旨として居ります、主人と雖も綿布の衣服を纏ふ事は無いから家族より雇人は勿論絹服を着る譯には行かず、知らず〱の間に外部の人々を感化して行くので主人平常の動作は恰も一村一鄉に不言の說教を爲しつゝあるかの感があります。

又主人の談に「當家の今日あるを致したのは、一に祖先の餘德に由るとは申しながら、內助の力を盡した妻の功勞を沒する譯には參りません、私が如何程勤儉々々と騷ぎ廻りましても內部に之れを援助する者が無かつたならば、水泡に歸したかも知れません、然るに私の妻が私の意を體して之れが實行に勤め居りまするから一家が平穩に治まつて行くのです。」と以て其內助者の賢德を推知するに難からずでせう。又世の節儉を守ると稱せらるゝ家の多くが動もすれば雇人の口によりて、吝嗇なり臨孫なりと惡評が傳はりますが、此家の夫人は未だ曾てソンな蔭言を言はれた事がありません。これ何故でせうか、左にこの家の下婢の談話を紹介して其性情の一班を明かに致しませう。

「私の家の夫人は私が御奉公に上がつてから、三年になりますが未だ一度もお小言を仰やつた事がムりません、獨り私斗りでなく他の雇人に對してもお小言を頂戴した事はありません、私共の事ゆゑ仕事の出來が惡かつたり、粗忽な仕出かしたりする事が度々ありますが、其時は決してお叱りなく、「ソーしては惡いものだからコーお仕なさい」と懇ろに諭されますから大聲で叱られるより却て將來を愼む樣になります。殊に暇ある每に色々と女のつとむべき道を說いてお聞かせになつて將來世に出てから必要な女の務めを懇ろにお諭しになつて可愛がつて下さるから、知らず〱實の母でゞもある樣な氣がしまして、常に愛持として致す仕事は全で自分の仕事をする積りになつて働いて居ります」

▲衣食住、是も實用主義から割出して來たものですから、必要以外に何

事の飾りを競ふ事なく專ら實業を旨として居るのです。日常生活の狀態は一家族は、主人より子女に至る迄で、一定の職業を與へ、空しく光陰を徒費せしむる如き事はありません。十八歳の男子、十四歳の長女、八歳の二男の三子がありますが、長男は家庭教師に就て一定の學問教育を受くるの外每日のツトメとして家の內外の掃除をなし、長女は兄の掃除せし屋內の床の間、椽の間等の拭方より下婢の手助として勝手元を働らきますので初めて見る人は何れが令孃で、何れが下婢であるかゞ分らぬ位です、八歳の二男の方は未だ仕事すると云ふ譯には參りませんが、可成仕事をするのを樂むと云ふ風に育てゝ行くと云ふ事です。しかし是れは多分朝ばかりで後は終日勉學に孜々たるものです。又小供の教育は全く放任で、お孃樣が徒跣で泥の中を馳せ回らふと二男が近所の小兒と喧嘩を仕ようとソンナ事には一向お搆ひなしです、しかし孰れも中々怜悧の性質で活潑に育つて居ります。

主人は一家の總理大臣として各種の役員を統括し每日一定の事務を執り、夫人は衣食住の三者を處理し、いつか女學世界で拜見したお臺所拜見や押入拜見などが何時(なんどき)お臨しになつても恥しからぬ樣にチヤンと整頓がしてあり、何品は何番目の簞笥へ仕舞つてあるといふ事がチヤンと暗記されて居るので、たとへ暗の夜に燈火なしで何品でも手探りにさがし出して來る事が出來る、以て家政の一斑を知るべしである。



花信頻々

▲娛樂、 別に記するほどの事もありませんが每週土曜日の夕には晩餐會を催ほし、廿餘人の家族一同大卓を圍んで飲食し(此日は平日より多少の御馳走あり)、主人夫婦よりは種々有益な修身實家の訓戒談あり、世間話しあり、主人は子女を相手に小兒の如く無邪氣に戲れ、各自勝手におもしろきお話をして八九時頃迄で樂んで居ります。樂器にはバイオリン、笛、琴、手風琴等ありまして土曜日の夕は恰もミューズの園に遊べるかの感が起ります。運動を兼れたる娛樂には弓術あり、實用を兼れたる娛樂には自轉車あり、實に文明的地主の娛樂として適當のものかと思はれます。

▲育英事業　として每年支出する金額は三千圓宛で、これは專ら中學卒業の者にして學資の爲め進んで專門學を研究する能はざる者に貸與するのです。現在貸費生の數は總計三十餘人ですが、學校の種類は多く官

立で東西兩大學、各高等學校、各專門學校、高等師範、女子大學、其他數校ですが畧しませう。主人の娯樂は弓術と讀書ですが、此頃カー子ギーの傳記を讀んで大に感じ、家政其他の上に改革を行ひ、前揭育英事業なんかもカー子ギー主義を實行して居られる。

農家の生活（二）

香川縣　石井靜子

爰に皆様に紹介せんとする家は我が地方にて地主中の德望勢力ある家柄にして先祖は古くより庄屋をつとめ、當主まで八代なり、每年舊正月と盆には村中を巡廻して若し貧しき者あれば米一斗づゝ惠み又孝行者、勤儉人其他感心すべき者あれば之れに賞與して奬勵の道を開き、己が家も又勤儉貯蓄を專らとして毫も懈心なかりき、右の結果として身代は次第に繁殖し現代にありては五十町の地主たり、扨其主人主婦の人柄を語らんに主人は謙遜にして情深く、忍耐にして物事に倦まず、公德心厚き性質なれば其爲す處常に人望に叶へり、主婦も又近郷にて賢德の聞ゐありて其爲す所なかく〱凡婦の及ばざる所あり、從順にして家長の意志を明かにし、其主義方針を一致せしめ、何事も主人の旨を受けて諸事を取り扱へり、夫婦とも斯如き性質なれば現代となりても猶先祖の遺志を嗣ぎ、克く勤儉貯蓄し、且つ謙退辭讓を專らとして一郷に名望勢力あり、されば慈善に就ても貧老に金米を惠み遭難者又は神社佛閣等の寄附金の申込あれば歡で應じ、田畑の不作なる時は小作人の勞を察し納米中一割とか五分とかを小作人に與へはすれど自己の懈怠より來る貧弱者には猥りに金數を與ふる事なし時としては怪しき懈け者の來る時は主人之れをよび寄せ懇に説きさとして業に附かしめし事度々あり又來訪者あれば主人自ら出でゝ親しく之れに應接し用事終らば時間の徒らに費ゆるを恐れて速に歸らしむ、家人一般敬神の心厚く先祖を大切にするの心深く、故に葬祭の時などには先人の恩に報ぜん爲最も叮嚀に深切に執行せり、「冠婚も日本風にして嚴正に執り行ひ、而かも一旦結婚したる以上は假令如何なる事情あるも離婚する事なく開祖より八代の間に於て離婚せし者一人もなしと云ふ、日本今日の弊風たる離婚の多きに際し實に奇特の現象といふべし又大祭日とか五節句には其れ相應の式を行ひて家族團欒の實を盡す雇人は下男一人下女二人なるが下男を指示命令するは主人の外何人も猥りに使用するなし、又下女を命令するは主婦の外何人も猥りに使用する事なきは家政上實によき方法といふべし時としては主婦が、僕を使ひたき時は主人に一寸打合せして其の都合をきゝて使用し、又主人が婢を使ひたき時も同じく主婦に知らして使ふ故双方共に少しも事の紛ぐるといふ事なし、特に主婦は僕婢を使ふにも克く愛撫して顏色を和らげ、其中にも何所となく品位と威嚴を保ちて僕婢を心服せしむるなり故に僕婢は常に云へり、「內の奥樣はほんとうに御やさしくて良い方だけれど何所となく又恐ろしい所もある」と又下婢の我思ふ樣に働かぬ時は主婦自ら事を執り、靜肅にして敏捷に事を運ばす故、下婢は無言の間に感化を受け、悅服して職務に從事するなり。又主婦は割烹、洗濯、掃除の仕樣より裁縫、張物は言ふに及ばず。來客の應接ぶり、配膳、給仕の仕方等も一々叮嚀に敎へ、言語擧動、戸障子の開閉等只其不束を責めずしてよく練習せしめ、且つ之れを單に我が家の爲めのみとして敎へず其人一生何所に行くとも心得べき事として敎ふる故下婢も其身の爲めとして悅びて之れを習ふなり、又薪炭の如き物も每月よき程に買ひ入れ其用ひ樣の巧拙により過不足も生ずべければそを皆下婢

自身の責任として所辨せしむる故、下婢も又我が物とおもひて身を入れば双互の爲め最良法と云ふべし。衣服は極めて質素にして外出などの時は時と場合によりて絹衣を用ふる事あれど常には皆手織縞なり。食物も又割合に經濟的なり然れども夕餐は愉快なる家族團欒して　相親むべき好機會なりとて主婦の最も意を用ふる　所なり左に其三日間の獻立を揭示せん。

	朝	晝	晩
三日　木	味噌汁（大根 人參）	酢三杯（大根 わかめ 脊）	鰯さしみ　小菜ひたし物
四日　金	うの花汁（田芋 ねぎ）	高野豆腐　ゆば	親子巻　すりいも（佛掌薯）
五日　土	味噌汁　ふ	甘煮（田芋 蓮根 ゆば）	清汁（豆腐 淺草のり）　道明寺巻

扨晩餐は六時三十分なり何れも待ち構へカチト拍子木鳴れば　皆一度に食堂へ集まり皆其時は嬉しき色を滿面に表はし　今日の疲れも忘るゝ樣にて一家の團欒は實に此時なり、　其れより主婦は滿座に向ひ「今日の手料理は如何で御座る」と言へば大人やら小供やら皆異口同音に批評して後箸を上ぐるなり、食べながら主人先づ口を開きて每日新聞紙にあけし色々なるお話をすれば、子供等も又學校にて敎へられたるお話を天眞爛熳に語れば、皆一度に笑ひ出し何所に憂き事のあるべきと思ふ位なりさらぬだに一家の快樂たる事さながら春風のそよ吹くに似たり、又時々主人は男兒を主婦は女兒を連れて金刀比羅とか　有明などへ遠足に出かくる其時の樂しさは一入にて常に近鄰人の羨む所なり、先年迄姑存命せしが甚だ心頁からぬ人にて嫁を娶りし後も常に義務と責任とを　嫁に果さしめ己れ其權利を握り我が儘を爲盡せど　主婦は少しも厭ふ事なくひたすら孝行を盡せしに今迄の腹黑き姑も遂に感心し、直に隱居して家の事一切を嫁に開け渡せしと云ふ、　又主婦は兒女の敎育に非常に熱心にして朝は早くより起き出で登校の前には必ず復習及び豫習をせしめ、又學校へ時々通信して務めて學校と家庭との連絡を保り、又日々の雜費を細記して月末每に淸算し主人に揭示するなり爰に記するは　只其雜費雜入の合計のみを記さん

一年中諸税｛地租七百五十圓／地租割六百七十圓｝—｛所得税三十五圓／縣税三百八十圓｝

扨この家の兒女は皆從順にして而かも獨立心に富み　依賴心は少しもなき故こは其躾け方の如何によるならんと或日夫人を訪ひ親しく　其由を聞くに曰く「我が兒女は可愛けれど出生の初めより成るべく懷に入れて温め又添乳等して寢さしめし事なく　故に兒女等眠らんとせば每に自ら臥して眠に就き敢て母の手を煩はさず又玩具の如き、其他自己の物は皆自ら片付けさする樣にせしむ、　妾の躾け方總て斯如し」と語られき實に子を持てる親は斯の如き心掛有りたき物なり又此家に感ずべき事あり、其は大家の事とて屋敷も廣ければ果實の木も多くあり主人曰「此果實は小供の物なれば宜しく敎育費に當つべし」とて每年其果實を賣りて貯金として子供が欲しがる時は別に買ひて與ふ又小供會と云ふを　設け會員は家族及び親戚朋友の小供等にして每月金二錢づゝを基本金として出し合ひ有志の者は別に寄附金をなし之を纏めて貯金とし　二ヶ月に一度離れ座敷に於て小會を催し其時には別に馳走と云ふ程でもなけれ　ど一寸手輕な料理をあつらへて　音樂の合奏やら唱歌やら遊戯やらそれはく色々な遊びをして　大人小供の差別なく皆打ち興じて其日を暮すなり實に

樂しきホームにこそ。

患者の食物

黄菜女史

病人は萬事悲觀的に流るゝ事多き上に、食物に付ての娯みすくなくなれば、一層不愉快にして病氣の治療上にも影響する事少なからず、されば病人の食物調理は最むづかしきものにして看病人たるものは大に注意せざるべからず。

病人が食物を取る事は平日健康なる人が食物の大切なると少しも變りたる事なけれども、大抵病人は食慾の少くなるものなり、第一消化器に病氣あれば食の進まざる樣になるは勿論、此場合には先其病源を治すれば次第に食物は進む樣になるものなれども、去りとて病氣の治する迄食せぬわけにも行かざる故、最困難なり、又は全身弱りたる太病人に至れば腸胃も共に弱りて、分泌液も充分ならず、變性して消化の力薄くなる、斯る時には全体の病氣を治療せざれば如何に滋養ある食物を與ふるも却つて害になる事あり、又精神病者などは其精神に異狀ある爲全く食機失して少しも食物を取るの念なき事あり、斯る場合には其心持より治療せざれば如何に食物を與へんとしても却りて無効に終るものなり、斯る事情を外としても大抵病人は運動少なき故、自然に食慾少くなるものなり。

重き病人が病氣のなほりかけたる時には食機非常に奮ひて多くのものを貪り食せんとする慾望を生じて看病人を困らすものなれとも、此場合には最注意して決してみだりに與ふべからず多く食傷して折角快方に向ひたる病氣も再び逆もどりして取かへしの付かぬは多く此時なり。然れども之は多く病人が快方に向いて只食物によりて專一に身体の衰弱を取返すと云ふ場合の事にして其他腸胃病の時には自然に食機の減ずるものなる故に、此場合には強て食物を與ふれば却りて害になる事あれども、此二點を除くの外には病人の欲する限りは食せしめて差支なきなり。

病人の食物は食物の品質によりて分たずして多くは食餌に就て區別するなり、人によりて異なるべきも普通は之を七通りに區別す。

▲第一、厚味食餌

之は肉類、飯、野菜等我々の平日食する食物にして如何なる病人に適當なるかと云ふに多くは外科的の病人が食する食物なり、凡て熱のなき病人には此食物にて宜し然れども手術を受けたるとき怪我等の塲合には普通の人の食する中にて刺戟性の食物は厳禁する塲合あり。



櫻雲十里

▲第二、淡白食餌

之は字の如き輕きもの丶みを食する食餌にして油氣の少なきものなり、何れの病人にも最害なきは此食餌なり、腸胃に病ある人はこの食物を用ふべきなり。

▲第三、輕減食餌

字の如く食物の分量を少なくして淡白なるものとしたるなり、之等は重に熱のある病人に用ふるものにして粥などは此内の一なり、然れども世の多くの人は粥とさへ名が付けば凡て消化よき樣に思

ふて湯づけの少しやわらかきものを造りて食するものあれども、之等を用ふる位ならば强て不味きものを食するに及ばず、却りて飯の柔かく炊きたるものを食するに若かざるなり、粥にすれば自然噛む事も不充分なる故に、長時間養て充分に噛む事が出來ずとも、腹中に入りて害なき位にはせざるべからざるなり。

▲第四、流動食餌

固形体のものは凡て食せられざる場合に用ふるものにしてそもゆソップミルク等此内に入る、チブス赤痢など重病のものにして腸の甚だしく損じたる場合には極少しにても固形のものよろしからず、か丶る時には折角出來かけたる腸壁の極めて薄き皮膜も爲に破られて生血などする事ある故に醫師より流動食餌を命せられたる場合には固く他のものは禁じて食せしめざる様になす事必要なり。

▲第五、止下食餌、催下食餌

下痢を起したる場合と便秘の時とに用ふる調理法なり、前者は果實など固く禁せさるべからず後者は之に反す食物の養生にて催下をせんとするには其最効あるは果實位のものなり其他凡て汁氣の多きものは便通を促すものなり。

甚だしく下痢を起したる場合には多く咽喉の渇くものなれとも水は與へずして蛋白水の如きものか、葛湯、茶、珈琲、等を與ふべし又時によりては神經を興奮せしむる爲に葡萄酒ブランデーの如きものをそうすめて與ふる事もあるべし。

▲第六、肥養食餌、强壯食餌

之は肺病、腺病に最必要なるものなり、凡て肺病、腺病など云ふものは親よりの遺傳もあれども、然ざるも營養不充分よりして起る事ある故に、常々より相當の滋養食物を取る事は勿論なれども此病氣になりたらば醫師にか丶り服藥するは勿論、其食物に最注意して專滋養多きものを與ふべきなり。强壯食餌は蛋白を多く含みたるものを用ふる方法にして肥養食餌とは体内に脂肪を多く入れんとする場合に用ふる食餌なり、何れの場合にも牛乳などは宜し前者は身体の衰弱したる場

合に用ひ後者は瘠せたる病人に用ふべきものなり。

◆第七、減損食餌

之は身体の組織を減損せしむる食物なり、組織を保持するは主に脂肪なるが故に、之を去る工夫をするなり、故に脂肪のある食物は一切厳禁するのみならず、水を多く飲ませ運動を盛に行はしめ主に蛋白質を與へて体中の脂肪を燃焼せしめんとする爲に用ふるものなり。

此他密尿病に關する食物の献立は澱粉とか砂糖類とかを悉く禁ず、乳類は病人に廣く用ひらるるものにして此乳を禁ずる場合は減損食餌の時のみなり、其他は何れの場合にも用ひらるゝなり、夫のみならず乳を薬の代りにして用ふる牛乳療法と云ふものありて非常に多くの乳を用ふるなり、即 薬は只付けたりにして一日に一升以上の分量を飲むなり、日本にては未だ行はれざれども西洋諸國にては牧場の側に出養生して日々新鮮なる乳を用らるる様に出來たる處多くあり。又牛乳の内に醱酵素を入れてケピールと云ふ酒になして與ふる事あり、病人によりては非常に好みて大に効力を奏する事あり乳の内の醱酵素の爲に乳がアルコールと炭酸とに分る、此炭酸を放散したるものは甚だアルコール分の少なきよき飲料となるなり、其他には菓子の内に入れ或は他の食品に混合するかして、最 用



春色駘蕩

途の廣きものなり。

肉類は極く上等なるものを生にて食する事あり、又は其汁のみを搾取して用ふる事あり、ソップにするとか、燒くとか、煮るとか種々の調理法あるものにして、汁のみを食するは强壯食餌の内最も大切なる食物と知るべし、又肉の内に人工の消化液を混和したるペプトンとして用ふる事もあり。

ソップは余り薄きものをがぶ〳〵飲む事の出來ざる場合には其の量を少なくして滋養の効大ならしむる爲に極く濃きものを造りて與ふべし。

玉子は牛乳とならびて病人に最も廣く用ひらる丶ものなり或は乳と一所に用ひ、或は酒と共に用ひ、或は澱粉類とまぜて菓子とか食物とかにして與へ、或は黄味と白味と別々にして用ふる場合あり、脂肪の多く必要なる强壯食餌に用ふるなり、蛋白水と云ふは玉子の白味を水と混じて水の代りに用ふるなり。

穀類は勿論飯又は粥にして食せしむる位のものなり、粥は大に滋養のあるもの丶如くに思ひ居たりしかども、之は水分九六、五五にして固形体は僅に三、四五よりなし故に余り滋養のあるものとは云はれざるなり、然し粥のやわらかきものは滋養にもなり消化も宜しきものなり、粥は只滋養分を取るのみならず腸胃の中を和げて下痢などを止むる効力もあるなり、又大麥も時にはおも湯と同じ樣に煎じて飲ましむる事あり、重に下痢する時に水の代りに用いて効能あり、脚氣の場合に大に稱賛せられて用ひらる丶なり、又麥より麥芽を造りて其ま丶用ひ、又は夫より麥芽糖を造る、即飴なり、之は非常に稱賛せられて食物として極く大切なるものとなり居れり。

小麥はパン又は麵類にし其他燕麥のオートミールなどは平生健康なる人にも病人にも甚だよきものとして用らる、其他きびなども病人には却りて害なしとて用ひらる丶事あり。

葛片栗なども病人の食物として最も廣く用ひられたり、豆類は非常に養ひになる樣に見ゆれども病人に用ゐて果して夫程の効あるや否や疑問なり、豆腐なども腸胃

の弱きものには酸敗を起しやすくして余り宜しきものにあらず、小豆は脚氣の時に多く用ひらるゝものなれども、之がさほど効力あるものには有らざるなり、西洋にてはゑんどうの中の澱粉は非常に養ひになるものとして麥芽糖と混和して大切なる病人の滋養品として用ひ居れり、併し凡て植物性の蛋白は肉類の蛋白質より見れば余程不消化のものなりと云ふ事を忘るべからず。

野菜類は澱粉を多くふくみたるものにして昔より賞揚せられたり、然れども木纖維の多きものは不消化を來す恐あり、大根にんじんほうれんそう、キャベーヂ、かぶなど云ふものは皆淡白食餌中に入るべきものなり。



春雨蕭々

果實も野菜と同じく通じを付くる時には最適當のものとして用ひらる、日本にては減損食餌などを用ふる場合は殆どなけれども西洋にては此食餌の爲に葡萄のみを食して病氣を治療すると云ふ事あり。

飲料とは水、酒、湯茶、コーヒ等にして腸胃病氣のある場合には凡の飲料はなるべく禁ずる事をよしとす、酒類即シャンパン、葡萄酒ブランデー、ビール、日本酒何れも病人に夫々用ふる場合あり、主に氣付けなどの場合とか非常に衰弱したる場合にシャンパンとか葡萄酒とかを與ふるなり、强壯食餌の時には之等酒類は宜しけれども淡白食餌の時は、全然廢すべきなり。

脂肪は肥養食餌に最も多く用ひらるゝものなり、動物性脂肪には肝油あり、植物性のものにスヰートオイルあり、之を一名人工肝油と云ふ、普通のオリーフ油を精製したるものなり、日本にて脂肪を平食にする事は誠に少なき習慣なれども、必要なる場合には腸胃を害せざる限りは多く食すべきなり、醫師によりては病人に落花生とか胡桃とかを食せしむる事もあり、其他胡麻油にて油揚とか天麩羅とかを製して食せしむる事も必要の場合あり。

凡て食物は只滋養分の多きを賞するのみならず、其形、分量、色の配合等にも心を用ゐて人をして食慾を起さしむる様にするを食物調理の本旨とするものなるが、殊に病人に與ふる食物は一層之に注意して食慾の全くなき病人をして食慾を起さしむる様に務むる事肝要なりとす、殊に其分量に注意を要す、如何に美味に美しく調理したるものなりとて病人の目前にうづだかく並べられては病人は只見たるのみにて嫌惡の情を起すものなれば、凡て不足目に出す方却つて食の進むものなり、一度食して餘りたるものを二度目に與へんとすればもはや味も變りかた〴〵何事にも都合あしきものなり。

又病人には一度に多く食物を與へざるをよしとす多くの食物を食せざるべからざる場合には度數を増して分量は少なくすべし、一日に五六度より多きは八九度にわりて與ふると云ふ事もあり、即病人は通例胃の働き衰弱し居る處に一度に多量の食物を與ふる時は胃は夫に堪ふる事能はずして却りて害となるなり、溫度は通常の食物の溫度にして夫より余り熱きも冷たきものも宜しからず、されども又病氣の性質によりて吐血咯血などする病人には殊更に冷かなるものを食せしむる事あるべし、一日に五六度以上も與ふる時には一々調理する事むづかしき故に、溫むる道具を手近に置きて其度毎に溫めやるべし、併しなるべく食時は服薬と同じく時を定めて置くをよしとす只眠り居る時には强て食せしむるにも及はず。

病人自ら食物を食せらるゝ場合には看病人の手はよ

ほど嘗けらる丶ものなれども、自ら食する力のなくなりたる病人に他より食物を食せしむる時には殊に注意せざれば却りて病人の苦しみを増さしむるものなり、若し飲食物を口より入る丶事能はざる場合、例へば食道の病氣とか胃の中に食物を入る丶時は胃の害となると云ふが如き時、吐氣激しくして食物を胃に入る丶事出來ざる場合、又は神經病にて咽喉つまり、食物の通じなくなりたる場合等には、滋養灌腸とて肛門より食物を注入するなり。されども直腸は吸収する作用あれども、之を消化する作用は有らざる故に、其ま丶吸収の出來るものを注入すべきなり、藥屋に行けば種々調合したるものあれども、黄味牛乳ソップ、飴等など一品づ丶入る丶事あり、又は二三品混合して入る丶場合もあり之を滋養灌腸と云ふ、之を行ふ前には初めに直腸の中を清潔にする爲に普通の灌腸をなし然る後に行ふなり、されども一度に余り多くを注入する時は直に流出する事ある故に、大抵百二十グラム位より超過すべからず故に斯る事を施す樣になりたる病人は大抵むづかしきなり直腸は平日大便を受くる事にのみなれ居る故に、之等の食



落花紛々

物を入るゝ時は多く直腸カタールなどにかゝりて其為に又なやむ事もあるなり。

（完）

鹽の効用

K　M　生

われ〳〵が日常用ゆる鹽ほど廣く世界に行渡つて居るものはないがまた鹽ほど多くの効能に富んで居るものもない、がそのあまりに普通なところから鹽に多くの効能のある事を忘れて居るもの——否鹽の効用の十分の一も知らぬものが多いやうである、ついては鹽の効用の大略を一家の賄をする主婦にお知らせしやう。全体一家の主婦ともいはれる人は厨で使用するもの、性質効用または應用等を十分に知つて居ると一のものを十にも使ふ事が出來るけれども、もし性質効用の一部分ほか知つて居らぬ時は十のものも一にしか使へぬといふ間接直接に非常に損をする場合が多い、鹽の如きもそれである。

▲鹽は防腐劑　日本では古來鹽は純潔のもの不潔を拂ふものと知られ鹽花をまくなどゝいふ事があるが、西洋でも鹽は純潔の紀號とされ、鹽の存在は常に健全を意味して居る、なぜといふに鹽は防腐劑であるからである、防腐劑である故に啻に物の腐敗を防ぐのみならず、腐敗及び分解の原因なるバチルスを殺すの力を備へて居る。

▲鹽と血液　もしわれ〳〵の食物の中から鹽分を去つて仕舞へば血液は非常に窮乏して、かのすべてのバチルスに抵抗し之を殺す力を具へて居る白血球はその力を失ひ、血液そのものはまたアルカリ性を失ふ事になる、その結果としては皮膚が荒れ、艶を失ひ、吹出ものなどが頻りに發生する事となる。

▲鹽は興奮劑　毎朝一碗の鹽湯は胃を洗滌し興奮せしむるの効がある、また鹽は眼にいろ〳〵の効能があつて、弱き眼に力を添へ組織を引締むる、もし眼瞼の腫痛む時などは鹽湯で洗へば痛みを止め目脂の發生を防げる、また使用に過ぎて眼瞼の筋の弱つた時に鹽水で洗

へばこれもひどく力を付ける、が眼に用ゆる鹽は純良清潔のものでなければならぬ。

▲鹽と感冒　頭へ感冒を引いて鼻の詰つた時は鹽が今度は藥になる、それは鹽の強い鹽湯を盥へ拵へてその中へ暫らく顔を浸し、なほ鼻からその鹽水を吸ふのである、殊に鼻孔の腫れた時など鹽水を鼻から吸入すれば心持がよくなつてすぐ癒る、なほまた純良の粉末にした鹽をそのまゝ鼻から吸ひ込むのも頭の感冒を癒す簡便法である。

▲鹽はコスメチックなり　温たかき鹽水にて顔を洗ふ習慣をつくる時は鹽はまた美顔水の効能を呈する、否コスメチックよりもヨリ多くである、何となれば鹽は物を清める力と興奮させる力と殺菌の力とそれから皮膚の表面にある氣孔の中の油氣の不潔物を排する力があるからである、で鹽で顔を洗ひつければ皮膚の艶を增し吹出ものや雀斑の類は次第に影を潜め、今まで油じんだ不潔の肌は柔らかになり、氣孔は力づいて十分の働らきをなす事が出來るやうになる、無暗に白粉を塗つたり、グリスリン入の美顔水などをすりつけた結果は氣孔を塞いで皮膚を害し、ます〳〵血色をも惡くするに至るのであるから、皮膚の生理を知るとこんな有害物は滅多に用ゐられぬ譯になる、だから記者は思ひ切つて。

▲白粉の代りに鹽をお用ひなさいと勸告するといふと餘り極端に聞えて排斥されるかも知らぬが鉛のある白粉を用ゆるよりは鹽を用ゐた方が實際の効能が多いのである、よくおしやれの娘などの襟を見ると白粉のために地色が黒くなつてるのを見るが鉛のある白粉の害はこれでも分る、それはその筈で全体皮膚には一概に氣孔といつても汗の出る孔と油の孔とがあつて一方は排泄物を外へ追退るため、また一方は皮膚に油をもたせ柔軟ならしめるためそれ〳〵役目のあるものであるのにその穴を白粉や何かで塞いで仕舞つてお負に鉛といふ有害物を吸入させるのであるから、どうしても害がなくしてはならぬ譯である、然るに鹽は全く反對に此等の孔の働らきを助け、すべての皮膚の狀態を最

も天然の有樣に保つものである。

▲鹽と醫治的効能　温たかき日に手足よりひどく汗が出て何かだるく氣色の惡い時がある、それは氣孔が疲勞を來したので、これも鹽水で洗ふと氣孔を力づけ局部の不愉快を癒す事が出來る、また脊髓の弱い小兒はそのまゝ打やつて置くと大事になるがこれは毎日鹽湯に入れゝば普通必らず醫治の効を奏する、若し鹽を入れた布團を病人に用ゆれば大變に健全である、齒の神經痛を患ふる時に熱した鹽を袋に入れて局所にあてれば痛みを和らげる、また蝕齒の窪みに純良の食鹽を入れゝば往々齒痛を治する事がある、踵を挫いて弱めた時に鹽湯で足を洗へば暫らくして筋を力づける。

▲咽喉と鹽　敎師、傳道師、演説者などは屢咽喉の弱い事を訴ふるが鹽はその弱い咽喉を回復するの効がある、聲帶を過度に使つたゝめ咽喉を痛めたものは何よりも咽喉を使はぬが第一であるけれども而もきつい鹽水で常に嗽をすれば咽喉を強め聲帶を使用に堪えるやうになる、鹽水で常に嗽をして居ればまづ咽喉病やヂフテリアの如きものにもかゝる事はあるまい。

▲鹽は水を冷却す　鹽は如何なる種類の水をも空氣の温度よりは六度程冷却せしむるの作用を有する、で常に空氣の變化に堪へずよく風を引く人などは鹽水で顏、胸、首筋などを常に洗ふ習慣をつけると、よく空氣に抵抗するの力を養ふ事が出來る、また夏など物を冷やす時にその水の中へ鹽を加へる時は一段と冷えしむる事が出來るので、例へばラムネを冷やすとかいふ時には水に鹽を加へるがよい、この事は時節柄よく心得て置くがよからう。

▲鹽は湯を一層温にす　鹽は冷たい水を一層冷たくもするがまた熱い湯を一層熱くもする作用がある、それゆゑに野菜ものを早く煮やうと思ふとその野菜を鹽水に浸して置けば鹽水はその纎維まで浸込んで早く煮熱に適するやうになるのみか鍋で煮られると植物に含んで居る曹達と食鹽中の鹽素と化合して血液に有効なる一種の鹽類を形作るものである。

▲窓玻璃に霜の凍りたる時　冬の寒い日には窓玻璃に

霜が閉ぢられてその霜を去るのに困難をする事がある、コンナ時に湯で洗へば必らず玻璃を破るが鹽水で洗ふと善く其目的を達する事が出來る即ち霜の結晶と鹽と結びつくと空氣より六倍も冷やかなものとなるので一方から云ふと空氣の溫度が高まつたと同一結果となり、結晶は自から解ける事になつて、加ふるに鹽分は瓦斯を吸收し結晶の分解を助けるのであるから、窓は暫らくすると奇麗に洗はれて仕舞ふ。

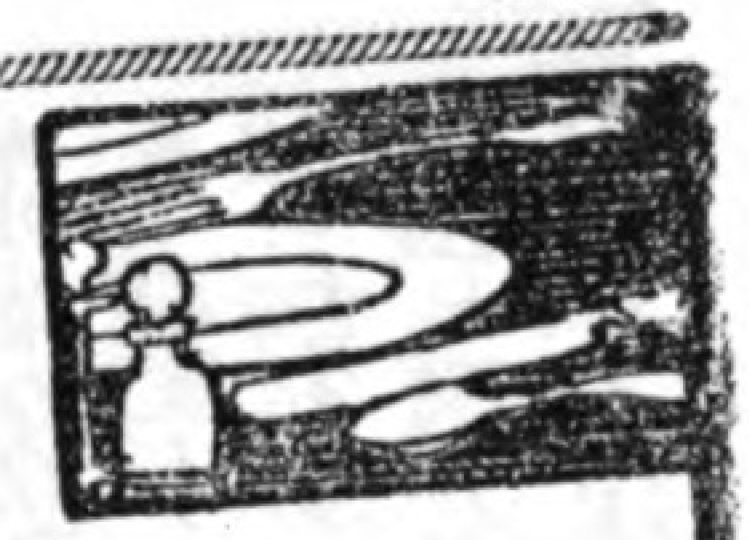
▲野菜の氷りたる時　野菜が氷つて固くなりそのまゝ煮たり湯をかけたりすると妙なものになつて困る事がある、そンな時には鹽水で洗ひ暫らくその中へ浸して置くと全く元の新鮮に復する、これも前と同じ理屈である。

▲野菜の貯藏と鹽　馬鈴薯、玉葱、蕪菁等を冬より春まで貯藏する場合には芽を發するため半分は食用に堪へなくなるばかりかいたくその香氣を損する、燒小手で以て一々……芽を燒いて置けば善いがそれは非常な手數である、でこンな場合に熱した鹽湯の中へ一寸馬鈴薯を浸して取上げ乾くのを待つて貯へれば芽を生ずる心配がない。

▲鹽と昆虫の豫防　鹽の中の塩素の臭氣は昆虫類が大嫌ひであるから、もし油虫や蟋蟀や蚤や蛾蝶や甲虫やそれ等の昆虫を防せがうと思へば彼等の潛んで居る處へ鹽を撒いて置けば出なくなる、椅子や木具類に虫のついたのも鹽水で洗へば、退治が出來る、だから器具類を鹽水で洗ふのは器具を健全にするのみか衞生にも適つて居るのである。

▲鹽の異なる効用　鹽水で洗へば染物の色を引しめる油や煤の汚點インキの汚點は鹽で洗ふ事が出來る、油の浸みた壜も鹽で洗ふがよい、鹽は牛乳へ混ぜれば甘味を增し卵子を打つ時に鹽を加へればよく泡が立つやうになる、胸の惡い藥劑などの香が口に殘る時は鹽で嗽をすれば取れる、其外細い効用を擧るとまだ〱限りもないほどあります。

（完）



總菜の栞

附り洋食献立の心得



▲櫻飯

大きさ中位の上等蛸を鹽にて善く揉み水にて洗ひざつと湯煮して その足を切取り足一本宛小口より薄く切り置き扨後鰹節出し汁にて飯を少し柔らか加減に炊き吹上れる時前に小口切になし置たる 蛸を入れ杓子にて能くかきまぜ十分時間立てばこれにて櫻飯出來上るなり附合ものは刻み葱又は胡椒、大根卸、淺草海苔、山葵等にて鰹節出し清汁を附べし

▲燒出し百合根

百合根をほどき能く水にて洗ひ水氣を取去り鍋に胡麻の油を少 し入れ能く沸したる後前のほどきたる百合根を投入し煎りつけて醤油にて 味を附け煮上るなり器に取入れたる上にて胡椒をふりかけて出す可し

▲黄蘗豆腐

水綿豆腐を美濃紙に包み灰の中に一夜埋め置けば水分殘らず 去る可し これ黄蘗豆腐の製法なり扨かく水氣を去りたる豆腐を酒醤油砂糖に昆布出しを加へて煮詰め小口切にし精進取肴に用ゆ 又鰹煮にしてよし或は魚肉をあしらひ清汁にするも妙ならん

▲豚肉のけんちん卷

豚の背肉を敲き人參、椎茸、豆腐を下煮して、それを丸め湯波を卷き、ソレなば味淋煮切りと醤油と豚の煮出しとを以て煮る、次に苺かん、苺かんは石花菜一本に水三合、砂糖五十匁の割で拵へる、初めに水を鍋に入れて、そこへ水に漬けて置いた石花菜をちぎツて入れ溶かし 又砂糖を入れて、それを煮、其の砂糖が溶けたらば篩で漉して、次にそれを型の中へ移して宜い加減に入れ、苺の實を並べて又其の上から前の石花菜を流して冷し堅め、アトで庖刀するなり、今一ツは空豆の鹽煮、新空豆の皮をむいてそれに鹽を當てゝ置いて湯煮るなり

▲黄金鯛

鯛の肉を生酢に製し甘漬新香のもの(澤庵)をごく細かに刻み水にて善く洗ひ酢を少し加へてこれも生酢とし鯛の生酢と混るなり 若狹雪鰈をこの料理にすれば最妙なり

▲深雪鯖

生鯖を三枚におろして骨を抜き鹽をふり置き暫時經て酢に浸 しさて山の芋を摺り玉子にて解き濃きとろゝ汁位になしその中へ前の鯖を作り落し善く交ぜ青海苔をもみかけて出す至極の佳味なり

▲むきみ、菜からしあへ

菜をゆで適宜に切り鉢に入れさて辛子をかき醤油味淋、砂糖を加へて前の菜へかけ蛤のむき身をゆでこれも辛子和にしたるをその上に盛りて 出す春先は一寸あつさりして善し

▲芋汁、吸もの

薄醤油鰹節出しにて清汁を作りその中に豆腐と蒲鉾を小さく賽の 目に切りて入れ煮上げたる後椀に盛り山の芋をおろし善く摺り置 たるをす

くひ入れ山葵を添へて出す可し

▲牛肉の田舍煮

これは牛肉をば刺身のやうに切りて鍋へ入れ、煮出し汁又は水を肉の上まで加へて沸騰させ浮上るカスを掬ひ捨て、それより火力を弱くして肉の少しく柔らかになりたる頃、豌豆の筋を取りたると油揚を竪に二つに切たるもの又は細く切りたる油揚とを入れ、これに甘味を用ゐ醤油味にて吸汁に仕立て、斯くて鍋を卸したる際生姜の擂りたる汁を絞り入れ、汁と共に深き器に盛りて食膳に供するなり、尙右油揚は鍋に入るゝ際目笊の如きものへ入れ湯を掛て用うべし

▲洋食献立の心得

日本料理のツヶ合せといへば椎茸、長芋、ウド、蒟蒻(コレは下等)誠に十八番で何日も同じだ、所が西洋の野菜に品々ある夫を日本料理にも使て貰ひたい其ツヶ合せも多い内でハリコ、ヴエールとかライマ、ビーンズ是は隱元豆のサヤ入又ハリコ、フラヂヨレーとかストリング、ビーンズ是はサヤを取つた隱元豆、ベークド、ビーンズ(豆の茹たの)ポルク、エンド、ビーンズ(豚と豆と一所に茹たもの) 此等はソツプへ交たりお吸物ダ子に爲たりする以上は二斤入で大體三十錢四十錢位 マセドアン此菜は野菜の交りですセツプ水漬同油漬といふ木子類 もありますシユガコーンといへば唐黍子トマトといへば例の赤茄子アスパラガス是には米國佛國製造の物があつて日本のウド同様まつた トリフといふのは松茸見た様なもので味がついてゐます日本料理の煮肴焼肴 のツヶ合せにチヨツト使ふ梅の砂糖漬とかアンヅ杯の代理になる物は インピリヤルプラムス即ち梅の實を乾した奴で砂糖を粘て喰ると中々旨 いシユレツテツヅ、コヽナツト是は椰子の實ですアマンド是は桃の實で二種類あつて皮アマンド實アマンドとある値段は皮が五十錢實の方が 八十錢位ハインアツプルは相應に世間へ名を賣てゐますがペカン、ナツトは知る人がない是はクルミですサテ又お香の物を申さうならピートン、ミツキスド、ピクルス此菜は胡瓜の類なんです此に又種類があつてピートン、チヨウ〱といへば胡瓜の辛子漬、ピートンピカリトーといへばキヤベツの花や胡瓜の辛子漬、 スパラツシ、オリーブス橄欖の實の酢漬チヤトニーといふは野菜の交つてるものでライスカレーなんかに 使ひますまだ〱種々ありますが此邊で置きませう

▲牛肉の茶碗盛

凡て汁物は先づ煮汁の造り方が(茶碗盛に限らず)肝要なれば 其造り方より述べんに煮汁を取るには成べく土佐、伊豆、薩摩等の 小き鰹節を撰び能く洗ひ汚物を除き皮は小刀にて削り取り布巾にて 水を拭ひ鉋にて薄く靜に削り、蓋のなき鍋に淸涼な水を入れ烈火に載せ沸騰したる時に削りたる鰹節を投じ一回煮立ば水の上に泡沫が浮く之を 金杓子等にて取り捨て鍋を下し大凡三分間位して水嚢にて器物へ漉べし、所謂一番煮汁なり二番三番とも同じ取り方なり茶碗盛用は一番を用ゆると 知るべし偖牛肉の正身に鹽を加へ庖丁にて能く叩き此肉を 碁石形に丸め煮汁少量にて火を透し茶碗に盛り靑味は葱を二つ割として眞の靑き處を取り捨てザツと茹て水に取りフワリと絞り煮汁と鹽にて下煮し 一寸位に切りて前の牛肉と共に盛り口には柚子を庖丁にてソギ水洗して 茶碗の中に入れる茶碗盛の淸汁は一番煮汁を鍋に入れ鹽と醤油にて 食味を附ける醤油は一碗に對して一滴か二滴位の加減なり多く入れると 汁に色が付く注意すべし

家事顧問

(問)瀬戸引鍋や、瀬戸引鐵瓶は、衛生上害があるといふ人があります眞實でせうか。(とめる)

(答)左様、多くは毒です。瀬戸引といふのは、瀬戸物の外面に用ひる、釉を錆止の爲引くので、琺瑯鍋、三德鍋などといふのも皆同じ様なものです。この釉は、硅酸鉛に錫を混じたものが普通です、ことに鉛が多ければ多いほど、割合に低い温度で溶けますから、細工の仕易いのと、安上りに出來るとの爲、大概日本製のものは、多量の鉛が用ひてあります、若し其の鉛の分量が百分の四以上の時は、鹽氣のあるもの酸味のあるものは勿論、其の外、肉類野菜類を煮炊しても、沸騰點以上に達すると、酸やアルカリに犯され、鉛が溶解して、自然に食物の中へはいり、これを食べた人の身體中にはいるのです。鉛の中毒は、直ぐにひどい症状を表しませぬが、若しこれに罹れば多くは治らないから、よほど注意せねばなりませぬ。舶來の琺瑯鍋は、下に鉛を引き上には硅酸カリ、又は硼酸鉛のやうな無毒な釉が用ひてありますから、値は不廉ですが焦げさへせれば危險はありませぬ。鐵瓶は和製でも、たゞの水を沸騰させるのみですから、危險の度は少いです。

(問)鐵砲風呂でコークスを燒くにはどんなのがよいでしよう又價は凡そ何程ですか(好湯女)

(答)燃料としてコークスを用ひるには、鐵製の鐵砲がよろしい、銅ですと早く腐ろくなります。鐵砲の下の口は横について居るのが、火の燃ねがよろしい、杉の赤身又は椹の白たで通常の寸法で、出來合五圓内外です、若し上り湯つきの誂にしますと、八圓から以上となります。

(問)澤庵漬の漬かたをお敎へ下さい(元江子)

(答)まづ大根をぬき、土を洗ひ落とし、日光に乾して適宜に水分を去られればなりませぬ、暑中を越すべき大からの分は、大根の首尾をもち押し曲げれば、殆ど首尾相合ふほどしなびたのが適度です中等のは、半圓形に曲るのが度ですし即座に口おけする甘漬は、弓形を以て度とします。さて乾し上りました大根を漬け込むには、四斗樽一杯百本を普通とし、これに對して辛漬は、鹽六升糠四升、中等は鹽五升糠五升、甘漬は鹽四升糠六升、或は鹽三升糠七升です何れも鹽糠とも上物を撰み、よく廣い器中で十分に混合しおきさて樽の底にこれを適宜に撒き、その上に大根を間の少しもあかぬやうならべ、上に糠と鹽との混合したものを殆どならべたる大根の見ねぬほど振りかけ、又上に大根を並べ、糠鹽を振る事前の通りにして全部つけこみ、上に押蓋を置き、重い石を置く。甘漬は三十日、中等は六十日、から漬は九十日で漬き上るのが普通です。

(問)水道の支管として居る、鉛管は鉛毒の恐のないものですか、伺ひたうございます(深川初女)

(答)御尤です水が鉛管中に、一時間や二時間溜つて居ても夫れほど危險な事もありますまひが、六七時間以上も鉛管中に溜つてゐたものは危險ですから、長く水道栓を開かなかつた後に、使用する時はその支管の長さに準じて小桶に一杯なり手桶に中分なり水を捨てるがよろしいです。

日用心得草

▲味噌の酸なりたるを直す法

味噌の酸なりたるときは味噌桶の味噌に三ヶ所許り孔を開け其の孔へ熱き酒を孔に滿るほど入れよく蓋をなし十餘日置きて右の酒を他に移し取り味噌を能く搗き交ぜ置くべし

▲梅酒の法

善　頁なる清酒一升に氷砂糖百匁程梅干二十個小なるは三十個許り能く鹽を洗ひ落し一所に壷に入れ壷口をよく塞ぎ五十日許り土中に埋め置くべし其味ひ頗る宜しく痰を治するに効あり

▲丸山煮梅の法

此法は大なるよき梅の熟せざるを鹽に漬け梅のよく熟したる時漬れざるを取除け潰れかゝりたるを擂り潰し梅酢を沸騰ほどに沸して冷し右の擂り潰したる梅をどろ／＼に溶き除け置きたる梅を其内にまぶし壷へ漬込み置くべし次第に熟れて味宜しくして黴の生ずることなし但し手を觸るゝことは大に嫌ふべし

酢の黴を防ぐには酢の中に煎鹽を入るれば決して黴を生ずることなし

▲白米の蟲除けの法

夏月は兎角に米の中に蟲の生ずることあり之を防ぐには梅の葉を米中に置けば蟲の生ずることなし豆類には鐵の物を入れ置くべし

▲糠みその中に蟲の生ずるを防ぐには南天の葉を入れ置けば生ずることなし

▲饂飩又は素麺を湯でるとき白豆を少許り入るれば久しくのびることなし

▲糠味噌の中へ永く貯ふる法

大根茄子又は其他の物を糠漬するに例へば四斗樽一杯に作らんとする糠の中二升許りを煎りたるを交ぜて漬けるときは五年程損することなし

▲餅を貯ふる法

餅は貯ふるに動もすれば黴を物ずる物にて之を防ぐには貯ふる桶に酒を塗り中に餅を入れよく蓋をなして納め置くべし何時までも黴ることなし

▲飯の炊き損なひを直す法

飯を炊く事は非常に六ヶ敷ものにて兎角炊き損の多きものにて或はこわく或は柔か過ぎるものなり然れども其柔きは衛生上害なくして却て適當なりと雖もこわきは仕方のなきものなり世の人こわきを好む人あれど此れ衛生の腦に乏しきものにて大ひに害ありそこで此の炊き損なひ即ちこわき時には酒の少量を打ちて蓋をなし火の氣を少し通すべし然るときは硬き飯も程好き飯となるなり

▲魚類を酢漬にする法

魚類を酢漬になすには先づ酢及び酒を各一杯づゝ鹽半杯を加へて煮かへし胡椒の丸を十四或は十五入れ魚類或は貝類の生なるを相當に作り以上の酢に漬け置けば夏日と雖も凡そ二十日間程は其風味に變りなく及び酢も濁らず常に遣ひ餘りたる魚肉は右の如く貯ふれば用多し

▲干鮑を早く煮る法

干鮑は兎角柔かに煮ること困難なれど今米の洗ひ汁へ大根を少許り加へて煮る時は忽ち柔になるものなり

▲千里酢の法

此千里酢とは旅行又は邊鄙の土地にて急に酢の入るときに當りて用を足さん爲めに備ふる法にて先づ蒸したる團子を酸味強き酢の中に浸し置き酢の染みたる時に取り出し日光に晒し乾かして貯へ入用の時は水にて溶かし用ゐるなり

▲青瓜を貯ふる法

青瓜を變色せざる樣に貯ふるには十二月に雪二升に鹽三合入れ煎じて壷に入れ置き夏に至りて瓜を二つに割りなかごをよく取り漬け置くべし翌夏までよく持つものなり

又青瓜を細に切り好天氣に乾し其後に酒をもみ付け壷に入れ空氣に觸れざるやうに口を張り置

くべし而して冬に至り取り出だし水に浸し置きて用ゆれば青く一寸變りて酒の對手によろし

▲廢物利用の秘訣

此法は重に毛布類に限るものにて即ち（めりんす）或は（ふらんねる）等の如き小片を綴目なしにて種々の物を作る法にて隨分面白きものなりさて其法は以上の如き毛布類の同種を接ぎ合せんと思はゞ先づ兩布の端を正しく切り二分許り毛糸をぬき取り兩布を其儘にて猶二分許り下を糸尻を止めずして縫ひよく糸をこきて毛布を水に浸し之を又よく搾りて水氣を少なくし毛布を抜きたる毛ばの所を一所にかため布の中にまろめ込み手の掌にてよくまろめる事殆んど毛布の稍乾きに近き頃布をひろげ先に縫ひたる糸を引き抜くも兩片接ぎ合ひて離ることなし但し其工合は初め一寸六ケ數ゆへ氣を永くせば其内には忽ち慣るゝものなり

但し此法は成るべく古きものを利用するのを主意とするを以て新しき布は濫りに切るべからず

雛卵の新古を鑑定する方法

雛卵の極新しいのを光りに透して見ると全體が透き通つて只一方丸い方の端に少しの隙間が見ゑ、黄味は形が眞丸で明瞭に區別され、別段暗い點も線もなく、急に廻して見れば黄味が白味の間を徐かに運動するのが見ゑます。

それが少し古いのになると、同じ様にして見れば、黄味の部分は新しいのよりは色が濃く、形が多少不規則で、手早く廻せば、此黄味が白味の間を比較的早く動いて行きます。かういふの中には、割れば潰ゑるのがあります。

もつと古いのになると、黄味の色はいよ〳〵濃く、形はいよ〳〵崩れて不規則に見ゑ、廻して見る時の運動はいよ〳〵迅速で、ひどいのは黄味の部に暗黑い點と線が見えます。これはもう雛に孵化りかけた證據で、此暗い線は血の管です。

以上の區別は馴れゝば決して間違ふ氣遣ひはなく、此卵は今幾日經てば黄味が崩れるか、言ひ當てることが出來ます。

澤山卵を扱ふ方は、これが爲に特別に箱を用意し、箱の中を眞暗にして置いて、向ふ側へ開けた小さな穴から光を入れ、これへ卵をかざして透して見るが一番宜しい。光は電燈なら上なしです。少し位の卵なら手で握つて周圍を暗くし、日又は燈光へあてゝ見れば大抵までは分ります。

これは在來の鑑別法を精細に申したのですが、先頃獨逸で發明になつた新法は、雛卵を水に深め、その起き上り方を見て、生んでからの日數を當てる法で、産んだばかりの新しいものなら、これを底の平らな器の水へ深めれば、眞横に寢て居て、頭を擡げはせぬが、産んでから三五日も經つた物なら、卵の太い方の端、即ちガスの入つて居る方の端が頭を擡げて、卵の長徑線は器の底と二十度許の角をなし、八九日になつたのは、此角が四十五度許り、即ち眞斜になり、二週間からのものは六十五度、三週間古のものは七十五度、一ヶ月からになれば九十度、即ち眞直に立つて、夫より古いのは浮き上ります。」眞直に立つのや浮き上るのは、黄身の潰ゑて居るのか、腐つて居るのか、何れ落第物で、立ち方の少い程新しい證據です。尤此日數と立つ度合は、夏と冬とで違ひませう。が、大體に於いて理に合つて居ることですから、十分信用が出來、馴れゝば、産んでから何日目の物かまで當てられると言ひます。



コーツ夫人の家庭談

小式部

外國から日本へ參ッて居られる宣教師の中で割合に年齢も古く、言語にも通じ、日本の事情に明るい方はまづ本郷龍岡町に住はる丶コーツ氏夫妻でありませう。コーツ氏は北亞米利加の英領キヤナダの人で篤志な宗教家ですが今より十五年前日本へ參り以來熱心に布敎に從事して居られます。又コーツ夫人は有名な家政家で實際的で家事の整理には極て熟練との事です、曾て十年前甲府の有志者から招かれて其地へ山梨女學校といふ可なり大きな學校まで設けて永らく同地で女子敎育をされた事が有ます。その後東京へ歸ッて麻布の東洋英和女學校へも二三年出て居られたといふ事です、いづれ



にしても十幾年この日本の地に生活して今では十五六歳を頭として四人の小兒をも儲けられて、日本に於ての育兒の方法などいろ〱珍らしい實際的のお話があるだらうとおもひまして先日同夫人を訪ねる事に致しました。

寓居は本郷龍岡町の無縁坂を右へ折れた横丁にある赤煉瓦の一と構、洋風建築としては頗る閑雅な趣きがあります。

知人の紹介を得て訪ねますと折よく在宅で夫人は快よく承諾をして呉れました。

應接室は廣さ十二疊ばかり

で小形の安樂椅子三四脚と中央に圓形の卓子とが備へてあッてこの上に聖書や寫眞帖があり室の一隅には洋琴が据へてあつて四方の壁間には外國の風景や、由緒ある人の肖像や、友人の寫眞など位置よく懸けてありました。應接間の隣りは食堂でその中央に長方形の大卓子があッてこれには萌黄色のうるはしい織物が掛てあッて周圍に五六脚の椅子が並べてありました、扨て挨拶すみて一と通り訪問の趣意を述べますと夫人は微笑みながら。別段お役に立つほどの事もありませんがと言ひつゝ家庭のお話をされましたのは流石は西洋人、自分で社會の利益になる事と信じたらば決して言葉を悋むなどゝいふ事はありません。

▲三度の食事

まづ何と申しても家庭の事は食物が肝要です、尤も日本の方にいきなりと食物の事を申しあげては如何と存じますが、併し私共の日頃考へてゐる事丈一寸お話を申上ませう、日本へ參ッた當座は、まだ日本も今日のやうでなく、殊に風俗習慣に馴れないものでしたからいろ〳〵と不便な事もありましたが、唯今では肉でも野菜でも大概はありますから困りません、尤も日本のお方の考へでは西洋人といふ者は朝から晩まで肉ばかり喰べて居る様におもひますが、實際は決して左様ではありません寧ろ野菜や、五穀の類が勝ちます、けれどもこれは日本の洋食店などで肉を餘計に料理しますから自然西洋料理といふものは肉の勝ッたものと思はれるのであります、私がまア横濱へ買物などに行きますとお晝の御飯を喫べなければなりませんから料理屋へ入ります、左様すると持ッて來る物も〳〵肉ばかりで野菜といつてはほんの咀ひのやうです、あれでは肉との調和が取れませんから私は洋食店へ這入ると先づ野菜の有るか無いかを聞いて別に誂らへるのです。

▲肉よりも野菜

併しまア料理はそれでよいとしても毎日の食物ですね、これは肉の方を成るたけ減らした方がよいかと思ひます、私共の毎日の献立を申ますとまづ朝はスープに野菜、牛乳に燒き麵包といふ様なもので肉は喫べません、

其代り、時々ポリッヂを拵らへます、これは日本で申せばまづお粥のやうなものでせう、原料は小麥、大麥、時としては玉蜀黍またはお米なども用ゐます、麥は挽ひて引割にしたのと平たく潰したのとありまして少し水を入れて煮るだけです、是れへ牛乳を入れたり砂糖を入れたりして喫べます。

それから晝食と晩



餐ですが、それは主人の職業によッて加減致します、主人コーツは朝の内勉強して午後は運動を致すのですから晝食に肉を一番澤山使つて夕飯は又減らします、それで夜分演説だの、説教だの致すにはあまり肉を喫べない方が宜いのです、殊に胃の消化がわるいときつと腦が鈍るものですから、或るお友達の方も、夜分演

説の時は肉を止めて野菜ばかり取る事になさいました。

▲滋養は黒麵包にあり

それから食麵包です、近頃西洋でも麵包は兎角色の白いのを好んで、何處でも皆な雪のやうなパン粉を製しますが、是れは全く間違ふた話です、米でも白米よりは黒米の方に滋養分があると申す事で、パン粉の色を白くするのは是はまるで麥の滋養分を捨て了ふのです。假りに麥を分拆して十五六の原素があるとして、粉を白くする爲めに十位の原素を去ッて了ッて殘る處は五つか六つですもの滋養分がない譯です、ですから私は態々黒いのを取寄せてパンに製します。成程價は少々高いけれども色が白ろくて奇麗に見へますから大抵の人は白い方を用ゐますが、白いのは肝要の養分のあるグルテンといふ薄い皮まで除けて仕舞ふのですよ、で私は日本のお方にこの黒パンを御食りになる事と料理に肉を減らして野菜を重にお使になる樣におすすめ申します。

▲間食の害

日本のお方は平素中々間食をなさる樣です、殊に一番いけないのは小兒の間食です、隨分泣いて騷ぎますが泣くより身体が大切ですから私は決して時ならぬ折に小兒に食物は與へません、若し實際お腹の空いた時には普通の食パンにバタを附けて渡します、そうするとこんな物は厭だといつて喫べません。それ御覽なさい、これが喫べたくない位なら眞實に饑いのではないですからと夫も取上げて仕舞ます、あの泣く度に可愛相だとおもッて冗な物を喫べさせるのは實に宜くない習慣です、ですから妾は嚴しく言ッて小兒には三度の食事の外決して何も喫べさせない樣にして居ます、すると矢張り習慣です、此頃はまだまる三歳にならない末の子も三度の外には、滅多に物をねだる樣な事はありません。

▲運動の必要

食物につゞいて肝要なは運動です、主人は大抵朝は六時に起きて十分間庭を散歩してそれから食事を致し、

七時頃から勉強を始めて正午までつゞけます、夫から晝飯を了ッて、午後二時頃から五時まで又散歩致します、この時は多く外て用達を兼ねてゞす、どんな事があッても毎日乾度運動は缺かした事はありません、それで私はどうかと申しますと朝から室内を掃除して一日動いて居ますから別に規則立つた運動は致しません、それから小兒等ですが、いろ〳〵運動の器械や玩具の馬などもありますけれども、まだどうも完全したものでありません、これは近日の内よく研究して造ッてやらうと思ッて居ます。勿論小兒といふものは一日何かしらいたづらをして動いて居るものでそれが自然によい運動に叶ふて居るのですが、なるべくは戸外に出して外で活潑にやらせた方がよろしい様です。都會に住ふてゐてはそう參りませんけれど海邊でも、川縁でもどこでも野廣く放し飼にして置いた方が小兒の爲にはよろしい様です。で小兒に對しては私はあまり細かく干渉は致しません、何故かと申すに小兒は自然のものです、何でも自然の心をあまり矯めては不可ません、よしやタトヘ危険な事だと思ふても大概な事は放任て置きます、危険だといつて何から何まで細かく注



直した分には箱に入れて仕舞ッて置くより外はないのです。

▲感情教育

どうも小供には少さい時から感情發育が大切だらうとおもひます。兎角殘忍な心を養はないやうに育てるのが肝要で、あの戸外で蟬の羽をむしつたり、蜻蛉をいぢめたり、又犬猫を非道い目に遭はせたりするのは、よくない習慣です、つまり小兒に天然を愛する心が缺けて居るからそういふ事をするのだらうと思ひます、で私共の小兒はまだ小いから小說などを讀みませんがイソップの物語や、いろ／＼の比喩譚、又動物の事を書いた書物を多く讀ませます、米國の幼稚園では多く天然を謡ッた唱歌の本があります、たとへば月の美しい事や、海の廣々とした事や、草木禽鳥の欣々とした有樣など謡ふてあります、小兒に天然の景色を見せながらこの唱歌を謡ふて聞かせると大變に爲になります、それから小兒の道德心を養ふには、まづ第一嘘を吐かぬといふ事が一番肝腎ですから母親はよく注意しなければなりません、日本では妙な習慣がありますタトヘバ小供が泣いた時に今好いものを買ッて上ると欺し賺すのを度々聞きますが、この欺し賺すといふ事は大變に惡るい事です、實際小供の泣く度に何か買ッて遣れるものではないから結局それが嘘になッて小兒に惡ひ性根を植つけます、私は小兒が泣いても決して何か與へるといふ事は云ひません、泣くだけ泣かせて置きます、併し日本ではまだ子守の敎育がありませんから折角母親が目前で注意をした事でも蔭へ廻ッてそれを破して仕舞ひます、これには一番困る、いくら母親が注意しても子守が惡い事を敎へる。ですから子を育てるにはまづ子守の方からして監督してやらなければなりません。

（了）

應急看護法

桂國子

〇出血、凍傷等の際に、急場の手當を施すことは、平

楽、何人も心得置かざるべからざることとなるが故に、火傷、溺死、中毒等に對する心得をも併せて、こゝに簡短に説明すべし。

第一　出血

○出血の原因には、種々あり、及物類による截傷、打撲等による組織の斷裂、尖れる物質による刺傷動物の咬傷等は、いづれも出血を發し、其他、毒物の腐蝕、病菌の侵蝕等によりても、出血を來たすものなり、又、血管の榮養不良のために、血管壁の薄弱になれる場合には、おのづから破裂して出血を來たすこともあるべし。

○すべて出血の場合には、これを止むる策を講じて、血量の不足せざるやうになさゞるべからず。大なる血管よりして一時多量に出血する者の如きは、放置すれば直に生命を失ふに至るべく、小さき血管よりする出血にても、永く持續するときは、遂には全身に貧血を起し、危險の症狀を喚起するに至るべし。

○出血を區別して、動脈出血、靜脈出血、毛細管出血の三種とす。動脈出血は、其色鮮紅にして心臟の搏動に伴ひて血液迸出し、靜脈出血は、暗紅色にして平等に流出し、毛細管出血は出血部の組織全體より徐々に流出す。

今若し、是等の出血の體の表面に現はれたる場合には其應急の所置として、動脈出血ならば、其動脈の部分よりも心臟に近き部分をきびしく壓抵し、靜脈の出血ならばその、出血の部分よりも心臟にへだたりたる部分をきびしく壓抵し、毛細管出血ならば、其部分を十分に壓抵すべし。かくの如くにして、一時其出血を止め、而して後に醫師の診察を乞はしむべし。

○身體の内部、たとへば腹腔、脳腔等に出血して、外部に現れざるときは、之を内出血といふ。斯の如き場合には、患者をして靜に仰臥せしめ、腹腔内の出血ならば腹部に、脳腔内の出血ならば頭部に氷罨法を施すべし。

○鼻腔よりする出血はこれを、衄血といふ。この場合には、頭をやゝ高くして平臥せしめ、鼻根を壓抵し、

前額及び頸部に氷嚢を貼すべし。或は、氷、冷水、もしくは明礬水を以て鼻腔を洗滌し、綿球をつくりて鼻腔を洗滌するも亦多くは止血の目的を達し得べし。

○肺、もしくは氣管よりする出血を咯血といふ。常に咳嗽と共に出づるものにして、中に泡沫をまじふ。わづかに咯痰中に血線をなして現はるゝに過ぎざるものあれども、其量多きは、一回の咯血にて甚しき貧血に陥り、或は直に死することあり。この場合にも、亦安靜に臥さしめ、胸部に氷嚢を貼し、淺く呼吸せしめ、談話を禁じ、成るべく咳嗽、噴嚏等を避けしめ、しかして醫師をまねくべし。

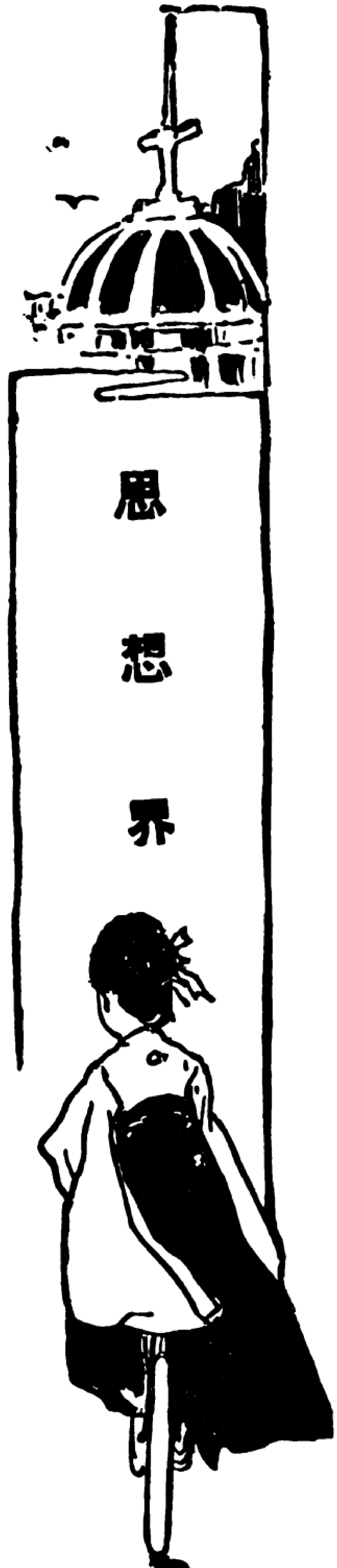
○食道、もしくは胃よりする出血の、嘔吐作用によりて口より出づるを吐血といふ。その色の暗褐色もしくは黒褐色なると、咳嗽と伴はずして吐嘔を伴ふとによりて、咯血と區別することを得べし。同じく安靜に臥さしめて、胃部に氷嚢を貼し、口に氷片を含ましめ、且、飲食物を當分禁じおくべし。

○腸出血は、腸窒扶斯、赤痢、幷に腸潰瘍等の場合に現はるゝものにして、その血液は、糞汁と共に肛門より排泄せらる、腸出血の場合には、氷、冷水の灌腸を行ひ、腸部に氷嚢を貼しなどして、醫師の來るを待つべし。

深部の腸より出でたる血液は、能く糞便と混じ、下部より出でたるは然らざるを以て、ほゞ出血の場所の肛門に近きや否やを知り得べし。往々痔疾のために出づる肛門の出血を腸出血と誤認することあり。

○子宮出血は、妊娠の場合ならば、前置胎盤等の疑を以て十分に膣栓塞を施すべし。その栓塞には、百倍りゾール水、もしくはカルボール水にひたしたるガーゼを用ふ、妊娠ならざる子宮の出血は、月經にはあらざるかといふことに注意し、その月經ならざることをたしかめたるときは、同じく栓塞を施しおきてお醫師の診察を待つべきなり。

（以下次號）



露西亞の婦人界

天風居士

いづくも婦人の境界は大方同じ道筋を辿つて發達するものでありませうが、露西亞の婦人も今は法律上でこそ倘ほ男子の下風に立て社交上では十分に男子と對等の地歩を占めて、或る場合では女尊男卑にあらずやと思はるゝほど鄭重に取扱はれてをります、尤もこれは多く形式上のみで其裏面に立入つて觀察すると必ずしもさうでなく、矢張男子の壓制束縛を受けてゐる、去迚昔に比べれば大層な相違であります、今から二百年も昔、上流の婦人は農家の婦女よりも哀れな生涯で、當時は韃靼の遺風が未だ全く除かれなかつたから、婦人は内を勤める者、内に燻ぶつてゐる者に極まつてゐて、閨閣外の事には更に拘合はなかつた、加之家内の事でも主婦としての權力は少しも認められず、猫の兒一疋始末するにも一々夫の指圖を受けねばならず、若し殿様の御意に悖るやうな事が有れば忽ち笞の苛責に逢ふ、今から觀れば嘘のやうでありますが一家の主人となると皆騎士の持つやうな鞭を持つてゐて、己の意に背く者は奴婢といはず小兒といはず妻でも手込めにしたものであります、されば人の妻となるは詰り一種の召使になるので、親の家に在つては親兄弟に頭は擧らず嫁しては夫に絶對に服從して老いては又子に從

はなければならぬ、其生涯の拙さは我邦の昔の婦人に似たり寄つたりでありましたから、かうした抑壓の下に如何して人格の發達を望まれませう、天分厚く生れ來つた者も是では畏縮して了つて才も伸びず氣力も振はず、大槪の者はいゝころの虚氣になるが當然でありませう、ですから、其後彼得帝の大改革の時には皆度を失つて了つたのです、西歐の風俗に習つて男女が時時集會して交際を温むべしといふ上諭が出る、サア何の事だか分らぬ、人々皆眼を看あはせて呆れ果てたるばかり、それで一向集會する模樣も見えぬから、今度は嚴の上諭を奉行せざる族は相當のお咎め仰付けらるべしと嚴重に達せられた、是に於て人々澁々その集會といふ事をやつてはみましたが、さてト顔を合せたところで如何して善いやらとんと分らず、茫然として手持無沙汰の体でありました、是では成らぬと又しても發せられた上諭、凡そ集會の席に於ては主人たる者はかく〳〵して客を待遇せねばならぬ、又客に招かれた者はかやう〳〵に振舞ふべしといふ集會の細則のやうなものであつた、はてさて世話の燒けた奴等ではあると彼得帝も歎息したといふ事であつたが、これ蓋し無理ならぬ事で、教へざる民を以て戰ふは是れ之を棄つと謂ふ譯で多年男子の壓制の下に高い息氣もしなかツた當時の露國婦人の身にしては尤の事、俄に聞きも及ばぬ夜會などへ引張り出されたから田舎者の宮中拜見の格で唯うろ〳〵するばかり、こりやさう有りさうな事、之を彼此云ふのは云ふ方が無理でありませう。

婦人發達の原動力

で、露國の婦人は此の如く幼稚至極であつたのが二百年と云へば隨分長の年月の如く聞ゆるけれど、文明の歩みの遲々たることを思へば昨日も同然、其束の間にどうして今日の如く進歩したのでせう、假令ば英佛の婦人と伍しても大した敗を取らぬやうになつたのでせう、是には段々仔細が有りますが、概して申せば是も殘念ながら男子のお蔭で、男子の發達が婦人を衝動し、刺戟して今日の發達を致さしめたのであります。

それは如何かといふのに、彼得大帝の大改革の結果として露西亞の社會に一の勢力を生じた、それは露西亞語でインテリゲンチヤと申して飜譯して見ると、まづ「有識者流」とも申しませうか、二三取除の場合は有りとして、まづ貴族出の子弟で、それが大改革後西歐の文明に接して全く其感化を受けて了ひ、貴族の子弟でありながら平民主義を主張し、平民の味方となつて戈を倒まにして貴族を攻撃するに至つた、是が即ちその「有識者流」といふ名の下に一大勢力と成つたので有り



露西亞田舍の風俗

ます、かの虚無黨などいふものも詰り此派の過激なるものが集まつて組織したものだと謂つても宜しい、で彼得帝以後の露西亞の文明は此平民を代表する「有識者流」、即ち自由派と君權に飽までも依附して之を楯に平民を抑壓せんとする保守派、即ち貴族の頑固黨との軋轢の間に發展したもので、政治上では所謂保守派が優勢を占めて飽までも君主獨裁制を維持し來つたけれども、社會上に於ては反て「有識者流」が破竹の勢を以て一世を

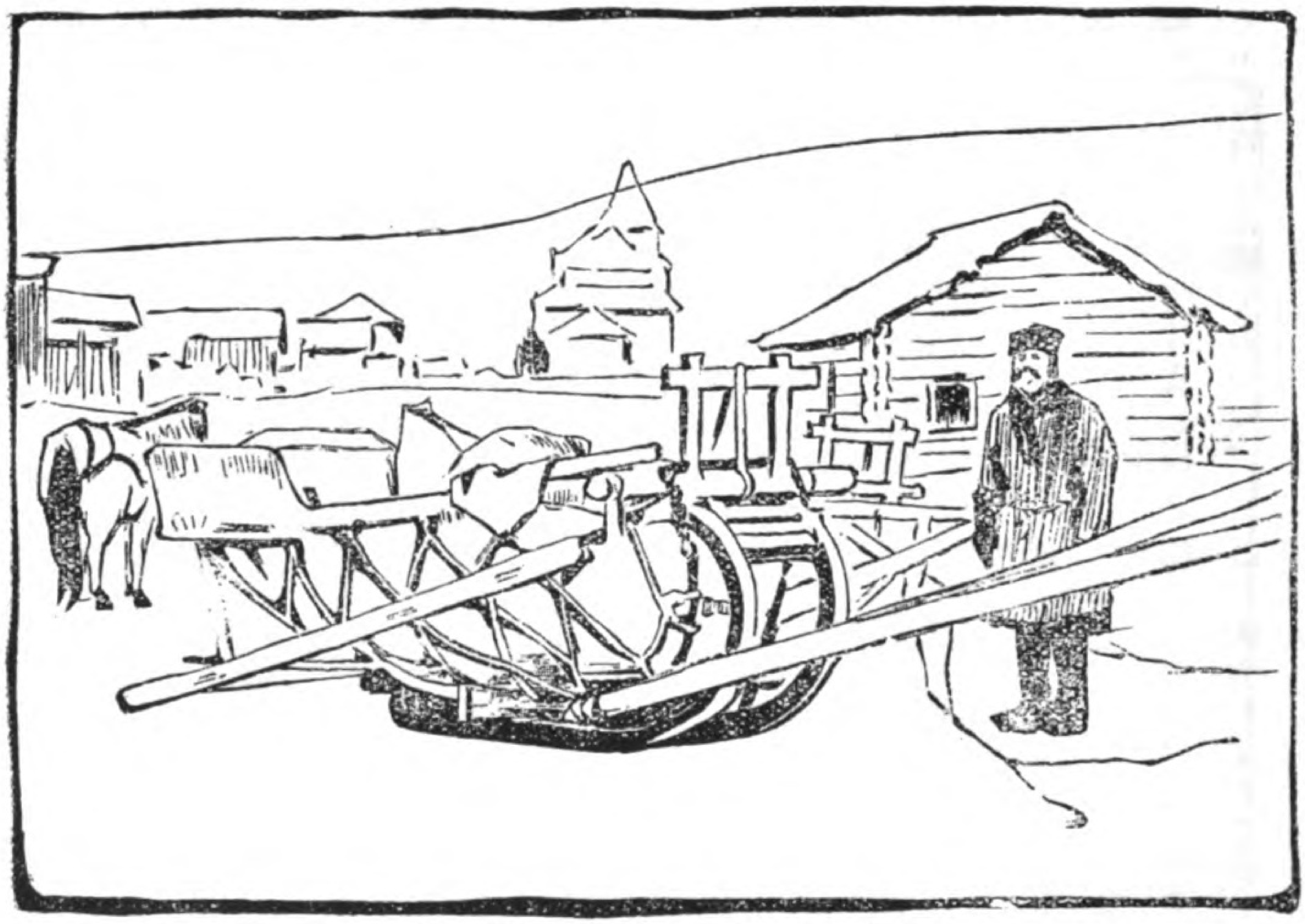
席巻して、凡そ露西亞で知名の學者、文學者、美術家は大抵皆此派から出てゐる、であるから其勢力は非常なもので假令貴族の子弟と雖も親の不承知をも顧みず、否親の勘氣を蒙むりながらも此派に身を投じて昨日までは錦衣玉食といふ身分であつた人が今は勞働者に伍して眞黒になつて働き、僅かの賃錢を得てパンと水とで露命を繋ぎながら、勞働者の間に盛に自由の大義を唱道し鼓吹し其結果刑辟に觸れ獄裏に呻吟する身となつても尙ほ少しも屈せず鐵窓の下に在つて詩歌に感慨を寄せ小說に所思を寓し以て天下の同志を鼓舞するなど、其意氣の壯烈なること殆ど當るべからざるものがある。

婦人精神上の自由

此の如くでありますから所謂「有識者流」は我國で謂へば先づ志士で有ります、志士の氣風は悉く備へてゐる、其所作は誠に花々しい、隨て天下の人望は此志士たる有識者流に萃まつて靑年輩の之に歸依渴仰するも無理はない、しかし別段團体を成して多數の人が一致の運動をする所謂政黨などいふものではなく、我國で謂へば維新の際の攘夷派とか正義派とかいふ謂はゞ散漫したる一代の思潮で、固つたものでは有りませんから、所謂有識者流に屬する者の内には官吏も有れば、軍人も有る中學敎員も有れば大學敎授も有る、尤も此等、官の俸給に衣食してゐる者は内心は兎に角表面は穩和で激烈なる議論を唱へない、激烈なる議論を唱へる者は新聞記者とか學生とか民間の志士に多いが、兎に角上下を通じて所謂有識者流は分配されてをる、といふも畢竟其人達の主張する自由は必ずしも政治上の自由でなく、もつと廣い意味の自由で、社交上に於ても學術上に於ても又文學美術に於ても自由を要求する、例せば從來の習慣に依れば結婚には親々の承諾を要する、しかしながら男女が互に相愛して二ッの生命を一つにせんと欲する精神上の要求に親々が干涉するは精神の自由を束縛するもので、天理に背くと云つて之に反對する、文學美術に於てオーソリチイを認むるは一面に

於て新進作家の自由手腕を拘束するもので、是も亦天理に背くといふ譯で反對する、といふ工合で廣い意味に於ける自由を要求するものでありますから、官吏で有らうが軍人であらうが或る範圍内に於て之を主張する分には一向差支がないのであります。

で、「有識者流」の主唱する議論は一代の思潮を代表して其感化を受くる者は多數であるけれど、其感化を受くる程度は千差万別である、深く其議論を是として死を以ても實行しやうと決心する者、即ち純然たる志



西比利亞の雪車

士になつて一生を此議論で終始する程の者は皆一廉の傑物であるから、是は割合に少ない、多數はどうかと云へば此樣な志士にかぶれて一個の小志士となる、否贋ひ志士となるに過ぎぬ、故に口では熱心に勞働の神聖を説きつゝ、臥てくらしてゐる者も有らうし、結婚の自由を主張して老親を脅しながら詰り老親のいひなり次第にお嫁を宛がはれて愚圖々々に一所になつて了ふ者も有らうし、官吏の境涯は奴隷の境涯なりとて之を惡むこと蛇蝎の如くなりし者が一朝聊かの生活

上の困難に遭遇してぺツたりとくづれていつしかその奴隷に均しき官吏に成つて了ふ者もあらう、而して段段年を取つて髮の毛が胡麻鹽に成り五人の子供に世路の艱難をつく〴〵と身に染みて覺える頃にはもう主義も主張もなくなつて仕舞ツて、富豪權勢家の前には頓首百拜泣血哀願するやうに成り、随て此度は有識者流の唱ふる所を空想と罵り、青いと嘲る、かく一人にして靑年の時は自由派に歸依し老大に及びて保守派に改宗する者は滔々として世間に多いから自由派も勢力は有るが保守派も敢て其人に乏しからぬ、兩々對峙して以て今日に至れるも全く此事情に原因するのである、此兩派の婦人に對する關係は果して如何と云ふに自由派の勢力は槪して妙齢の女兒を靡け保守派の勢力は老大の婦人を其麾下に集めた。

老婦と少女の思想の相違

それは又如何してと云へば槪して老人が保守主義に傾き青年が自由主義に謳歌するが常時の常態であつた、随て妙齢の女子が自由思想を懷き老大の婦人が保守習氣を帶びたのである、蓋し此處らが人情の自然で、いや何と仰しやつても女は己を悦ぶ者の爲に容づくるのが古今を通じた婦人の弱點です、男の爲に悦ばれるが婦人の命です、勿論男子とても婦人の爲に容づくらぬではないが、しかし從來の社會に於て兩者の境遇の差を云へば男子は兎も角も自己を恃んで世に立つ傾があるけれど、婦人は男子に縋る氣味が有る、之を便にする、之を便にして自己を托する傾がある、然らばかく便にする所の男子の志趣傾向がそれ〴〵對手の婦人の心性に影響するは當然の事です露西亞で然うあつたとて少しも異しむに足りません、で前申す通り露西亞の青年は槪して西歐文明の感化を受けて昔とは全く違つた思想感情を以て世に立つやうになつたから其對手なる妙齢の女子も勢ひ舊來の思想感情を保持して行かれなくなつた、どうしても青年に連れて自分も進歩せざるを得なかつた、否らずんば青年らしい青年は顧みて與れぬ、此方が便らうとしても先方で輕蔑して了つて對手

になつて呉れぬ、實際婦人は時勢に後れたのであつたから、當時露西亞の青年男女間の關係は甚だ憫むべきものであつた、此間の消息は其頃の小說に能く寫し出されてあります、有名なるグリボエードフの「智慧の煩ひ」降つてはグレーブ、ウスペンスキイの作などをお讀みになれば能く其情勢が分ります、此處らは露國の小說は我國の小說とは全く趣を異にして時勢と密着の關係を持つてをりますから人間社會と交涉のない閑文字では有りません。

婦人の思想男子に伴ふ



露西亞の田舍馬

これは少しく餘談に涉りましたがさて當時の妙齡女子の境界は此の如く殆ど男子に見棄てられさうな憖れむべき境界であつたから、志ある婦人から先づ發憤して進歩の緖に就いた、勿論其手引は活氣ある所謂志士肌の青年男子であつたから其辿つた道も自ら男子の進歩した蹤を追つて矢張自由の大義を唱道するのであつた、で、男子の場合に均しく一種のマニアと成つて婦人界に傳播したから猫も杓子も皆自由主義で隨分と滑稽な事も有つた、何しろ男子が手引であるのだから、婦人が男子を眞似て眼鏡を掛ける、卷烟草

をふかす、甚しいのになると髪の毛をも男子のやうに刈つて男裝してゐた者も有つた位です、しかしこれは滑稽な方面ですが又眞面目な方面を觀ると男恥かしい健氣な立派な婦人も澤山に出ました、元來が志士の義烈に感憤して起つた者であるから婦人の身ながら自ら志士肌で、しとやかでは無かつたかも知れぬが、意氣は頗る壯烈で、夫が政治上過激の議論を唱へたゝめ刑辟に觸れて西伯利へ流される、其蹤を慕つて繊弱き婦人の身を以て住み慣れし我家を跡に万里の旅にさまよひ出で、憂を累ねて遙々と西伯利の配處に住つて夫と艱苦を共にしたなどいふ美談も有る。ネクラーソフといふ詩人が「露西亞女」と題する詩で此等の婦人を歌つてをります是は露西亞では有名な詩であります、又今少し上手のになると身を虛無黨に投じ、男子と共に思ひ切つた事を企てる者も有りました、夫の歷山二世の暗殺の隱謀に與かつたウイオフ其人の如きが即ちそれであります、此等は褒た話でも無いかも知れませんが、兎に角婦人が一代の思潮に動かされてから極端にまで走るやうになつたから、最早手引であつた男子の手を離れて獨立獨行して行くやうになつた、然のみならず、或る場合では反て自分が原動力になつて男子を動かすまでに至りました最早立派なものであります。

女子敎育の勢力

これには勿論敎育の力が與つて多きに居る、婦人の發達を促したのは所謂志士肌の男子であつたけれど、其發達のこれまでに成就したのは敎育であるから、此に少しく婦女敎育の事情を申しませう、現今露國には種種の名稱の下に女子に中等敎育を授ける學校は三百四十校あるけれど、高等敎育を授くる學校は僅かに二校に過ぎぬ、最初は各大學で女學生の入學を許してをつたが、後全く女學生を入校させぬ事になつたから、進で高等の敎育を受けんが爲め續々佛蘭西や瑞西あたりへ出懸けた、然るに彼邊には露國で政治上の罪を得て逃げて來た所謂亡命者が多く徘徊するので、自然留學の女學生も其感化を受けて過激な議論をするやうに

なる、政府はこれが迷惑であるから僅か二校に過ぎぬけれど女子大學めくものを國内に興すを許したのであります。

此外彼得堡に女子醫學校が有つて一時は中々盛であつたさうで、現に露土戰爭の際には其處の女生徒が澤山に戰地へ出懸けて大に功勞が有つたため其當座は此學校の卒業生は稍ドクトルの待遇を得さうに見えたが、兎角婦人の獨立なぞは政府の好まぬ所であるから、其議も沙汰止になつて了つて今は何ぼ正式の教育を受けたものでも婦人醫には開業を許さぬ地方もあり又許す地方もあつて其地方々々の長官の心任せになつてゐる。



イルコーツクの天主教會堂

此外學校教師として働いてゐる者も多數にある、一時は電信技手は愚か辯護士にまで成つた者も有つたが、政府は飽までも例の主義で婦人の男らしい職業に就くを喜ばぬから、手の届くだけは皆法律で禁じて其職業を奪つて了つた、であるから現今婦人の職業を得て働いてゐる處は多くは政府の手の届かぬ私立會社とか私立學校とかいふ個人の事業に限るやうになつてゐる。

文壇でも婦人は目覺しい働をしてゐます、ロストープチナとかマダム、コワレーフスカヤとかマルコ、ウオフチヨークとかフセーウオロド、クレストーフスキイとか皆過去現在に

於て名を成した作家である、此外マダム、ゴルブノーワは國民生活の研究家として、マダム、ツエルピーコワは婦人記者として、マダム、エフサメンコは學者として孰れも名聲嘖々たるものである。

自由主義の感化

要するに露國の婦人は政府の干渉の爲め敎育も十分に受けられず、又外國に留學などして十分の敎育を受けたところで職業を制限せられてゐるので十分に働くことも出來ず極て不便の境遇に在るにも拘らず尙ほ志士の義烈に感憤して蹶起した餘勢で前述べたやうな處までは進步して來た、之を二百年前の情態に比べれば大進步と謂はねばならぬ

しかしながら此大進步の原動力となつた婦人はいづれも一代の思潮たる自由主義の感化を受けた人々で一國の花で有ります露西亞の婦人は皆かうした精神家で有るかと云へば決してさうでない他の多數のものは保守が主義でも何でも無いけれど保守の習氣に染みて保守的の行動をしてゐる婦人である、かういふ婦人はいづくも同事ながら矢張金錢を崇拜する、贅澤をしたがる、衣類頭の物に氣を揉む、芝居を觀たがる、亭主が斯した慾を滿足するだけの資力を供給せねば意久地なしと罵る、夫婦喧嘩をする、下女に八ツ當りをする、年を取れば兎角嫁の惡口をいひたがる、いづくも異らないが、しかしかういふのは社會の原動力にはならぬ、原動力になるのは前の自由思想を懷く婦人でかういふのは其原動力に働きかけられて之に逆らつて抵抗してなか／＼頑として動かぬ連中である、自由思想を懷く婦人が露西亞の良心なら、かういふのは其肉體である、肉體に基く物欲である、習氣である、露西亞の精神的生命を繼持するは自由思想を懷く婦人で、其物質的生命を維持するは此保守習氣を帶びた婦人である、かういふ婦人に限つて意識的に他に働きかける活氣活力は無いが、無意識的に他を腐敗せしむる俗氣墮力を持つてゐる、其勢力は露西亞の社會を支配はせぬが、其臭氣は露西亞の國內に充滿してゐるのであります、であるから露

國に於ける婦人の進歩といふことを換言すれば、自由思想が野蠻的臭氣を掃つた迹で良心が肉體を制し行く功程と謂つても宜しい、肉體の抵抗も頑强であるが、良心の働きもなか〳〵活潑であるから、旣に奏し得た成功の蹟から見れば露國婦人界の前途はまづ有望の方で有りませう。

（完）

婦人の自活問題

（自活せる婦人の實例）

英國ヒッギンソン述
塚本はま子抄譯

わが友安井哲子嬢かつて英國に留學せられ歸朝の際おのれに贈らるゝに「コンモンセンス、アヴァウトウーメン」Common sense about women の一書を以てせらる譯みもて行くに今の我國の婦人問題に適切なるもの少からず、この頃永き夜の興に乘じて譯せるもの一二を公けにして同好の婦人に分かつ。原文の玉を瓦に代へたるはわが英學の素養淺きと譯文に熟れざるの罪のみ

生活裕なる人は、必ず社會に欠くべからざる階級にして、國家の公務、學術の研究の如きは、實に此階級を待ちて初めて其進歩を見るべしとは、英國人の主張する所にして、ダルヴィン氏の如きも亦之を是認したりき、されど試に英國の學術を見よ獨國に比して果して耻づる事なかるべきか、而も獨國に於いて學術界を支配するもの、多くは生計裕なるはあらざるを見る、こゝに於て余は少くとも青年の男子が、其修養の時期に際しては、必ず自活するの要ある事を認めざるを得ず。果して然らば女子と雖も、全然この問題を看過するが如きは、決して望ましき事にあらざるべし。

されど某文士は全く之と意見を異にし、女子はその境遇の許す限り、成るべく自活の途に就かざる事必要なりと述べ、金錢上他人の補助を受くるは、男子に取りてこそ大なる耻辱なれ、女子に在りては聊か品格を損ふことなく、却てそを完うする所以なり、文明の社會

に於ては、女子は必ず男子に養はるべくして、金錢を得るはなほ野邊の清き百合の花を摘み採るが如し、決して自ら心を勞すまじきなりと此極端なる主張も、亦自ら見地明かにして亦痛快なるものあり。殊に今日の如く女子の勞働及び、其の勞銀に就き世論極めて區々たるの時に當りては宜しく各自に其主張を執り、此れが窮極の判斷を求めざるべからず。

夫れ妻たり母たるは確に婦人の常態なり、而も、此の理由に基きて、婦人がその壯年の間、勞働を避くることも亦確かなる狀態となすべし。抑々男子が最も精錬の域に進み、又最も多き勞銀を得るは、通常二十五才より四十才に至る間に在り。されど女子は前述の理由により、少くとも金錢を得るには、必しも此常則に從ふ能はず。此事實は聽て婦人を一楷級となし、事業に勞銀に、共に其程度を下したる主因なりとす。男子の楷級と雖も假りに人の妻たり母たるの任を負ふとせば、その多く爲すなきや明なり。此に兩性ありて、其一が專ら勞働界に力を盡さば、他は勢ひ家政、其他日常の勞働に服せざるべからず、即ち今日男女兩性間に存する競爭は實に此點に在るなり。

此を以て余も亦、某文士と共に、苟も婦人が妻たり母たるの境遇に在りては、業に從ひ自活の途を求むること、到底男子の競爭者ならざるを信ぜんとす、故に其境遇に在りて猶且自活の途を求めんとするは、婦人に取りて非常の不幸不利ならざるべからず。ミツトフオート孃曰く「婦人に家族の食を得るの責任なし」と然なり是れ何人も信ずる所にして、その責任は獨り男子に在り。されど家族の食を得るは、自活に在らずして自活以上なり、而もミツトフオート孃は更に曰く「婦人が自己の食を求むるの止むを得ざるは、實に婦人の不幸なり」とされどこれ論旨を誤てるもの彼此相異れるの事實を混同せる感なき能はず。蓋し七人の小兒を養ふと、單に自活の途を求むるとは、其間自ら徑庭の存するが故なり。

實質的の勞働を看過する勿れ、婦人が母たる責任を負ふの間は、當に金錢上の義務を免るべし、されどそは

他に重要なる任務を帶ぶるが故のみ、野邊の百合たる性質あるが爲にあらずして、一家の母たる權能を有するが故なり。劣等の勞働に代ふるに高等なる又神聖なる勞働を以てすとも、吾人は猶之を勞働と云ふ。婦人は婦人たるが故に補助せらるゝに非ず、即ち家政を行ふべき婦人の權能に由るなり、然れば若し婦人にして此義務を負はずとせば、更に補助を仰ぐの理由なきこと、男子の階級と撰ぶ事なし。婦人が妻たり母たるは一種の職業なり、此職業あるが故に



佛蘭西流の裝飾せる露西亞の貴婦人

一時他の職業を妨ぐるのみ。されば婦人にして此要求を充たさゞる限りは、世は婦人に向て更に多く要求するの權利あるべし愛蘭土婦人が、その食を求めんが爲に、我兒を室内に閉ち込めて外出するが如きは、必しも其地位に不忠實なりと云ふべからざる事、猶父が我女兒を百合花の如く養はんが爲に終日勞働に服するの地位と撰ぶなきのみ。

英國の詩人は、未婚の處女數人爐を圍んで其父を慰めつゝ、編物などに餘念なき有樣を寫して、家庭の樂園

なりと謳ひしかど、余は未だ之を理想の家庭と覺えざるなり。私に考ふるに適度の仕事は人間に欠くべからざるものにて、人の健康にとりても亦、規律を與ふるにも力あるべし。而して若し其家庭に仕事少く、思ふが儘に力を盡すべき所なしとすれば、彼の雛鳥が母の巣を去りて廣き世界に飛ぶが如く、若き婦人も亦外に出で丶働く事宜しからん。殊に其の仕事の金錢を得る爲めに働かる丶は望ましき事にして、昔より無下に勞働を卑めたる弊風を打破するは、今日自活の尊嚴を保つ所以なるべく又婦人は、自ら進んで其尊き地位を占むるの權利あるなり。

されど余は他面に於て。彼のセリアブルレーが其著「異の婦人」に云へるが如く「婦人は結婚の後もなほ自活の途を求めざるべからず」との説には必ずしも同意する事能はざるなり、婦人が家庭に於ける務、即ち家政及び兒童の養育の如きは、當に戸外に働ける夫と、全く別種の家財を實質的に齎ふるものと云ふべし、新婚の婦人が家族の收入を助けんとして、樣々の計畫を施すと雖も、多くの場合には徒勞に終るべく又實際これを婦人に求むるはその負擔重さに過ぎたり、而も是れ婦人が怠惰に傾くの謂にあらずして、事情婦人の負擔は既に業に其半ばに餘れるが故のみ。此點に於ては余は讀者諸君と其見を異にするものあらん、乞ふ更に進んで詳述せしめよ。

或る家に夫妻二人の經師屋あり、妻は四十五歳夫は五十歳ばかりにして終日其職に務む子女はすでに長じて他家に嫁したるもありまた家に殘れる一人の娘も家政に耐ふる年頃にして、母の手を離れて、自由に働くを得なり、さて此家庭の有樣は如何にといふに夫婦は朝出で丶終日其勞に服し、夜に入りて家に歸り、共に晩餐の歡を盡くす。あ丶幸なる夫妻なるかな、余は未だこれに勝る夫妻を見ず彼等は共に働きて妻紙を揃ふれば夫之を斷ち、彼糊をつくれば我これを貼る、見るだに歡ひを覺ゆるなり、彼等の生活は眞に生産的の宴會といふべし、余若し英國諸侯の如く數多の宮殿をもたば常に喜んで此夫妻を迎へ、長しへに其の壁を貼らし

むべきなり。實に此の婦人に此の仕事の尙くして見た者の眼にも愉快なるは他に爲すべきの務あるを顧みざるが如き事なきに在り、若し彼れが若き母として、幼き子女を有し、經師職の爲にその養育を忽にするの止むを得ざるか、或は子女を日々育兒院に托するか、或は兩者を兼ねて自ら過度の勞働を爲すが如き事あらば實に痛ましきかぎりなるべし、されば母の務は誠に聖く、母が子に對するの義務は極めて尙く、また最も心を傾くべきものにして、眞に社會の狀態を察すれば、母なるものはその幼兒を養育する間は他の義務を總て免るべし、なし得べくんば家政の常務をも免れて可なるべし。若し婦人が健康にして餘力あり、己が快樂の爲め某の職業に從事すべきは宜しといへども義務としては之を免るべきものならん、見よかの子女を有せる若き婦人の自活するや多くはその身を害するに至れるものにして其他の好果を奏するもの極めて稀なるが如し。この災禍を來たすことは、常に社會に認めらるゝ所にして、余は之を北部合衆國の製造所に於てその女工に見、又之れを南部合衆國の綿花園に於て黒奴の婦人に見たりき。實に是れ一種の悲劇とも云ふべく、母子の身体に及ぼす所、又その腦髓を惱ますこと、決して輕少にはあらざるなり。母たるものは、內に留りて兒女の養育に心を傾け、父たるものは、出でゝ勞に服し、以て母を助け、又之を保護すること、眞に家庭の分業と云ふべし。

然らば婦人は之が爲に將に得られんとする參政權に故障を來たすべきかと云ふに、決して然らず、恰も父が職務の傍、なほ公務にも意を注げるが如く、母も亦其務の餘暇を撰びて、此の研究に從ふを得べし。試に搖籃に眠る幼兒を看よ、無邪氣なる此兒の將に立つべき社會は、如何にあるべきかの疑問は日々に起り、必ず純潔なる社會を作らんとの念に耐へざるべし。余が知人にして專ら心を兒女の養育に傾けたる母の一人、即ちマルガレット、フルラー、オッソリ氏の妹の如きは、自ら一則を案出して、如何に其兒女が己れを慕うて止まざるの時も、日々一時間は必ず讀書新聞の閱覽に費

すと、なせりと。彼女又語りて曰く、凡そ母たるものの務は、單にその兒女の身体發育を計るに止まらず、更にそれ以上を計らざるべからず、されば母の心は兒女の爲に常に快活に保たるゝを要すと、されど更に加へて母がその兒女の爲に、金錢を求むるに就きては、猶多くを考へざるべからず、試に行きて新英州の墓地を訪ねよ、若き婦人の石碑壘々たるは果して何をか語れる、あゝこれ實に若き妻女の過勞を戒むる標榜にあらずして何ぞや

（完）

干涉教育

千河岸櫻所

我邦教育の現況に就て喜ぶべきものあり、又大に憂ふべきものあり、其喜ぶべきは教育の普及なり、教育の益々都鄙に盛んなるに隨ひて、學校の設備に不足を告げ、小學校に入る能はずして學齡の兒童の空く家に在るあり、中學校に入る能はずして高等小學の卒業證書を懷にして彷徨するあり、中學校より高等學校若くは他の專門學校に入らんとするも、高等學校より大學に入らんとするも、同じく其入學せしむべき定員よりも數倍の志願者ありて、到底競爭試驗に因て餘程良好の成績ある者ならでは、入學するを得ざるが如きありさまなり、教育の都鄙に普及する實くべし、是實に喜ぶべしとなす、

次に大に憂ふべしといふは何ぞや、曩に菊池文相が中學校長會議に臨みて演說せられし如く、中學校は中等以上の資產ある者の子弟の入學する所にして、進みて高等學校又は他の專門學校に入るもあるべく、中學全科を卒業して直ちに某々業務を習ふもあるべけれども、中學校は將來日本の中堅となるべき子弟を養成する最も大切なる場所なり、然るに學生の風儀の最も宜しからざるを一般の中學校なりとす、是豈に大に憂ふべきものに非ずや、

概して中學校に在る生徒の品行を簡短に評すれば、小學を卒へたるのみにて實務に從事する子弟に比して、劣る所あるも優る所あるを見ず、斯ては折角教育をうけしめたる効能果して奚くに在るや、勿論其學ぶ所の學科には次第に進む所あるべしと雖も、其常識に於ては毫も進まざるのみならず、

球戯短艇等諸種の遊戯を好むの風に趨向する事

淫猥なる談話を聞知る事

無賴なる惡少年の風に感染し易き事

是等は最も重なるものにして、種々少年に好ましからざる弊習を養成するの[illegible]少しとせず、高等學校より大學に進むものは、年齡も漸く弱冠を過ぎ、多少自ら其志操も立つべければ、其品行も自ら修まるべしと雖も、中學校は高等小學二年級の修業を經たる巳上の少年より、入學し得る處にして、滿十三年より十八九年までの間に於て學ぶものなれば、最も善良なる習慣を此時期に於て養成せざるべからず、然るに教員は概ね俸給を取て學科を鬻ぎ、生徒は月謝を拂ひて學科を買ふものゝ如く思ひ、學校を以て學科の取引所の如く看做し、師弟の情誼

頗る複雜なるは識者の曾て憂ふる所なり、然れども一教場即ち一組にて四十人も五十人もあゝ多數の生徒を取扱ふ事なれば、教員が如何に深切なりとも、到底行屆くべき害なし、校長とても三面八臂あるにも非ず、一人にして數百人の生徒が如何に教科を授受するや、教員生徒の間に如何なる利害得失ありや、細かに觀察する能はず、私立中學校に於ては、生徒に對するに嚴重の規則を以てするに偏重すれば、學校の收入に影響するの懼れあり、故に校則を厲行すべくして未だ充分に手を下す能はざるの内情もあるべし、左なきだに教員を師として敬憚する心もなく、且つ世味の甘酸をも未だ嘗めたることなき少年が、跳梁跋扈することなれば、一種の無羈無檢束の習慣を成すも亦宜ならずや、

然れば則ち中學校は、少年に一種の惡風を習はしむる所なりといふ如き實況無きに非ずと雖も、余輩を以て觀れば、啻に學校の校長教員に罪を以て教ゆるほどの人物に乏しき故のみにはあらず、今の中學生徒の父兄は、社會中等以上の資産あるにも拘はらず、其子弟を養ふに就て、家庭の教訓を嚴にするもの甚だ稀なり、其中には子弟を親戚知友の家に寄寓せしめ、又は下宿屋に下宿せしむるもあり、父兄に代りて監督する人もなく、丁年未滿の少年常識を闕く者をして、學校以外に於て其自ら恣きまゝにするに一任す、是等は遂に厭ふべき惡書生に親みて惡少年に化す、惡しきことは見習ひ易く善きことは覺えがたきものなれば、他の父兄あるものも、其父兄に嚴そかなる教訓もあらざるときは、彼下宿屋に放し飼にせられ、或は監督者もなき家に寄宿する少年の惡風に同化せらるゝを免かれず、即ち其重なるものは、

敎科書を賣却する事

月謝を學校に納むる前に費消する事

學校に往くと稱して家を出で學校には出席せずして惡友と共に遊び戯れて家に歸る事

校費等と僞り父兄より金錢を出さしめ徒に自身の雜費に供する事

出席は遲刻し退校後は直ちに家に歸らず數時間遊び歩く事

左れば此等の惡習を防ぐ爲には、出校退校の時間を嚴密にし、叨りに金錢を所持せしめず、學科に必用にて購入せし書籍の有無を點檢し、月謝の請取證を速かに父母に示さしめ、學校に就て缺席遲刻の數を調査し、或は其報告を得て、謂はれなく缺席したる事あれば之を取調ぶる事、是等は常に父兄の監督を怠るべからざる事とす、

家庭の教育の嚴ならざるは、大に今の中學生の惡風を助長したりと覺ゆ、若も社會なべて家庭の教育を重んじ、其子弟の言語行跡の不是なるものあれば、之を譴責して敢て假さゞるが如き父兄をして多からしめば、彼の下宿屋に放し飼にする少年の如きも、自ら其言行を愼まざれば、同學の友に齒ひせられざるに至らん、陸機が淫風大に行はれて貞女も冶容の陋へを褱り、淳化殷(さか)んに流れて盜跖も曾史の情を挾むといひしが如し、然るに今日の社會を觀察するに、家庭の教育は絕て無くして、父母は現存しつゝ、其子を取締ることをせずして恬然たり、曰く我兒は目下某中學校に入て勉學中なりと、曰く我小弟は目下某地の下宿屋に在り某中學校に通學せしめつゝあり、學校にすら昇降せしむれば、智識も品行も何一つ不足なき人物となる樣に、薫陶し鎔冶せらるゝものとして安心するが如し、吁何ぞ中學校を信任することの甚だ過度なるや、是恰も會社の株主が重役に一切放任して、業務の如何をも知らず、帳簿を檢査せんことも思はず、突然破産せんとするに際して俄に喫驚するが如く、其子の放縱にして世人に嘲笑せられ、甚しきは刑罰に觸るゝ如き場合に到りて、初めて學校にのみ一任せしの非を悟るも旣に晚し、自家の子弟の眞否は自家の利害に最も大なる關繫を有す、豈一日も之が監督を等閑に

付すべきものならむや、

往昔封建の時代に於ては、武家の風は一般の町人百姓に同じからずして禮義廉耻を知り所謂武士道を守らしめたるもの、師道の嚴なるよりは、寧ろ家庭教育の力が最も有力の者なりしなり、富豪なる農商の子弟は寒暑を懼れて身體軟弱なりしかども、武家の子弟は千石の家老の子弟も三五十石の平侍の子弟も、同じく演武塲に於て劍槍を學ぶときは稽古襦袢一枚を着くるのみ、其文字に於けるも亦寒暑風雨を厭はずして學舘に上らしむ、幼少の比より人に後れを取らば我子に非るぞ、人に負けて生を偷まんよりは、寧ろ人に打勝て死すべしと覺悟せよ、汝ぢは苟も武士の子なるぞといふを以てす、故に苟も辱めらるゝことあれば、其己れに敵對する者よりも、父兄の知るあらば痛く罰責せられんことを懼れ、心を決して此と奮闘せんとするの風あり、薩州藩の如きは此點に於ける敎訓最も有力のものなりしと覺ゆ、その他子の父母に對し庶子の嫡子に對する禮節も、嚴格なるは言ふを待たず、殊に當時儒學が士太夫の道德節義の標準なりしかば、小學禮記等に記する所は子弟が父兄に對する模型たりしなり、若し一家治らずして其妻子に不都合あり、父母たりとも武家に似合しからざる所爲あれば、其家長は家事不取締といふ一語を以て、役儀を召放され世祿をも削減せらるゝに至るべし、左れば家庭敎訓は一家の安危に關す、徒らに愛に溺れて之を等閑にすること能はざりし所以なり、

今や其子弟の無賴なるありとも、往時の武家の如く的面に其父兄に災害を及ぼすことなく、且つ社會の下層より中層に進みたる人の如きは、其家累代田夫野人なれば、斯る嚴格なる家庭ありしことを知らず、日々業務の繁多なるに逐はれ、子弟を訓戒するは兎角煩はし、學校にすら通はしむれば、よも惡しくは成長すまじと思ふなり、家庭の敎訓を等閑に付するもの多かるべし、是全く父兄たる人の誤りなり、父母の心は人みなこれあり、誰か其子弟を愛し之をして人に劣る者たらしめず、よきが上にもよかれがしと思ふは人情みな同じ、然るに其子弟の品行習慣を擧て、たのみすくなき敎員に委托し、種々の惡風を傳染せしむる不良の友多き中に立交らせ、四十人五十人を一組とし此を一人にてうけ持つ人こそ、父母たり兄たる者の敎訓にまさる善良の德性を涵養せしむるに足るものなりと信ずるは、甚だ理に合はざるものに非ずや、

故に余は我社會に敎育の益す盛んなるに隨ひ、他は暫く置き中學生徒の父兄たる人々は、大に力を家庭の敎訓に用ひ、嚴重に其子弟の行狀を取締り、敎員の薫陶は學科をこそ委ぬべけれ、其己れが愛する所の子弟をして、品行を正しくせしめ、習慣を善良ならしむるの責任は、全く父兄に在ることを知るに至らば、希はくは中學生徒の風自ら改良し、惡少年無賴書生を學生生徒の群より擯斥するを得べきを信ず、然ば則ち目今中學生徒の風儀良からずして、識者の憂とする所の一たる所以のものは、啻に中學校長と敎員とのみ責むべきに非ず、其父兄たる人々が平素家庭の訓誨を怠るの責を辭すべからず、

結婚費の義捐

四谷區南伊賀町四谷銀行の頭取波多野尹政氏の六女隅子孃は此程農學士某と良緣結ばれ近日結婚式を擧ぐるまでの運びとなりたるが折柄今回の國難に際したるに父尹政氏はたとへ一生の大事なる婚儀とはいへ徒らに冗費をかくるは國民として憚かるべき事儀式さへ正しければ酒は茶にても事足るべしとて其旨先方にも申し通じ一切の費用を節減して金三百圓を四谷區より出征せし軍人遺族の扶助料として出金せり。



軍人の家庭

一記者

瓜生海軍少將の家庭

皇天我が忠勇なる海陸の將士に仁義の斧鉞を授られ、以て世界最兇の無道國を、今や將に海に陸に遺憾なく伐たしめつゝありますが、その海面に殺到する我が船艦、その陸上に席卷する我が將士の、東亞の大舞臺に於て、驚天動地の大活劇を演ずることは今更説くまでもありません。が、その裏面に潜んで、即ち後方勤務たる留守の任に當つてゐる是等將士の父母、妻女が、その一人の父たり、子たり將た夫たる者の爲めに喜憂するの狀は、却て一死の外胸中何物をも懷はざる出征者それ自身に比して、更に切なるものが有るでありませう。依て記者は其出征者の留守宅を訪問して、その名譽ある家庭の光景を聊か愛國の姉妹方にお知らせを致そうと存じます。而かも古語に所謂忠臣は孝子の門に出づとある如く勇猛にして職に殉ずる傑士は必らず品性高潔なる家庭の後援ある事は疑なき事實であります。

日露開戰の劈頭第一、露艦二隻を仁川港外に破壞沈沒せしめたる壯擧は、如何に壯快なる感懷を我が日本國民に與へましたか、如何に多大なる凋傷を無道なるスレーブ人種に與へましたか。吾人はこの第一の捷報を耳にして、思はず天を仰いで萬歳を叫んだのでありまする。こゝにまづ仁川海戰の勇將瓜生司令官の留守宅を見舞ふことに致しました。

呉竹の根岸は笹の雪、それより北に向ひ、音無川を遡ること僅かに數間、右手の奥まつた所に、瓜生と記せる軒洋燈が、嚴めしき門に揭げられてゐる、これ

即ち第二艦隊司令官海軍少將瓜生外吉君その人の留守宅であります。

門を潜つて左手を見れば、其處に小かなる姫垣を超えて、器械体操の鐵管、鞦韆、相撲場等が設備されてゐて、はや其の家庭に於ける令息等の體育養成に重きを置かれてあることが知れます、突き當つて、左の方の玄關に取次として、上下粗き絣を着た足袋も穿かない一個の青年が出て來られました、これは即ち令息の剛君で、記者とは同鄕の好、豫てのお近付でありましたが、久しく掛け違つて會ひませんかつたので、雙方とも殆んど忘れて居ましたが、記者は何處となくその昔の俤のある剛君だらうと思つて、一言二言話しますと漸く双方の素性が知れ合つて、哄と大笑して玄關に上り、次の客室に通りました。

▲客室の有様　客間は東北の開いた、十二疊の廣々した、日當の宜い立派な座敷で、九尺の床の間には三光鳥に寒牡丹の極彩色の幅が掛つてゐて、その左には紅白咲分の古梅の鉢が飾られ、右には碁盤があつて碁石が載せてある、違棚には愛らしい嬰兒の寫眞、その横に奇麗な山水を畫ける織物の額が飾られ、天井からも電氣燈がぶら下つてゐて、何處となく少將夫人の西洋趣味が此處に發揮されてゐる。

▲少將の略歷　君は加賀大聖寺の藩士で、當年四十三歲、海軍兵學校の出身で、卒業してから後、海軍省より選拔せられて、米國に航し、同國の兵學校に入つて、機關砲術等を研究し、歸朝後、身を海軍に投じて專ら軍國の事に盡されました。

▲今度の出征　君の少將に任ぜられたのは、過ぐる三十三年の五月で、同時に海軍々令部第一局長を拜せられたが、昨年四月清韓兩國の警備を命ぜられ、軍艦高千穗に乘組みて回航さるゝことゝなりました。其後歸京する暇もなく、開戰の當日に至る迄回航に從事され、現に第四戰隊司令官として、軍艦浪速に乘組みてゐて、今度の偉功を奏されたのであります。

▲畏き詔勅の摸寫　今度仁川に於いて著しき功勞に對し、畏き邊より嘉賞の詔勅を賜はりましたが、海軍省

では其詔勅を少將の許に傳達すると同時に、その摸寫したのを、此の日暮里元金杉の宅へ送つて參ッたさうで、夫人繁子を始め家族一同恭しく、右の詔勅の摸寫を三寶に載せ、床の間に飾り、前代未聞の優渥なる恩命に感泣されたと云ふことであります。

▲兼ての宿望　君は日清戰役の時は、佛國公使館附で同地に駐在されてゐたので、我が海軍の爲めに何等の功績を建てることが出來なかつた。又北清事件の時には、軍令部第一局長で、是にも實戰に臨むの機會を得ないで、髀鳴り肉動くの嘆に堪えなかつたのでありましたが、少將は甞て或る人に向ひ、「日本の敵は支那位でない、まだ〳〵もつと大きいものであるから其のつもりで居なくてはならぬ」と、云つて居られたそうであるが、今度といふ今度こそは、兼ての敵、其所謂大なる者に出會つて其れを擊破して、君が多年の宿望を遂げられたのである。如何に壯絕快絕なるか、この勇將の胸中また思ふべきである。



▲少將の平生　容貌は軍人としては優和といふ方で、何處か君子然とした好丈夫であるが資性豪放豁逹で、常に勇武を好み、松島、嚴島、扶桑、八島等の艦長として、其部下を督勵することが頗る嚴格で、平時も猶ほ戰時の心得を忘れないやうに勉めて居られる。而して、運動競爭といふ事に非

常に重きを置いて、艦内で部下を奬勵することは非常なもので、海軍が聯合して短艇競漕のある時などにも、君は必死になつて之を督勵するから、何時も、其部下が優勝旗を占むることになつてゐるさうである。

又、在宅の時も運動、散歩が好きで、家族殘らず共に、郊外散策などに出掛けることを、此上ない娯樂として居るとのことである。

又夫人は有名な音樂家であるから、ピヤノも据え付けてあると見えて、自分が話してゐる時、靈妙なる美音が奥の方より溢れて聞えた、尋いで令孃の笑聲も聞えました。

▲その家族　夫人繁子は彼の有名なる益田孝君の令妹で、幼少の時、即ち日本最初の留學生でありました彼の大山大將夫人、津田梅子女史等と共に、米國に留學された方で、久しく女子高等師範學校に教鞭を執つて音樂と英語とを受持つて居られました、同時に有名な日本語の不得手な方といふ事である。自分が訪問した時は、丁度お留守であつたが、それは高木夫人、齋藤夫人など、何かの發起でもすることがあつて、斡旋の勞を取るべく早朝出掛られたとのことであつた。

家族は夫人繁子との間に長女千代子（二十年）長男武雄（二十）次男剛（十九）次女忍（十八）三男義雄（十四）三女榮枝（十二）四男勇（二年）都合七人あつて、皆勇將の令息らしい名稱が付いてゐる。長女千代子は、神戸市なる住友銀行の山下芳太郎といへる人に嫁し、長男武雄氏は現に江田島なる海軍兵學校の第二年生であるが、學術優等品行方正といふので、襟の所に櫻花の徽章を付けてゐる有望なる青年である。次男剛氏は學習院の中學六年生、來る七月が卒業だそうで、之も海軍の志願、誠に頼もしき次第です。次女忍子は女子高等師範學校の附屬高等女學校へ通ひ、三男義男氏は根岸小學校へ、四女榮枝子は令姉忍子と共に附屬小學校の方へ、共に手を携へて、雪の朝も雨の夕べも、人力車にも乘らずに、上野の山を超えてお茶の水まで通つてゐるとのことであります。

▲將軍の嗜好　君は酒を縦にして高歌する如き放膽の擧動とてはなく、在邸の折柄は令孃等にピヤノを彈せ

しめ或は琴を奏でしめて樂み時には家族打連れて散策を試み又圍碁を嗜みて黑白の爭ひに軍略を凝らしつゝ此上なく樂み居らるとか。

自分が訪問したのは、二月十四日であつたが、その翌朝、前日賴み置きし寫眞を借りに行つたが、夫人は『貴公ならば、何れでも宜いのをお持ちなさい』と云ひ置いて、又も外出されたさうだが、自分は軍艦二隻轟沈したを聞いた程に嬉しかつたのであつた。

東郷海軍中將の家庭

わたくしは瓜生家を訪ねてから、車を走らせて麴町の方へ進みました。上六番町の保玄坂を登り切つて右手に黑板塀の城廓があつて、棕櫚、檜葉柳等の並樹が護衛してゐるのが見ます、これは旅順の戰勝者聯合艦隊の司令長官海軍中將東郷平八郎君の邸宅であります。黑塗の大門をくゞつて門内に入りますと、石疊の道を少許ゆきまして玄關口で案内を乞ひますと應と云つて、出て來られたのは、眉目秀麗なる一個の青年で、わたくしは刺を通じて來意を述べるとやがて導かれて、應接室の椅子の間に通されました、記者は此青年にも又五六年前面晤した記憶があるので、貴殿は御子息の彪君でせうと云ひますと。先方では水雷の襲擊でも食つた程に驚かれたやうであつたが、成程とよく顏を見合せるとわかつた容子でうなづかれる、夫れから種々と舊を談じました。

仰げば正面に將軍が盛裝された大なる寫眞が掲げられてあつて、其風丰の何となく犯す可からざる趣があるので、自分はその偉大なる風釆に打たれました、而して又今度の戰功に就て思はず涙が出る位嬉しくなりました。

又床の間を見ると何かあつさりとした山水の幅が掛つてゐて、其横には、無鷄頭の二連銃が二挺並んでゐました、これは將軍が銃獵を好まれる徵とも思はれました。

やがて、召使の運んで來た、銘茶一椀に咽喉を潤してゐると、風釆の打ち上つた、有髯の一紳士が出て來られた、これは令夫人の令弟で留守宅の家事を掌理せらるゝ有村邦太郎氏である、二人又もテーブルを圍んで、談は今度の戰爭よりして始まりました。

▲中將の略歷　十年の昔、彼の日清戰役の際、君は軍艦浪速の長として、劈頭第一に高陞號を轟沈されてから、君の名は普く世人の腦裏に深く印せられました、それより黄海に、旅順に、威海衛に、更に南方打狗を鎭め龍騰虎擾の辣腕を振はれ、尋で北清事件には、常備艦隊司令長官として、清韓の沿岸を警備され、今また君の資性と實腕とは、時局の要求する所となりて、今度舞鶴鎭守府司令長官より轉じて、聯合艦隊司令長官たるの大任を擔はれ、自ら軍艦三笠に乘じて、我が十有六隻の艦隊を指揮し、旅順の大海戰に於て、敵艦の半ばを擊破された奇効は、實に空前の偉勳として世界にその名を轟かされた。

▲將軍の平生　將軍は薩洲出身で本年五十九歲であるさうな、併し何樣鬼平八と呼ばれた程の豪傑で、今時の壯年などは中々傍へも寄りつけぬ元氣ださうです、日清戰爭前に君は浪華艦長であつたが、當時伊東艦隊司令長官が非戰論を唱へたとかで、まづ始めに伊東を擊殺し血祭にあげねばならぬと言はれた程の熱心な主戰論者でありました、その節浪華艦が高陞號を轟沈した時には廟議未だ何れとも決しなかつた時でこの擊沈沙汰が霹靂の如く廟堂に傳はると丁度御前會議の折柄で大臣等は何れも顏見合せ眞蒼になつて仕舞ひ、獨り悠々と落つき拂つて首肯て居られたのは故西鄕侯ばかりであつたといふこの時「東鄕平八は馬鹿ものでござる」と西鄕侯の詞が出た、そこで當時の内閣の腰も愈々据つたといふ、斯いふ履歷付の人が今度の聯合艦隊司令長官となつたのだから頼母い譯で、九日の旅順攻擊でも此人なればこそ思ひ切てあンな事が出來たに相違ない併しながら中將は決して無鐵砲な人ではなく冒險的の中にも自ら深謀遠慮の存する所があッたのです、又去年冬新たに聯合艦隊の編成される時折惡く中將は風邪に犯され腺病まで併發し發熱の有樣でしたが鬼平八の名に負かぬ人であるから「海へ出ればすぐ癒る」と、家人の氣遣にも拘らず病を冒し笑つて佐世保に打立つた、所が中將がいよ〳〵艦隊を率ゐて旅順に向はんとする前日の事、前記の有村氏が旗艦三笠に中將

を尋ねると中將はもうけろりと癒つて居て、「お宅へ言傳は在ませんか」との有村の問に對し『無い、手紙などは決して寄越すなと云つてくれ健康か、健康はこの通りぢや」と無造作に挨拶されたといふ事である。

將軍が家に居られる時は、朝は夙く起きて、直に机に向つて何か取調べ一秒の時も徒に費さぬといふ風で、その行動は殆んど規矩繩墨に當るごとくだそうです。

▲中將の嗜好「水陸共に獵が何より好きで、斯樣な銃があるのです、獵犬も二匹ゐます」と同席の一紳士は答へられた、而して次の座敷を指され、「あすこにある剝製した鷹も獲物の內です。」と云はれましたので、自分は眼を其方へ注いだが、成る程次の座敷の書院の所に、鷹の剝製したのが、左右二羽木の上に留つてるのがあつて、其中央に蠟梅が見事に生けられてあつた。これは云はずと知れる中將夫人の御嗜好と入り交つてゐるものと感せられた。



▲その家族　夫人哲子は樞密顧問官子爵海江田信義の長女、當年四十二歲、中將との間に長男彪(二十年)次男實(十七年)長女八千代の(十四年)都合三人あつて、男子二人は學習院に通ひ、長女八千代は番町小學校高等二年生であるが、その內華族女學校へ入らるゝとのことである。　(口繪參照)

で、夫人は挿花を最も好まれ、茶道にも精通してゐ

られる。又和歌などもお手に入つたものであるさうな、筆蹟も亦見事で、婦人として心得てゐないことはないとのことである。

而して、將軍も夫人も非常な綺麗好で、庭の方から、玄關は素より塵一つ落ちてゐないのである。また家風が美しくれて嚴格なる徵には凡ての置いてある物などが、曲つたり、撓くれたりしたものが一つもないのを以てもその大凡が知られます。

▲虛報一向驚かず　二月十日比のことであつた。旅順の海戰の際中將が名譽ある戰死を遂げられたとの虛報を某新聞が傳へたことがあつたから、自分は、嘸同家に於ては、驚かれたであらうと思つて、伺つて見ると、一紳士は『なに、奧樣などは、平氣で一向驚かれなかつたです、』と答へられたが軍人の家族はいつもこの覺悟がなくてはなりません質問した私は却て恥かしくおもつた位です。

けれども、海軍省へ捷報が來た時には、家族一同喜悦、自ら家門に溢れたことであらう。

因に云ふ、中將には去冬聯合艦隊の編成せらるゝやうになつて、舞鶴鎭守府の任地より一度歸京せられ二三日滯在して出征の途に就かれたとのことであります。

旅順の戰死者 山中少佐の家庭

旅順港外の大海戰に名譽の戰死をなさいました山中少佐の夫人喜子と仰言るは、曾て横須賀に進修學舍といふを設けて子弟の敎育に從事して居られた土屋平四郎氏のお娘御で、御夫婦の中に長女ちゑ子、長男武の二子をお設けになり、圓滿和樂の家庭を結んで居られたのですが、御良人には國家有事の際と決然覺悟なすつて、夫人に二子を託して實家へ御預になり、昨年九月を以て、軍艦富士に乘組み、遂に今回の出征に名譽の最后を遂げられたので御在ます、先頃某新聞記者の慰問に對して、夫人の御話なさるやう『平生思切りの好い人で御座いましたから、去年の十月一日、富士に乘込

みました後、手紙を一本呉れました事も御座いませず、逢ふ事なぞは夢にも出來なかつたので御座います、今になつて考へますと、切めては戰地へ出發前に一度は逢つて置きたかつたと存じますのも幼兒のがあるからでございます……はい子供は二人御座いまして智惠と申すのが總領、只今は幼稚園に通て居ります、次が三歳、是が武と申す長男で、まるで父の顔を知ないので御座います……併し是とても、皆御國の爲め君の爲に討死を遂げて呉れたので御座いますのでたとへば、父の顔を存じて居りませんでも、成長くなりましてから、事を喜んで呉れるだらうと存ます、何の男子が戰爭に參りますれば生きて還つて來やうとは、露塵存じては居りませぬが、子供の顔を見る毎に、つひ思出しては、やつぱし女で御座い



中山少佐の未亡人並に遺子

ますもの……。』

『如何して、死亡りましたかは、まだ妾共の存じません所で御座いますが、昨夜艦長からの電報では、山中少佐は天晴れ見事な戰死をしたからとの事で御座いましたので……嬉しく……存じて居ります。』

夫人は人生の悲極に接して、幾干の嘆を胸に御秘になるでせうか、眼には一滴の涙さへ浮べず、而も人々の見舞に對し、平生と少しも變らぬ御樣子は、有繋軍人の妻と敬服致した相で御座います。

旅順の負傷者　松村大尉の家庭

旅順の大海戰に先頭第一の功名を博し、其が爲に負傷をなすつた海軍大尉松村菊勇氏は、芝區伊皿子町六十五番地に宏壯な邸宅を搆へてお在でなさる吾妻艦の副長海軍少佐松村辰雄氏の御舍弟なので御座います、氏は昨年の五月お宅を辭して軍艦三笠に乘組んだ以來一度もお宅をお訪ねなさらず、我が東洋艦隊が奮然決死の意氣を顯し波を蹴つて佐世保を出發した當時も、唯だ『ゴキゲンヨウ』と云ふ電報を御宅にお掛けなされたのみださうです、御宅には淸子と云つて今年六十二になる阿母樣が被爲居のですけれど、公事に際して私事を省るといふやうな事を屑しとせぬ御性質ですから、生還を期せぬ永遠の旅立に在ても、遂に家門を顧みやうとは爲なかつたので御在ませう、氏には祿子といふ結髮の奥樣が御在ます、福島縣令有田義資氏のお娘御で、今年十七にお成りだ相です、四海太平ならんには、ことし彌生の花の咲笑ひ、胡蝶の羽風暖かき頃を以て、芽出度くお儀式をお擧げなさる筈だつた相です、氏の御家庭は老母淸子と、叔父の十藏氏と、兄の辰雄氏と、嫂の敏子と、家兄の愛兒二名と氏の外に下婢一名とが在る許ですが、家兄と氏とは常住軍艦に在つて海上生活を爲てお在でゝすから、滅多にお宅に御在でなさいません、始終留守をして被爲居るのは阿母さんと嫂の敏子さんとですが、軍人の母とし妻として愧しからぬ程のお心掛で被爲居いますから、常に綿

服を御召しなすつて、至極質素な御生活向で御在ます、かういふ御家庭ですから自然立派な御兄弟をも養ひ出されたと申すもので御在ます。

三浦中尉の未亡人

富士艦乗組の海軍中尉三浦容夫とおつしやる方は、旅順の砲撃に名譽の戰死をなさいました方ですが　御出征前に、大阪の山内一誠氏の娘綾子と申さる丶方と、御結婚の式を御擧に成たさうです、嫁御寮の綾子さんは御年も漸と十七に成た許りださうでしてね、御可哀さうでは御在ませんか、御國の爲めに名譽の戰死をなさる程の大丈夫を良人に持たれたは、軍人の妻として



此上もない御本懐と御慰めも致すので御在ますが、併し行先長き御生涯を孤獨で御暮しになるかと思へば、眞に御痛ましく存じ上るので御在ます、此程或る方が大阪北區野田今開町の御實家に此の若後家様を御見舞致した時、阿父様（一誠氏）は、涙を隠して「三浦の戰死に就ましては寔に名譽の事ですから悲い心も打消れて嘆きは致しませんですが只々最後の勝利まで見せて死なせたかつたと思ひますも愚痴でございましやう綾子は二女で當時堂島高等女學校の二年生です婚姻の約を結びましたは三浦がまだ淺間に乘つて居りました頃同僚の水谷中尉が媒介で約束だけは致して置きましたが去る四

日富士が呉軍港に入つた時三浦から電報で呼ばれましたので早速私が參つて逢ひますと三浦の申しますには愈々時局切迫して來たから此分では開戰も遠くはあるまい一朝開戰の曉は生還は到底望まれないから御息女との結婚もといひ淀みますのを私は皆まで聞かず否御心は能く了解ましたナニ軍人の妻となるからには死別は當然の事である決してその斟酌には及ばぬ事さういふ事なら急に結婚の式を擧げやうと私から無理に說きまして同月十二日佐世保で式を擧げましたやうな譯で、綾子は二月六日富士が出發するのを見送つて歸阪致し引續き堂島の女學校へ通つて居りましたが今回の報を聞てから學校は休ませました綾は本年一月十日が滿十六歲になつたばかりで結婚屆も其爲に滯りなく濟みました位でございますから當人は申すまでもなく私もまだ夢のやうな氣が致します」

と仰言つた相ですが、其の御心中を御察し申せば御道理の事で御在ます、その時故中尉の未亡人綾子樣には縞の鼠色袷に大飛白の綿入羽織をお重ねになり、其の席へ御挨拶に御出でたさうですが、見れば御頭髮の端は惜氣もなく美事に切棄て丶在つたさうで、其の御痛ましさ、いぢらしさ、何とも申上やうが無かつた相で御在ます、けれど御當人は固く御決心遊ばされて被爲入と見えて、涙を押隱して被爲居る御樣子が、ほんに御氣の毒で耐らなかつたと、其人が歸つて來ての話で御在ました。

奈古浦丸機關長　宮本氏の家庭

彷徨船の露艦の爲に北海の沖にて打沈められました、滊船奈古浦丸の機關長宮本政吉氏の家庭を、去頃或る人が御見舞致した時、奧樣は涙を流して其の好意を御喜びになり、扨て仰言るやう

「妾が夫を見ました最後と申しますのは一月十日の事で御座います恰度能登の七尾港に碇泊致して居たものですから尋ねに參つて何時になく妾が佛法の法義を致したので御座います一体妾は佛教信者で殊に主人が滊船の乘組と申すやうな職務を致して居りまするので就

中信仰致して居るので御座いまゝそれを貴方平素だつたら馬鹿なとか何とか言て頭から耳へも入れて呉れませんものがその時に限つて何うしたものか染々と聞て呉れましてね別れまする時にも貴方常になく職務上萬一のことでもある時には後の事は何分にも頼む〳〵つて繰返して申すんですそれでわざ〳〵停車塲まで送つて來て呉れまして滊車の中まで這入つて呉れましたのが思ふと永の永訣で御座いましたそれから宅へ歸りますと一月も過てから酒田から手紙が着致し不在中の注意などを細々と認めて御座いまするのを半分ばかり讀かけました時に號外が參つたので御座いますスルト貴方打沈められたといふので御座いませう恰で夢を見たやうで暫らくは泣く氣にもならず漸と正氣着て泣倒れましたが三十分ばかりも後のことで御座いましたらう然し船員の夫を持て居りまする以上は常から覺悟を致して居なければなりませんので却て泣てばかり居りまするのは夫の菩提の爲にも可はあるまいと思ひ返しましては御覽の如く今日は恁う致して僧を迎へせめてお念佛を申すのを何よりの樂みと致して居るので御座います」

と仰言つて暗涙に咽び居られた相で既にお髪を卸さうとまで御決心遊ばされたのですが、其の後數日、船は沈んだが船員は露艦の爲は救はれ、浦鹽に連歸られ、獨逸汽船に依て我が長崎へ送り還されたといふ報を得ましたので、其時の奥樣は何んにに御喜びで御在ましたらう、戰時の常とはいへ死んだと思つた方が生きてお還りなさつたのですもの……。

▲一日一厘の富

我が同胞は五千萬　此の人々が一日に
一厘づゝは一年に　一千八百餘萬圓
二十箇年の其の間　一年五朱の利息以て
貯蓄をなさば其高は　實に六億二千萬
三千萬をも越ゆるなり　若し又た之を四十年
猶擴なさば其高は　二十三億圓となり
亞米利加國は文明の　音に聞えし大富國
されば戰備の其の財も　二十餘億を積むといふ
我日本は武を以て　世界に名高き國なれど
富の程度はいと低し　海軍擴張一億萬
其財源は地租とやら　公債發行とやら
心も細き財政の　遣り繰る本の其の實は
我が同胞にあらざるか
今は明治の御代なるぞ　二十世紀の始なり

我が同胞が一日の
一層づゝは此世紀
午も過ぎぬ其の内に
亞米利加國を凌駕せん
世界に富の冠たらん
一身一家の勘定を
正しく記す斯業は
國の富の礎ぞ
努め學べや文明の
民の榮なり務なり。

▲征露軍歌

（福島少將作）

世界に名高き日本國
旭に輝やぐ日の御旗
皇統連綿大君の
臣子は今や五千萬
仁義を以て建てし國
忠勇勝りし國の民
之に反する敵國の
其有樣は皆知らん
詐そ偽りを常として
他國の領地を掠め取り
咎なき家を焼拂ひ
罪なき人を擊殺し
過ぐる婦女子を辱しめ
乳に泣く小兒を刺し殺し
兇惡暴戾神人の
共に戴さぬスラヴ人
國は廣きも荒れ野原
人は多きも烏合勢
一億中餘の人口も
六十有餘の異人種ぞ
直隸平野の戰ひに
進み來たる卑怯者
歷史に名を得し哥薩克も
今は昔しの夢なるぞ
旭に解くる雪氷り
消ねてぞ失せし露西亞兵
イザ起て皆へ我男兒
駒さへ勇む春立ちて
仁義の師に敵は無し
愉快極まる此の戰
旅順哈爾賓踏破り
烏拉の山の絕頂に
旭の御旗を飜へし
スラヴを舊都モスコーの
森の吟りに追ひ籠めて
我大君の御威德を
普く宇內に宣揚し
世界の平和を樂まん

（京都府師範學校作）

一、吹雪ふきまくシベリアの
蒼空かける荒鷲の
露西亞は翼をおしひろげ
東の方を睨ふなり

二、眠りし支那は夢さめぬ
さめて仰ぎて驚きぬ
滿洲もはや侵されて
爪牙にかゝる諸國の城。

三、咎なき家は焼かれたり
事なき民は屠られぬ
乳になく兒さへ殺されし
其の蠻行も忍びしに。

四、忍ぶ弱みにつけ入りて
益々振ふ兇暴を
見るに堪へで我國は
支那の保全を叫びたり。

五、億へば明治の九年より
旭の旗のはたかげに
生したてたる朝鮮の
國內の築く砲壘や。

六、かしこに木をばきり倒し
こゝに兵舍を營みつ
ほしいまゝにも振舞ひて
侮辱を我に重ねたり。

七、かくて掠めて徐ろに
我帝國を危くし
まづ東洋に覇をとなへ
世界を呑まんと巧みたり。

八、今しも春風吹き初めて
平和に榮ゆる文明の
この六合に我獨り
豈に戰爭を好まんや。

九、されば忍びて日を重ね
年を閱して幾度か
交涉せしも彼聽かず
友誼に報ふ其の侮辱。

十、あゝ外交は破れたり
戰爭こゝに開かれぬ
鐵艦海に龍と馳せ
砲門陸に雷となる。

十一、あゝ戰爭は開かれぬ
我戰爭は朝鮮や
支那を助けて東洋の
永き平和を買はん爲め。

十二、あゝ戰爭は開かれぬ
義は不義を討ち文明は
野蠻をうちて地球上
永久の平和を得んが爲め。

十三、あゝ戰爭は開かれぬ
大戰爭は開かれぬ
列強環視の其の前に
國旗の威嚴を示せよや。

十四、大戰爭は開かれぬ
行けや進めや戰へや
平和の爲めに旭日の
國旗の威嚴を示せよや。

科學

齒の衛生

ドクトル　久保田誠麿

▲一般の衛生と齒牙の衛生　國家は單一なる機關より成立たざると同く人間も矢張り複雜な諸機能から出來て居ります、故に健全なる一個の人間を作り出すには微妙な複雜的事項所謂生理的及び病理的より診察して一の缺點異情なきものとせなければなりません、言ふまでもなく人體は種々なる部分的機能から出來て居る、一の人體を健全にせんには先づ局部々々の機能を健全にしなければなりません、そうして其健全な機能を求めんが爲めには之れに應ずる專門の醫師があるのです、玆にまづ一の標本を出しますが其標本を腦病患者とします、同じく腦病と云つた處が腦膜炎もあれば腦傷もある、其病因も亦た種々になつて居ります、例令ば一の腦膜炎と云ふても黴毒性から出來たものあれば又心經作用から出來たのもあるから、若し其病因が黴毒性から出來たものとすれば其腦膜炎を治療すると同時に其黴毒性も相當に治療しなければなりません、之れは獨り腦病斗りではなく一般にそうなつて居るから一の病者にして二人、又は三人の醫師に賴まなければならぬ場合は幾らもある、そこで一般衛生思想の發達と齒牙衛生の發達とは如何なる關係をなしつゝあるかと云ふに、身體に於ての諸機能は總て一般衛生思想の發達と必らず正比例的であつて、殊に腦の如きは人間が發達すれば發達する程緻密に且健全になるが、齒は之れと全く反比例的である、彼の最も野蠻なる亞米利加の土人若くは亞非利加の土人の腦は極めて不健全であるが、齒の健全なるは驚く斗りである、其面形は四角張つて腮は廣く、齒も其れに準して四角に廣く、虫齒などは一枚もない、彼れ等には齒科病などは殆んど

其必要はありません、之れは何う云ふ譯であるかといふに、世が發達すれば發達する程其食品も種々複雜美味になつて、隨つて歯を腐蝕するからであります。

▲歯の衛生　口は食物を消化して胃部に送る關處である、殊に其一部消化を助けて胃部に送るべき職能を司つて居るものであるから其平生に於ての注意即ち衛生は最も肝腎である、一體歯の衛生とは何う云ふことであかると云へば、一般に歯を粗末に取扱はぬこと丶常に清潔にして置くことである、元來口中は黴菌の集合所と申して宜い位で種々なる細菌は澤山居ります、之れは何處に發育するかと云ふに、食物の殘片が歯の根または歯の隙間などに滯るのでそれが其處から生理作用を發生し蕃殖するのであります。故に一般の衛生に清潔を重んずる如く、歯科衛生に於ても亦歯の清潔を重んずるのであります、何事でも粗末にしてよいものはないが歯は御承知の如く胃部の一部消化を助けるものであれば之れを粗末にすると獨り歯を惡くするのみならず胃部の消化を惡くして之れが爲め種々なる病因が出來るのである又其歯を清潔にせなかつたならば啻に齲に罹るのみではなく肺結核の細菌なども此處に發生するのであるから、歯の衛生としては其歯を粗末にせぬことが第一である。

▲乳歯　小兒が生れて初めて歯の生へるのは凡そ五六ケ月目で下の前歯より生へ始め、三十六ケ月間に乳歯が生へ揃ひます、此發生期の間には腦を病み又腸胃を病むことがあります、殊に難生歯の爲めには生命を失ふ樣のこともありますから、此期間は小兒に取りて最も大切な時期です、其乳歯の數は下拾枚、上拾枚、そうして此乳歯が揃ふと小兒が漸次に物を噛んで來ますが小兒の時は最も腸胃が弱くありますから、此乳歯は十分に保護する樣にして、其食物は特に注意しなければなりません、其衛生法は小兒の口中を清潔にして置くこと丶、乳を與へたるときと、夜分寢るときとには必ず口中を洗滌せ、其歯の表裡は清淨なる布巾を以て拭ひ取ることが肝腎です、世間で小兒の歯が腐蝕するのを親達が何んとも思はずに打捨て當然斯なる樣に思

生て居るもありますが、之れは一種習慣的から出て來た誤解です、西洋杯の小兒には斯んな齒は見たくともないのです。

▲臼齒及び永久齒　小兒の齒の代る時斯を名けて齒科學では齠齔期と云ふ、先づ下顎の奥に大な齒が生へて來ます是が即ち臼齒です、大概五六歳の頃には此臼齒が生て來ます、此臼齒の發生と共に前の齒が交代的になるのです、そうして十二歳頃までには順次に替るのであります、最も後に生へるのは俗に親知らず齒と言ひます、一体永久齒と申すのは永久的に口内に存じて食物を咀嚼するものでありますから、大切なものである、殊に此乳齒の替る時に注意をせぬと獨り、面形を醜くする斗りではなく即ち齒列又は食物を咀嚼する上に不便を來します、米國の如き齒科の發達した國に於ては小兒の五六歳の頃から十五六歳の頃まで時々齒科醫の診察を受けて齒の衛生に關する總ての點を聞く樣になつて居ります。

▲時候と齒　之れは大した關係でもありませんが多少の關係があります即ち六七月の頃は炎暑の時でありますが、種々の病氣が發生するのでありますから、齒にも幾らか熱氣の出る時である、此時には多少の患者がありますが、平生齒の衛生に注意し、且つ齒科醫に就き完全に治療せらるゝ人には甚だ尠い。

▲齒痛の原因と種類　一体齒は如何なる性分から成立つものかと云ふと、人躰から生ずる石灰分からです、そうして酸素質のものと極めて中のわるい樣に出來て居ます、試に酸の中に拔けた齒を入れて置くと段々と柔らかになり且溶けるやうになつて來ます、殊に此齒は御承知の通り行列的に重なつて居りますから、其隙間に食物の片屑が停滯して腐つて來ると酸化します其酸化したものは齒を腐蝕せしむる原因となるのであります、勿論唯だ腐ると云つては素人に分りかねますから申しますが、其腐り始めるのは肉眼では見へない丁度針で突た樣な細い孔穴が幾個となく出來て漸次に其孔穴が大きくなつて、其孔穴の内に粘液やら食屑やら停滯して酸化的作用が出來て最初の小孔穴が其酸化

實作用の多くなるに隨つて其孔穴を大きくし段々に其歯を殺して仕まう夫れで其歯の疾病の種類を申せば色色ありますが齲歯、歯髓炎、歯根膜炎、歯根膿瘍、歯根炎等は其重もなるものです、而して其治療術は金、銀、セメント其他、尤も脱落た部分には架橋的歯術を施すこともある、序に乳歯の拔き取り方ですが乳歯は代る歯であるから何時拔いても差支ない様に思ふ人もあるが、決してそうではないやはり時期があります、餘り早く拔き取りては歯の發生を遲くし、其上顎骨の發育を妨け顎の形狀を醜くしたりするのです、又餘り長く拔かずに置くと成長しての後に歯列を惡くする様になります、歯並の惡しいのは獨り其容貌を惡しくするのみではなく歯の重り合ふ部分にどうしても食物の片屑が停滯する様になつて來ます、是は先きに申した通り歯の石灰分を溶解する原因となる故に歯の拔る時期は深く注意をせねばなりませんが又齲歯は痛む時には歯科醫に駈け付治療を請ふのもあるが其痛みが去ると其儘にして置く人もあるが、之は拔くとも拔かぬとも

相當の手當をせねばならぬ、要するに一の歯が腐蝕すると隣歯に傳染するもの故これも注意せねばならぬ、そうして歯の種々なる病の出來るのは食後と夜中とでありますから此處に心を留めて清潔にし、且つ其手當をせねばなりません、從來食後に小楊枝を使ふ習慣ですが此楊枝は可成柔な樹と細きものを用ねばならぬ、剛きものを用ゐると歯の頭部を減少し歯の位置を退却せます、之れは鳥の羽莖又は極く柔な樹を以て製したるものが一番宜しい、特に食後には必らず含嗽をして口中及び歯の隙間を清潔に洗ふことゝして其含嗽は別に藥を用ゐなくとも微温湯で差支はありません、歯病の出來るのは晝間よりも夜分である、晝は物を云ふたり笑つたり終始其筋肉が活動してゐるから少々位の食屑は歯間にあつても自然と脱却せられ、又粘液なども始終排洩せらるゝから歯病の出來るのも極めて少ない、然るに夜分は此筋肉の活動も已み、亦粘液や食物の片屑なども排洩されずに其儘翌朝まで口中や歯間に停滯して居る、故に口内は不潔になり其片屑は停滯し酸

化して遂に種々なる病因となるのであります、故に朝は楊枝と歯磨とで其粘液や片屑を脱却すると同時に其酸化質のものを防止せねばならぬ、そうして其防止劑としては稀薄な石炭酸を微温湯に入れて十分に含漱するのである、石炭酸は身體に害のある様ですが極く薄くすれば少しも身體を害する様のことはありません。

▲楊枝と歯磨粉　楊枝は日本製舶來製両方共によろしい、日本製ならば房楊子舶來製ならばゴム楊子、これは十分に歯を磨く上に便利な計でなく歯齦を健全にする上に利益があります夫れから歯磨粉である、坊間に行はれ居る歯磨粉は随分粗悪なものが澤山ある、特に房州あたりの砂で製した物なども見受るがこれは甚だよろしくない元來歯磨粉の粗悪なものを使用すれば歯の琺瑯質を減却します、此琺瑯質と申すのは歯の上皮部にある堅きもので之れを減却すと歯は自然弱くなるのでありますから歯磨粉は歯科醫の撿定を受けたるものを使用する様にしなければなりません且つ其磨き方は歯の全面即ち歯の表面、裡面及び咀嚼面をよく清潔にすべきです、之れは其初めは随分面倒の様に考らるゝも一週間乃至二週間も使用すれば其習慣が付いて何にも面倒なことはありません、次に楊枝は毛の多い小さなのが宜しい、奥歯は前歯より十分磨く様にせなければならぬ奥歯を磨くには大きい楊枝より小さい楊枝の方が磨くに便利である、且又歯を磨くのは朝起きた時計りではなく、夜分寝るときにも磨く様にせなければならん之れは歯の健全を圖るの第一法であります。

▲健康と治療　之れは最も注意せねばならぬ事柄で健全の身體には健全の精神が宿るとは千古動かすべからざる格言で、身體は何處が惡くつても必らずその精神は害される、故に平生の健康は身體何處の部分に於ても保たねばならぬ、然るに我が同胞は歯などゝ來ては其幾部は腐蝕し其疼痛は神經に到つて堪えぬ様になつて來なければ一向構ぬ風習である、斯う云ふ風習は是非廢止せなければならぬ假令ば平生攝養して居る體は少しの疾病は治療し易きと同じく歯も又少々位の腐蝕は治療がし易い又其治療した後の經過も永く丈夫に保

存することが出來るが打捨て置いて其腐蝕が大きくなつてからは治療上頗る困難なるのみならず治療した經過も惡しいのであるから其幾らか痛むべき兆候でもあり異情でもありと云ふ際には可成歯科醫に就いて診察を求むるは必要である、歯科醫學の進んだ米國では疼痛の有るなしに關係なく大概五六ヶ月毎に其歯全体に就ての診察を求めると云ふのが通例です、我國人は歯の一本や二本位有つても無くても差支ない樣に思ふてゐるが何程巧妙に出來たものでも人造の歯は到底天然の歯の樣に行くものではないから平生歯の健康診察はして置かねばならぬ又歯の幾分に黒く薄き膠の樣なものが付着してある人がある、之れは細菌の巣であります、其巣の内に無數の細菌が潜んで居つて歯間の食片を食ふて生存して居りますから之れは一寸、歯磨粉や楊枝の力では脫除ない歯科醫に就き掃除して貰はなければならぬ夫れから總て歯の根は楊枝で十分に掃除することの出來ぬものであるから素人の掃除法としては、歯と歯の間隙に絹糸を通ふして磨くべきである、之は可成歯齦に障らぬ樣に靜かに通ふして叮嚀に磨くべきです、夫れから俗に云ふ歯壟と云ふものがある之れも通例の毛楊枝では取り除くことは困難である之れは元より細菌作用ではないが之れが付着し居ると歯齦が退却します、歯齦が退却すると歯を弱くする計りではなく一種の臭氣か口中から出來る樣になります永久此歯壟の付着したものは兎もあれ一ヶ年や二ヶ年位のものは絹糸で叮寧に掃除すれば清潔になります、此歯壟を取り除くと云ふのは歯齦を健康にする方便である。

▲一般の治療方法　一般の歯の治療方法は歯及び歯に付屬する種々の疾病を全完に治療する歯科學上の手術であるが其方法は澤山ある、世間一般には歯の治療と云へは單に金銀又はセメント其他陶器などを以て歯を製造することの樣に考へるものがあるが金銀セメントなどを以て歯を修飾するは手術一種の方法に屬するもので金銀セメントを幾ら使用したからと云ふて歯は完全したと云ふものではない、治療の目的は病根を驅除す

ると同時に原狀に復さするのが目的である、然るに世間一般には其病根と原狀とを兎角後にして其修飾に重きを置くやうであるまづ齒を造るには天然自然の齒を可成保存するのが治療上の第一義であつて、素より幾ら金銀其他の貴重品で修飾つたからとて宜しいと云ふものではない、齒科醫術で世界第一等の米國に於ては紳士貴女は金銀をはめないで可成齒と同じ色合のものを以て造るといふ事ですそして奥の方は齒の性質と其腐蝕の部分如何とに依りて金なり銀なり夫れ相當に撰擇して造るのである日本の風習は之れと反對で齒の治療は一種の修飾的の如く思惟して何んでも人の目に付く處のみ金銀で修飾し醫師も亦た之れを注意せずして大事の奥齒は一向搆はぬ樣である、又齒と齒との間隙には金銀の塡めなどをして居る人も澤山あるが之れ齒科醫術上よりするも亦其衛生上からするも害あつて益ないものであります、之れは苟くも齒科醫術上の心得あるもの丶することではありません、齒と齒との間隙は少小位ある方が齒を腐蝕する方からするも、或は治療上の便宜からするもよいのであります、假令二本の齒が揃ふて居る處を一本が腐蝕して來ると、一本づつ其腐蝕したる部分を取り除いて別々に其間を些しく透して塡めるが眞の手術なるものであります、そうせぬと其間の掃除は行屆かず且つ腐蝕するの虞もありますから、先づ其間は紙の一枚强の處を透かすのが宜しいのであります。（完）

電氣の話

一、電話　　松琴女史

私が或時或家を訪ねました時に、其家の小供と御母樣との間に、下の樣な御話が御座いました。

小供「御母樣私は今日學校の歸りに、電話を聞きました。

母「何所デ。

小「隣りの太郎サンと、御一緒に歸つて來ますと、ソラ何時でも私が御菓子を買ひに行く、木村屋の角に電信柱がありませう、アノ柱へ耳を着けて聞いて居る

と方々の御話が一所になつてブン〳〵と言つて居るノ太郎サンに聞いて見ますと、柱の上に張つてあるのは電話の針金ダツテ。

母「夫は違ひませう、ブン〳〵と鳴つて居るのは、話聲ではない、アレは風が針金に當つて響く音で、夫が柱に傳はつてブン〳〵と鳴るのです。

小「ソーカネ、それでも話聲はアノ針金の中を通つて行くのでせう、夫に私にわからないのは、電話ですと東京と大阪とでも話が出來るのだソーですネ、此間學校で先生が御話しなさいましたに、ドンナ大きな聲の人でも、一里はサテ置き、半里先の人とは話が出來ないのに、電話なら通例の聲で遠方迄聞えると云ふのはドー云ふ譯でせう。

母「御前には話してもマダわかりますまいが、一應話して上げますから靜かにして御聞きなさい。

小「ハイ、私は覺えて居て、太郎サンに話しませう。

母「音や聲の樣な、凡て人の耳で感ずるものは、之を音響と云ひます、此音響が空氣の中を傳はります早さは、一秒と云ふ時の間に、三町余りで御座います、つまり一時間に三百里程になるのです。

小「早い事ネ、汽車より。

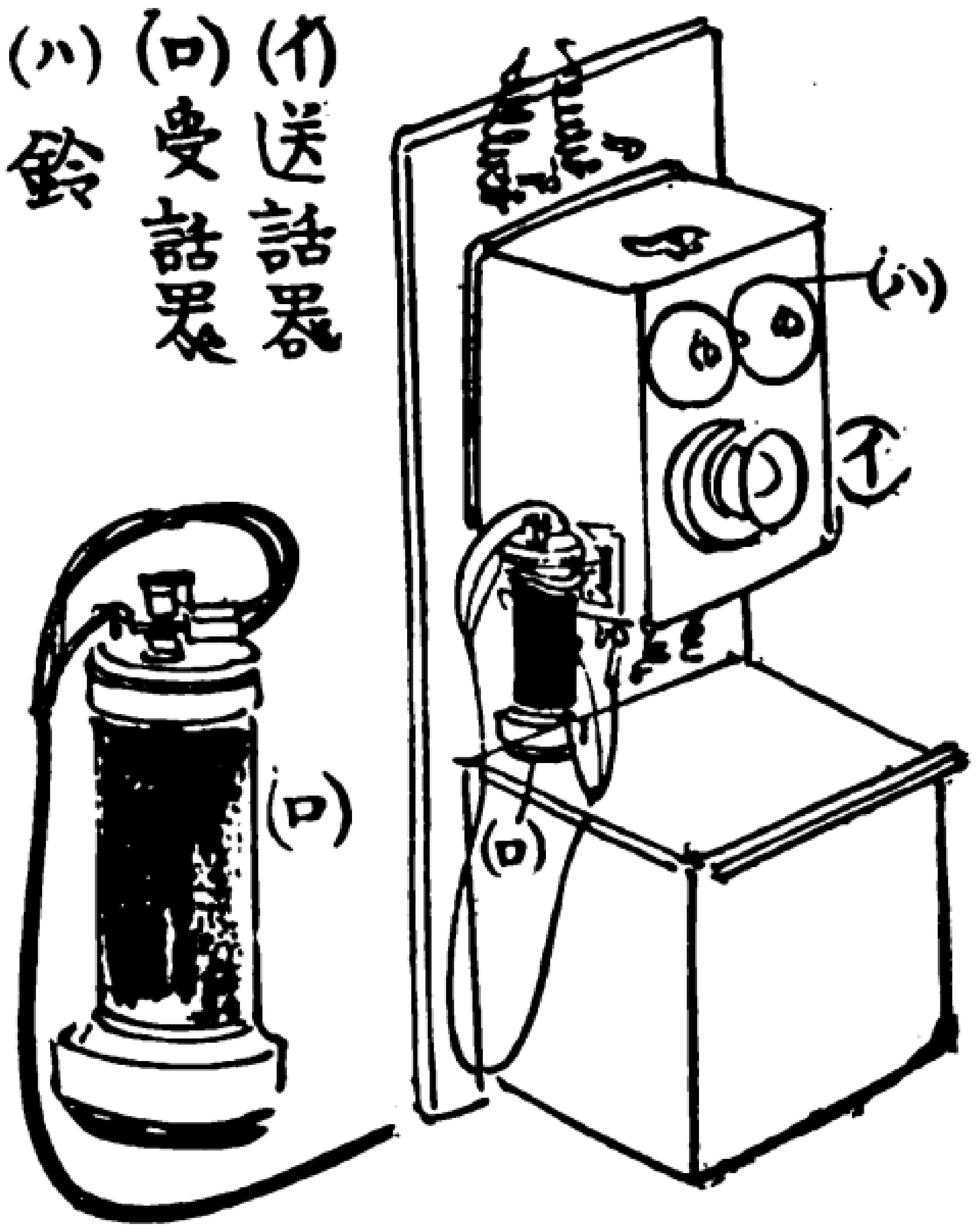
母「ソレは早いサ、併し御前考へて御覽、今東京と大阪とで、人が話をして、其聲が假りに届くものとしても、其間は百二十里あるとしますと、東京の方でモシモシと云ふと、其聲が大阪に届くには、二十四分かゝる事となりませう、それにドンナ大聲な人でも、半里の外迄透る聲は出せません、電話の助けを假りますと此方で云ふ聲が、一秒もかゝらない内に、遠い所迄屆くのです。

小「大きな聲でも遠方ではドーして少さく聞えるのでせう。

母「夫は聲許りではない、光でもソーです、大きい提灯でも遠くから見ますと、豆程にしか見えないでせう聲が人の口から出ますと、四方へ廣がりまして、遠くなればなる程廣がりが大きくなりますから、聲は小さくなりますし、夫に風や又近所の樹木、建物の爲めに

跳ね返されて、益々少さくされますから、余り遠くでは、聞き取れない事となるのです。
小「夫では途中に邪魔物がなく又聲か四方へ廣がらない樣にすれば、遠方迄聞こえまするか。
年「ソーデス、ですから長い管の兩方へ、喇叭の樣な口を附けて置いて一方で人か話をして、一方で耳を宛てゝ人が聞いて居ますと、空氣中では屆かぬ程遠い所へ迄も話聲か屆きます。
小「アーそれて分つた、此間私か太郎サンと、遠りに置いてある水道鐵管の兩方の口に居て小さい聲て話をしたのに、よく聞えて丁度耳の側て話をして居る樣に聞えました。
年「ソレが私の今云つた譯からてせう、併し管を使つても、ソンナに遠い處迄、聲を傳えさせる事は出來ません、管の代りに針金を使つて、又空氣て聲を傳えさせます代りに、電氣で傳えて貰うのです。
小「針金の中に孔が通つて居るノ。
年「針金の中はガラン洞ではないのです、併し夫でも電氣と云ふものは、針金の中を自由に流れます、學問上で電氣の流れの事を、電流と云ふのだがネ、其電流が聲を運ぶ働きをするのです。
小「電氣と云ふのはドンナものです。
年「夫は分かりませんが、其性質丈けは知れて居ます空氣の樣な瓦斯でもなく、又水や石の樣なものでもありません、譬へて見ますと、熱の樣なものです、火箸の端を火の中へ入れて置きますと、一方は火に入れてなくつても熱くなりませう。之は一方が火から熱を吸ひ取りますと、夫か火箸の中を流れて、他の端迄來ますから、それて熱くなるのです。
熱は火箸の中を、ソンナに早くは傳ひませんが、電氣は金屬の中を非常な早さで傳はります、それだから此者を假りて聲を運ばせるのです。
是から電話機の事を云つて上げますから、電話機を一所に御覽。
と云ひながら御母樣は、小供をつれて電話室へ參りました。

母「此眞中に出て居る喇叭の樣なの(イ)が、送話器と云つて、此口の前で話をするのです、夫から左側の肱にかけてあるのが(ロ)受話器で、之を耳に宛て丶向ふの御話を聞くのです、一寸御覽。送話器の奥に鉄の板が見えませう、此板が話を電氣で運ばせるのに大切なもので、まだ此奥にも仕掛があります、夫は話した聲を大きくして、向ふへ送る爲めであります、又上について居る二つの鈴(ベル)(ハ)は、電話交換の合圖や、話の終りを合圖する爲めの者であります。



御母樣は、又左手の受話機を取り外しまして小供に示しながら、是が話を聞く道具です、向ふから來ました話が、電氣で運ばれて、針金の中を通り、此處に付いて居る紐の中を通つて受話器に入りまして、種々の仕掛で再び聲になつて人の耳に入ります。

小「電氣はドコから來るのでせう。

母「此電話機の箱の内に電氣を起こす藥が入れてあります、そして電話をかける時に、電氣が出て行く樣になつて居ます。

小「二本の針金は何處から出て居るのです。

母「受話器から二本出て居まして、其内の一本は地面に導いてあります、他の一本は電柱の上へ行つて居ます、送話器からも二本出て居まして、其中の一本が電柱の方へ行つて居ます、一体は針金が四本入りますが地面を使つて二本てスマスのです。

小「往來の電話線の中に、太い鉛の管の樣なのが、他の針金に吊されて引いてあるのは、何て御座いませう。

母「あれはやつぱり、電話線ですが、澤山の線を一所にして、鉛の管に入れたのです、町幅に限りがあつて

餘り澤山の線は張られませんし、又始末が惡いから、アーしてあるのです、それに電話線は地面の下にも、通つて居ます。

小「此間友達が、電話線の側で、凧を揚けて御巡サンに叱られたのは何故でせう。

姉「それは凧を揚げる事は構ひますまいけれども、若し凧の糸が電話線に纏まつて御覧、澤山の針金がある事だから、電氣か一本の針金から糸を傳つて、他の針金へ移つたり、又針金を切つたりして、電話が通せなくなりますからす、それで人に叱られる迄もなく、電話線でも電燈線でもある近邊では、凧等を揚げないに限るのです。

小「ハイ分かりました。

二、電燈

油もないのに明がつく、しかもいつか人の知らない間に火がつくと云ふのは不思議だナー、と獨りで灼熱燈の下に首を傾げて、一心に見て居るのは、考太郎と云ふ男の兒で御座います此樣子を見て居ました、姉は、電燈について理解させて置くにはよい機會と思ひまして。

姉「考サン其樣に電氣燈が不思議なの。

考「デモ火を燃やすには、何れ油か瓦斯か何でも或物を、外から入れてやらねばならない筈でせう、夫に電燈計りは何にも入れずと、始終針金が赤くなつて居るではありませんか、モ一つ不思議なのは、此燒けた針金は、空氣の通はないガラスの球の中に入れてあるのでせう、私學校で聞いたのに、何でも物が燃えるのには、空氣か入用たと云ふのに、電氣燈計りはそうでない樣ですから。

姉「焚える物がなくつて光が出ないものなら、稻妻はどうして光るのでせう。

弟「それは電氣ですから。

姉「電氣燈だつて、やはり稻妻と同し事す。

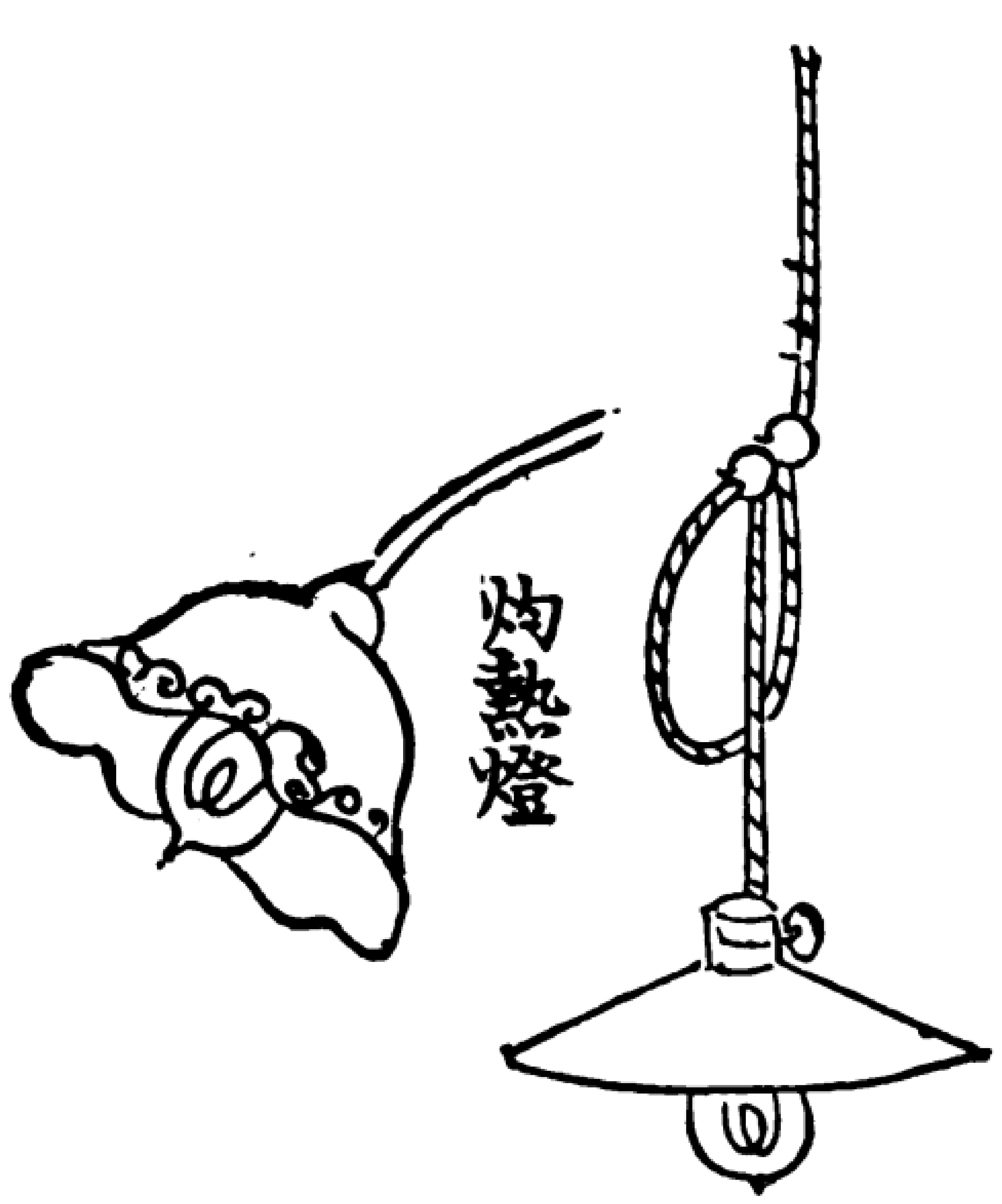
弟「併し稻妻は、一寸光つて直に消えますが、電氣燈は始終明るいぢやありませんか、夫に空には別に針金

はないのですから

母「電氣と云ふものは、光を出す事が出來るのは、分りましたでせう、若し稻妻が一箇所で絶えず輝いて居たとしますと、此時には公園や往來に建てゝある、アーク燈と同じ樣に明るい筈でせう。又御前の言ふ通り、空に針金は引いてはありませんが、其代りに雲や空氣と云ふものがあります、稻妻と云ふ光がドーして出來ますかと云ひますと、あれは空の上に浮んで居る雲の上にある電氣が、他の雲へ飛び移る、其飛移る時には、二つの雲の間にある空氣を通して行かねばなりますまい、其空氣を貫く時に電氣が光と熱とに變はるのです、電燈も同樣な譯で、一寸御覧、アノランプの上に垂れて居る紐子、アノ中に二本の針金が入れてあるのです、此針金の端は、電燈會社の發電機と云ふ電氣を作り出す器械迄、續いて居ます。

此針金がランプに入りますと、其兩方が電氣の通りにくい細い針金で連ねてあるのです、電燈會社から來ました電氣は、一本の針金を流れて來ましてランプの中を通つて夫から他の一本の針金を傳つて、歸らねばなりません、トコロがランプの中の針金は、電氣を通しにくいのですから、電氣は熱と光とに變はつて此通り針金を白くなる程熱して居るのです、

孝「ソンナラ稻妻も熱いでせうか。



母「ソーヂスナ、私は稻妻にサワツテ見た事はありませんから、知りませんけれども、雷樣の落ちた所にあります樹を見ますと、眞黒に焦げて居ますし、又落雷の爲めに、家の燒けました話を聞きましたが、ソシテ見ると餘程熱の高いものに違ひないでせう、

孝「此電氣燈も熱いのでせう、ドノ位熱いでせう、炭

の火よりか熱いでせう子、
姉「夫は熱いのなんので、譬様がありません、水は攝氏寒暖計何度で沸きますかね、
孝「百度でせう
姉「ソーデス、百度の水でさへ、手は附けられますまい、私達の浴びます湯は、四十度から五十度位の温度でせう、人間は金を熔かすのに、高温度の熱を作りますが、錫は二百三十度、鉛は三百三十度、銀が千度、生鉄が千六百度、白金は二千度で融けます、炭や石炭瓦斯を焚いて、白金を融かすのは困難ですが、電氣を熱にして、夫で融かしますと、容易く融けます、それで白金細工には、電氣の力を假るのです。
孝「ソンナに熱いのなら、何故ランプの内の、針金は融けないでせう、アノ針金は何で出來て居ます
姉「今白く熱せられて居る所丈けが、炭で出來た細い糸で竹を燒いて造つたものだそうです、炭は空氣のある所では、熱せられると、焚えてしまいますけれども空氣のない處では焚えません、そして現今人の工夫で、出來ます限りの高温度では、炭は融かす事は出來ません、それですから二千度以上の熱でも、アノ通り平氣で居ます、
孝「此ランプは何時迄も使えませうね
姉「ソーは行きません、使うと云つて、夫は内の針金の切れる迄使える樣なものですが、其前に新らしいのと取換えのるが當り前です。
孝「惡くなるのですか、
姉「使つて居る内に、明が段々暗くなります、此處のランプはソンナに暗くならない内に取換えるのですから、目には立ちませんがね、私が行く通りの小間物屋子、アスコの電燈の暗い事を御覽、此間聞いて見ると子、半年余も取換えずにあるのだとさ、そうして此頃は會社で電氣を高價にしたのだらう、と云つて居たが、物を知らない人には困る子。
今も言つた通り、ランプの内の針金が、炭で出來て居るのでせう、それだから夫が終始熱せられると、炭が熱の爲めに、一部分細かい粉になつて、回りのガラス

の球に着くのです、そうすると石油ランプのホヤの曇つた時と同様に明が暗くなります、其上に、炭の糸も細くなりますから光る所か細くなるので、一層暗くなるのです、夫ですからヨイ加減に見計らつて新しいのと取換えないと損です、

客「ドンナ物でも良い事計りありませんネ、電氣燈の便利は唯明るいのと、油をさしたり芯を切つたりする手間のない位でせうか

婦「まだ外に肝心な事があります、行燈、石油ランプ、瓦斯燈、又自轉車の前について居る、明るいアセチリン燈にしても、空氣のない所で、點火する事は出來ません、併し電氣燈の中で此灼熱燈は、前にも言ふ通り空氣と全く縁がないのですから、ランプから炭酸瓦斯が出ると云ふ事はありません、當り前の家ではまだよいが、寄席とか、芝居の様に大勢人の集まる所では、人の口からも炭酸瓦斯が出るし、又燈からも出ては、余程風通しをよくして置かないと、頭痛がしたり、目がくらむで來たり、する様な事になります、灼熱電燈だと、炭酸瓦斯が出來ませんから、人の健康上都合がよい譯です。

客「此ランプを消す時にはドーします。

婦「ランプの傘の上にある、チヂを回はせばよいのです、チヂを回はしますと、電線とランプの内の針金とが、縁を絶たれて、電氣がランプにこぬ様にしてあるのです、元にチヂを戻すと明るくなります、

客「ランプの吊るしてある紐の、中途にある丸い球は何です。

婦「あれは、ランプの光には、關係のない者で、唯紐を長くしたり短かくしたりするものです。

客「此ランプは、モット大きくは出來ないでせうかね、

婦「夫は大形のも、小形のも、色々あります、是は十六燭光形ですが、百燭光以上のもあるし、又ヤット二分の一燭光位のもあります、御醫者が咽喉の撿査等に使ふのは是です、

客「燭光とは、何の事です、

婦「之は明の明るさを示します名前で十六燭光と云ふ

明は八燭光の明の倍明るいのです。

考「それで灼熱ランプの事は、立派に合點が行きましたが、公園や町等に建てゝある、大形の白く光つて居る電氣燈は、何と云ふのでせう、

博「アークランプと云ひます。

考「灼熱燈と何所が違ひませう。

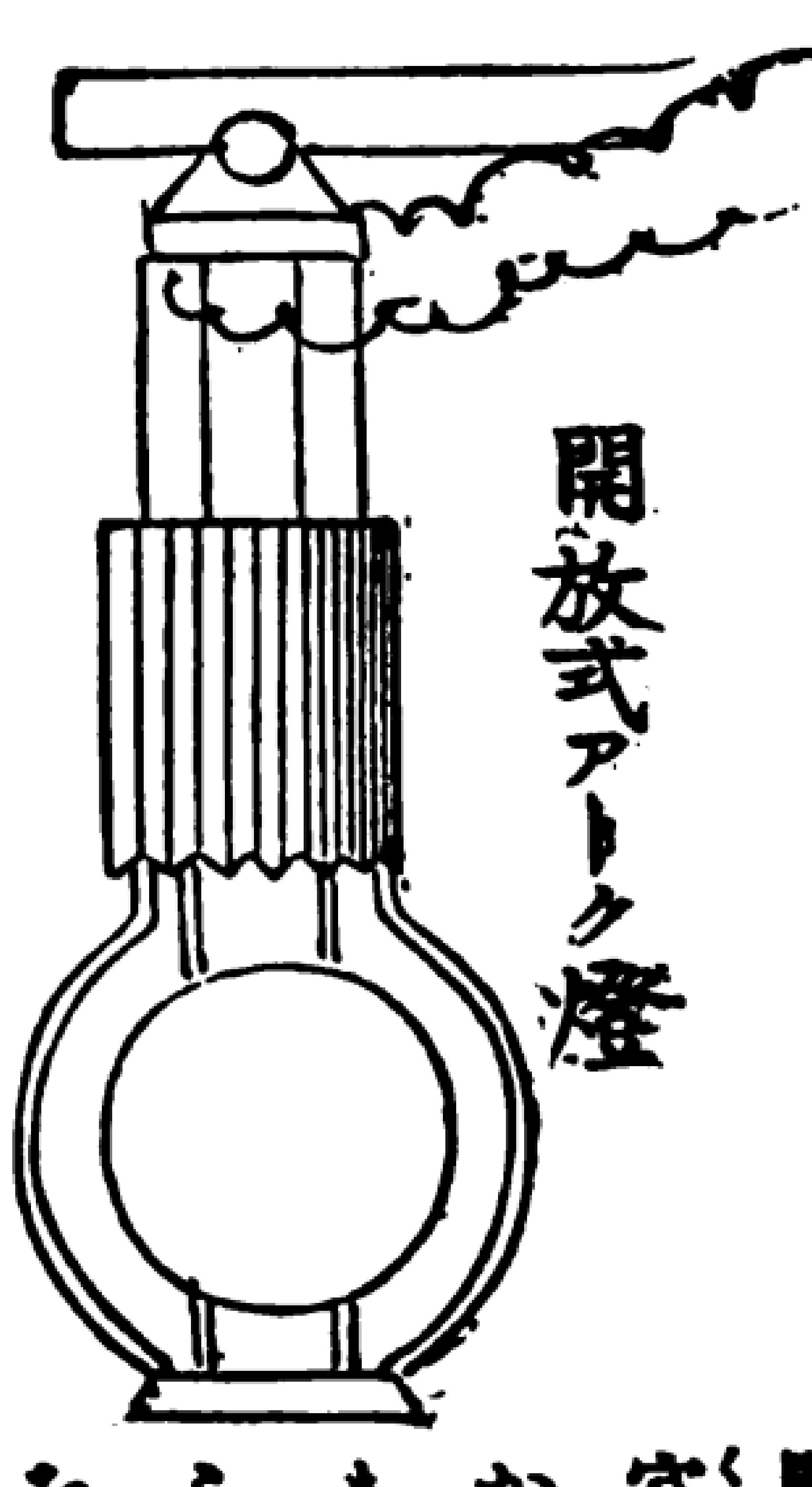
博「電氣を發電機から、針金で引いて來て、ランプの内で光と熱とに變えるのです、仕組は灼熱燈とは少し違ひます。

ランプの内には、コウ云ふ風に二本の炭の棒を、上下に一線になる樣に、匡に取附けてあるのです、そうして上の棒へ電氣の流れを送りまして、夫が下の棒に移り、針金を傳つて發電機へ歸ります、炭の棒の間が少し放してあるので、此所は電氣が通りにくいから、ソコデ熱と光とに變はります。

炭の棒の取附けてある匡はガラスの球の中に入れてあります。

考「此時にも、ガラス球の中に、空氣はない樣にしてあるのですか。

博「アークランプには二通りあります、ガラス球の中に空氣が自由に通ふ事が出來るのと、又全く外から空氣がはいらぬ樣にしてあるのとの二色です、空氣の入り込むのは、開放式のアーク燈、空氣の斷たれたのは、閉鎖式アーク燈と云ひます。

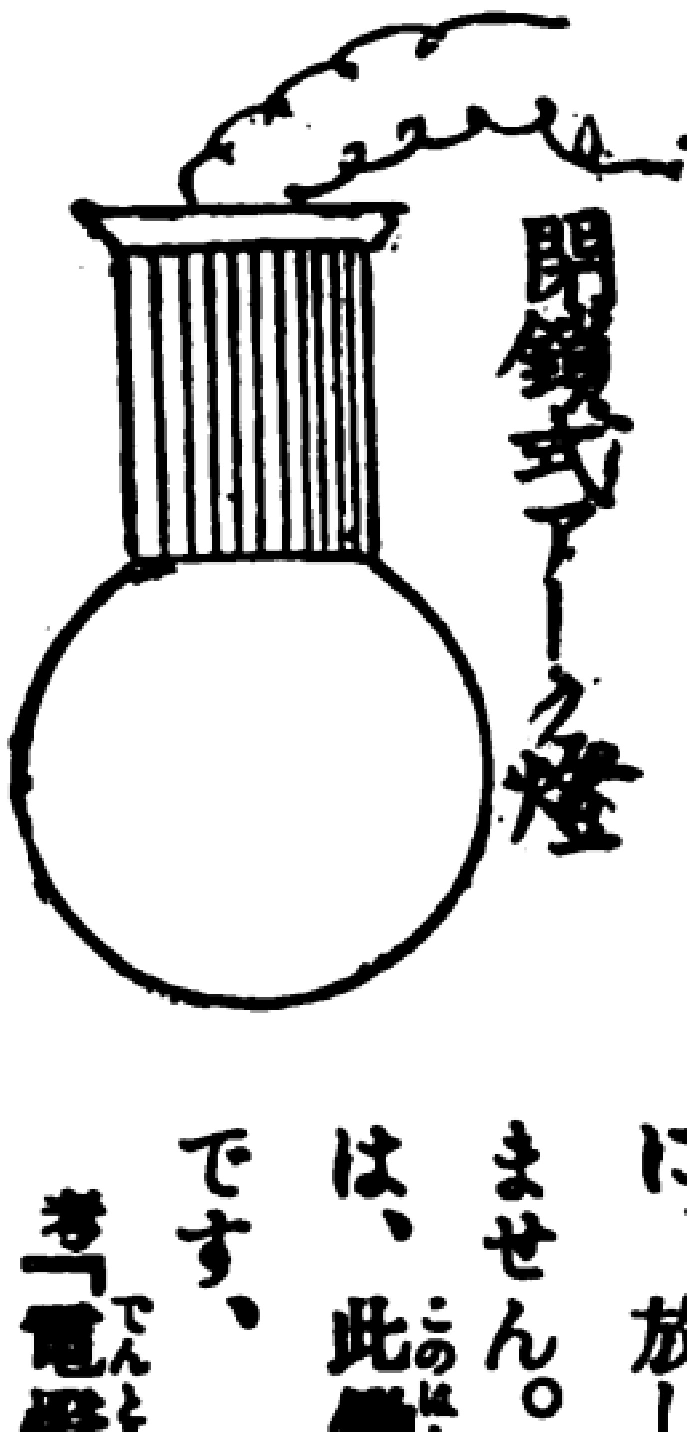


開放式アーク燈

開放式の方は、空氣が通ひますから、炭は耗ります、それだから、一夜毎に炭を取り代へてやるのです、閉鎖式の方は、初めに球の内にある酸素が、炭酸瓦斯になつてしまへば、最早炭は燃えません、それですから、炭を度々取代えずにすみます。

考「アーク燈の球の上に、丸い筒がついて居りますが、あれは何でせう。

坤あれは調節機と云ふものです、前にも云ふ通りに、炭の棒の端が焚えて耗りませう、そうすると、炭の間が段々アイテ來て、光が暗くなるから、それで耗つた丈け炭の棒を送つてやらねばなりません、又炭の端が餘り近寄つてもいけませんから、都合のよい程の距離に、放して置かねばなりません。調節機と云ふのは、此働きをします仕掛です、


閉鎖式アーク燈

孝「電燈會社では、電氣をドーして造り出して居るのでせう、

坤夫は一寸御話しても、分かりますまいが、發電機と云つて、電氣を造り出す仕掛がありまして、其裝置を蒸滊力で動かすと、電氣が流れ出るのです、流れ出ると云ひましても、電氣は水の樣なものではありません、熱、光、動力等と同じ類のものです、石炭を焚くと熱と云ふものが出來ます、其熱で水を沸かしますと、蒸滊が出來ます、蒸滊と云ふものは、膨らむ力のあるものです、そら鐵瓶のお湯が沸くと蓋が湯氣で動かされませう、あれは蒸氣がふくらむで、蓋を押し上げるからです、此力を使へる樣に都合よくする仕掛が蒸滊機械です、つまり蒸氣の膨らむ力が、器械の動く力に變つたので、此動く力を發電機に移しますと、今度は動く力が電氣と云ふものに變ります。發電機から出ます電氣は一本の太い銅の針金から、出て行き其先きが幾本にも分れて電柱の上にかけられ、諸方へ引かれて家々のランプに入り、そこで光に變りましてそれからランプを出て再び他の針金を傳つて、外のらんぷから出た針金と一所になつて、電柱に架せられ乍ら發電機の側迄來て、再び一本の太い針金に合せられて、發電機に戻ります。

孝「それでは、電燈會社で石炭を焚いて、熱や光を作つて、電氣の媒で夫を少し宛方々へ、配る樣なものですね。

坤「手短かに云へば、夫に違ひないのさ、併し電氣

媒に使うと、熱や光許りでない、他のもの丶動力でも方々へ分配する事が出來るのですが、御前は其例を御存じかね。

孝「何でせうね、此間學校で先生の御話に、電扇とか云ふもので、夏の暑い時に、電氣で團扇の車が回つて、人を煽ぐ樣にしたのがあるとか、オッシャイましたが此事でせう。

姉「夫もソーですが、まだ外に大仕掛のものがありませう。

孝「外國で使つて居るのでせう。

姉「東京で、しかも御前も一遍乘つた事のあるもの。

孝「ア丶電車ですか。

三、電車

兄の説太郎と弟の利口三は、田舍から上京して來ました從弟の菊雄を、新橋の停車場へ迎えに行きまして、三人一所に連れ立つて今歸る處でした。

菊雄は田舍に長い間居まして、ガタ馬車や汽車は知つて居ましても電車を見ましたのは、今度が初てゞ御座いますから、奇妙だと思ひましたのか。

菊「ヤー、馬がなくつて車が動いてら、

横鎗を入れるに拔目のない、イタヅラ盛りの利口三は、

利「菊さん、是はね、馬車の馬が逃げてしまつたものだから、車が鹿になつてアレ御覽、二本角を出して居ませう、

菊「鹿の角よりか、蝸牛の角に肖て居る、そして角の先に車がついて居るぢやありませんか。

利「是が抑々滑稽の種で御座い、菊さん田舍なら見世物にして、大儲が出來るだらう、東京では見るのは無賃で、三錢で何處迄でも乘れます、

説「菊さん是が電車ですよ、前に東京に御出での時には、馬車でしたね、アレが今度電車と改まつたのです

菊「何故馬車をよしたのでせう。

説「夫には種々の譯がありませう、第一に馬車では市の体裁が惡いでせう、馬糞が道に散る、夫が埃と一所になつて風につれて飛びませう、又雨が降る時なんか、

馬の蹄で蹴上げられた泥が往來の人にかゝつたりしませう、マダ夫もよいとしまして馬車では速くは走れません、西洋の方では種々の動力を使つて、交通の便利を計つて居るのに、日本のしかも首府の東京で、時代後れの馬車で往復して居るのも餘り智恵がなさ過ぎるぢやありませんか、

妻「電氣の代りに蒸滊では、車を動かせますまいか、

既「夫は出來るのです、此電氣鐵道の出來る前に、色々の說があつたのですがね、トウ〳〵電氣を動力にする事になつたのです、蒸滊車にしますと、煙突から出ます烟の始末に困りますし、又壓搾空氣にしますと不經濟です、夫や是やの都合から電車を用ゆる事になつたのです。

妻「滊車は前に滊鑵車がついて居て、列車を牽いて行きますが、電車では車を動かす仕掛は何處にあります、

既「車体の床下に、動力を出す仕掛がついて居ます、

利「夫こそ、椽の下の力持ちだ、

既「トコロが夫が椽の下の力持ではなく、此動力を車軸に傳えて、車輪を回はして車を前進させるのです、

妻「車道の上に、二本の針金が張つてありますが、あれは何の爲めです、

既「あれは、電車の發動機に、送る電氣を流してある針金です、あの針金の一方の端は、發電機と連ねてあるので、二本の中一本は車迄電氣を運んで來、一本は車から出る電氣を戻すのです、

妻「其外の針金には、電氣は通つて居ないのでせうね、

既「あれは、今云ひました、導線を吊るす爲めの針金です御覧なさい、所々に針金の中に、球がついて居ませう、あれは電氣が外に逃げない爲めで、あの球は電氣を通さないもので作つてあるのです、

妻「兩方に建てゝある柱は鐵でせう、

既「鐵の鑄物です、あれは鐵でなくつてもよいのですが、町の体裁をよくする爲にと、又腐らないから使うのです、此銀座の通りを通つて居るのは、東京電車鐵道會社の線路です、神田橋から數寄屋橋や半藏門の方へ敷いてありますのは、市街鐵道會社の持ちです、其

外にまだ車を運轉させては居ませんが、甲武鐵道會社、東京電氣鐵道會社等云ふのがあります、

（專）電氣がどうして車を動かすのでせう

（巫）順々に御話しますが、上にある導線を流れて居る電氣は、上の角の先について居る車から流れ込みまして、角の內を通つて居る針金を傳つて車体內にはいり、そこで二本に分かれます、一本は天井の眞中を通してあります、是はランプへ電流を送る爲めです、も一つの方は、車の前について居る、コントローラーと云ふ仕掛の內を通りまして、夫から床下にある發動機へ入ります、

アレ御覽なさい。運轉手の立つて居る左手にある、四角な函の樣なもので、上に少さな把手が二つあるのがコントローラーと云ふもので、あの把手の回はし工合で、發動機へはゐる電氣の量を加減して車の速さを變え、又電路を切つて電氣を發動機へ行かせない樣にして車を停めたりするのです、

右手にあるのは、利輪機と云ふもので、あれを一方へ回はすと車輪が回轉しにくゝなるのです、あれは車を停める時や、又坂道を下る時に使ふのです、

發動機から出て來ます針金は、ランプからの針金と一所になつて、屋根に上りそれから角を傳つて導線を經て發電機に戻ります、

（專）晝間は明がついて居ませんね、

（巫）晝間はランプへ連ねてある針金が途中で切つてありまして、電氣が行かない樣にしてあります、

（專）角の下の附け根の所に一本宛横にある短い棒は何でせう、

（巫）さつきから角角と云つて居ますが、あれは角と云ふものではないのです、トロリーポールと云ふものです、針金と蝶つて居ます小さな車の事をトロリーと云ふのです、又下について居る太い短かい棒は、ポールをなる丈け上に向けて、トロリーを針金から外させない爲めの重りでせう、又此車が返る時にはポールは逆の方向に直さねばなりません、其時にはポールについて居る繩で方向を變えてやるのです、

利子「ヨク考えて造つてありますね、是はどの位の早さで走れるのです。

武男「十分に速力を出させますと、汽車より早いそうです、併し市内では余り早いと危險です、又曲り角が多いものですから遲くしてあるので、一時間に八哩位です、上野から品川迄行きますのに一時間と少しかゝりますそうです、

利子「兄サン、私は足が疲れました。

武男「ホンニ話に身が入つてしまつて、忘れて居ました、サア御一所に電車に乘りませう、

三人電車に乘る。

車掌「ハイ動きます、

チン、ガラ〳〵〳〵。

（完）

水雷驅逐艦の話

故海軍大尉　長尾耕作

名は體を表はすとか古めかしい事は措置き、日本帝國の軍艦が、如何なる種類は、如何なる艦名を持つて居かを見るに、若干の取除けは勿論有るが、戰艦は泰然山の如く、其名亦三笠、富士、左もなくば敷島とか、八島とか呼ばれ、巡洋艦は、如何にも心地良げな、吉野、高砂、松島等の名所に因み、水雷艇は小鷹、鵲、隼等飛翔自在な鳥の名を冠らし、水雷驅逐艦は叢雲、東雲、霞、陽炎等の如何にも漠々然たる名を附けてある。尤も霓の如く山東岬角の邊で、消えて仕舞うなどは、國民の頭痛だが、驅逐艦の性質として、夜陰に乘じ、煙霧に匿れ、朦朧の中に其攻擊の任務を行う事などは、誰しも名に似た面白い處だと思ふであろう。記者は妙齢諸孃に、此驅逐艦の事を紹介しよう。

佛蘭西は新しきを好み、軍艦に甲鐵を裝する事、又は大砲の製法は着々新式を出し、水中潜航水雷艇も亦他に魁をなしつゝあるが、英吉利は云はゞ頑固で、容易に新式に信を措かない、然るに彼英利西が、眞先きに製造して自慢して居るのは水雷驅逐艦である。

驅逐艦は水雷艇の進化したのであつて、水雷艇の仕

事も出來、寧ろより善く出來て、水雷艇に恐れらるゝのである。水雷艇は其形も小さいので、速力も遲く、武裝も薄弱であるから、英吉利海軍では種々の實驗を重ね、若干の失敗を經て、漸く成功したのが此驅逐艦で其目的も公然と發表しておる。

大膽なる英吉利人は曰ふた。

戰爭が始まつたら、此驅逐艦で佛蘭西の水雷艇三百隻を、英吉利海峽や、地中海から追ひ拂ふのだと。

日本の驅逐艦は英吉利製で、一番早く日本へ來たのが東雲である、之れは外國人の手で英吉利から日本へ廻航したので、先年我海軍は、當初叢雲を彼地で我廻航員の手に受取り、即ち日本海軍將校が此叢雲を廻航する第一着で、東雲に先つて英吉利を出發した、然るに洋人は非常に奮發したのか、若干日後れて英吉利を發した東雲が、日本へは先着した、技倆の優劣は兎も角も、我海軍將校の方では、唯驅逐艦を日本の軍港へ持つて行くのみが、主意でなく、艦体機關の保存、取扱にも、無責任な事があつてはならぬと云ふ點にも重きを置いたに相違ないから、廻航上の點は決して洋人にのみ鼻高くさせる事もないのだ。

驅逐艦の目的は、第一に敵の水雷艇を擊破追掃するのではあるが、其れは驅逐艦其者の役務の一つで、夜陰に乘じ、又は霧降の際、碇泊又は航行中の軍艦を攻擊するのが其役務である。此外敵艦隊を港に封鎖した時又は敵の爲めに封鎖を受た時にも使役の途があり、又巨大なる戰艦の艦隊に隨從して行つて、我艦隊が敵の艦隊と交戰の初期には、成る可く敵彈の及ばぬ所に退いて其樣子を窺ひ、愈兩艦隊が混亂して互に雌雄を決すると云ふ場合に、一瀉千里の勢で驀進し、其水雷を敵に向つて發射すると云ふ好機會が無いと云へない。

實に戰艦一隻は千三百萬圓を價するが、驅逐艦一隻は四十萬圓である、其驅逐艦が戰艦に勝てば非常の利益ではないか。

英吉利の驅逐艦も、日本の驅逐艦も、構造上大差は無いから、「ブレーキ」氏の著書から、其記事を引用す

る、然し日本の驅逐艦は二種あつて、英吉利の「ソルニクローフト」會社製造のものは、夕霧とか、叢雲とか、二字名、「ヤーロー」會社製造のものは、朧とか、漣とか、一字名である其違ふた所は、第一全体の外觀、煙突の數が著しい點で、是等は更に述べる事として差置き、借英英吉利の驅逐艦の一に就て搆造の大畧を記載しましよう。

艦の長さは二百呎、幅二十呎、喫水凡そ六呎で、全体を厚四分の一吋なる良質の鋼鐵で作り、機關は五千馬力即ち通例 荷物船の馬力より強い、又其機關が推進機の軸を回轉せしむる回數は、一分間に四百回轉するである。排水量 即ち艦の重さ二百五十噸を算へるが、其搆造上 乘員の愉快と清潔とを幾何か犧牲に供して、滊機滊罐室を廣くしてある、之は一時間三十幾海里と云ふ大速力を得ん爲めの苦策である。

大砲は十二听砲が一番大きいのであつて、之を前部の展望室上に裝置してある。此十二听砲こそ實に驅逐艦が水雷艇を擊破する主要の武器で、諸君若し驅逐艦を實視せば、艦の前方で直に之を認むるに相違ない。其外に二門六听砲が兩舷に、一門が後部に置かれてある水雷發射管は二門あつて、海軍用魚形水雷の最も大なるもの即ち經十八吋の魚形水雷を發射する事が出來る。

探照燈一箇が又甲板上に据付られ、煙突、通風筒、三隻の端舟は甲板上所狹きまでに置かれておる。其上甲板は煤や、石炭の粉塵で黑く汚れておるが、通例である。

上甲板を下つて艦內を見れば、場所の節約が嚴に行はれ、前後七區劃に分たれておる、各區劃の隔障は防水裝置といふて、互に水が流通せぬ樣にしてある、一の區劃から次の區劃に行くのは、大艦の如くに扉を設けてない、一旦上甲板に登つて行くので、其の爲に鐵製の階梯が懸けてある。艦首一番の室は、錨鎖並に艦首で使用する必要具を收め、二番の室は水兵室である、水兵室の中央には食卓が置れ、兩舷には兵員の衣服を收める箱兼腰掛がある、此の食卓腰掛が夜に寢臺とな

るので、大艦の様に釣床を用ひない。此區劃の甲板下には彈藥並に魚形水雷實用頭部を收める所があつて上げ蓋で出入する様になつておる。

次の室も亦乘員の寢食する所で、總乘員凡そ六十名である、此室の下には淡水罐と倉庫がある。

其次の二室が驅逐艦の死活を左右する所で、即ち滊機滊罐室である、此二室は艦全長の三分の二を占め、全重量の半分を測り、八箇の水管式滊罐と二基の滊機が置かれておる。

焚火室即ち滊罐の前は、比較上廣いが、然し何れの艦でも同じ事で、艦航行中で働くのに最も苦しい熱い場所である。通常の速力を出すには滊罐の半數を焚けば充分だが、三十海里近くの速力を出すには全數を焚く上に、强壓通風即ち尋常滊壓よりは高い壓力で空氣を送り込み、焚火の强烈なる爲めに機關兵は色眼鏡を用ひないと眼が眩む位である。

滊機室の後は發電機と二個の淡水罐を入れた室で、此室は頗る狹い、又厨房に兼用してあるので室内の温度は常に高い。

其下部には乘員生命の綱たる麺包と「ビスケツト」がある、斯く艦内では僅々一吋の間隙でも決して無駄に打明てないのは、諸君最も注意す可き點であろうと思う。

次の室が准士官室で、其下層は小銃の彈藥を貯藏してある。

次は士官室で艦其者を考へると、最も愉快な室である、階梯を下ると極めて狹い房室があつて、此處で食器を洗ひ、又は格納する。士官室内には四個の寢臺と一脚の食卓があり、其兩側に座席が設けられ、其下は物品格納所である、其外小さき書棚に盃臺が便宜に取付けられ、美麗なる寫眞や額が室を明るくする程懸けられてある、士官室は勿論艦内で最も住易き場所で、暴風等の際に將校が當直勤務を終り休憩するに最屈强である、其直後が推進機の上部が艦長の室で、美麗なる寢臺書見卓、洗面具筐がある、然し艦長は士官で士官と會食するのが例である。

驅逐艦の艦長は大抵少佐で時としては古參の大尉が勤める事もある。

驅逐艦は大抵推進機が二個で、通例の舶用滊機を用ゆるが、英吉利驅逐艦の「ウアイパア」は、推進機が三個で「タアビン」式の機關を備へておる、此機械は蒸滊が直接に推進軸の車を回轉するのであるから、「ビストン」も「ビストンロッド」もなく、其速力は三十五海里であるとの事だ。

驅逐艦の生活は尋常一般の海上生活を去る事遠く、其乘員も成る可くは交換して休養を與へねばならぬ。艦の振動は全速力の時は隨分氣分を惡くするが、二十五海里の時は尙其より惡い又驅逐艦で、海に慣れた古い水兵でも船に醉う相である。驅逐艦に乘れば全速力で航行中に舷外に落ちぬ事に氣を付けねと溺れるよりは寧ろ推進機に卷込まれて頭を碎くは必然である。士官用として護謨製の輕便な入浴具があるが、兵員には亞鉛製の湯桶が備へられてある、然し浴湯は鹹水を用ゆるのである。航海中は煤烟石炭の灰塵の爲め隨分不潔で眼鏡を用ひなければ、眼を害する程である、然るに入浴に使用すべき淡水は全然無いので、三千「ガロン」内外の水を蒸溜する機械は有つても、其二千五百「ガロン」は滊鑵に呑まれ、殘餘は飲料水料理用に要するのである。

艦体は僅か四分の一吋の厚であるから、大砲の爲には擊沈され易く、又其甲板にある魚形水雷並に滊機鑵室は最も敵の狙を受ける所で戰爭中には宜しく敵に發見せられぬ事を考へねばならぬ。

然し其煙突から烈しく出る火炎は、夜中でも其來襲を知らしめる。

石炭は僅に八十噸内外しか積めないから、根據地又は石炭船から餘り遙か離れる事は出來ない、二十四時間二十海里の航行は其極度である、荒天には非常に動搖して其有力の武器たる十二吋砲さへ使用困難に至る事がある。

此驅逐艦は常に愼重に取扱はないと、直に其効力に關係を生ずる。其海戰上有力たるは疑を容れぬが、

未だ實戰に使用せられぬから、將來の運命は別らない、唯水雷艇には恐るべき艦がある事は斷言が出來る。大軍艦の如く、嚴重に乘員に規律を守らせる事は艦の性質上稍難いが、然し掃除並に兵器の手入等は、決して之を怠る事は出來ない。海軍將校として驅逐艦に乘組むは功名を成す最近の道で、其には危險も多く、辛苦も山をなす程である。然し水雷一發で一萬五千噸の大艦が沈めば、最大名譽は直に双肩に懸るのである。大丈夫將に屍を馬革に包む可しとは、我輩常に耳にする所であるが、記者は言はんとす、大丈夫將に驅逐艦上の犧牲たる可しと。（完）

魚形水雷の話

魚形水雷は種々あるが、我海軍の新艦は皆「ホワイトヘッド」式を用ひておる、水雷の事は元來秘密が多いので、記者は諸君に之を敎ゆる譯に行かない、玆には英國海軍で專ら使用する「ホワイトヘッド」水雷を說明する。

「ホワイトヘッド」水雷は火藥庫、機械室、壓搾空氣罐、舵器並に他の樞要機械を有する、複雜な自働小艦で、語を換へて云はゞ、其頭には二百二十听の綿火藥を詰め、壓搾空氣で機關を動かし、三十海里の速力なる爆裂船である、英國海軍では之を呼んで「babies」と云ふが、此赤兒は中々高價の赤兒で五千圓乃至六千圓を値する。

圖は水雷を架臺に載せた所だが、其外見は宛然銀の大形葉卷煙草の尾に鰭を附けた如くである、最も前部が爆發藥を收めたる頭部、次が空氣室、其れから秘密室、機關室、浮室と順次に連續し、最終端は尾框と推進螺である。

頭部には綿火藥を裝塡し、之に「ピストル」と云ふ發火裝置を附屬してある、其前端は尖頭ある金屬の棒が突出し、水雷が發射管から發射され、其方向に進行して、軍艦の底部又は他の堅牢なる物体に衝突すれば、金屬の棒は退て爆發管を衝擊し、綿火藥を爆發せしむるのである。

頭部の直後に位置する氣室は、水雷全長の三分の一を占め、中には武器の原動力即ち壓搾空氣を込め、其空氣の壓力は、毎平方吋に一千三百五十听である、

壓搾空氣を氣室に送るのは壓搾唧筒に依るのである。秘密室内には精巧の機械を装置して、水雷が水中を進行中、適當の深度を保持して行く調整を行はしめる、此室内には前後に動搖する重量物があつて、後部の舵と連絡し、水雷が定められた水深より下方に沈むときは、外部から水の壓力が増加するゆへ、忽ち舵の作用で所定の深度迄浮ばしめ、浮び過ぎれば、其反對の働作が起るのである、機關室には三十馬力の機械があつて、壓搾空氣は細き管を通つて氣室から流入するのである。浮室は其名の如く、水雷に浮力を與へるので此室の力によりて水雷を浮遊せしむる事が出來るのである。

尾框には舵を取附け、秘密室から作働せしめ、又後端の推進螺は、機關室内の機械で回轉せしめられる。

輓近製造の巡洋艦又は驅逐艦から、水雷を發射するのは、水中發射管に依りてし、水雷艇又は驅逐艦からは甲板上の旋廻發射管を以て發射する。驅逐艦の中で艦首に發射管を設けたのがあるが、實際艦の大速力で航行中は、艦の速力が水雷より早く、反つて之を追越す事があるので、今では專ら後部のみに装置する事となつた、驅逐艦は魚形水雷四本を載せ、中二本は常に發射管内に貯へ、二本は前部に格納してある。

大艦の水中發射管には、製式種々あるが、我海軍のものは秘密である。

水雷を發射管から發射するのは、「コルダイト」の小量又は壓搾空氣力を以てする。

水雷の有效距離は凡そ一千碼で、距離が近い程命中の確實が保證せられる。

英國海軍では、五千本も水雷を貯藏し、「ポーツマウス」軍港丈けに一千本ある。

此「ホワイトヘッド」魚形水雷の製造權を得る爲に、英國海軍省は十五萬圓を「ホワイトヘッド」氏に支拂ふたとの事だ。

魚形水雷は水雷庫に在る時、既に十分其工合を檢し、之が艦船等に配付せられた後は、毎週、毎月又は年數に從ふて、手入檢査を行ひ、其發射等の成蹟、其他の記事か、綿密に錄取せられるのである。魚形水雷の大さは、十四吋、十八吋の二種で驅逐艦には最大のものを用ゆる。(完)

(以上二件中學世界より轉載)

戰 爭 談

(熟語使用法練習)

To bear out

日本は正義のため戰へり、世界は皆之をみとむ。

Japan is fighting for the sake of justice; all the world *bears* her *out* in this. (her は日本國を指す)

To bear out＝辨證す、維持す、正當なりと見做す。

To bear the palm

日本は露西亞に勝つや疑ひなし。

No doubt Japan will *bear the palm* over Russia.

To bear the palm＝勝利を占む、優勝を得、秀づ、(勝利者に palm の枝を與へしは希臘古代のオリンピア祭の演技の折の習慣なりき、此語は即ち其故事によれるもの)。

To bear up

露西亞巡洋艦ワリアク、及び同國砲艦コレーツは日本艦隊の攻擊に堪ゆる能はずして、港をさして退けり。

The Russian cruiser *Waryag* and the Russian gunboat *Koreetz* could not *bear up* against the attack of the Japanese fleet and retreated to the harbour.

To bear up＝支ふ、堪ゆ、もちこたへる。

To bear upon

戰爭は東洋の貿易に大に影響す。

The war *bears* much *upon* the trade in the East.

To bear upon＝作用す、關係す。

To beat back

露國軍艦は我艦隊のために擊退せられたり。

The Russian men-of-war were *beaten back* by our fleet.

To beat back＝退かしむ、歸り去らしむ。

Before long

露國海軍は遠からず破滅せらるべし。

The Russian navy will be broken down *before long*.

Before long＝間もなく、直に。

To be friends

我國は最早魯西亞と親しくする能はず。

Our country can no longer *be friends* with Russia.

To be friends＝仲よくす、親交す。

ヴヰクトリア女王（前號のつゞき）

Nor did she know anything of the heavy crushing sorrow which came to her mother very soon after this; for the baby was only nine months old, only just beginning to laugh, cry and play, when her father, the Duke of Kent, died.

He was very fond of his litter girl, and very proud of her too, and although it seemed so unlikely to everyone else, he always thought that she would some day sit on her grandfather's throne. He would hold her up in his arms and say to his friends, "Look at her well; she will be Queen of England!"

One day he had been walking in the grounds, when a heavy shower of rain came on, and he hurried in to change his wet clothes. But on his way to his room the Duke saw his little girl, and he could not help stopping to have a game of play with her.

But the Duke stayed too long, for a chill struck him from his damp clothes; he was taken very ill, and soon little Princess Victoria was fatherless. But she had a good loving mother, who took every care of her little girl, and did all in her power to train her to be a useful woman.

(*to be continued.*)

又この後すぐ御母君の身の上に起つた重大なる、滅入るばかりの悲嘆に就ても、このお姫様は何事も御存知なかつたのです。何故と申せば、嬰兒さんはまだ僅に九ヶ月で、ちやうど笑つたり、叫んだり、また遊び初めなすつた頃に父君のケント公爵はお亡くなりなすつたのです。

父君は甚しく小さいお孃様を可愛がり、また自慢して居られました。そして外の人々には、まことゝは思へませなんだが、父君は、いつかは此お孃様が其祖父君の位を繼れるだらうと常に考へて居られたのです。いつも腕に抱き上げて友達に向て申さるゝには"あれを能く御覽、英國の女王になるだらうよ!"

或日父君はお庭先を歩いて居られました、其時非常な大雨が降り出しました、そして其濡れた着物を着換へんため急いで内へおはいりになつたのです、然し自分の部屋への途中で公爵は其小さいお孃様をお見掛けなすつて、一緒にお遊びを一番しなくては辛抱ができなかつたのです。

しかし公爵はあまり長く其處で居られました、なぜと申せば惡寒が濡れた衣服の爲に起り、非常な御病氣になり、後、まもなく小さいお姫様ヴヰクトリアは父君を失はれました、併しいとしい善い母君は生存して居られ、其少さいお孃様を何くれとなく世話し、力の及ぶかぎり、有爲の婦人とせんとて敎育なさいました。

（つゞく）

會　話

Mitsuko.—How sorry we are to think that our brave soldiers are having such a hard time in the battle!

ミツ子. なんと云ふ氣の毒な事でしよふネー、日本の勇氣ある兵士たちがいくさで困難をされて居る事を思ひますと。

Haruko.—Yes indeed, we must have great sympathy with them.

ハル子. ほんとふでございますよ、私共は大ひに同情をもたなければなりません。

Mi.—Well, we girls also can give some kind of help for our country.

ミツ子. マー私共も御國の爲め何かつくさなければなりません。

Ha.—First of all we will try as much as we can save some money, and send them to the office of soldiers for some use.

ハル子. 第一我々はいくらかおかねを出來るだけためて何かの御用に軍部へお送り致したい物ですネー。

Mi.—And then, it is our duty to help and visit these poor families, who are left in such poor conditions.

ミツ子. それから、あとに殘されたあわれな有様に居る家族をたすけたりなぐさめるのは我々の義務ですよ。

Ha.—O Yes, how cold and hungry they must be in their poverty.

ハル子. そをですよ、どんなに不幸の内にうへたり、こゞへたりして居るでございましよふ。

Mi.—And yet we must teach them that their husbands, sons and young fathers have gone to do their noble duties for our beloved Japan, so they too must keep up their courage, and fight for many troubles and cares.

ミツ子. そうして又彼等の夫やむすこや又若き父親達は御國の爲め己れの義務をはたしに行つたのですから彼等も亦た勇氣を出して困難や心配と戰ふ樣に敎へてやらなければなりません。

Ha.—Now we have time enough to go around and visit some poor family, so let us go and we will begin our work.

ハル子. 今丁度暇がありますからこれから其憫な家族を見まいに出かけましよふ、そをして私共の仕事を始めましよふ。

Mi.—O, I am so glad to go with you.

ミツ子. エヽ、私は御一所に行くのが、マーどんなにうれしひでしよふ。

眼の記臆 (植物の部)



サヽゲ



ゴマ



アヂマメ



モチイネ



アツキ



ムギ



センダン



サクラ



アヂサヰ



アフチ



ヤナギ



キリ

雜錄

戰爭と家庭（軍國の輿論）

今回の戰爭は單に兵士軍人のみの戰爭にあらずして實に國民一致の戰爭なり、日本全國の國力國費を擧げて戰ふべき大戰爭にして直ちに國の運命に關す、されば國民の死活休戚は擧げてこの一戰にある事と覺悟せざるべからず此際我が家庭が如何に處すべきかに就ては之を海內の輿論に徵せん

▲軍人家族の扶助

日露の戰爭は我國未曾有の大事にして國の安危の繫る所なれば、苟も日本人たるもの各々其職分に應じて力の及ぶ限り國の爲めに盡す所ある可きは勿論なる中にも、直接軍役に從事する海陸軍人は五千萬の國民に代りて砲煙彈雨の下に護國の犧牲たらんことを期するものにして、國民一般に感謝措く能はざる所なり、左ればば彼等の勞苦の萬一に酬いんが爲めに人々資力の許す限り或は金品を醵出して恤兵の資に充て或は出征軍人の家族を扶助して後顧の憂なからしむる等孰れも當然の處置にして其內にも家族扶助の一事は此際最も緊要のことに屬するを信ずるものなり、抑々我海陸軍の兵士は重に中流以下の出身にして殊に豫後備役に在る者には一家を經營して妻子を養ふの責を負ふものとそ多けれは其主人が一朝の動員令に忽ち戎衣を着くるの身と爲るときは後に殘りし妻子は其日よりして糊口の道を失ひ、路頭に迷ふものもあらん、人生悲慘の極と云はさる可からず、固より一家の幸不幸の如き國の大事には換ふ可からず、家を忘れ身を忘れて兵馬の間に馳驅するは國民の本分にして身を以て其事に當るは無上の名譽なるに相違なしと雖も、從軍の義務を負はざる一般人民にして軍人の家族が斯る慘状に陷るを傍觀しながら一臂の力をも添へずとありては從軍者に對しても國に對しても何とも申譯なき次第ならずや、軍人家族の救護の必要止む可からざる所以にして有力なる人士

中にも兼てより其事業を計畫するものなきに非ず、現に愛國婦人會、軍人遺族救護義會等二三の團體ありと雖も、創立年尚ほ淺くして十分の財源を有せざれば其事業に多きを望む可からず。只此上は各地方の自治區域もしくは便宜の區劃に從ひ土地の人々相協同して、其地の出身に係る軍人の家族が生計の狀態を調査し扶助の方法を立つること肝要にして其方法は金品を給與するも又は交代を以て其田畑を耕耘し營業を助くることゝするも可なり、孰れにしても全國各地に此種の事業の起らんこと切望に堪へずとして茲に注意す可きは都會の地には他地方より、寄留せるもの多きことにして例へば東京の如き四隣互に其故郷を異にせる寄合身上なるを以て地方の如く隣保郷閭の情誼を見る可からず。吉凶の慶弔も自から冷淡なるを免れざれば軍人の家族を扶助するの方法を立つるにも甚だ困難を感ぜざるを得ず亦止むを得ざる次第なれども、此場合のことなれば町内の重立ちたる人々が大に奮發して同町内に於ける軍人の家族に對しては平生は赤の他人なりしものも先祖代々隣附合を爲したると同樣に待遇し、苟も出征軍人の家族にして饑寒に苦むものを出すは其町内の大耻辱なりと心得、力の及ぶ限り救助の方法を設くること肝要なる可し、要するに軍人家族の扶助は啻に一片惻隱の情に出づるものとして見る可からず其饑寒を救ひて衣食の道を授くるときは、從軍者も爲めに後顧の憂を去りてますます勇奮の氣を生ずるは必然にして、即ち國の爲めにも利益ある次第なれば今よりして全國到る所に是種の計畫の成立せんこと我輩の呉々も希望する所なり(時事新報所說)

▲戰時の女性

戰時の女性は如何に處す可きか、是れ今日に於て聊か一言を要するもの。

犒兵の如き、看病の如き女性の手を勞すべき多々、是れ必ずしも言はじ、但天下の女性は其の數男子に超ゆといふ、今日如何に戰時に在りといふも、未だ全國二千萬の女性を驅りて盡く赤十字事業に奔らしめざるな

り、特殊なる女性の任務は、未だ以て一般の爲めに言ふべからず。
女性は平和に宜しくして、戰鬪に宜しからず、人類の世界は權利競爭の修羅場なれども、彼女等は戰鬪員に非らずして、非戰鬪員なり、局外中立者にあらずして其實寧ろ戰爭の目的物なり、男子は他に勝つことを名譽となせども、女性は他を和らぐることを光榮とせざるべからず。女性を保護するは男子の名譽にして、男子の腕に投ずるは決して女性の恥辱にあらざるなり、ゲーテは若きヘルマンの口を藉りて云く平生の浮沈を問はず、己れ一身を計るに急に、衷心苦樂に同情する無くして可ならんや、苦樂は人生の恒態なり、苦樂を分つこそ人情にして、斯る時(亂離奔竄の時)いとゞ伉儷をぞ欲しかりける。なべて女性は一身を寄すべき良人有り、又男子は不幸に際し、我れを慰め、我を勞ふ好逑あるべきにこそと。
吾徒は直接女性より軍國に對する寄與貢獻を望まじ、然れども女性の立場としては又男子の苦辛に同情して其の慰藉奬勵の道を講ぜざる可からず。只女性は平和に宜しくして戰爭に宜しからず、勿論吾徒は戰爭は盡く殘忍にして無道なるものとのみ看るものにあらず、何となれば戰爭は人間勢力の漏溢にして、一種の遊戲衝動に外ならず、此の點に於て戰爭の後世大に美化さるゝの日あるを期すべきなり、平和の天稟ある女性が直接止戈戢兵の說に周旋せんよりは、寧ろ戰爭を美化するに向つて補助を與へんと捷徑にして有效ならずといふべからず、是の故に今日の女性たるものに告ぐ、彼等が戰時に於ける心掛けは第一、戰爭其ものに向つて弟妹幼兒に物語りを供せんよりは、戰爭の目的に向つて說明せざるべからず、戰爭の目的は平和に在り、平和の關鍵は商業に外ならざるを以て、滿州、西比利亞地方の地理風土の珍しき事物を語り聞かし、汝の父兄が今現に此の如き土地に遠征しつゝあるを示して、彼等の好奇心を利導し、以て他日移住通商の氣風を作興するに努めざるべからず、實利を收めざる空戰は何等の意味をもなさゞるを以て、吾人は首として戰

後の人心を拓開し、此方面に於ける國民の擴張を計らざる可からず、第二、無道なる露人の野蠻行爲を語り聞かして、幼童の眞率なる復讐心を喚起すが如きを避け、單に我軍の寛容なる處置精神を讃へ、且説明するを要す、第三、戰時は喪時に居るが如く國民が擧げて謹愼す可きの時なるが故に、勤儉を勵行するは勿論なれども、奢侈の以て少數者の心を驕らしめて多數下民の嫉妬心を激發し、以て社會の親和力を傷くるが如く、勤儉を誤解せる利己は、全社會の各員をして互に相陷らしむ、故に其の結果は奢侈よりも恐るべきものあり、戰時は動もすれば人の利己心を挑發し易からしむ、勤勞と、儉素は人間至高の美德なり、淺薄なる女性の誤りて卑吝となり、利己となるは、恐るべき危險なり、これ亦彼女等の注意を要する所なり。（二六新報所載）

▲國民の覺悟

▲國民皆兵なり。この覺悟なきものは日本國民にあらず、十二師團三十万噸の海陸軍は、四千五百万の心を以て直接事に當らんとしつゝあり、彼等の活動は吾人の活動なり、彼等の生死は吾人の生死なり、同心一精神自ら銃を提げ水雷艇に乘込めるものと覺悟せざるべからず、此覺悟を以て軍人及軍人の家族に對すべし。

▲吾人の熱望する所は、各人財産の幾分を割き、以て將に募集せらるべき國庫債券に應ずるの準備をなさんことこれなり。

▲國民が日々空しく費消して、之が代價に疾病饑渇盜賊姦淫、あらゆる罪惡を受取りつゝある、飲酒慾是也。全國に於いて費消せらるゝ酒類は、一年約一億三千萬圓に達すべく、一人平均三圓に當る、記憶せよ此額は單に酒類の代價にして、此丈の酒類を費消するが爲に、併せ費す肴代、之に伴ひ來る藝妓代娼妓代一切を合算せば、果して如何程の巨額に上るべきか。

▲酒類に次いで煙草及茶あり我國民が一年間に費消する煙草は約三千萬圓、茶は一千二三百萬圓を算すべし。

▲吾人は國民に一切酒煙草茶の費消を廢止せよと勸告するの不可能を知る然れども日露戰爭は國家安危の分

る丶所、國民生死の決する所、少くとも我帝國が日淸役の結果として得たる一等國の名聲をいよ〱大にするか、將た二等國三等國に墜落さるべきかの大勝負たるべきぞ。此非常の時に於て非常の決心を覺悟しつ丶ある國民は、吾人の總代として二つなき身命を的に戰はんとしつ丶ある同胞軍人の顏に面じても、少しの肉慾を抑制し得ざるが如き、吾人は信ず、此の如き小人は決して一人も我國内にはこれあらざるべし一ヶ月一圓の酒を飮む者は五十錢に節せよ、藝妓の酌にて酒を飮めるものは女房の酌にて我慢せよ、キングフイッシヤーを吹烟すものはヒーローにせよ、ヒーローを吹烟す者は大鹿にせよ、食後の茶は番茶に下げよ、白湯は神聖なる飮料なり、此の如き節慾は少しの苦痛にして、之を忍ぶものは以て疾病を免るべく、罪惡に遠ざかるべく、以て時間を節すべく、修養の機會を得らるべし、若し酒烟茶の費を半減し得べくんば、一年優に三四億圓の流動資本を剩し得べし此額を以てせば、年々數十隻の大軍艦を新造すべく、百二三十師團の兵を養ふべく、各府縣の教育費を百倍すべく、郵便電信を無代公開し、數千の施療病院を起すを得べし、たとへ何年戰と爭ふとも少しも軍資に困るとは無かるべし。

▲臥薪嘗膽の眞義は實行にあり、徒に聲を大にするとも實行なき聲は遂に半文の價値あるなし、貧富を言ふ勿れ老若を論ずる勿れ各自箇々、身近き所より實行せよ、願くは吾人の聲をして半文の價値なきものたらしむること勿れ。（河西環）

▲戰爭と節儉

戰爭中の儉約の仕方については色々考へ方もありましようが、私は先づ小事二三を擧げたいと思ひます。儉約は小事を愼むより起るわけでありますから。先づ其第一は來客に茶を出すことを節し、次には菓子を出すとを減ずる樣にしたい日本では何でも來客さへあれば直ぐに茶菓子を出しまして、至極深切ではありますが、其爲に家の者にムダな手數をかけ又客の早く歸りたいのを强ひて長く止め、又不經濟である上に、主客の衛

生を害します。そりやタマに來られた親しい人と懇談などする時には茶菓子は至極結構でありますけれども、誰にでも出すのは餘り叮嚀過ぎて無用ではありますまいか。西洋は贅澤とは申しますけれども、誰にでも茶菓子を出す程には贅澤ではありません。

其次には料理屋の宴會を全廢することであります。今の宴會の樣な金ばかりかゝつて、そうして何の益もないものは恐らくはありますまい。もし公の會合ならば公の會合所で單純にしたらば、夫ですみましよう。懇親の會ならば自分の宅でやつたらば、夫で宜くありましよう自分の宅でします會と料理屋でしますのと、同じ快樂で非常に經費が違ふとは申すにも及びますまい。

其上、宅ですれば酒なども餘り醉ふ程飲む人もありますまいし、醜業婦などに無用の財を使ふ必要は全くありますまいし、誠に簡易で面白く出來ます、此三つを節するだけでも年に勘定したらば非常の儉約が出來ることと思ひます、一体日本人は富の割には奢り過ぎて居りますから、此戰爭を利用して、どうか儉約な習慣を附けたいものであります、戰爭に大變な金がいり戰爭がすんでも中々金は益々いりましようから、決して戰爭前の樣なノンキな風では立ち行きません、一度砲門を開いたらば、國民はチャーンと此丈の覺悟をしなければなりません(某教育家談)

▲各國公使夫人の厚意

今回の開戰に就ては各國大抵我邦に同情を表し特に我が赤十字社事業には最も厚き同情を寄せ居るが今度英國公使マクドナルド氏夫人佛國公使アルマン氏夫人白國公使男爵アルベルダヌメン氏夫人伊國公使メレガリー氏夫人墺國公使アンブロー、アダモーツ氏夫人等發起と爲り閑院宮妃智惠子殿下の御賛成を得我が赤十字社看護部に寄附金を爲さんが爲め本月五日午後三時上野公園音樂學校音樂堂に於て盛んなる音樂會を催し内外朝野の貴紳貴女數百名を招待する由當日の演奏者は

テーン夫人　幸田延子　幸田幸子
ユンケル　ハインリッヒ　メートランド
プール　外音樂學校敎授一同

演奏者は何れも内外に知られたる名手なれば當日のヴアイオリン、ピアノ、合奏、獨吟等聽者をして最も感動せしむべし入場料及寄附金の全部は悉く赤十字社に寄贈する筈

▲毛利家の奉公

公爵毛利家にては今回の軍債に百万圓應募せらるゝ趣なるが尚ほ奉公の万一に供し度しとて秘藏の古金銀類を取調べられたるに大判小判扨ては蓮り眩き珍器什貨の數ある中に故太閤の大坂城にて「軍旅之外不可用他事」と彫める金塊さへありたる趣にて是等は悉く軍事の資に供せらるゝ筈なる由

東報

●日進春日の歡迎會

今回の戰爭に我が精鋭なる艦隊に新勢力を加へたる日進春日の兩巡洋艦を回航し來れる委員諸氏の歡迎會は去十九日午後一時より東京日比谷公園に於て開かれたり、此日天氣晴朗、昨日まで吹荒みたる北風も融々たる春風と變はりていと長閑に麗かなる天氣なりし當日の景況は

▲正門附近の雜踏　同門は正午頃より見物人群集し雜踏しかば門の左右に二條の電線を張り數十名の警官と數名の騎馬巡査絶えず警戒したるも二時頃に至り愈々益々群集し來り其數幾萬なるを知らざりしがその大多數は當日の會員に非ざれば會場に入るを得ずして空しく外部に佇み雜踏を極めたり

▲會場　會場は方數十町の日比谷公園を其の儘に裝飾して球燈と花火とは空に高く音樂と爆竹とは地上に鳴る、絹帽、山高帽、フロックコートと燕羽織袴に角に市民が敬意を其服裝にも現して午後二時半といふに式場に入來れる珍客、リー(日進回航長)ペインタア(春日回航長)アームストロング會社の代表者ボイルの三氏を初め十數名の英伊兩國回航員並びに我が回航士官としての竹内大佐(日進回航長)加茂機關中監(同)丸山大尉(同)の三勇士を迎へたり式場は西北隅の芝生にて餘興の土俵へ白布敷きてそれに充てあるが會の總代東京市長尾崎行雄氏立つて歡迎の辭を述ぶこは多くは儀式的の言なりしもたゞ「吾人は單に個人として諸君を歡迎するのみならず亦た今の時局に際して深厚なる好意と同情とを我が國に注ぐ西歐文明諸國の名代者たる意義に於いて歡迎し且つ感謝す」の語は彼等に取つて深く愉快に感じたるならん次いで彼等に紀念章を呈したるに彼れ等は直ちに之れを胸間に着けボイル氏起つて答辭を述べたり

▲附園の粧飾　廣き公園の繊樹には一面紅白無數の球燈を吊し日英伊三ヶ國の國旗を樹てたれば其美觀譬ふるにものなく其欄干には數百の見物人群り登りて場内を覗ふ樣物凄くも又盛んなりき

▲萬歲の聲　斯くて午後二時廿分海軍々樂隊の吹奏と共に兩艦の回航員は正門前にて馬車を下り粛々として場内に進み來りたるを今や遲しと待設けたる會員は一齊に萬歲を唱へたり其聲百雷の一時に轟くが如く戰捷國民の意氣天に沖するの慨あり

▲運動場の大天幕　正門を入りて左の運動場には五ヶ所の天幕を張り其一を發起會員休憩とし其他の三ヶ所を通常會員席とし其一部を内外新聞記者休憩所となしたりさて始めは通用門を開放しつゝありしが遂に午後三時頃より見物益々群集し押しつ押されつして場内にも入込まんとする凄じき有樣に警戒の巡査も到底制し切れずなりしかば已むなく通用門を閉鎖するに到れり

▲海軍々樂隊　海軍々樂隊は同公園内築山上二ヶ所に分れ代る〲吹奏し一團體は昨朝横須賀鎭守府より來りしものなるが此二團體の一團體丈けは午後七時芝口一丁目の加治屋へ一泊横須賀へ引揚ぐる事に決し又横濱の團體丈けは帝國ホテルの夜會へ廻されたり

▲夜の景況　夜に入りての日比谷公園は正門のイルミネーションを始め園の周圍に吊せる球燈悉く點火し尙運動場には市の徽章を現はしたる花瓦斯二個を點火し惠比壽其他のビヤホールは各店頭に球燈又は大行燈を揭げたれば園内燦然として白晝の如く煙火は四方の池畔に絶えず打揚げられ芝生の廣場には午後五時半より市民有志の祝捷會の催しありて諸人の入園を許したれば其群集雜踏は非常にてさしもに廣き園内も人を以て埋められしが如く其處此處に間斷なく起る萬歲の歡呼は宛然天地を動かすかと怪まるゝばかりなりき又當夜晩餐會場に充てられたる帝國ホテルは玄關屋上に花瓦斯を以て日英伊三國合併の徽章を現はし庭前には數千の球燈を點じたれば此處にも見物人群集して同所附近には又是れを當て込みの諸商人の露店を張るなど晝にも増して一層賑ひ市中も亦銀座通りを始め目貫の場所は軒提灯を吊し重なる商家はイルミネーション或は花瓦斯を點じなどして非常に賑へり

●水戸家の古金銀

舊御三家の一たる德川侯爵家(水戸家)にては今回華族に率先して寶庫を開き昨日巨額の古金銀貨幣及び純金器具類を日本銀行に納めたるが中に最も珍寶とも稱すべきは烈公の奥書を附せる直徑五寸巾一寸位の古鏡形の純金製藥用品にして其重量一貫二百餘匁此の鑄潰價額五千餘圓の

物なり倫は此外烈公が此金銀は軍用金以外に使用すべからずと自署せる金銀塊等もあり換算金額は目下日本銀行にて調査中なるが驚くべき金額に上るべしと云ふ

●園田氏の金杯金鎖

帝國ホテルに開催されたる國民後援會の席上十五銀行の頭取園田孝吉氏は此國家大難の時に際し人々が秘藏せる古金銀並に金屬類を賣却し以て軍資に應じ且つは我兌換準備の基礎を強固ならしむべしとの事を討論したるに其後續々書を氏に寄せて贊成の意を表するものあり同氏は一昨日金杯七個金鎖一個を添へて日本銀行に購入方を依頼したり而して其代價は千七八百圓なりと云ふ

●毛利家の勤儉

毛利公爵には周防國三田尻に住居の處宣戰の詔勅公布の報同地に達するや即日出立十二日の夜着京し翌朝參內せられしに平常の例に異なり特に拜謁を賜はりしかば公爵には斯く深厚なる恩召に感泣せられ且つは軍國の容易ならざるを察し自ら食膳を減じ諸經費の大削減を命じ留て軍資に應ずるの計を立て即ち日用須要品外の諸商人は堅く出入を禁じ時局に關せざる寄附金は一切之を爲さゞる事に決し更に家扶家從等をして今回の事情は勿論今後の用意として更に月俸の二割內外の積金法を定めしめ以て奉公の萬一に報ゆべき旨を訓諭せりと云ふ

●愛國婦人會總裁の諭旨

愛國婦人會總裁載仁親王妃智惠子殿下には時局の發展に伴ひ、會員の奮勵を望ませられ、本支部會員に對し、左の如き御諭旨を賜りたる由

諭　旨

我愛國婦人會は日を逐ふて隆盛に赴くも本會の目的に對しては前途尙ほ遼遠なり各職員諸氏は刻下の時局に鑑み一層奮勵して事業の擴張に勉めんことを望む

愛國婦人會總裁載仁親王妃智惠子

尙は會長公爵夫人岩倉久子氏より各會員諸員に對して與へたる告知は左の如し

愛國婦人會員に告ぐ

總裁殿下の御諭旨を奉體して愛國婦人會員たる淑女達に告ぐ抑も本會が戰病死者の遺族及び廢兵の救護を主張せるは往者を回想して來者を奬勵するの旨趣に外ならざるなり近日國際の關係平穩ならず危機漸く相迫れるが如し實に前古未曾有の事變にして形勢の推移する所殆と端倪すべからざるものあり不幸にして平和破れ干戈相交るに至らんか陸海の戰鬪は各方面に惹起せられ死傷者の數も亦甚だ多かるべきは今より豫測するに難からざるなり此際本會會員たらん者は特に事業の擴張を圖り救護の方法を講じ一朝戰端開けるに方ては遺族及び廢兵の慰安に勉め外征軍人をして後顧の慮なく一意專心君國の爲め其本分を盡さしむることを期せざるべからず是則本會設立の主旨にして洵に刻下の急務なりと信ず淑女達は厚く殿下の御諭旨を奉體し留て會旨遂行の準備に盡力せられんことを望む

愛國婦人會長公爵夫人岩倉久子

●愛國婦人會の活動

今回の戰役に際し非常の盡力を以て活動せんとの計畫をなし差當り仁川、旅順海戰に於ける戰死將校以下に弔慰金（水兵、兵卒五圓、下士七圓五十錢、尉官十圓、佐官十五圓、將官二十五圓）を寄贈する事に決し尙戰死者遺族へは臨時相當の香奠をも寄贈する見込なりと又同會より在韓軍隊、聯合艦隊へは既に慰問使を派遣せしが近頃亦第二師團、近衞師團等へも慰問使を派遣したりといふ

●赤十字婦人會總裁の諭旨

日本赤十字社篤志看護婦人會總裁彰仁親王妃賴子殿下には本社救護事業開始に伴ひ其翼贊の主旨の貫徹せん事を望ませられ本支部會員に對し左の御諭旨を賜はりたるにより會長侯爵夫人鍋島榮子は直ちに會員一同に傳達したりと

本會は國家有事の日に方り軍人傷病者の看護慰問本社救護員の送迎慰勞其他種々の行動を爲して本社事業の翼贊に勗むる事を旨趣とす曩には二十七、八年の戰役及び北淸事件等に際し會員各應分の力を盡し社業を贊助せしが不幸にして今又一大國難に遭遇し將來或は前役に數倍するの慘狀を見るに至るやも測りがたく從て本會の執るべき業務も亦た一層繁多なるべしと思惟す會員諸氏同心協力國家の爲め益々奮うて本會の主旨を貫徹せんことを望む

明治三十七年二月

日本赤十字社篤志看護婦人會

總裁　彰仁親王妃賴子

●篤志看護婦人會の申合

赤十字社篤志看護婦人會は去月五日本社に於て職員會を開き左の事項を決定せり

職員集會申合條項

一本社救護員派遣の節は會長副會長幹事の內若干名づゝ停車場若くは横濱港まで見送り其行を壯にし引揚げの節も同樣之を歡迎する事
一陸軍省海軍省及び本社へ献納用の繃帶製造場所を在澁谷本社病院內に設け會員若干名づゝ其製造に從事する事
一東京支部に於て患者休養所を設置せられたるときは同部へ交涉の上會員中の有志者同所に出張其勤務を幇助する事
一本社若くは東京支部より協議あれば會員若干名づゝ從軍に從事する事
一護送患者一時に多數通過の儀豫め相分りたる節は職員の內若干名停車場等に出張慰問の事
一職員若干名づゝ豫備病院入院患者を慰問し或は患者に物品を寄贈する事
一本社出張の救護員を慰問し又は之に物品を贈與する事
一會員中(修業證書を所持する者に限る)實地看護志望者を取調べ其人名を本社長に提出する事
一豫備病院より繃帶の洗濯若くは卷替等依頼ある節は之に應ずる事
一當分の內每金曜日に例會を開く事
一臨時に幹事七名を增員する事
一會員へ寄附金を依頼する事

●婦人教育會の日露開戰談

同會にては時局に鑑る處ろあり去二十日神內少佐を聘し「日露開戰と婦人の覺悟」といへる題にて痛切なる軍國的演説あり。聽衆約二百名演説の詳細は次號に紹介せん

●出征軍人家族慰問婦人會

東京なる各婦人會にては今回重立ちたる者發起して表題の如き會を組織し、專ら軍人家族慰問に盡すべしと

●赤十字船の出發

博愛丸に乘組むべき理事吉川元雄、醫長岩井禎三兩氏及び救護員看護婦等の一行は昨日午前十時三十分新橋を發して横濱に赴き乘船し博愛丸は直に佐世保に急航したり弘濟丸は明日出發の筈なり看護婦の人名は左の如し

▲博愛丸　看護婦長園村てふ、同稻田ゆき、看護婦村瀨ひさ、渡邊よし、秋元みち、山崎きく、石川たき、由良ちう、田中たれ、石川しづ、高木うめ、青井てつ、香川みどり、舘けい、大橋ゆう、堀江ため、小原竹代、玉木ゑい、小串りよう、芝崎はる、原ひで、加藤いは

▲弘濟丸　看護婦長野崎しゑ、同在田のぶ、看護婦高田やほ、山口はつ、池田ちゑ、奥野うめ、前原せい、小澤しま、山田ふで、中島やゑ、栗原きん、井出辰野、田中ゆき、加藤しん、大田とよ、松園ひで、武市きく、遠藤やゑ、松田こう、松山とみ、須澤あい、塩千里

●醫院の無代施療

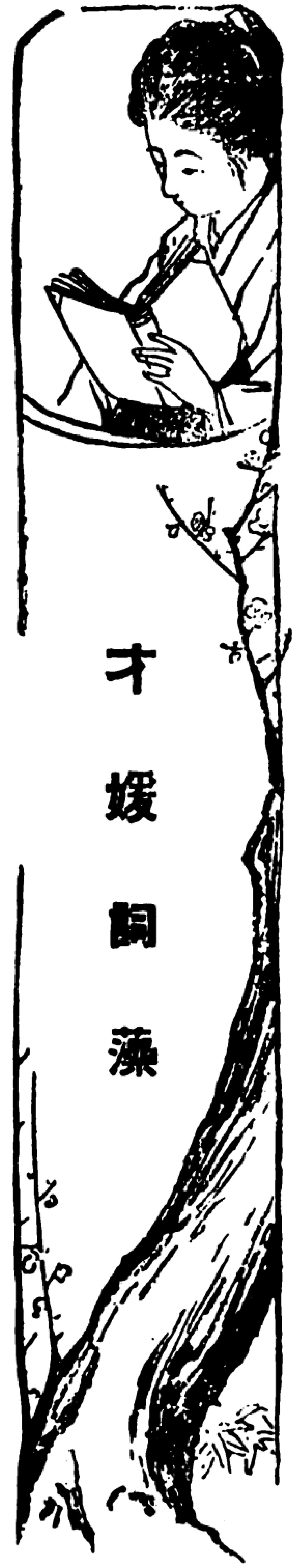
淺草內の醫師二百卅四名は出征軍人の家族に限り施療となす事とし同馬道一丁目廿八番地產婆旅澤はるは軍人家族の出產者を無料にて取扱ふ旨屆出でたり又深川平久町の養生病院にて充員召集に應じたる同區內の家族に對し無料入院治療の需に應ずるといふ

●囚人の請願

市ヶ谷その他の監獄署に在る囚人中にも何時しか日露開戰の事の傳はりしと見ゆ或は勞役の時間を延長して之に依て得たる工錢を軍資に充てんと乞ひ又は預置の金を献納せんと請願する者多く當局者も之が諭旨に苦慮し居るとか

●都下に於ける婦人團体

性質	會名	總裁及會長
(慈善)	東京慈惠醫院	幹事長有栖川宮妃殿下
(教育)	大日本婦人教育會	總裁閑院宮妃殿下
(衛生)	大日本婦人衛生會	同小松宮妃殿下
(慈善)	婦人共立育兒會	同有栖川宮妃殿下
(矯風)	日本婦人矯風會	會長矢島楫子
(慈善)	慈善會	總裁小松大宮妃殿下
(同)	帝國婦人協會	會長下田歌子
(慈善)(教育)	女子手藝慈善會	同　ミスパーカー
(矯風)(慈善)	女子同情會	伯爵夫人板垣絹子
(交際)	月曜會	會員共同
(慈善)	愛國婦人會	伯爵夫人板垣絹子
(同)	女囚携帶乳兒保育會	會長岩倉夫人久子
(交際)	東洋婦人會	會長未定
(慈善)	千島同情婦人會	同
(同)	東京孤兒院	院長小川はつ子
(教育)	婦人精[illegible]會	會長未定
(同)	大日本女子教育會	主幹下田次郎



才媛詞藻

塚越停春撰

《天》桃　　河内　櫻井敬子

薄月夜馬子の鄙歌おぼろなり
　桃の花散る追分の路

詩情詩韻並至る、眞に有聲の畫なるもの。昇平の氣象言外に溢る。

《地》軍艦　　東京　佐藤ちよの子

いくさふね勝しと聞きて嬉しくも
　悲しくも又吾背をぞ思ふ

嬉しく思ふは公けの喜也、悲しく氣遣ふは私の悲也。勝報一たび到て公私の喜悲先づ至るは、眞に海軍軍人に妻たる人の情なるを見る。

「又」の字「悲しくも」の上に置くべくして、却て下に置く妙。

《人》軍艦　　伊豆　ひで子

くろがねの船も何せむ敷島の
　やまと男兒の心あらずば

評言堂々、筆端力あり。

秀逸

〇〇軍艦　　福岡　太田とも子

探海燈かげもの凄く照る夜半を
　鷲の羽風の音かすか也

恰も是れ朝鮮海上の光景。

〇〇桃　　松江　岸崎なみ子

まゝ事の手ぶりかわゆき少女子が
　かざしに紅き姫桃の花

旨韻共に可憐。

ヽ〇殘雪　　東京　芳江

島ごとに雪消え殘る松島の
　松よりあくる春のあけぼの

韻致高し。

ヽ〇桃　　京都　三の宮露子

ふる里の傾く軒の桃の花
　折りて手むけむ罪もあらなくに

無限の感慨を叙して、露骨ならず。妙々。

○○桃　京都　葉山みさを

髪垂れて振れの小袖に籠さげて
　折らむとぞ思ふ白桃の花

眞に無邪氣なる少女の眞趣を歌ひたるもの。

ゝ○桃　河内　竹内敬子

そよ〳〵と吹く春風にぬし知らぬ
　垣根ゆかしき桃の香ぞする

餘味言外に在り。

ゝ○軍艦　大坂　高橋珠子

吹きしきる大山おろしまにうけて
　ゆるぎも見えぬ軍艦かな

大艦如山、是家國之鎭。

○軍艦　備中　大西操

吹雪する玄海灘の曉を
　三つ二つ行く軍艦の影

力あり。

ゝ○桃　備後　すみれ

たちて舞ふ姿は神か少女子が
　川添桃の花陰にして

何等の好畫趣ぞ。

ゝ○桃　河内　櫻岡喜志子

牛なきて鷄啼きて江の村の
　桃の林に日は入らむとす

江村遲日の景桃源の春も外ならず。

○桃　東京　佐々村まさ子

門川のゆるき流れに日もすがら
　散りて流るゝ姫桃の花

好畫趣、又好詩趣。

○軍艦　東京　佐藤千代能子

いくさふね今出るらし舞鶴の
　港遙かに烟り立つなり

氣力雄渾。

○殘雪　安藝　松坂梅子

三笠山まだ春淺みもえ出る
　草ところ〴〵雪處々

下旬用字奇。

○殘雪　京都　村井澄江

消え殘る垣根の雪も咲く梅の
　匂ひの中になりにけるかな

「匂ひの中になり」の語妙甚し。

○桃　長門　飯田はる

おぼろ月はた香さえし賤が家の
垣間にやさし白桃の花

村家の活光景。

○軍艦　東京　天沼ます江

山里の雪まだ消えず梅咲きて
若草もえて春は立てども

用語奇警。

○桃　相州　白つゆ女

三千代てふ其名も嬉し桃の花
かざして君がよはひとや見む

妙作。

ヽ○軍艦　東京　鈴木留子

烟る空凄き浪間を軍艦の
行方や國の浮き沈みなる

「行方や國の浮き沈み」の語ありて、詩凡ならず。

○軍艦　美濃　波津子

浪の上に浮たる城と見ゆる哉
立ち並びたるもゝいくさ舟

此程の光景、眞に人意を強ふするに足る。

○軍艦　安房　奥澤瀧子

勇ましや霞むあなたにものゝふが
みつく屍と歌ふ艦歌

是れ吾か水兵の情狀。

ヽ○桃　東京　川井喜久子

嫁入りの日も定まりて村長の
家の門べの桃盛りなり

桃夭の意、寫し得て斧鑿の痕なし。

○軍艦　香川　前田きみ子

月白き今宵を艦の甲板に
故郷望むものゝふあはれ

遊子の情を寫す。

○桃　東京　鷲田長子

賤の女が赤きたすきのほの見えて
背戸の垣根に桃の花咲く

田舍の景、見るが如し。

ヽ軍艦　陸前　渡邊しげ子

ひゞき渡るつゝの音やみて
仁川の夕べの海に帆柱高き

仁川戰後の狀。

○殘雪　伊勢　飛露子

うすくこく萠し若菜の色見せて
むら消え殘る小日の白雪

「淡く濃く」の「むら消」の字相映照して好し。

○桃　東京　みどり

白桃をひとひら口にをしあてゝ
君なに思ふおぼろ夜の月

うら若き婦人の状躍々。

○殘雪　東京　幹子

荒鷲のすむとし聞けるウラル山
雪なほ寒く嵐吹くなり

佳作たるを失はず。

○軍艦　廣島　永島淑子

かたぶけるマストに凄く月ふけて
旅順港外たゞ浪の音

旅順港外の沈沒艦艇を詠す。

ヽ殘雪　羽前　齋藤しげ

月の山見ぬ間にいつか春立ちて
冬の名殘の雪も霞めり

妙。

○桃　福島　遠藤清子

姉君の心つくしの花なれば
ひなの前にもわがかざしにも

「心つくし」の字力あり。

○桃　群馬　黒岩露山女史

小湧谷大湧谷に日は落ちて
湯けぶり白う桃の花散る

溫泉場の桃花乎。

ヽ○殘雪　横濱　巽　常子

思ふよな去年の吹雪のあはれさを
今まだ殘る八甲田の峯

感慨長し。

ヽ○桃　仙臺　村田さく子

吹く風も春まだ淺き乙女子の
ちごわにかざす白桃の花

少女白桃、淺春の字唐突ならず。

桃　名古屋　森井せき子

君がのりし駒のたづなの紅に
桃散る嵯峨の春の日おそし

如畫。

桃　岡山　橋本芳子

梅は散り櫻はまだきなかゞきを
ひとりしめたる姫桃の花

少しく諧謔の意なきに非されとも、用語奇也。「なかがき」「姫桃」等、語術且ならず。

桃　新潟　内藤ゆき

桃の花二ひら三ひら散る見えて
張物板に日は斜なり

是亦田舍の實景。

佳調

（軍艦　桃　殘雪）

○佐世保　山口木芽子
大洋をよこぎる艦に夕日影匂ひてすごし荒波の色

○長門　飯田はる
日ならずも我御國の軍艦バルチックあたり漂蕩立つらむ

○兵庫　柳田春枝
おぼろ月かすみにふけて山寺の鐘樓のあたり桃の花散る

餘韻あり。

○越後　荻野てる子
つれて來し童はいつら影見えず小牛のせなに桃の花散る

○堺　すみれ
木かげ行く人のおもわも照るばかり咲きつゞきたる姫桃の花

○和歌山　西川粂子
牛ひきてかへる童の影見えて夕月かすむ野路の桃その

○豐後　英君子
桃の宿は皆出で行きて堺のへに小猫留守居の晝靜なり

○石見　宮内登美子
賤が屋の軒の日なたに眠り居る猫のそひらに桃の花散る

○佐倉　春の花子
公達の立寄りたもふ賤が家の垣の白桃花咲きにけり

○伊勢　中村はん子
ともすれば小雀おりて餌をあさる門の内外に桃の花散る

○備中　黒住美都野
駒なづむ春の山路の夕まぐれ手綱もつ手に桃の花散る

○越後　吉田梅子
すぎがてにむかしすみたる我庵の垣越見れば桃咲き匂ふ

○横濱　寺田光子
たがわらべ折りていにけん垣の邊り昔ながらに桃の花ちる

○茨城　菊地みれ子
野邊に出てゝ若菜摘みつゝ今見れば殘れる雪のなつかしきかな

○越後　佐藤かう子
かすみとも花とも見しは行く春の名殘を留めし山の端の雪

○丹後　高宮やす子
しら桃の花咲匂ふ下草に牛もねむりて野はしづかなり

○丹後　高宮やす子
黄海の風なほ寒き最夜中にみいくさ船はいつちゆくらん

○信濃　成澤晃子
乳母が背に桃のむかしなきゝたりし里の川邊に桃の花咲く

○三河　戸田雅子
潮落ち波路をぐらき大海にかたむく月の影かうくし

○東京　齋藤すみゑ
小鮎飛ぶ川瀬の水を染めつゝも今を盛りと咲ける姫桃

○京橋　佐々木まさ子
分捕の軍艦見に行く子等の少さきみ旗に春の風ふく

○越後　和歌田雲子
春くれど越路はなほも風さゑて去年の三雪のきゑんともせず

○岡山　横山かめ子

人踏り稀れなる村の片隅に淋しく殘る舊驛廓かな

◎　美濃　藤濱むら子

金婚の式擧げるてふ車の屋の緋桃白桃花盛りなり

◎　駿河　菊地武子

まだらなる山邊の雪の雪間より香ひ初めたる春の色淡

◎　信州　安孫子みつ子

折々は戀憶の樂の唱び來て松島灣の訣別の宴

◎　群馬　堀口みな子

軍艦あまたそろへるわが國のろしお打つべき時は來にけり

◎　定　子

糸くりて老女れむれる賤か屋のかたふく軒に桃の花さく

◎　小石川　花の里人

一村は桃花さかり馬子にとへば桃村なりとこたへて行きぬ

◎　伊豫　静田ひで子

もの丶ふの駒つなぎたる岡のへの松の木かげにのこる白雪

◎　大阪　田中　宵

いづれをか花とや分けんむらぎぬの雪ぞのこれる月が瀬の春

◎　水戸　榊　春子

姉君のいたづき重く戸ざゝれしさびしき窓に桃の花散る

◎　横濱　高木京子

來て見れはくらふの山も名のみにて桃の林のてりまさるかな

◎　信濃　高松蝶子

少女子が人まつ背戸の夕ぐれを春雨しめり桃の花散る

◎　茨城　渡邊豐子

今日もまた庭の紅梅二ツ三ツほころび初めて鶯のなく

きぬのころみ山の雪のたね〳〵に霞むも春のたよりなりけり

◎　丹後　高宮やす子

國まもる吉野龍田のいくさふれかゝぐるはたは花か紅葉か

◎　芝　齋藤すみれ

あたゝけき日影をあびてシベリヤにのこれる雪や打解るらむ

◎　仙台市　梅村まつ子

逝きし子かかたみの雛に手向てはむかし戀しき白もゝの花

◎　東京　うきくさ

春きても雪なほ深くのこるなり鷲のすむてふウラル山の峰

◎　下谷　くに子

我庵の下ゆく水も匂ふなり軒のひめもゝ咲そめしより

◎　三河　山内經

櫻てふものなかりせはいかはかり緋桃の花のゑましからまし

◎　偲のや社中戸田柳子

渡し守病みにし日よりわたし場の小舟わびしく殘る雪かな

◎　京都　葉山美佐尾

波の上にしづみ殘れる軍艦の帆柱見ゐて浪靜かなり

◎　伊勢　山本しげ子

霧はれぬ朝日のほりぬ海原に御旗かゝけて艦つゞき行く

◎　大坂　藤田春江

怒り狂ふ波をけたてゝ事もなけに北に進みゆく軍艦讃

◎　茨城　大橋夏子

狽の歩みし跡もそのまゝに荒れし山寺雪ぞ殘れる

◎　鳥取　松井東子

◎　小倉　なみ子

大連の浮雲はれて三日月のわが艦の上照らす夜半かな
○　鳥取　松井隆子
その人の歌ひの聲もうちまぜて砧の音ゆかし桃の一ッ家
○　兵庫　きん子
颶風は吹おさまりてうごきなき皇國の旗に朝日てり添ふ
○　栃木　戸田芙蓉
古寺のかねの音ひゞく夕まぐれ緋桃の花の風なきにちる
○　神戸　今村竹子
こまにある武士いかに寒からむ殘るみ雪のなほも深きに
○　香川　吉田金子
富士の山高峰に殘る白雪を清くもてらす有明の月
○　上野　濱の露
ときは木の色にちなみて消ゑすあれ昨日積りし松か枝の雪
○　山口　田中眞子
荒鷲の羽音絶へたる海原に日の旗あげし軍艦見ゆ
○　東京　みき子
たのしげに打ちつれだちてよめなつむ少女の袖に桃の花ちる
○　山口　田邊桃枝子
書讀みて倦みにし吾を慰むる庭の垣ほの緋桃の花
○　赤坂　政野いし子
日の御旗たかくかゝげて北へ〳〵單縱形の艦隊いそく
○　長門　梅田鈴子
みとりなる麥畑つゞき桃さきてわらやのあたり鷄のなく
○　東京　古川すゞ子
音もなき雨にしほれて桃の花しづかににほふ春の夕ぐれ

○　長崎　横山しげ子
ことしあらは國の光をますらをの大和心のしきしまの艦
○　東京　みき子
君がため御楯となりて進み行くみいくさ舟の勇しきかな
○　美濃　梅田正子
新線に島田かざりし玉根懸艦買ふしろにさゝげまつらむ
○　本郷　堀內直枝子
牛鳴てまひろのとけき川そひのまきばのまがき桃の花さく
○　群馬　吉田たま子
海怒る大連灣の血けぶりの中に燃ゑ沈む露艦幾隻
○　大阪　岡崎かつ子
雲雀さへはや啼きそめし此頃を峯にのこれる去年の白雪
○　美濃　梅田豊子
うちかすむ入江の岸に舟よせて酒買ふわらや桃の花咲く
○　三河　宮野みつ子
雪と見し遠山の端に色淡くあはれに殘る六つのはなびら
○　名古屋　水野八十子
幾はくの御軍舟や行かひて海原とほく國守るらむ
○　近江　北川たつ子
訪ふ君はそれかあらぬか何となくもゆる緋桃の家なつかしき
○　讃岐　片山ますこ
紅の雲かにほふと見るまでに咲きみちてけり里の桃山
○　伊豫　桐原ひさ
比叡愛宕かすみこめたり大原の桃の一さと陽炎もゆる
○　長門　飯田つじ

日本の御旗輝くいくさぶれ遠にひゞくかちどきのこゑ

◎　島根　松　子

牛飼ひの子等が草笛ふきつ行く山畑つゝき桃咲きにけり

◎　大坂　清野美子

遠山のまたらにみゆて消のこる雪こそ去年のかたみなりけれ

◎　神戸　高井小菊

雛いだき眠れる稚子の横のほとりなづるが如く桃の花ちる

◎　兵庫　柳田暢子

勇しく御軍艦の進み行く行ゑや何こ夕もやの中

◎　若狹　野石話子

靄のこゑのみ春のこゝちして谷間にのこる去年の白雪

◎　備後　佐藤篤子

黒烟吹き靡かして一列に玄海よぎる我が大君の艦

◎　仝

天の川桃の初花咲きけらしはゝ子つむ兒に顏の色そふ

◎　大阪　大道白百合

富士吉野八島松島筑紫潟朝日かゞやく敷島の艦

◎　甲府　土屋露子

鳥はうたひ蝶は舞ひ來ぬいざ我もゆめに武陵の桃やとひなむ

◎　越路　重　子

長閑なるひなの夕べを鐵の柄にかけてかへりぬ野の桃の花

◎　長門　齋藤秀子

咲きいでし花のかげにて去年までは共に眺めし兒はみいくさ

咲きみだる桃の堤におのこ等の軍さ事して春の日くれぬ

◎　上總　飯田せい子

洗濯の婆は歸りぬ牛ひきてぢゞも戻りぬ桃咲ける宿

◎　同

鷹狩のつばもの乘せていくさぶれ行くやきさらぎ有明月夜

◎　下野　川連美喜江

にわとりの足あとまばら雪の上にこぞのかたみと消ゆ殘りけり

◎　栃木　山本ゆり女

雲の間に煤煙一縷また一縷次第に見ゆぬ敵の黒艦

◎　長野　くに子

共に植ゑし君はいまさず三年經て實生えの桃の花はさきけり

◎　越後　佐藤榮子

水清き里の小川に姫桃の花散るほとり日は鮮かに

◎　前橋　ゆき子

ますらをが行やなやまむとつくにの岩間にのころこぞの白ゆき

◎　津市　永田たけ子

國のため君にさゝげし重き身を輕げにのせて浮ぶ艦かな

◎　栃木　生澤いま

くだりゆくふな唄おぼろ桃咲きて利根川堤只ましろ也

◎　熊本　龍野つゆ子

そのむかしさかへし君が古殿の破れし垣根に殘る雪かな

◎　大阪　寧　子

空さへもうす紅に見ゆそめしかきつの小田の桃の花がさ

◎　牛込　西江靜子

乙女子が米とぐあたりあひる群れて夕しづかに桃の花ちる

◎　本郷　古川すゞ子

かくれても世の春風の音つれてしづがまがきにかほる桃かな　丹後　高宮やす子

◎

かりがねにつらをならべていくさ船友にいそぐらん曉月の空　三州　荒川よし子

◎

軍ふれ走れる風に霧絶て昇る旭の影しまはゆき　岐阜　井川まつ江

◎

山里は木々のみどりに春見ねてまだ消あへぬ去年の白ゆき　京都　矢野龍子

◎

一枝をいざや折らなん妹がはつひな棚のかめにさすべく　淡路　松月女史

◎

いとひてしこぞの白ゆき春たちてきねんとすなりシベリアの原　京都　辻よし子

◎

男たけびもほがらに聞ゆ對島沖くにのみいつに勇ある船　芝　ひさご

◎

さしいづる朝日がくれに白雪のつれなくのこるおちこちの山　伊勢　桐田淸子

◎

春の日の光にもれてつれなくも小笹がもとにのこる白雪　大坂　田中瑜瑳子

◎

おくれにし我身かこちてやむ窓に猶消ゐのこる春のあは雪　千葉　井上きみ

◎

人とはぬ里にも春のおとづれて片山かげに桃の花さく　東京　江藤隆子

◎

敵艦の吹雪激しき海峡の夜を潜みて今か過ぎ行く　越後　武とい子

◎

牛引きて出づる童の宿ならんけむ立つあたり桃咲き亂る

和歌兼題

櫻

野蕨　（〆切三月十五日）

軍旅の夫を憶ひて　（披露四月五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲出征軍人の家庭

▲軍事小說　（〆切三月十五日）

▲寫生文

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折、和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必らず右方の上部一ヶ所を紙撚にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投書原稿は一切返却せず

雪の朝

大獄　古山楠子

いづくの寺にてつき出すにか。曉つぐる鐘の音一つ二つ三つ四つばかり聞ゆる折、亦も近きほとりにて汽笛の聲かすかに。やがて下女の起きいでしと覺しく水くみ上ぐる音ぞ一。雨戸くり開くる音ガメン。しばしほど經て雪よ〳〵と立ちさわぐ聲ふと耳に入りぬ。我の起き上らんとする間に弟ははやとび起きて、其のまゝ聲する方へはせ行かんとするに、我の「あれ一兄さん衣物着ていかない と風引きますよ」と聲かけしもおそし。はや弟はうら戸のあたりに、聲高に下女をのゝしる聲したり。やがて我も起き出でゝ急がわしく 表にいでしにさても〳〵變りはてたるあたりの景色よ。玉の家居も賤が伏屋もけじめなういづこも全じうましろにつもりなしたるいとめでたし。

いつまでもとけであれがしなど獨りごちつゝまだ降りやまぬ、雪の中にたゝずみつ。

折しも高く勇ましき弟の聲聞こゆるに、急ぎかどべにはせ出しに降りしきる雪の中に、弟は雪もて少さき固りを作り、夫に黒き米をつけ、其のはしを長くしたるものあまた作りゐるに、その何なるかを問ひしに、ふり返りし弟のしたり顔に「何つてこれチヤンぼうずよ、ほんとは露國のやつなんだけど露國人はむつかしくつて僕かよーこさへないから、かりに是を露國人にしとくの」といふつゝ亦もさしうつむきつゝ、一心に何かしつゝあるに何にせんとてにかと、弟のかたごしに盗み見しに、かの少さき雪の固りに目鼻を入れ居るなりけり。出來上りしを見ればなかしきながらも、先は人の顔に似よりの物できたり。

弟はかゝる物を作りて何にするにや、今しばしと見つめ居る我を見もやらで、かの雪くれに目鼻を入れ居し、弟はこの時はじめて、ふり返り「姉さん僕これから山田君や次郎さんをよんできて、このやつをぶち殺して夫から、雪合戰をするんだから、竹や富やにこの邊ふんじやいけないといつといて下さい」といひつゝ、降りしきる雪の中を嬉しげに走りさりぬ、我の心付いて彼の行てを見つむる目に、はからず入りしはまじろの雪路に黒き少さき足跡二つ三つ四つ。

部屋のかざり

跡見女學校　大森清子

うつくしい畫がかいてある唐紙をあけてはひると、お香のにほひが滿ちきツてゐる。八疊のすゞしさうな御座敷。格別、目ぼしい品はないけれど、あツさりと飾り付けてある。なんとなく、趣かある床の間には、唐津燒の花瓶に、かあいゝ野菊がさしてある。別段何流といふのでもないが、仲々うまく活けてある。たぶん、お祖父樣の御手際であらう。其のかたはらに、なんといふのか、私にはよくわからないが、くづした書の掛物がかゝつてある。左の方の違棚の上に、金ぶちの寫眞狹みがある。これは私と妹が、このお正月に寫したもの。

夕日はちようどお庭の老松の枝をさへぎつて、障子と障子との一すばかりのすき間から、隅にある金屏風に花々しくさした。その屏風に、目をつけると、四季の花が、いろ〳〵とかいてある。かの床の間にあるくづし字の掛物なんかよりは、たしかに、此の方が私にはよく見ゐる。然し、父樣は、常にあの掛物をおほめになていらしやる。私には、どこがいゝんだか少しもわからない。

殘雪

千葉縣　齋藤すゑ

起床の鐘に驚かされて起きいで急ぎて 戸をひきあくれば思ひきや時ならぬ花は冬枯れの梢に匂ひうかばしき白金は庭の面にうちしかれて 故里の夢いまださめずいと れむとうてよろめきたりしも此の景色にて全く目さめぬあな美しく雪降れりと喜ぶに年長けたる人の 例の雪好みの君の面てのうれしげなる事よと 笑はれぬされど時ならぬ花の梢を匂はせてとしばしはそれにみとれてふとかたへなる梅の木に氣づきぬ 漸く二ッ三ッほころびそめしに 梅枝に雪ふかく積りてゆかしき香をはなたんすべもなき様なり

　我が宿の香りゆかしき梅の花
　　雪にうもれて咲くよしもなし

思はず口すさびつゝ内に入り雪降りしにつれて さまざまの事思ひいでぬげに雪は暖き國にて はかくまでめずらしけれど寒國にては雪いと多ければ年々これが爲めに害をこほぶる事少なからずと云ふとへば 旅人の山路をなやまし 賤がふせ屋をおしつぶすも思へば此の雪なるぞそれのみならず寒國にては之がために歩行も自由ならずして がんじきといふ物を足にはきて 歩み其の困難は一通りならずとぞきくさるにてもひとしき雪にて花とめでられ白金とたゝへられかしこにては 人をなやます物と云われてみやび心をもて 見る人もなしこゝにては人の目をよろこばしかしこにては人を 苦むるなぞ思へば奇なる物にはあらずや雪も少なければ人にもめでられ多くてはうるさしわわれこゝこそかくは 見れ名に負ふ寒國ときゝつる 露國と戰へる我が同胞はいずくにて見るそがゆく手をうずめそが山路をなやます此雪よと思へば 花とも見へず白金とも覚ねずなりぬ

　戰の野邊を思へばいたずらに
　　花とめすべき今朝の雪かは

さりとて雪すてべき物にあらず 其のいさぎよきは國民の心をたとうべく朝日にあとなく 消ゆくは命を君に捧げてをしまぬによそほうべしげにこれなければ小嵐吹きまく冬の日にもねんれつやくが如き 夏の日富士の高根の 景色をそうるものもこれなるぞ雪こそはうれしき物といひつべきかうたてき物といひつべきか思ひうかびし 事をいさゝかしるさんと紙筆とりそろへつ 文机に向ひて外うちながむれば空いとよく晴れ渡り朝日はいつの間にか高く昇りて 殘りし雪にきらきらとうつろう様銀世界ともたとうべき有様なり

夫の出征の途に上るを送る

▲特賞

實踐女學校　長尾糸子

海行かば水つく屍
日本男子(やまとをのこ)の雄心を
散らば諸共響ある
　行けや行けや我が夫(つま)よ

ハルピン城頭月冴ねて
荒野一留日本刀
　行けや行けや我が夫(つま)よ
思へば十年(とゝせ)其の昔
平和の爲めと泡にせし

山行かば草むす屍と歌ひてし
示すは紅(あか)き櫻木の
花と散るこそ望みなれ
　行いて功名手柄せよ

萬馬嘶くシベリヤの
拔きて試めすは今ぞいま
　行いて功名手柄せよ
我が血に染めし遼東を
恨みを晴らす時は來ぬ

行けや行け〱我が夫よ　行いて功名手柄せよ
名殘りになくる此シャツは　寒さふせげの爲めならず
御國のために血に染めて　死ぬと聞かせよ妾まで
行けや行け〱我が夫よ　行いて功名手柄せよ
君出て行きしそのあとに、老ゐし父母ゐますとも
仕ゆる道は怠らず　夢な思ひぞ故園を
行けや行け〱我が夫よ　行いて功名手柄せよ

日曜の料理

長江滿子

朝早く、妹の髮は結びやりぬ。さらばとて、料理にかゝる。まづ、庖丁取りいでゝ、牛肉を切り、それをたゝき、玉子をつけ、パン粉をつけ、鹽胡麻を少しふりかけ、牛酪にてあげぬ。これにて、ビーフカツレツは出來上りしなり。それより、スタツプホテートを造らむとて、馬鈴薯を皮つきのまゝむして、上をばすこしへぎ、中をくりぬき、裏ごしになして、鹽胡麻牛酪半匙玉子を入れ、かきまはして、前の薯の中に入れて出す。それに、ミルクソースをそへたり。ミルクソースは、砂糖一杯半、バタ大匙一杯、玉子二個、くず小匙一杯水にてときて、ナツトメツク小匙一杯、牛乳大匙五杯、右の品々をば、まづ、牛乳を煮立てゝ、カツレツにかけて、いだしけるに



をさなき弟ども、いたくよろこびて膳にむかふ。常には洋食を好み給にぬ母君も、今日のみは、フオークをとり給ひしなりき。

家庭日記

佐倉富美子

例の通り門山神社の太鼓の音を聞て起きたるは六時なり部屋及び座敷の洒掃を終れば早や時針は九時を指しぬ今日は　孝明天皇祭なれば何がな御馳走をと、新年女學世界の菓子製造法を參考して、そば饅頭及びねりやうかんを拵ふ弟と妹と妾との三人、釜の下を焚付ける、粉をでつちる、餡を固める、くるむ、ねる、この日我臺處には時ならぬ菓子やの現出せられたりき、未新參なれば皮薄きもあれば又厚きもあり破れて、餡のはみでたるが多くをしめたるもおかし、すべて物事は熟練なり、七ツ八ツと拵へ行くに段々手ぎはよく上手になつて、可なりなるも出來得たれば其うれしさ喜ばしさ、我ながら微笑をもらすを禁じ得ざりき、さて之を蒸して十二時頃出來上りぬ、今日は母上御歸省の筈刻日に掛けて、驚かし參らせんと中の美形なるを殘して弟妹と共に舌打ちならしぬ、實にぶざまなれど、味は中々の好味なりき、午食を取る、

臺所整理最中一枚の端書來る、見れば母上より父上 御病氣の爲歸宅は四五日延ろとの御知らせ、一同胸は憂と落膽とにて 被はれ果てつ、間もなく、弟の友人例の山村に藤川の兩君來る、早速御手製のお饅頭を出す、夕食六時、食器整理して後入浴す、父上の御見舞其他種々家事上の事問合せの手紙認め床に就きたるは恰も十時なりき。

献立

朝　豆腐汁　香の物　　晝　薯(煮)　香の物　　夕　ひらめ(煮)　香の物

五時半起床、食事、庭園の整理、洒掃、修容等例の如し、いざ裁縫に取りかゝらんと針取れど、そゞろ、都なる父君の御上の忍ばれて何事も手につかず、インフルエンザより肺炎にならせ給ひぬ、さはれ、熱はさにもあらざればとは今朝母上よりの御便りにてあれど、近頃 數多の人の死にゐるは、多く此の病にてなりとや、さるにても心細き限りなるよ、今父上の逝き給はんにはあゝ如何にかせん去年つぎ給ひて、來年はと期し給ひし梅も形見になり果てむ來ん年の夏には、一家共に江の島に遊ばんと宣ひしも水泡に歸し終らん、過日問合せ參らせし事共は、後日說明して聞かすべしと母上して去にし 日言越されしがこれぞ後日の名殘の種とやならむ其の 悲みの如何斗にこそなど思ひ浮べつゝ終日うつ〳〵として打暮しぬ夜は次第々々に更けゆきて燈のかすかなる光に 一しほ思ひは都の空に走りて、それよりそれへと心は亂れぬ、さはれよし彼の病に冒され逝きし人々は多く老人小兒なりとか、父上は未四十路の段の御壯年なり、決してかゝる御事はあるまじ呼母上よ、 昨今の嚴寒に一しほ御身御大切に父上の御みとりに 御心をつくし給はん事を祈り上げ參らする手紙認め床につく十一時なりし折りからかすかに 遠く里寺の鐘に何となく又なき感慨にうたれぬ。

献立

朝　大根汁　香の物　　晝　人參の白あへ　煮豆　　夕　牛肉葱の煮付　香の物

梅の花

京都　矢野みち子

自然を彩る花は數多けれど、中に姿が理想としもいふべきは、梅の花になむ。門田の雪まだむらぎへで、殘りの寒さうすれぬさき、やさしき笑を洩らして匂ひ出でたる、きのふ迄はさみしかりし野山も、急にいろめきわたり、しらぶる鶯の聲とともに、いかばかり 心地すが〳〵しからむ。形やさしきが上にもけだかくて、恰も雲の上人にもくらぶべく、これなか〳〵になまめかしき櫻の及ばぬ處にぞある。とりわけ、果實は食用に供して多年珍となすに足るなど、たゝふべきふしいと多きにかゝはらず、「百花の王」てふ名の他にあたへられたるはこれ自ら名聞をほりせざるゆゑか、はた世人があだし色に迷はされたるつみなるか、あゝ世に花てふ花は多かれど、あらゆる德をつゝめるこの梅花こそはげにおみなの理想ともすべきものならめ。

不動の祠

湘南　葉山しげ子

逗子の不動の祠とし言はゞ、彼の蘆花生の小說不如歸にて名の高き處と人は知るべし。稍高き石の階段を登りたる處、自然の洞窟、古りたる堂宇、此中にこそ浪切不動尊は鎭座ますなれ。里人はお瀧の不動と呼びま

ぬらず、傍にさゝやかなる茶店の設かれる故なるべし、風景絶佳とにはあられども、逗子の濱、葉山の磯、鳴鵠が崎をも望むべく、晴れたる日には伊豆の大島も見ゆるなり。われ此けしきを愛づる事あつく、しば〲此處に遊ぶ。

願ひある身にはあられども、毎日來りて今はおなじみの不動尊、素通りするも勿體なしとこの頃は賽錢さゝげて、暫らく祠前に額つくを例とせり。

けふは殊にうらゝかにて、岩根を洗ふ浪も音なく、松の村立も聲を斂めたり、得がたき日和とや瞰下す渚には、地引網ひく海士のよび聲沖にはこがれくる舟夫の船唄までも霞の中に長閑なり。

禮拜致し居れば次第に近づく人音あり、立上り見れば春なほ若き男女なり、戀をや語る、睦ましけれどすゞろ悲しげなり。我ありとも知らでや、一間ばかり隔りたる木陰に憩らひぬ、涙を拂つて男は曰く、

「御身と契りしより早三歳を經たり、誠や小夜の寐覺のかれ言にも、玉椿の八千代相生の松の萬代とこそ誓ひつれ、其かれことを夢にして永く別れむ我心中推量してよ……されど御身は恨みもせず、よくぞ〲諾ひて給はりし」、女も涙のうちより

「せん方もなや、事情の止むを得ざれば……」。聞きゐる我も涙なり。



事情とは如何なる事か。我もとより知る答なし。相愛ふ中の隔るゝは生木を裂く如しとか、嗚呼最早見るに忍びず、聞くに堪へず。

あはれ彼の不如歸中の浪子武夫といひ、今また此男女が哀別離苦の悲嘆。如何なれば逗子の不動尊は、かくも男女の間を裂きて苦しめ給ふぞ？　情なしと嘆てば

「愚なり愚なり！　我れ衆生を救ふ佛の身として何しに人を審めんや、唯花に憧れ月に浮れ戀に醉ひて、飽く事をしらぬ世の人に、聊か會者定離の理りを告げんのみ」、と何處ともなく聞ゐさせ給ふは、不動の御告か松の風か、そもまた心の迷ひなりしか。

觀じ來れば理りなり〲、生者必滅會者定離は人間有爲の理りなるを恨み奉りしは我が科ぞ！　敎させ給へ不動明王!!!

沖の霞の奥には、海士の呼聲！　船唄！　浮世の春は長閑なり。

家庭日記

兵庫　柳田暢子

二月七日晴、五時起床、寒甚し、未だ下女の起出ない内に、室內掃拭裝飾庭はき清めしは、吾れながら近來の大出來で有た、併、水道の水のつ

めたく、手もこうろ斗、ほうき持手のちぎれる斗で有たのには、實になきたい位で有た、やがて下女を起し新聞を見る、七時父上姫路へ行かる、今日は日曜の事故室内押入書皃など掃除す、誠にあとの氣持の好ぷ、午後綿入一枚仕立上ぐ、五時父上御歸り妹は室内ふく、妾夕食の用意、食事すみて八時頃迄で裁縫、都なる糸枝様より御手紙給はろ、繰返し々々拜見す、日記をつけて床についたのは十時、此の日調理、例「豆腐の味噌汁生玉子香」晝「鯛の鹽焼かまぼこ香」夕「メンシチユウ、カキのフライ、玉子のあつやき。」八日晴例の通り室内及庭はく、あせの出る處を見るときなふより餘程あたゝかい、空には有明の月あわく殘て居る、九時父上出勤やがて糸枝様への御返事書く、岡山の知人より白魚一籠戴く、午後妹と裁縫洗濯、四時頃待ちに待ていた女學世界來る、あまりの嬉しさに取手おそしと一通り目を通す、口繪の斷新にして勇ましく、記事のどれもこれも新しく豐富で面白想なり。才媛和歌秀逸の部に、思ひがけなくも吾名の有るにゆめかと斗りに嬉しく、拙なきをお慈悲に出し給りしを深く謝すので有た、五時父上お歸り折から滊車便で生野から猪戴く、すき燒となし白魚は吸物芋午蒡てんぷらとなす、皆なうましく〳〵と樂しく食事終へしは六時半、八時一同れ靜りたれば火桶かこみて、今こそ吾よと女學世界ひもとく、ねむりにつきしは十一時過ぎ、此の日出金八十錢授業料、三十錢ごまの油、十錢うどんこ、九日晴、する事、例の如し久々にて髮洗ふ、氣持よし、裁縫しながら色々と、今度の歌を考へるので有たが、一寸もいゝ想が浮ばない、知人よりやまの芋澤山戴く、とろゝとなして夕食の膳に上す、折柄勇ましき號外の一擊あゝ愉快々々、露國軍艦二隻沈默し、我海戰第一の勝利、父上は此上もない御滿足、兄弟姉妹はおどり上りて帝國萬歳日本海軍萬歳を連呼し、最後に我が最愛の兄君の萬歳をとなへた、皆へ仁川港從軍千代田艦に居ます兄君より御手紙給はる、父上皆共開き拜見す、見れば愉快なる御筆のあと勇しく、辭世の御和歌に髮の毛そへて有り、父上の御目よりは悲喜の御涙ハラハラと、弟は絶はず萬歲をいゝながら、私等がないて居のを見て、姉樣達はよわ虫だたとへ兄樣は戰死しても、日本が勝るへすれば好ヂヤア無いか、此のけなげな言葉に、涙おさめて、皆な床についた。

島の婚儀

在八丈島　島田靜子

破れたる芭蕉の影小まどを入りて、疊の上に落ちぬと見れば新月今そ松をはなれて、すみたる空にさしのぼれる。庭におりてめぐり〳〵、池のほとりに櫛を見出でつ。

あたり靜かに、たゞ鈴虫の聲のみして、何となう、友なき孤島のわびしさ、涼しきにそいて身にしみわたる。

折しも、人の來て、近きあたりに嫁入りあなり。お國へのはなしがれに、いざさせ給へとそゝのかすに、とかくしてその家にいたりぬ。月はさながらにあけはなたれて、青き赤き燈あらはなり。

門のあたりに火かげの見ゆるに、門火たくにやとおもひて、見れば、おのれらとおなじなみなる見物の人の、煙草くゆらす附木の光なりけり。

今や〳〵とまちわびつゝかたへなる捨石に、やをら腰おろして、まづ、おほかたの話をきくに、この地にはかの結納と云ふものもなくて、只儀式のまへ日には、嫁の君聟の君がり、とまりにゆくなりとか。めづらしのならはしもあるものかな。

やがて、十時過しともおぼしき頃、燈の三つ四つ見えそめたる、そはと

うち見やれば、はや十人ばかりの女のむれ、こなたをさして練り來めり。こは、嫁君とぞが仲のよき友だちとなり。家にも入りぬ更に戸をさすかたも見えず。おのれも、もよほさるゝがまゝに、近くすゝみて居よるほどに、よめ君と聟君と相對ひて、席はおのづから定まりたり。

まづそのいでたちはと見れば、紺がすりの御ゆかたに、紫繻子と絹繻珍との腹あはせ帶。おぐしは束髮、右には時色左には赤の、いづれもれり玉のかんざし。足のつかれけるにや、右に左にみじろぎつゝ、木綿のハンカチーフを手にまきては、猫のかほあらふらむやうに、汗うちぬぐひ〳〵すめり。聟君は白のかすりの御ゆかた、黑の色こそあはせたれ、さすがに、御羽織は召されたり。煙草くゆらせつゝ、目鏡ごしに時々は、よめ君の方へ、まなざしおくらせたまふ。

と見れば細帶したる女出でゝ、小さき盆に、口とりらしきを一皿と、茶飲茶碗一つ（飯茶碗の家もありとか）とをのせて、嫁君の前にさし出しつ。後につゞきて、三たりの細帶の君、貧乏德利を横だきにしてぞ出できたれる、如何にすらむと、下に、おもひをれば、かはるがはる、御まへにいでゝ、例の茶碗にさしてひくなり。嫁君のそなうくろ手ぶりぞ、見もしらず言ひもおよばぬめでたさなるや。



つゞきて、膳は、聟君とまろうどだちとに配られたり。御もてなしは、何なるらむ、しかと見さめれど、三皿ばかりなるがなかに、一皿は御さしみなりと、誰やらむ、さゝめく聲の、あやしくも耳に入りぬ。吸物も、二つばかりあめり。かくして式はをはりぬ。醉ひどれたる人々、後れさきだちて歸りゆく。夜も更けぬらし、はひりのおい松、額をしづめて、みだりに星もまたゝかず。潮の氣かをりて虫の音さびたり。

家庭の日記

きぬ子

一月八日朝とく起き出づ今日より學校初まるとて弟常になくさわぐ九時過ぐる頃祖母樣と買物に行く此處かしこにて用すます足はいたく、つかれぬ、午后一時頃よふ〳〵歸宅す歸り路に三善樣を音なう余りそこ〳〵にして云ふべき事も云ひもらしたり却ておもまたげなりしならむ、あとより氣づきぬ、

久留米の古賀樣來らる菓子餅などうろさしとは、知りつゝ差上ぐ草々の物語りに舌の根も乾かんばかりなり　折から姉ら來る樂しく遊びて四時過ぎ歸舍す古賀樣も急用の爲め六時發車にて歸米さる

夕飯後湯あみして部屋にて年始狀二三通したゝむ、發信十二　着信九

買物　ショール、澤井摸樣六尺　石鹼　肴　野菜

朝　菜の味噌汁	ひる　雑煮	夕　鶴の汁物
漬物	大根かまぼこ煮〳〵	菜のひたし物
牛乳	漬物	大根の漬物

一月九日　七時起る朝より曇りがちなり風さわがし朝の間は福幹継ふ叔母様は下女と漬物せらる今日は朝より　來客少し十二時頃木村の奥様見ゆお嬢様の笑顔いつも變らずいと美はし直に例によりて雑煮、お酒など差上ぐ、臺灣の御物語承る、いとめづらかなりし、一時頃歸り給ふ、又、縫物取出てゝなす、夕方雨しめやかに降る、いと暖かなり火鉢も今は用なかりき、暮れ方よふ〳〵縫ひ上ぐ、夜に入り兄來れり、地行の叔父様も來らる例のおかしき話しある明日は日曜なればとて、遊びに來たられしなるべし日記など記るして十時寢につく

朝　大根の味噌汁	ひる　玉子の厚焼	夕　鯛のさしみ
黒豆	漬物など	牛のちり
漬物牛乳		野菜の煮〳〵
		漬物

さゝやき

大阪　田中　しゆん子

昨日柄本家の下女から、今日妙子さんが久々で御歸り遊はすと聞いたので、之から停車場へ出迎に行くのである。野良の仕事を休んで。停車場へ來て　時計を見ると、汽車の着時間に後れてはと、氣がセイテ〳〵走らん計りにして來たからであらふ、敎へられた時刻には未だ餘程間がある。とにかく待合で妙子さんを待つ事としやう。

四方はヒツソリとして　居るので我が小さい胸は破れはしないかと思はるゝ位昔のいろんな事が、彼れから是是から彼れと思ひ出される、あたかも青々筝につむぐ糸車のめくる様に。

妙子さんと我とは同級生でごく中好であつた。雲雀なく春野の摘草、稲葉に涼風度る夏の夕の螢狩、空よく晴れた秋の日の茸狩、野も山も白絹もてつゝんだかの様な冬の雪見も袖は四ツ。ソウ〳〵たしか十二の歳をむかへたお正月であつた。牡丹の模様ついた上着に緋の下着をかされ大きな亂菊の帶びにヒツタの帶上をしめて、いざ遊びに出掛様とした折、玄關にコか〳〵と可愛らしい下駄の足音がしたので、必と彼の方だわと氣もそゞろに走り出て見れば、主は推量通妙子さんであつた。が。わが眼と妙子さんの眼とカチ合つたしゆんかん「チヤツ――」と驚きの聲は二人の口より發した。夫れは、上着下着帶上右の手の羽子板までが二人同じてあつたからである。違はなかつたからである。ふと氣が付て見ると、妙子さんは板石の上に我は玄關に彳んで居つて。互に手を取りかはして「嬉しいの子」「嬉しいの子」聞けば二人の中の餘りいゝので内の御母さんと妙子さんの御母さんとが　御相談遊ばしてこしらへて下さつたので有つたとやら。

二人が目出度高等小學校の業を終た時、我一家は不幸にもあまたの田畑先祖代々住みなれた邸宅を、人手にわたさればならない様な悲境に墜入つたので、共に手を携へて遊學の途にのぼる可き答の我れが、涙をのんで此停車場に妙子さんを送つたは、今より三年前。あゝ其時の殘念さ!。口惜さ停車場は俄にソウ〳〵しくなつて來た。時計は豫定の時間の早き事はづかに五分。我が胸は何とはなしに騒いで早鐘を打初めた。

三分―二分―一分―あゝ氣車は着た。

とある上等室から四五人のお友達と出なさつた、束髪に金ブチ眼金をか

け、紫の袴をはいた女學生はまさしく、懐しいなつかしい片時忘れぬ妙子さん。出口で待て居た我はツとよつて妙子さんのお手を握きらふとしたが、昔に變る我が哀なみすぼらしい姿に氣がついて一歩進めた足をふみ止め「妙子さんお歸りなさい。お久しう……。」と挨拶したら妙子さんは只だ「ハア……」とのみ冷かに仰有つて、直ぐお友達の方を向いてお仕舞ひなされた。語りつ笑ひつ打興じつゝ行く無情の友の後影を、涙に曇る眼で眺めて居た我は、アゝと吐息をついて天を仰ぐと、夕やけ雲は紅く〳〵そらを色どり餘光は森林野小川に流れて暮れて行く自然を飾つて居る。其美に悲しみを忘れて思はずウツトリと成つて居る我が耳に自然は囁いた。恨むな哀れの處女泣くなよ不運見我れは終生汝の友たらんと。

正義の敵

伊勢　花涯女史

一

おろかや露國　兵を擁へて
友誼を蔑する　無禮傲慢
世界の敵ぞ　正義の敵ぞ
撃て撃て日本の　御旗揭げて。

二

おろかや露國　分を忘れて
暴威をほこる　無禮傲慢
世界の敵ぞ　正義の敵ぞ
撃て撃て日本の　御旗揭げて。

三

おろかや露國　法を破りて
平和を害する　無禮傲慢
世界の敵ぞ　正義の敵ぞ
撃て撃て日本の　御旗揭げて。

四

天地も容れぬ　醜奴の群を
今や拂はむ　神威の劍
進んで城下に　白旗見る迄
撃て撃て斬れ斬れ　正義の大敵。



友の許へ返し

伊豫今治　小松崎萩子

仰せの通り日露交渉もいよ〳〵斷絶、東洋の平和は終に破れ、劔の光砲筒の響き血腥き風シベリアの野に吹きすさまん事亦遠きにあらざるをと存し候、主の君にも過日何師團より御出陣遊されしとか「此度こそは心はすでに切髮の覺悟今より後は一入萬の事を節約して主が御國の爲 譽ある戰死を遂げ侍るとも幼子をは養ひて育て天晴親の跡をつがしむる精神に これあり又傍ら篤志看護婦人會にて看護、

[illegible]の道を勵み、又愛國婦人會の爲に奔走致し、せめて手貢ひ給へる、いくさ人又は討死し給へる英雄の遺族の爲看護の業に弔慰の道につとめんむぐみ」との此數行鐵石よりも堅き御精神、健けなる御覺語、かくてこそ主の君にも勇みに勇みて滿洲の野に荒れまわる鷲の翼を折り、打ち摧き狩り盡し給ふともいと易かるべしと思へばいとゝ胸苦しく熱き涙はほら〳〵といつしか錦の御玉章を濕し侍り候この御文こそ紀念の爲いついつ迄も保存致すべく深く手箱に納め申候

扨もきのふの號外はいかに〳〵仁川の第一海戰に我軍の大勝利ないと筆太に掲げ露國の軍艦二隻を打ち沈めしと見るより覺えず叫ぶ萬々歳げに愉快とも、勇ましとも嬉しさたとへんに物なく候

けふしも華き紀元の佳節戸毎に飜る國旗の色一入[illegible]しく殊に覺え候折から菊子の君など五六人音つれ給ひ候へばいとうれしく互に戰捷を祝し合ひ我國軍人の強きを世界にたぐひなしと誇りかに語らひ居候處に母のいで參りて御身達は只一の勝ち軍に心を奪はれ立ち騒き給へど未だ此後いかなる大激戰ありて我軍隊の難儀を聞かんも計り難ければ喜ひはさる事ながら努々油斷はなり侍らず必ず心を同しうして女にふさはしき、務をなしいさゝかなりとも御國の爲に盡し又出征し給ふ軍人を慰ん心掛こそ肝要なれと諭し候へは皆々さなり〳〵と感じ候されは如何なる業をや初めなんと評議致し候ひしがさしあたりよき考へもいですたゞ忙然と致し居候にまた母の「御身達申し合せ手袋或は靴下にても編み親しき友垣にも勸めてなるべく數多く寄贈しられなば之ぞふさわしき働きならめ」と申候へば忽ち皆々それと心を決し、かれて貯へし金はかゝる時にこそ出すべけれと各々の出資を定め居候處へ「號外ッ」と、一同覺えず立ち上り我先にと馳せいで見れば旅順の大海戰に我軍の大捷、目覺しき勝ち軍を報し來り候へば一時に起る萬歳の聲續いて歌ふ凱歌もいさましくいざあすよりは打寄りて編物にとりかゝらむとかたく約して友の歸りを送り候時しも「郵便」と投げ込む封筒はいづこよりと手に取ればなつかしき御許様より送り給ひし嬉しさに封押切て拜見致し暫しは手を放たずよみ返し〳〵、涙と共に卷きおさめ候後にすぐ筆とりてかくなん御返し書きこゐまつり候かしこ

梅見の記

伊勢 丹羽 さく

[illegible]ゑのころ垣内の雪は、まだふるとしのまゝなるに、窓の南のまがきの梅は、やう〳〵きのふけふ、四つ五つほころびそめつるを見るにつけても、地藏谷の梅花、如何ならんと去年の思ひいでられて、いかで今年もと思ふ折から、したしき友だち三人四人とぶらひきて、いざやこれより學びの道に心をこめし、日頃のうさをなぐさめばやと、せきたつるが如くいはるゝに、心隔つる友ならねば、いとうれしくいで立ちて行くまゝに野邊の草はもえいでたれど、まだ春淺きみどりなれば、霞のたちそはんも、さこそと思ひやらる。

村里近くなりぬれば、面も吹く風に、梅が香のかをり來て、うぐひすのまだうらわかき、聲さへきこゆるに、いと嬉しうて心も空に、足もしどろに行くまゝにとある竹藪の中より、消えのこる雪かとばかり、白く咲きいでて、霞ににほふ様いとゆかし。そも〳〵花といへば、何れ目出たからぬはなけれども、中にもよろづの花の魁をして、よく雪にたへ、霜を凌ぎて匂ひ出でたる、其のをゝしさよ、松のみさをにもをさ〳〵おとるべきやはなど時のうつるもしらず、語り合ひつゝ眺めゐたるに、いつしか日もくれはてて月出でぬ、暗香疎影の袖にゆかしくかをれども、さまではとてなんたちかへる。



小說

海戰の夢

二十三階堂

上

今年は三十年來まれなる寒さなりき、明治の人のまだ知らぬ事なりと沙汰するも尤ぞかし、春の風なか〱にするどし、膚は錐もて砭すばかりなるこの晨、こほりを碎きて顔洗ふなど若き人にもならぬ業なるを、まして白髮を戴ける老人の斯くかひ〲しきは昔時に返り給へりやと娘の身になりて見れば、これもうれしかりき。

『まアおとう樣のお嚴い事ですね、この寒いのにわざわざ冷たい思ひをなさらずと、もう少しお待ち遊ばせば銅壺に沸きますものを』

父親は笑ひながら『イヤ寒いの冷たいのいふた處ろで知れたものだ、軍艦に行ッてる人の事思へば何でもないわい』

『左樣でございますね、武雄樣の事を思ひましては寒い暑いは滅多に申されませんね』

『全くさ、何だつてお前、寒暖計が凍ッて役に立たぬ處ろもあるそうだ』

『あのおとう樣外套の襟が凍るといふ事ですが眞實でせうか、』

『されば睫毛や口髯の凍るといふ事は聞いたが、ま

さか着物の襟まで凍るやうな事もなからうさ」
娘は水口に立ちながら手紙を操り返し〴〵讀みもて行きしが「でもおとう樣武雄樣からのお手紙にそうかいてありますもの」
父親は心あり氣にうなづきつ「ムヽそりや何だらう船ではな、あの鹹水が吹きつけるので衣類が濡れるからであらう、何せ浪の荒い處ろぢや堪るまいて、殊にあちらの海は酷いそうぢや」
流石に田舍の住居なり、後園廣からねど植へられたる梅櫻、桃季の二株三株、中にも百花の魁たる南向きの一枝は、春知り顔に綻ろびそめたり、清香の馥郁たるはこれぞ我が閑寂の友なれと、老人はやがて一枝切りて持ち歸り、瓶裡にさして、春の長閑さを樂しみつヽも、心にかヽるは昨今の風雲なり、日露の事件如何ならんと、今日の新聞を讀みはじめぬ。
「おとう樣、戰爭の噂は如何でございます、また矢張り何とも別りませんか」
「さようさね、まア毎日同じ樣な事しかいふてないがどうやらむづかしそうな按排だのう、所詮一と戰爭は免れまいて。イヤ何だかむづかしくなッて來たぞ」
「ヘエ左樣でございますか、どうせやるものなら早くやつた方がよいでせう、私共も何だか氣が揉めて仕樣がありませんの、ねえおとう樣、あまり政府の方で大事を取りましては」
老人は讀かけし新聞を膝の上に置き、眼鏡をはづして一考せり。
「春江や一寸こヽの處ろを御覧、いよ〳〵戰爭になりそうだせ、外交はもう斷絶して仕舞ッた、それこヽの處ろを御覧、ね、各軍艦の〇〇〇に集注と、これは佐世保かね、武雄の乘ッてるのは水雷艇、嘸ぞ元氣づいて居る事ぢやらう、御奉公に命はいつでもさし上ると常々言ふて居たがのう」
言ひつヽ乾度娘の顔を見上ぐれば、外交斷絶と聞いて若き婦人は身の上の一大事に思ひ當りけん、新聞を取りあげつ「日露外交顛末」とある處ろを息をもつかず一心不亂に讀み透せり。事件に關係ある記事一と通り

讀み終りて娘はほつとしながら氣遣はしげに父親の顏見つめぬ。

「あの御父樣、これで若し戰爭になればもう武雄樣には逢へますまいか、私は別にもう彼の方に逢ふ必要もありませんがね、一寸一と言申して置かねばならぬ事がありますよ」

父親は心配そうに「それは何かい」問はれて娘は面羞かしき体なりし「イゝエ何でもありませんの、ですがたつた一と言申して置かねばならぬ事が出來ました」

「ヘエ、それは何かへ、手紙ででも知らせて遣る事なら造作はなからう、それとも是非逢はなくてはならぬ事かい」

娘はさッと面うち赤めぬ。

「おとう樣、そんな事申しあげてまア善い事でせうか、善いか、わるいかまだ私にはよく辨りませんの」

とは底事ぞ、春江は兼ねて武雄の許婚なりとはこの父親の何故に忘れたりしぞ。

下

西へ向ひて急行せる山陽鐵道の二等客車中、ことにこの日は乘客塡充して寸隙を剩さず、中央の通路はいふまでもなく、客車の通行口にさへ大鞄を置いて身を寄するもの幾人、その混雜は名狀しがたし、中に小兒同伴の婦人あり、抱づめにして一時間餘も通路に我慢せしが、優しくも席をゆづる人ありて稍くにして寛ろぎけり、學生あり、商人あり、支那人あり西洋人あり、七十に近き老人の妙齡なる婦人を携へてこれも行先は佐世保なりといふ、老たる人の旅は何事ぞ、心にかゝるは戰爭の事、いづれを見ても氣遣はしき面地なりき。

「如何でせう戰爭は、また始りませんかな」

ラッコの帽子を戴ける商人口金のパイプに紙巻を挿みながらいへば

「左樣、もうどこかてオッ始めたかも知れん。米の騰りやうが尋常でないから」

襟毛の外套に身をつゝみたる髯男は答へぬ。
『それぢや日本の軍艦はもう九州地には居ませんね』
『それはもう疾くに發ましたらう』
窓に對ひて雑誌を繙きつゝありし學生はふと此方を向いて『イヤまだ中々そんな事はありますまい。私共もこれから佐世保へ面會に行く處ですが、まだ三日や四日の内にそんな事はない筈です』
『もし面會と仰やるのは矢張り軍艦へ乘組の方ですか私共もそのつもりで參つたのですがこれから行ッても大丈夫でせうかね』小兒を伴へる一婦人は心許なき面地にて尋ねぬ。
『戰爭の事は秘密ですから何とも申されませんが、私共の受取ッた電報に由ると、どうやらもう船は大抵出ましたやうです』
このとり〳〵なる噂に耳を傾けたる白髪銀髯の老人はその同伴せる、一人の妙齢、人の妻としては物足らずさりとて常の處女にもあらず、年若くして心は老たりその人氣遣はしそうに眉をひそめつゝ、その父親なる白髪の老翁に何事かうち咡やきつゝありしが、やがて老翁は一統へ會釋しつ。
『もし唯今軍艦が出發したとか仰しやつたのは事實でせうか、私共も矢張りその面會に參る者ですが二月の十日までに來れば、逢はれるといふ事で、大急ぎて參るところです』
『ハアそれはどういふ御都合かよく存じませんが、矢張軍艦乘組の方ですか』『ハイ水雷艇へ』と若き婦人の答へんとするを老人はよき程にあしらひ。『イヤ實は豚兒です、これまでは陸上に勤務して居たものですが、今度水雷の方へ廻されました』
ラッコ帽子の商人は眼鏡ごしに妙齢婦人の顔を見あげつ、成程、水雷といへばそれや戰爭では一番功名をする役ですから、實に名譽ですなア』
『ハイ何になッても名譽は名譽ですが、その代り生命は――何時でも陛下に差し上げて居ますので。』
『イヤ御尤、實に御尤です、といふのもつまり親御が

しつかりして居なくては、いくら本人の思ひ切がよくッても、家族の情に牽されては未練が殘るものです。現に私共の弟が矢張りその一人です、弟も陸軍の後備ですが戰爭に出るのはこれで四度目です、最初は滿州へ遣られる、それから臺灣の守備になり、それから北清でも戰爭をするし、今度また呼び出されました子供が三人もあッて家は農家です。まア明治といふ年は戰爭の度々ある年ですな、今度こそいよ〳〵命の御奉公をする時だといつて芽出度く水盃をして出ましたがそれでも、家内がしつかりして居て、三人の子供は手一ッで立派に育てあげるから未練を殘さず花々しく遣つて下さいといつて笑ッて立たせました。』

『成程それは實に奇特な御方ですな、三人の子供があッて、實にそれは感心な事です。それから見ると悴なぞは身一ッです、今度のやうな事があれば眞ッ先きに命を捧あげて國家の爲めに成ッて呉ねばなりません、ですが先刻の御話を承玉はると軍艦はもう出發したとかいふ說ですが、それぢやもう遭へますまいかな。出發前に一と言申殘して置かねばならぬ事があるです、どなたか實際の樣子を御存じの方はないかなア』

老人は伴なる若き婦人を顧みつゝ氣遣はしげに問へり

『イヤそれはまだ判然としません。私共もヤッパり面會に行く者です。御心配なさらんでも乾度遭へますよ。』

滊車はとある停車場に着く、折しも空前號外の聲頻りなり。『旅順海戰』『日本海軍大勝利』

一同意外に撲たれぬ。

* * * * *

三日過ぎて公報は來りぬ、曰く旅順口の敵艦を轟沈すべしとて命を帶びて敵前深く突進せる水雷艇ツバメは首尾よく其の任務を完ふして敵の戰鬪艦〇〇を轟沈せしめたりされど悲むべしこの絕大なる成功を博したる水雷艇は敵の砲臺より亂發せる砲丸の爲めに破壞されて艇長大和武雄以下數名こゝに尤も名譽ある戰死を遂げたり、と。

（完）

忘れ霜

小栗風葉

花過ぎて吉野出る日や忘れ霜——几董

(上)

某伯爵の誕生日とて、今年彌生の中旬麻布本村の其別莊で催され た園遊會は例年の如く盛大な事であつた。

主人の伯爵は當時廟堂の切れ者で、政界の一方には缺くべからざる人であるから、假にも今度の有難き招待に預つたのは、今の世の紳士が誰しも一期の光榮とする所、馬車腕車の轍を連ねて、其の日を此權門に馳參ずる者は引き切らぬ有樣であつた。

斯くて午後一時を報ずると、立食の場に立入る人は漸く少くなつて、先様の多くは是から初まる餘興の方へ足を向けるのである。是も其群なる絹帽子に燕尾服を着た若手の紳士が五六人、築山の上の四阿に陣取り、何れも三鞭酒の醉面白く笑ひ興じて居る所へ、今日を晴と着飾つた貴夫人連が靜に其前を通つて行つたが、中には見知り越しの人もあると見えて、皆丁寧に會釋を爲ながら、極り惡さうに過ぎて行く。

『誰だい今行つたのは。』

顏の四角な色の黑い紳士は坐中の一人の肱を突いた。

『彼を知らずか、交際場裏に居る人とも覺えんね。中央のが大口男爵の夫人さ。それから此方の端に赤くなつて俯きながら行つたのが、鶴森貴族院議員の令孃、向方のが藥師寺伯の妹君さ。』

『オヤ〳〵君は實に能く知つて居るな。』

『生きたる貴夫人令孃字典は先づ僕だらう。敢て人名ばかりでは無い。何處の誰は年齡が幾歳で身持が何うだとか、許嫁があるや否や、容貌の美か醜か、そんな事が委しく解る。』

『それで定價一錢は廉いもんだ。然し其れだけ知つて居れば新聞の探訪に成つても飯が食へるね。』

『冗談云ふな。是でも何處へ行つたづて歡迎されるん

で通つたものだ。」
「然うぢやあるまい、押が强いので通つて居るんだらう。」
丁度向側のベンチに腰を懸けて居た他の一人が口を出した。
「時に今日は西内が見えないが何う爲たのだらう、君等は知らんか。」
片隅に居る痩せたのが突然伸を爲ながら尋ねる。
「今し方矢島ともう一人名は知らんが能く見かける西洋人と三人で、麥酒を傾けて居たつけ。君は西内に用でもあるのかい。」
「別に用では無い。」
「諸君少と歩かうぢやないか、斯んな處に暇を潰して居るのも詰らん話だ。」
と又一人が云出すと、皆之に同じて、五六人の連中は宛然燕のやうに此四阿の軒を離れた。
是と入違ひに、今しも木立を廻つて此處へ來たのは、年齢三十位の背の高い、色の淺黑い、鼻下に美しい八字髯を生した男で、黑斜子の五つ紋の羽織に、黑羽二重の紋服、仙臺平の袴を折目も正しく穿いて居るが、酒を强ひられるのが辛さに一人此處へ逃げて來たらしく、然も苦しさうに椅子へ腰を下し、絶えず往來する人を憚つて有繋に横にも成らずに、片手で額を抑へながら熟と俯いて了つた。
や丶暫時は此ま丶不動であつたが、そよ〳〵と花の香送る春風の身に泌みて、渠は不圖首を擡げて四邊を見廻した。丁度午過の麗かな日光がきら〳〵と照して、草や木は何れも其情を浴びやうとするらしく、折々は靜に囁くやうに葉摺の音を爲せて居る。築山の背後の方には糸櫻が亂次く身を持ちながら裏淋しげに微笑んで居るらしい、それが宛然自分には難面い世の中だと云はぬばかり、風の吹く度に不性らしく搖られ縺れながら、ちら〳〵と散り殘りの花片を零して居る。
見上ぐる空には根も無い白雲がふら〳〵と漂ふて、霞を抹した南へと動いて行く。つい其處では今しも餘興の音樂が一段高く響いて、又ハタと鳴り止むと、軈て

喝采の音が軒打つ霰のやうに聞えた。其賑ひも他に、一人美しい木々に圍まれた此岡の上に居るのが、何と無く超然人の世の外に出たやうな氣が爲るのであつた。

渠は此淸らかな景に打たれて、少時何事をも忘れた樣であつたが、軈て又二三人の微に笑ふ聲が爲て、其處の茂みを出て此方へ來る者がある。黑の紋付に白襟を襲ね、つゞれ織の帶を締めた未だ若い貴夫人であつたが、十二三の令孃と連立つて、折しも其前を過ぎやうとしたが、不圖内の人と顏を見合はせて、

『おや。』

と云つたばかり先方は驚いて目を瞬つた。此方も氣が着いたか、立上りながら、

『靜枝さん……ではありませんか。』



『何うも……側らずお目に懸りましたのねエ。』

夫人は何となく落付かぬ樣に、手にした桃色の手帕を頰の邊りに當てる。

『まあ此方へお入りなさいませんか、お一人では無いからお差支も

ありますまい。』

と云つて、男は片隅へ席を退き、而して一方に離れた椅子を指示す。

『それでは少し休息致して参りませうね。』

と連の令孃を見返り、

『さあ千代子さんも一緒にお入りなさい。』

二人は小高い岡に上つて靜に四阿の内へ入つたが、夫人はやゝ俯き氣味に坐に就き、

『まあ西内さん、久し振でお目にかゝりましたねえ、京都へ御轉任に成つてから後は、一向懸違つて御面會



も致しませんでした………又此方へお歸りに成つたとは承つて居りましたが。』

『はい此春又本省へ逆戻りを致しましたが、非常に忙しいものですから段々御無音に致しました。牛込の御本宅へは兩三度伺ひましたので。』

『然樣でございますか、然し此度は大層御榮轉で居らつしやるさうで、何より結構に存じます。』

「いや痛み入ります。」

西内は一寸會釋して。

「申し後れましたが、貴方が桑山家へ御輿入に成つた事は京都で承りました。私も何よりお慶たく存じます。」

夫人は鼻白みつゝ。

「其節は又頂戴物を致しまして……。」

双方とも大きに狼狽して少時は默つたまゝ相對して居たが、西内はやうやく口を開き。

「今日は誠に結構なお天氣で何よりです。あゝ先刻一寸桑山男爵をお見受け申しましたが、混雜の中ではありましたし、それに私は未だ一度もお話を爲た事も無いから、御挨拶も差控へました。御歸邸に成りましたら何うぞ宜しうお申上を願ひます。」

「はい。貴方はお一人で居らつしやいますか。」

「否、連は多勢ありますが、今も無理に酒を飲ませられて、仕方無しに此處まで逃げて來た處です。」

「眞に貴方は餘り召上がらないのでしたねえ。」

夫人は醉ふて苦しげな男の顔を見て、氣の毒さうに眉を顰めた。

「姉樣、妾彼方へ行きたいわ。」

退屈らしく柱の周圍を回つて居た令孃が云出したので西内は心着き、

「何うぞ御遠慮なく入らしつて下さいまし、私の爲めに飛んだお暇潰しをお爲せ申しましたな。」

「何う致しまして。」

と少し躊躇うたが、

「それでは是でお別れ申します。又機が御座いましたらお目に懸りましやう。」

「來年も亦此園遊會で御面會が出來るかも知れません。」

西内は一寸笑つて、自分も徐ら席を起つたのである。

又一切り音樂が爲て、後は崩れるやうに人の散る樣子。西の風が段々強く成つた。空高く掲げられた紅提灯や旗がバラ〳〵と搖れ立つて、眞白な花片が雪のやうに飛んで來る。

『千代子さん參りましやう。』

桑山男爵夫人は丁寧に會釋して立出たが、褄を取つて徐々と段を下りながら、

『まあ此の糸櫻が好く咲いた事。』

令嬢が口輕に、

『然うですねえ、兄樣が一緒に居らつしやると好いのだけれど、自分だけで御勝手に行つてお了ひなさるですもの。』

西内は一人反對の段を降りながら、此話を耳にして同じく糸櫻の梢に目を注いだが、何處となく心淋しさうに、而して醉覺の風が身に沁みわたるやうな姿で、思はず其處に立留つたが、又足疾に母屋の方へと歩み去つた。

（下）

麹町の唯ある玉突場の扉を明けて直と內へ入つたのは今〇〇省に若手の巾利と云はれる西內朔郎である。派出な脊廣にインバネスを被けて、緣の狹い焦茶の山高帽子を手に持つたまゝ、折から五六人集ふて居る先客を一通り見廻す。

今しも紅白の球を爭うて、杖を構へつゝ臺の前に立つ者、他に讓つて空しく一番の勝負終るを待つ者、皆等しく入口を向いて、此新來の客に會釋を爲たが、西內も愛相好く之に應へながら足疾に長椅子の前へ來て、

『オイ飛鳥、君は散々人を待たせて置きながら何時か拔駆とは酷いな。』

『僕は又大方君の方が先へ來て居る事と思つたんだ。』

『それではお互ひに勘違ひだつたな。』

と帽子と外套を壁に懸けて、

『何うだ、未だ大分手間取れるのかい。』

『然うさ。此輩は今初めたばかりで、加之になか〳〵長いと來て居るから、何時濟むか知れやしない。』

『へゝ何方の事だか。』

と今しも敵手に好い玉を取られて、焦慮氣味で居る競爭場裏の一人が云つた。

『では飛鳥君、一寸夕飯をやらうぢやないか、君も附會うだらう。』

『それも好い。』
飛鳥も直ちに同じて、二人は別室の食堂に入つた。西内は給仕人を呼んで簡單に料理を命じ、其前にウヰスキーを持つて來るやうに吩咐ける。
『昨日はいやに濟まして居たが、今日は又頗る元氣だな。』
飛鳥は卓子の上に肱を突いて、對手の顔を眺めた。
『皆の爲めに無理に飮ませられて、平常の量を越えたものだから昨日は閉口して了つた。僕は皆に別れてからして、彼の築山の上に茫然として居たよ。實に詰らなかつた。』
『イヤ處が詰らなく無かつたらしいねえ。』
飛鳥は鼻で笑つて、フイと天井を仰いだ。
『何が、妙な事を云ふぢやないか……まあ一つ杯を揚げやう。……而して何だつて？少しも僕には解らんが。』
『解らなければそれで可い。誰も知るまいと思つて居るのかい、君は彼處で女と話を爲て居たらう。』
『フム爲て居た。桑山の夫人と。』
西内は冷やかに言つて、
『それが何うか云ふのか、誰だと思ふ。而して斯んな詰らん事を然も可笑しく云ふのは、お互ひに身分に關はるでは無いか。』
『否然う改まつて出られては困る。唯其の桑山夫人の以前は大分君の神經を痛めた事があつたと思ふから、不圖斯んな事を言ふんさ。何うだ、名譽ある參事官では無い、吾輩の同窓の親友なる西内君！昔の戀の歴史でも語らんか。』
『戀の歴史といふのか。』
西内も無邪氣に笑つたが、
『なか〳〵僕は語る資格が無いよ。それは假に或事に餘分を付けて、小説のやうに煉つたらば、隨分面白い話も出來やうが、僕には幸か不幸か其樣な事は無かつたんだ。』
『まあ一つ杯を重ねて、而して其樣な白つぱくれた事を云はすにな……君は彼れから何うした、顔色を靑

くして匆々に歸つて了つたでは無いか。』

『それは酔覺で何だか薄ら寒かつたからさ。然し、君は能く僕の事を注意して居たと見えるね。』

『可厭に又一々咎め立てを爲るんだな。』

飛鳥は高笑を爲て、

『僕だつて決して人の話を立聞するやうな不埒は働かんよ。唯恰も其横を通りかゝつて姿を目に爲たから、それで斯う自分で種々想像もして見たのさ。』

『然うだらう。然し君が立聞を爲て呉れたら、僕も恐らく痛くも無い腹を探られなかつたのだらう。』

『オイ〳〵僕は君が人の聞くのを憚るやうな事を話して居たとは決して思はんよ。唯其の淡々として別れた時、そも〳〵何ういふ感があつたかと聞くんだ。』

『可、それならば話さう、全く淡々と別れた時の心も亦淡々たるものだつたよ。敢て禮義と云ふ事を重んじたんでも無いが、……君人間といふものは決して常識の範圍を出る事は無いね。強ひて出まいと爲るでは無くとも、自然が之を然らしむるものだ。是は僕が眞面目に云ふんだ。』

『では全く昔の事なんかは頭を去つて了つたと云ふのか。』

西内は壁を見詰めたまゝ少時は默つて居たが、軈て靜に杯を把つて飲差しの酒を仰ぎ、

『まあ斯うなんだ。彼の時偶然彼の女に逢つたので、僕は實際驚いて心が戸惑ひを爲たやうだつた。けれども其れは嬉しかつたからでは無く、又悲しいのでも、腹立たしいのでも無かつた。僕は自然に唯改まるべく命せられて、而して口から久濶の挨拶を出さうと思つた。先方も恐らく然うであつたのだらう、何だか狼狽して同じ形。言が響くばかり、初の中は大弱りさ。然し是は女に逢つた時の常だから格別不思議は無い。』

『君の如き交際家にして倘然りかな。』

飛鳥は獨り頷首いて居る。

『君も知つての通り、僕と彼とは親達の存命中から極く懇親に爲て居た間柄だが……昔の事を語るのも詰らんな。此位に爲て置かう。』

「非常に簡單では無いか。」
「其の後吾輩の方からともなく、又先方からと云ふでも無く、何だか有耶無耶の内に話は立消になつたが、其れは表て向の事で、本人同志の熱度は未だなか〳〵盛であつたと思ひ玉へ。處でせめて僕の方からでも進んで交渉を爲たら、本人は無論の事、親達だつて強ち異存は無かつたかも知れんのであつたが、其時分は一方に功名心が熾であつて、自分の位置を得やうと爲る念も急であつたし、それに僕は前話した通り實際彼を戀して居たが、其れを打明けて先方の親に言ふだけの勇氣が無かつた。結婚といふ考が浮ぶと同時にもつと自分の位置を作つて置かなければと云ふ、他の思慮が入つて來る。又其他の事情もいろ〳〵出て來る場合になつて、何うも我ながら意氣地が無かつたが、遂に其處まで到達し得なかつた。」
と又苦さうに酒を飲んで、
「其の内僕は京都へ行く事になり、それから一年の余も經つてから女は桑山へ嫁いださうだ。僕は其事を聞いた時には有繋に悲しいやうな、心細いやうな氣が爲たよ。然し世の中に能く云ふ失戀なぞ、其樣な事は僕には無かつた。その心細かつたのも一時で、所謂去る者は日々に疎し、何時か何事も忘れて了つたのさ。」
とや、自ら嘲むやうに笑つて口を噤み、對手の顏を打戍つたが、
「先づ僕の戀の歷史とも云ふべきものは是だけだ。骨組は何うか面白さうだが、實の處僕自身にも餘り無趣味だと思はる丶程呆氣ないのさ。それで斯う思ふ、僕は何うも他から比べると冷淡なのかも知れん。能く初戀の爲めに何うしたとか斯うしたとか云ふ例もあるやうだし、又詩人や小説家は其樣な事を材料に取つて人生の悲哀を物語るが、僕は全く平々だつた。然し今日の一般が果して詩や小說よりも冷やかなものであらうか。それとも僕一人斯う冷淡なのか、君に聞いたら解るだらう。」
「何うも僕にも其の解決は付かん。然し西內君、君の話はそれでお終ひでは無からう、後談があるでは無い

か。」

「おゝ其處だ。昨日偶々其の戀人に遇つた時の心持ちは何うであつたかと聞くのかい。僕のやうな人間が昨日のやうな機會に觸れた時の疑問を先づ頭に置いて呉れ。先刻常識は自然だと云つたが、其の常識は蓋し本能だらう。僕は其時昔の知人に會つたと思つた。然し決して昔の關係を思出さなかつた。唯今日の彼の幸福男爵夫人としての榮を祝して、而して自分の孤獨な事を憐んだ。」

「それが君の……その憐んだ心が戀の所業だらう。」

「否々。」

と西内は頭を掉つて、

「然うぢや無い。其の憐みと云ふのを露骨に云へば、人の富を見て自分の貧を氣に爲るやうな卑劣心さ。何で昔の戀なぞを思ふものか、僕は元來現在のみ考へる。以前は然うでも無かつたが、今は確かに此現在主義だ。人間は過去を考へたつて仕樣が無い。」

「では君は歴史を重んじないのか、國に歴史のあるやうに人にも歴史がある。君は其の立派な歴史を今語つたでは無いか。」

「語つたつて何うなるものか。それは誰しも歴史の無い者はなからう。然し其物を重んずる必要更に無い何うだ其の歴史の終局は？史を調べて到着する處は今日では無いか、今日を知る者は即ち歴史を知らずともそんな不必要な事は知らずとも可なりだ。然しそれが有る物なら強ひて排斥する事も無益だが、僕自身としては少なくも僕其者の過去を考へる事に依つて何の滿足も得なければ、又苦痛も感じない。食に飽いた者が食後に其の味を思ふが如く、多くの喜怒哀樂は皆を滿腹させて居るではないか、君は僕を冷淡だと云ふだらう、然し僕は利己の爲めに然うなのでは無い、凡てのものに冷淡なので、自分にさへ斯んなに淡いのだもの。」

と徐ろに冷えた紅茶を啜つて、

「常に此心を持つて居る。宛然今此食堂に別れるやうに……。實際現在に滿足して、禮も失はず、自ら恥ぢず

と云ふのは斯んな時に起るべき常識で、それが又自然と云ふものでは無からうか。……あゝ詰らん事を言つて長くなつた。サア君彼方へ行つて大に鬪はうでは無いか。』

彼は立上つて、何をか云はうとする友の肩を叩いた。

（完）

露西亞小話

櫻塘山人

其四

エリシアは扉の握りへ手を掛けて曳くと、其儘開いたので、小舍の中へ這入つた、見ると隅の壁には古い肖像が懸けてあるし、卓子椅子、暖爐が位置を亂して据ゑてあるが、一つの腰掛の上には、襯衣一枚で慄へながら、いつ梳つたか解らない頭を卓子の上へ投出したやうに載せて、眠つて居ると、其側には蠟細工のやうに膨れた腹の、薄く蒼白い小さな兒が蓐りと搖ぶつて居るのである。

するとまた一つの棚の上に瘦せて骨ばかりの脛を見せて、伏向けに臥て居る婦人があつたが、此婦人が吸呼をつく度に、咽喉がごろごろ云つて、其また咽喉が鳴る度に、不快の臭氣が鼻を衝くのである『此婦人も亦病人なので、誰も此婦人の看病をしてやらないものと見える』かうエリシャが考へて居る中に、腰掛の上に臥て居る老婆はひよいと首を擧げてエリシヤを見た。

『貴郎は何か欲しいのですかえ、お前さんに上げるやうな物は一つも有りませんよ。

エリシャは頷き〳〵側へ行つて、

『なアに水を貰ひに來たのさ、外に別段用はない！水を一杯飮ましてくれまいか。

『お恥しい事ですが水もありません、何卒外へお出で下さい。

『ちやアお前の家にやア水一杯ないのかね？

『ありません、この通り、伜も此五六日食べないで、御覽の通りでゐるのですもの、何一つある理由がありませんはね。

かう云ふ中にも疲勞の爲めに眠りかける老婆を、側に立つて見て居た小兒は用捨なく搖起した。

『伯母さん、麵麭を頂戴よ、お腹が減いたから麵麭を頂戴よ！

エリシヤは未だ老婆への質問を續けやうとした時に、床の上に仆れて居た男は不意に起上つて壁の隅の腰掛へ行かうとしたが、足が利かないので、敷居へ蹶いて仆れる。もう起き上る力もないのか、其處へごろりと臥て、かう云つた。

『お客さん、御覧なすつて下さい、私共はこの通り病氣になつて居るのです、饑ゑて死ぬのでございます！

小さい兒の方を見た時に、男の眼にはもう涙が一杯溜つて居た。エリシヤは手を延して男を抱き上げて、腰掛の上へ臥かせてやつたが衣袋から麵麭を出して、小刀で小さく切つて男にやると、男は力のない頭を振つて、

『私はもう死ぬものです、何卒小兒におやりなすつて下さいまし！

エリシヤはまた小兒に麵麭の一片を切つてやり棚の上に臥て居る婦人から女の兒と順々に配つて來てさて最後の一片を老婆にやると、老婆は凝とエリシヤの顏を見て。

『水が飲みたいと被仰るのですね、其處に臥て居る伜や嫁も此間から咽喉が焦げつくやうだつて、水を欲がりますんで、さう、一昨日でしたか、今日でしたか解りませんが、何でも妾が水を汲に行かうと思つて手桶を持つ所ぢやアない、一足も歩行けない中にこゝへ仆れてしまつたのです、誰か盜つて行かなければ、手桶は何でも其所の臺所にあるだらうと思ひます。

『手桶があれば理由はない、どれ一つ汲んで來てやらう！

エリシヤは臺所へ出て見ると、から〳〵になつた手桶が一つ置いてあるので、直ぐ井戸の水を汲んで來て、病人に飲ましてやり、また一つの麵麭を切つて一人一人食はしてやると皆喜んで腹を盈たしたが、只一人腰掛の上に臥て居る男ばかりは『私は食べる事も飲む事も出來ません』と云つて一滴の水一片の麵麭も口にしなかつた。

エリシヤは町へ出て行つて、食料品、鹽、麪粉、牛酪を買つて來たが、丁度柱に小刀が懸けてあつたので、それを持つてつて、裏の木の枝を伐下し、早速火を起してスープと粥を拵へ、これをまた皆に食べさせた。

其五

さアかう御馳走が來て見ると、男も食べれば、老婆

も食べる、餘り滿腹になつた故爲か、小兒は腕と腕とを組合せて臥てしまつて、盆と正月とが一所に來たやうな有樣になつたが、男と老婆さんとは徐々元氣を恢復して、今迄の身の上を悉皆エリシャに話す事になつた。

『俺共ア固からさう富豪と云ふ理由でもなかつたですがね、夏の收穫が思はしくなかつたので、とう〳〵此樣になつて仕舞ッたのですよ、始めの中はなアに近所の人へ賴めば一年や二年どうにか越せると思つてましたが、一体の饑饉年と云ふので、近所だつてさう〳〵人の世話を見る所ぢやアありません、さアもう喰べるものが無くなつたので、獵へ出たら少しは獲物があるだらうと、鐵砲を擔いで山へ出て見ましたが、少しも獲れない、まア三度の御飯を二度にしても春まで待つたら、少しは好い芽が吹くだらうと、饑餓じい腹をかかへて俟つてましたが、駄目ですな、其中に病氣になつて働く事が出來ない、一日食べては、二日食べないと云ふ理由で終局には草を食べましたよ。其故爲でもありますまいが、俺の女房が病氣になる、老人も床に就くと云ふ風で、實に死ぬのを俟つて居るばかりでした。

と男が云ひますと、老婆さんは詞をついで、

『食べるものがないものですから、妾共はどうして生きて居られますものか、伜が床に就く、嫁が仆れると云ふ理由ですから、せめて嫁だけでも近所の人へ預けてと思へばもう腰が立たないと云ふ仕末で、ある日近所の人が見舞に來てくれましたつけが、皆枕を併べて寢て居る上に、明日の麵麭がないと云ふ騷ぎですから逃げて行つてしまひましたよ、其苦でございませうよ其人の家にも麵麭がなくつて、小兒に食べさせるものもないのですからね、それで貴郎、妾共はかうして寢たまんま死ぬのを俟つて居たのです。

聞けば憐な話で、エリシャも貰泣きをしたが自分は何時までも此處に居るべきでない、エフヰムと會はなければならぬと思ふと、氣が急いでならぬ。其晩は此處へ臥て、翌る朝になると、自分が此處の亭主のやうに臺所へ踞んで、火を起す、水を汲む、近所へ行つて甘味い食物を買つて來て食べさせた。

三日ばかり立つ中に、小兒は丈夫になる。エリシャを朋友のやうにして跳廻る、嫁もだん〳〵壯健になる、老婆さんも近所歩行位出來るやうになる、男も壁へ凭れながら仕事をするやうになる、只若い娘だけが未だ

思はしくないが、これとても食物が食べられるやうになつたので『あゝ大分長くなつた、もう徐々出懸けやう！』とエリシヤは翌る日出立と心に決めた。

其　六

エリシヤは此處へ來てから、もう四日目になつたが時しも丁度夏の終りで、祭日も明日に迫つて居る事でもあるから、もう一日此處に泊つて、明日の夕方出立の事にしやうとそれから町へ行つて、牛乳や、豕肉や麵麭粉などを買込んで、老婆さんに料理をさせ、其翌る朝は皆と膳を一つに食べ、聖堂へも一所に出掛けた捗々しく好くなつた、若い娘も此日から床を出るし、男は汚れた襯衣を着換へて村の方へ出懸けた、それは田地や玄米が其村の富豪に抵當に行つて居るので、此次の收穫を的にまた少し追借をしやうと云ふのだ。夕方になると男は歸つて來たが、酷く失望した樣子で、『あゝ、駄目だ〳〵！富豪の野郎、いくら俺が賴んでも聞いてくれねえ、少しでも始めの錢を入れたらば、後を貸してやらうと云ふのだもの！

エリシヤはまた出立する事が出來なくなつてしまつた。と云ふのは、男は今一文の錢もない、一片の麵麭もないのだ。さうかと云つて自分の田地は大概抵當になつて居て、殘つて居るのは十二段許りの畑であるがそれとても草が一杯生へて居て、何一つ出來るのではない。それを今自分が見拋てゝ行つて、此處の家を出たら、男も、老婆さんも、若い娘も、小兒も、また自分が來た時の通りになつてしまふ。自分は此處に居るだけ時間も費へれば金も隨分入るが、これは何とか扶けてやらなければならないと、其晩また出立する事が出來ず、泊る事にしたが何分眠る事が出來ない、俺はどうしても此處の家を助けてやらなければなるまい。さうだ、抵當になつて居る米を取返してやつて、あの荒れて居る田地へ種を蒔くやうにしてやらなければなるまい！

翌る朝エリシヤは起上ると長い上衣を引懸けて、自分の心を明瞭させる爲めに、苦しいながら嗅煙草も嗅がつす。腕組をして種々考へに沈んだが、什麼も判斷がつかない。仕方がないからまた橫になつて、臥やうとすると、不意に誰か枕頭へ來て起すものがある。

寢た間は短いが、エリシヤは鞄と杖とを持て旅へ出た夢を見たのである。其夢と云ふのがまた頗る不思議でエリシヤは鞄と杖とを持て旅へ出ると、やがて自分が通れるだけに開けてある門へ來たから、サッさと出や

うとする。門の左から不意に鞄を摑む者がある。するとまた右からもエリシヤの杖を摑んだものがあるので、エリシヤは周章して居る間に、また一人脚袢の紐を摑むと、紐はヅルリと弛んだから、締かへて居る中に、今迄あつた門もなくなつてしまつて小さな女の兒が枕頭で『叔父さん、麵麭をお　れ叔父さん！』と起して居たので、不圖氣がついて見ると、小兒が自分の足を摑んで居た『さうだ！明日こそは抵當になつて居る玄米を取返して、男には馬、小兒には牝牛を買つてやらう、神樣が乾度自分に此處の一家を助けさせるに相違ない！』とまた一寐入したが、眼が覺めると早速村の富豪を訪れて、若干か金を出して玄米を取返し、馬と一臺の車を買つて男にやりまた小兒の爲めに牝牛を買ひに行かうとして、てく／＼村の方へ引返して行く道で二人の婦人に遇つた。何の氣なしに二人の話を聞くと、これは自分の噂をしながら行くのである。

『始めはお前さん、彼所の家でも普通の人だと思つたでせう。何しろ水が欲しいと云つて這入つて來て、それから彼所の家へ種々な物を遣つて、終局には馬まで買つてあてがつたんですもの、あんな情け深い人は世界にあるものぢやアありませんわね。

から讃められて見ると、エリシヤはもう牝牛を買つてやる氣もなくなつて、其儘引返して小舍へ歸つて來ましたが、男はもう門の所へ立つて居て。

『お客さん、大層好い馬ですが、一体何處から曳いてお出でなすつた？

『買つたのさ、馬鹿に安價かつたよ、草を刈つて小舍へ運ぶのに好からうと思つてな。

『それは難有うございます、あんなに種々御厄介を懸けまして、其上に馬まで買つて戴いちやア濟みませんです。

男は非常に喜んで、其晩は寢てしまつた、家中が寐靜つたのを見濟したエリシヤは急いで靴を穿いて、鞄と杖とを小脇に此處の家を出てしまつた。（次號完結）

▲米國婦人が歐洲に持去る金額　此程英國のロクスバルグ公と結婚して公爵夫人となりたる米國のゴーレット嬢は持參金として二千万圓を携帶したる由なり從來此の如く米國婦人が歐洲の有爵者と結婚して之が爲に米人の資産が歐洲人の有に歸したる總金額は實に莫大なるものにして概算凡そ四億圓なり今其内英國に於て知名なる人々の持參金を舉ぐればマンチエス公爵夫人二百万圓マーボロー公爵夫人二千万圓印度總督カーゾン卿夫人一千万圓ランドルフ・チヤーチル卿夫人百万圓ペレスフオード卿夫人六百万圓ヤーマス伯爵夫人二百万圓等にして歐洲大陸諸國にてはコロンナ公爵夫人五百万圓カステレーン伯爵夫人三千万圓ハツワフエルト公爵夫人四百万圓フエステチックス伯爵夫人四百万圓ボニアトウスキー公爵夫人二百万圓等なりと云ふ

次號記事要目

四月五日發行

每月五日發行

定價表

一冊（紙數二百八頁）	金二十錢
四冊（三ヶ月分）	前金七十五錢
八冊（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六冊（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
內（定刊數……十二冊 / 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）	
郵稅 一冊	二錢

廣告料

	特等	一等	二等	三等
二十四字詰一行	……	四十四錢	三十六錢	二十九錢
中頁（卅二行）	……	十四圓〇八錢	十一圓五十二錢	九圓二十八錢
一頁（六十四行）	割引三十三圓	割引二十七圓	割引二十二圓	割引十八圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

注文規署

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治卅七年三月五日發行　第四卷第參號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　合資會社博進社工塲（東京市小石川區久堅町百〇八番地）

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　二千六百二十番　千十八番　三千二百二十九番

三月三日發行

第三編

正價壹册拾錢　郵稅壹錢五厘

博文館發行　日露戰爭實記

極東の風雲滿韓の野を捲き海を蔽ふの艨艟東洋の大波瀾を衝破す眞に是れ世界歷史未曾有の大戰爭、山岳震撼して河海爲めに掀翻す、若し夫れ砲火迸裂し鐵騎馳突するの壯觀活劇を描出し戰地特派員の通信寫眞記事と相待ちて帝國の爲めに衝天萬丈の光炎を吐く者日露戰爭實記即ち是れなり

口繪

黑木陸軍大將 第二師團長 **西陸軍中將** 出雲、磐手、常盤、淺間、八雲、吾妻六巡洋艦と**各艦長**を首とし開戰前の旅順口大寫眞三頁大の全景は、敵國全艦隊、黃金山砲臺より船渠及市街とも總て一目の下に在り眞に絕類の珍なり **近衞** 第一第二 **旅團長** 一二三四 **各聯隊將校**の寫眞は、如何に之を集むるに苦心せるか、讀者必ず之を諒とせられん

戰記

記事には**旅順第一二回襲擊**の詳報を首とし、陸海軍の動靜は、法令の許す限り、最精最確、最迅最速、**露國陸軍大臣**クロパトキン**同黑龍江總督**リチウヰツの傳、など、最新最詳、其他我が陸海軍各將校の傳記を首とし、財政外交、其他軍國の時事一切を網羅し、秩序整然、文晴雅健、趣味實益兩ながら紙上に溢るゝを期す。

六冊五十七錢●廿四冊二圓十五錢●卅六冊三圓十五錢●此外郵稅

發兌元　東京市日本橋區本町　博文館

(後付の一)

最新發

前衆議院議員櫻井駿君著

酒量大觀

（製本既成）

全一册

洋裝細長形
裝幀堅牢
正價三拾錢
郵稅六錢

本書は財政家酒仙なる櫻井駿先生の新著なり先生政界に在て平素政務調査に多忙なる傍ら其能く時に大酒量を實演し氣焰揚る所餘情溢れて酒量大觀の大文章となる其哲學觀を以て酒量を論ずる所眞に古今獨步の妙あり後篇は內外各地に於て先生の實例に依り酒量觀言行一致の實を示せり附錄には內外人の酒量と歐米の禁酒論賛否とを掲げて最後に內外各種酒類精分對照及分拆表あり人をして興味實益併せ得て一讀三嘆巻を措く能はざらしむ

水谷不倒先生著

巻頭竹本攝津大椽夫妻の肖像及手蹟銅版

竹本攝津大椽

（製本既成）

全一册

和裝極美本
中判
正價卅八錢
郵稅八錢

東に市川團十郎、西に竹本越路太夫、名人上手の好取組、歌舞伎と淨瑠璃の兩大關と稱へられしは實に一年前のことなりしが、團十郎は一歩お先へ御免を蒙り、跡に次ぐべき名優なく、殳許御聞に達しまするは、近世義太夫節の泰斗、二代目越路太夫改め竹本攝津大椽、先づは藝園の一人土俵入か、今の社會の横綱を、デン通でもなく傳通でもなき著者が、大阪に居る甲斐に、吾が儘ながら誰書こと、撰り出したは此傳記、攝津大椽が少年より身を起して藝人社會に投じ、千辛萬苦、今日の大名を博したる其經歷は云までもなし、彼が平常の行狀、得意の語り物、細大漏さず一面より見れば大椽が傳にして一面より見れば實に一編の立志談、又最近五十年間、大阪に於ける人形淨瑠璃の變遷消長より文樂座の沿革を窺ふは、本書に限るべし、面白くて、爲になつて、而して事實が正確なれば、讀書社會に趣味を供すると共に、學者の參考に資すべきなり、是れ丈けは僞りなき効能なりとは著者が自白、其他の利益は讀者が撰り取り勝手次第なるは、尙千圓の大福引を引き當てるが如しと、ホヽ敬て白す

發兌元　東京市日本橋

（後付の二）

行圖書

ホノルヽ新聞主筆 木村芳五郎君
傳道師 井上胤文君 共著

布哇渡航案内

全壹冊

全一冊洋装頗美麗本
寫眞銅版密圖共面布哇航路圖(石版)挿入
正價金三十八錢
郵税金八錢

海外移民の我國に必要なるは尚衣食の人生に欠くべからざるが如し我諸移民中過去及現在に於て最も成効し又將來に於て最も安全にして有望なるは布哇の右に出つるものあらず故に布哇の榮枯盛衰は一に本邦移民の掌中に存す著者多年布哇にあり親しく兩國の關係眞相を熟知し本書を公にす其記事皆實地踏査を基礎とし平易通俗を主とせり

法學士 武田千代三郎君著
平福百穗君挿畫

新農家

全壹冊

正價金四十錢
郵税金八錢

▲附錄 大脇農學士 新案編纂 農家年中行事 月々の農事、播種、施肥、手入移植其他祭日儀式の由來縁起等六十頁

著述者は長く地方長官たりし經驗と其專攻の學問とに依り、現下の社會問題たる「農民生活」に就き、家人として、私人として、公人として時代に相應す可き知見あり品格なる文明進取の新たなる「農民」と「其家庭」とはいかにして得らる可きかを具體的に構思し、乃ち之を基礎として着實穩當に本問題の解釋を試みし也。各種農業學校農學補習學校並に農業地方小學校の「課外讀本」としては最も適切たる可し

區本町三丁目　博文館

最新發

神戶高等商業學校教授 東爽五郎君閱
長崎縣立師範學校教諭 山下與之助君著

製本既成

普通簿記教科書

全壹冊

菊版洋裝背クロース
紙二百餘頁
正價金三十錢
郵稅金六錢

現時我邦の師範學校及高等小學校等に授くる簿記は多く高等簿記に限れり高等小學校に於て會日用簿記の一部を授くるも其一種の家計簿記なる學生及官吏の生活內部を示したるに過ぎずして未だ實業家の計算整理法を講ずるものあるを聞かず著者茲に見るあり商業簿記に商業家の生計簿記と農業家の生計簿記とを各部互に相關聯せしめんが爲め多年此事に傾意せり、師範學校の如きは他日小學兒童の指導者を養成する所なれば無論此題意により授くる所の方針を取らざるべからず故に本書は師範學校教科用丼に高等小學校簿記參考用書に充てん爲め懇切に編纂せり請ふ其眞價は一卷を得て御諒知あらんことを……

東京高等商業學校教授 佐野善作君序文
曾我部純一君著

製本既成

最新家計簿記

全壹冊

菊版和裝中版美本
正價金二十五錢
郵稅金六錢

從來家計簿記に關する著書は或は簡畧に失し或は冗漫に流るゝの恐なき能はず著者茲に見る所あり高等女學校等に於ける家計簿記の教科書參考書たらしむると同時に一般家庭の主婦たる人々に家政を整理せしむる目的を以て本書を著述したり其第一章に於て帳簿を論して一讀家計簿記の何たるを知らしめ且從來其例なき豫算の編成を論じたるが如き以て著者の意を見るに足るべし加ふるに上田學士の嚴密なる校訂と注意とを與へられたれば家政上欠くべからざる要書にして讀者此書によりて傳習せば其稗益せる所大なるさし……

發兌元　東京市日本橋

(後付の四)

行圖書

工學士久野末五郎君著

實地土木工學

（製本既成）

全壹冊　洋裝金文字入　正價金八拾五錢　税郵金拾錢

東海道一ヶ月の旅程を一夜の夢に縮めし鐵道扨ては大船巨舶を擁する築港設備より水道下水の衛生事業は云ふも更なり文明改善の諸般工事凡て基礎を土木工事に待たざるもの一として有らざるなく眞に土木は文明の先驅者たり而かも其施行の良否は成効の如何を賭するものにして設計書策如何に其理を盡せるあるも一たび施工を誤らんか遂に沙上の文字に歸せんのみ而して本書は土木工事全般に於ける施工本領の概要を叙述したる者にして其梓に附する所以のものは蓋し今日未だ斯る著の世に見ざるを以てなり其説述の懇到にして辭義簡明なる挿圖の精細なる近來得がたきの良書なり

工學士　矢野道也君著

繪の具製造法

（製本既成）

全壹冊　洋裝上製金文字入　正價金八拾五錢　税郵金拾錢

目次

附錄

（一）顔料性質一覽（二）顔料使用に關する注意（三）新奇なるレーキ顔料數種（四）比重計比較表及奇性曹達溶液強度表（五）硫酸第一鐵溶液の強度（六）硫酸鉛溶液の強度（七）硫酸亞鉛溶液の強度（八）重クローム酸加里溶液の強度

區本町三丁目　博文博

（後付の五）

最新發

故文學博士 高山林次郎君遺稿

（製本既成）

樗牛全集 美學及美術史

洋裝上製總クロース
正價金壹圓五拾錢
小包送料拾五錢

故文學博士高山林次郎先生が、吾邦文藝界の發達に貢献せしこと甚だ多きは世人の知る處なり。其肉體は龍華寺境內、冷なる土中に横はれりと雖、文や永遠の生命を有して輝く。茲に彼れが遺文を蒐集して、彼れが思想に接して靈の泉を汲まんとする者、はた彼れが事業を研究せんとする者の便宜を計る。第一卷の納むる所は、**日本美術史稿**の外に、審美的論文十數篇とす。美術史稿は、彼れが後日大成せんが爲めに稿本として作りたるものなれど、觀察評論の警拔なる、吾美術發展の跡を闡明して餘蘊なし。

山田槌太郎君編

博士試驗論文集

全壹册

（製本既成）

洋裝紙數三百頁
正價金三拾五錢
郵稅金八錢

博士の學位を授受するに四個の方法あり、第一帝國大學大學院に入り定期の試驗を經たるもの、第二論文を提出して大學敎授會が其定期試驗を經たる者と同等以上の學力ありと認めたる者、第三博士會に於て學位を授くべき學力ありと認めたる者、第四帝國大學總長の推薦を受けたる者是れなり、而して第三第四の方法は試驗に依らずと雖第一第二の方法は所謂博士試驗の方法に依るものなる故に、其博士の學位記を得たるもの丶試驗論文は社會の木鐸たり文明の指導力たり、讀者此書に依り學術の蘊奥を究むるの階梯とせば、他日世に貢献する所鮮少ならざるを知るべきなり。

發兌元 東京市日本橋

（後付の六）

（後付の七）

長田秋濤居士新著

世界富豪の表裏

製本既成

全壹册

洋装菊判　定價卅五錢　郵税六錢

立志—成功—富豪。實に當時の流行なり、是に於てか米國的拜金熱は今や將に幾多人士の頭腦を攪亂せしめんとす、徒らに黃金の色に眼を奪はれて裏面糞嗅の鼻を撲つを知らざるもの一度此書を繙いで如何の感ある、秋濤居士今や俗輩等か痛罵到らざるなき重圍の中に在て平然として天下黃金のために屈辱を事とせざる所謂無腸人士の眠を覺まさんとて此著あり、或は富豪を論し或は婦人觀をなし或は其奇癖を列記し或は其子孫を論す、苟も立志—成功—富豪を夢みるもの熟讀なかるべけんや……

鳥谷部春汀君著●明治人物評論（全一册洋装）正價金貳拾五錢　郵税金六錢

鳥谷部春汀君著●續明治人物評論（全一册洋装）正價金三拾錢　郵税金六錢

鳥谷部春汀君著●明治人物小觀（全一册洋装）正價金三十八錢　郵税金八錢

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（後付の八）

(明治参拾参年貳月廿五日第参種郵便物認可)　第四巻第参號　(明治参拾七年三月五日發行)



(定價金貳拾錢)

Vol. IV.　(東京市小石川區久堅町百八番地　博進社工場印行)　No. 3.